
女學世界定期增刊
女學校生活
春乃巻
博文館發行


東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尚は註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覽被下候様奉希上候

女學世界定期增刊

女學校生活目次

三月十五日發行

餘興

口繪

表紙

フェリス女學校卒業生





橫濱共立女學校卒業生

博進社工場印行)

堀越裁縫女學校卒業生

洋服科卒業生





造花部及繡細工卒業生

東京女學館
高等科生徒
の製作品







女子美術學校
生徒の製作品







東京女學館生徒の手蹟

菫

あれはてし庭の里むくらにみ
色なつかしきすみれ花さく　はな子

春夕

はなちらしかつらなしはまあみの干て
かすむ夕日にかへるあまの子　はる子

深夜春雨

枕辺はてし新あ志はふ窓乃はる
あつしなれとやはる雨の降る　かを子

雪中梅

ちる雪は雪にまかひて梅のはな
このまりは中のしくみにたえて今か　こよ子

帝國百科全書

第百貳編

水産講習所技師兼教授 農學士 塚本道遠君
農學士 井上正賀君 合著（全一冊 洋裝美本）

水産學

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

近來我邦人口の繁殖と共と海産物の需用頻りに増加し加ふるに海産物は重要なる海外輸出品の一となりて時勢は大に斯業の發達を促して止まざらんとす而して之を改良發達せしむるには學理を巧みに實地に應用せざるべからざるは勿論なれども我邦未だ斯種に關するの著書多からず隨て之れが研究に思を潜むるの士が造詣の道途を辿るに苦しむは一般識者の夙に慨歎する所なり然るに塚本井上兩農學士其蘊蓄を傾けて本書を編まる其斯學研究者に多大の資料を供せらるゝは勿論なるのみならず當業者亦此書に就て講究せば其裨益や蓋し鮮少ならざるなり

第百參編

法學士工藤重義君著

議院法提要

（近刊）

上製五十五錢 郵税十錢
並製四十錢 郵税八錢

法學士工藤重義君議院法に精通するを以て名あり而して職を衆議院に奉すること多年、其運用に於て得る所少しとせす。今其得たる實驗と其學へる學理とによりて著せる者を本書と爲す、學理實際二つながら其蘊奥を發揮して遺憾なく且參照歐米二十有餘國の議院法に及ひて知名の學説は皆網羅することを怠らさりし所なり、一般人士の一讀に價するは固より職に議院に在るの士は座右必す一本を欠可らす

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

女生徒募集

◉四月一日より新學期開始、新入學を許す、◉教科目◉和洋裁、◉刺繡◉家事◉國文（隨意科）◉入學金壹圓　月謝金壹圓◉規則入用者は郵券二錢を添へて申込みあれ

日本橋區濱町二丁目十六番地

私立 **裁縫女學校**

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券封入にて御照會あれ

千葉縣安房國北條町　川名助次郎

引風一切 **太陽散** 速治新藥

風は萬病の基輕きとて打捨置く時は。諸々の恐ろしき病を起すこと少なからず。故に人常に此の。獨逸にて最近發見の貴重新藥を以て調製したる。「太陽散」を備へ置き。殊に**冬期旅行**の節は必ず携へ。機に臨み服用し以て後の難義を逭れ給へよ。

價 一四十包入五十錢◉十五包入廿錢◉一七包入十錢◉三包入五錢◉郵送料各二錢。取次店は内外各地有名藥舖

本舖 東京日本橋本石町大通角 合資會社 **博愛堂** 電話本局二八六番

高等女學校 學科程度 初號より取揃 送本の準備有

會長 子爵 岡部長職君 第十三號迄既刊十四號四月三日發行

講師◉修身、篠田教授◉國語、佐方教授◉地理、伊藤校長◉歴史、高木教諭◉理科、林校長◉家政、下田學監◉裁縫、喜多見舍監◉禮法、小笠原講師◉兒童心理、松本文學士◉女子衞生、鶴山校長◉割烹、赤堀講師其他名家論說會員の文章和歌等趣味津々

一種獨特の通信教授 各科解釋付

女子學術講義

（目下入會の好時期）

女學世界へ廣告中 **割引券** 入會金特に**拾錢**に減ず 但し四月中

（見本郵券**卅錢**）

我が教育は女子の爲講習を開き更に講義錄を發行す講義中難解の文字には別に**註釋**を加へ**女子**の讀易く了解し易き**講義錄**なり◉入會金廿錢◉會費三ヶ月七十五錢六ヶ月壹圓五拾錢壹年三圓一學期間四◉入會者に會員證 卒業者に卒業證書を授く◉卒業期一ヶ年半

◉講義錄冊五拾錢

東京神田一橋通町 帝國教育會内 東京府教育會附屬 **女子講學會**

（甲の二）



二八水は
肌を白くきめをよくし●にきび●わせも●ひゝ●すべて肌のあれ、おしろい下に用ゐて尤もよし又芳香馥郁として貴孃紳士の愛すべき佳品なり
中瓶一本拾五錢
登録商標
本品縮圖
Nihachi Water
花王石鹸
品質善良と衛生に經濟を旨として製煉したる佳品なり
●賣捌所は全國到る處にあり
發賣本舗
東京日本橋區馬喰町二丁目
長瀨富郎
(電話特浪花三二)

(甲の五)

●英學新報社出版書類●

英文書簡

本社編纂

新刊 全壹冊(四六判)洋裝美製本●紙數三百五十頁●正價金四拾五錢郵稅八錢

本書は交際用商業用英文書簡の書き方を最も丁寧に説明し約六百の作例を示したれば人事百般のこと悉く其の文例を本書に求むることを得べしもし事に臨みて本書の文例を採り之に適宜の修補を加ふれば立ろに己の用務を辨ずることを得べし諸君一本を机上に備へて此至大の便を享有すべきなり。

英文 英國大家演説集

本社編纂

新刊 全壹冊(四六判)洋裝美製本●肖像寫眞版七葉挿入●正價金三拾五錢郵稅六錢

本書はグラッドストン、ヂスレリー、ロズベリー等英國近時の七大政治家が國論を動かし一世を驚かしたる大演説各一編を蒐集せるものにして讀來り讀去りて文字血あり紙上聲あり肖像亦動かんとするの感あり我同盟國の爲政家の高風に接せんと欲するものは必書を執りて之を讀め。

●和文英譯集

東京高等商業學校教授 高嶋捨太先生著

正價三拾五錢 郵稅六錢

本書今般增訂再版出來せり

英文討論集

東京外國語學校教授 村井知至先生著

新刊 全壹冊(袖珍)洋裝美製本 正價二拾五錢 郵稅二錢

討論は言論の花にして字々是金句々悉玉なり一文一章論理の正鵠を失はず條理明晰にして推論機微に入り一寸毫の瑕瑾を存すべからざるなり此活躍せる言論を英文にて讀まば更に一層の妙趣あるべし是を以て本書は東京外國語學校副用教科書に採用せられ又江湖の歡迎を受くること極めて大なり。

東京外國語學校教授 村井知至先生著

●英文對話編 正價三拾五錢 郵稅六錢

ハーツホーン女史著

●アーサー王物語(註釋付) 正價金四拾錢 郵稅六錢

英學新報社撰訂

●エノックアーデン 正價金二拾錢 郵稅二錢

村山敏雄先生著

●和漢名家英譯詩歌集 正價金三拾錢 郵稅四錢

英人リッデル女史英人コルビー女史米人グリーン女史英人ソントン女史英譯

●英和對譯日本昔噺 壹冊金拾三錢 郵稅四錢

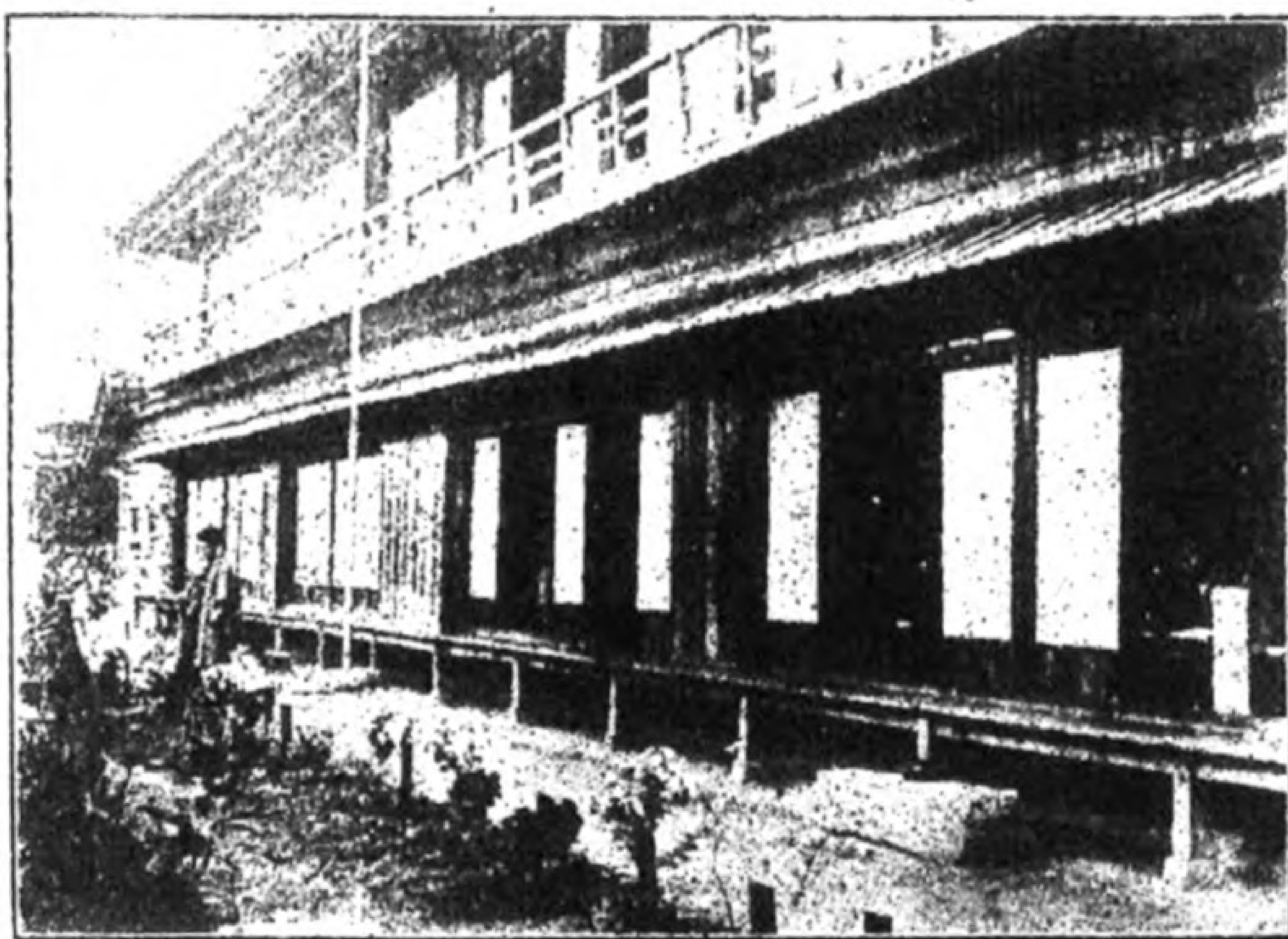
發兌元 東京日本橋區本町 博文館

發兌元 東京神田表神保町 東京堂

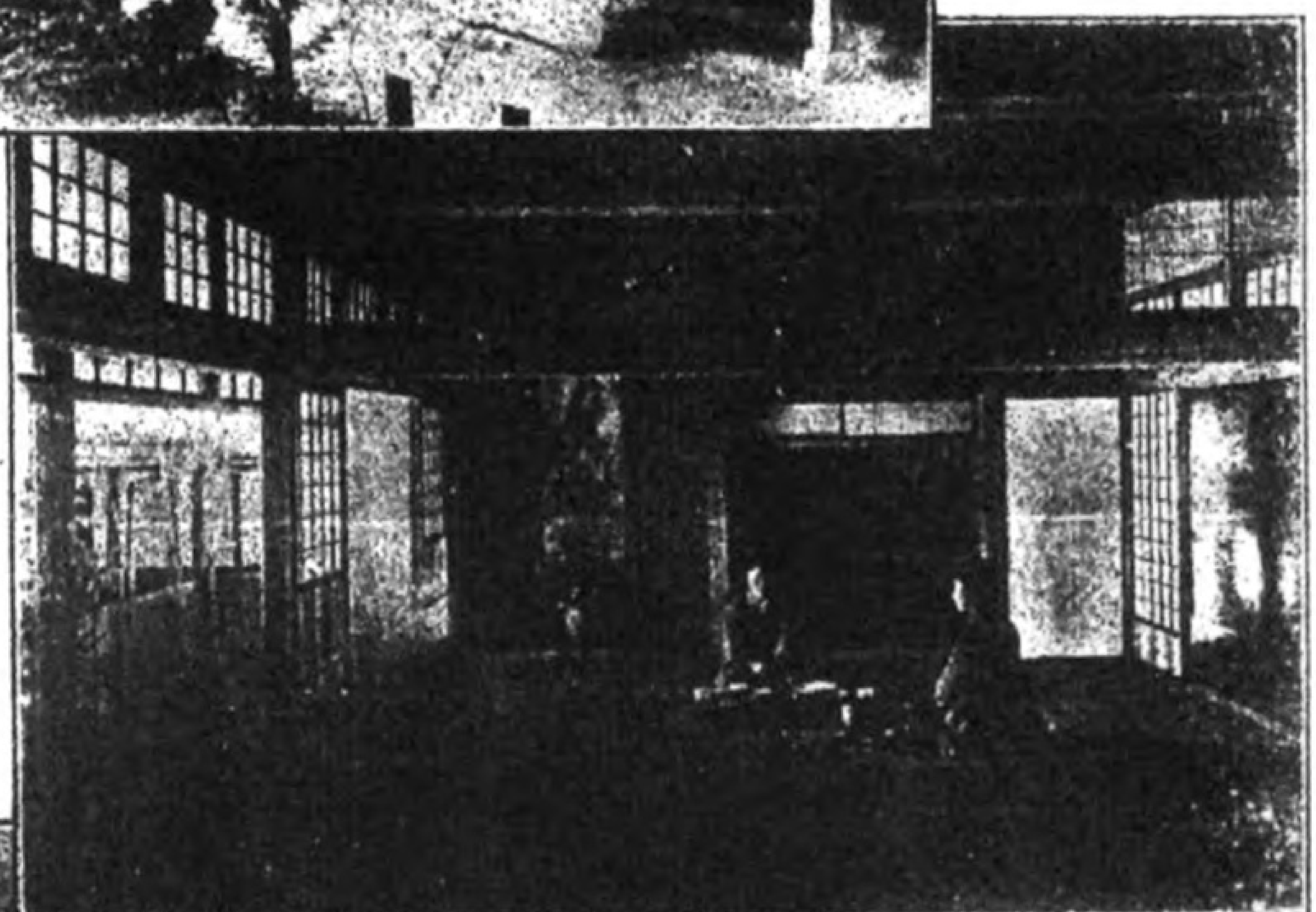
(甲の七)

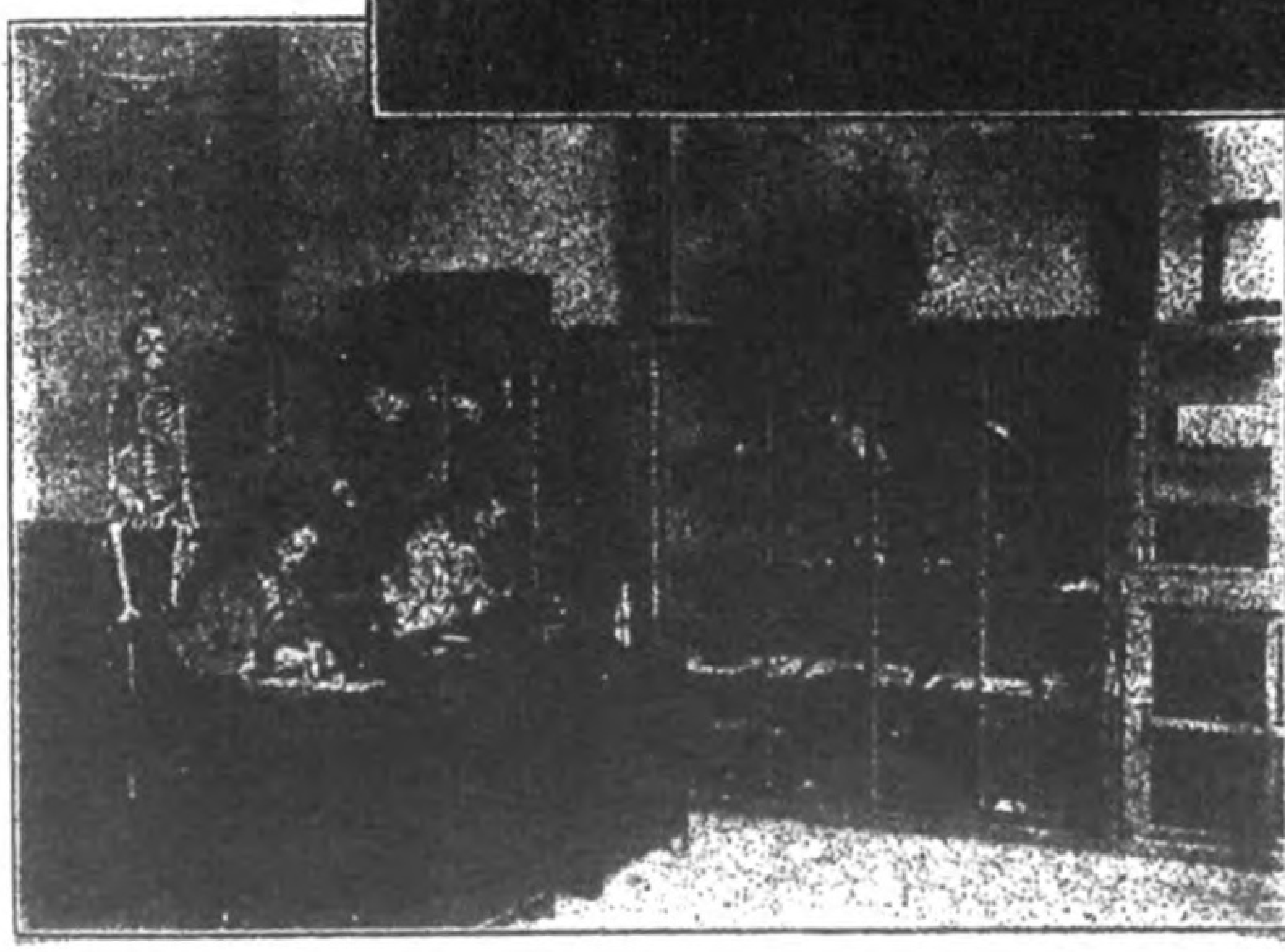
下伊奈高等女學校の內部

寄宿舍の一部

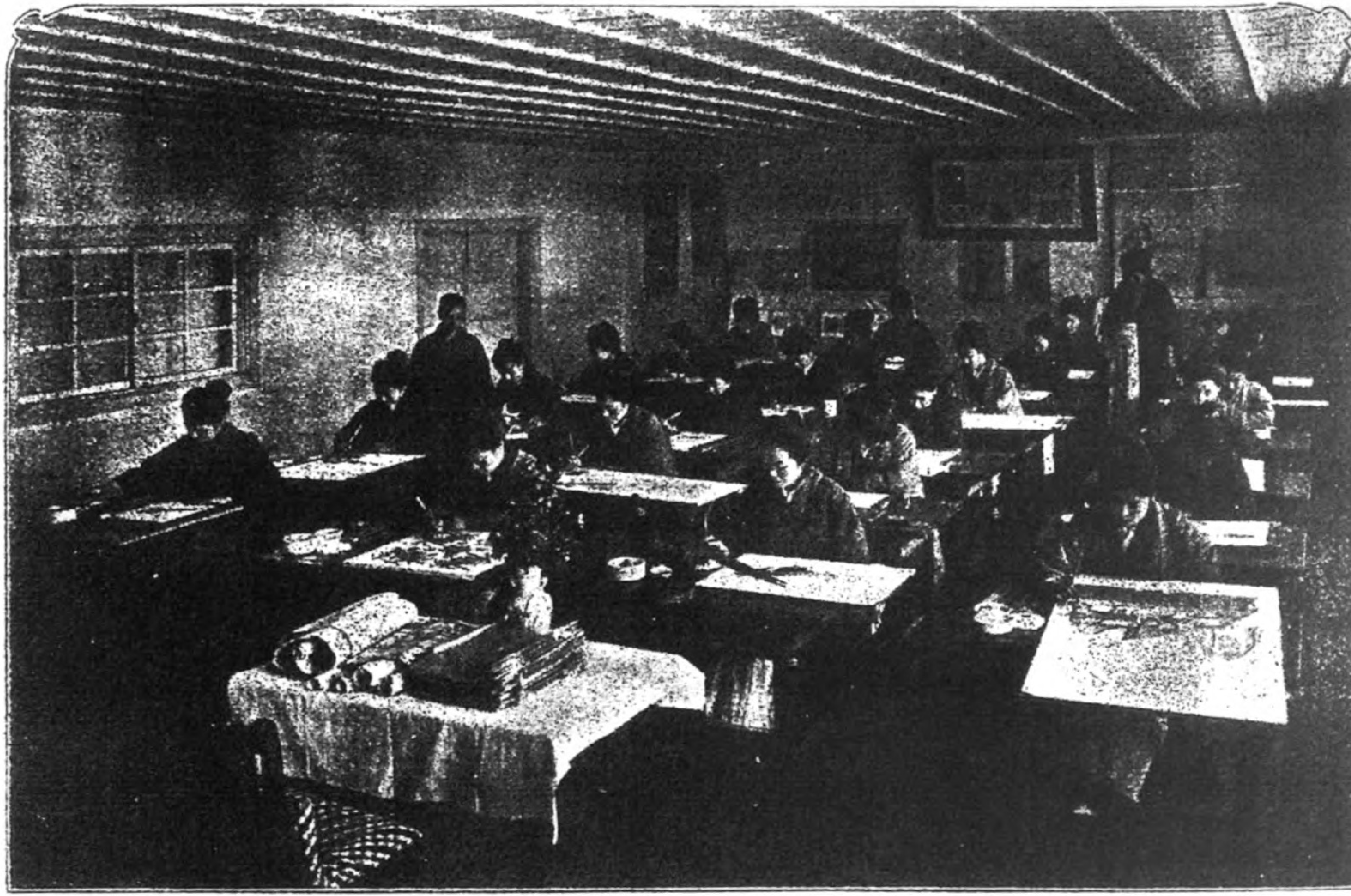


作法室





博物標本室



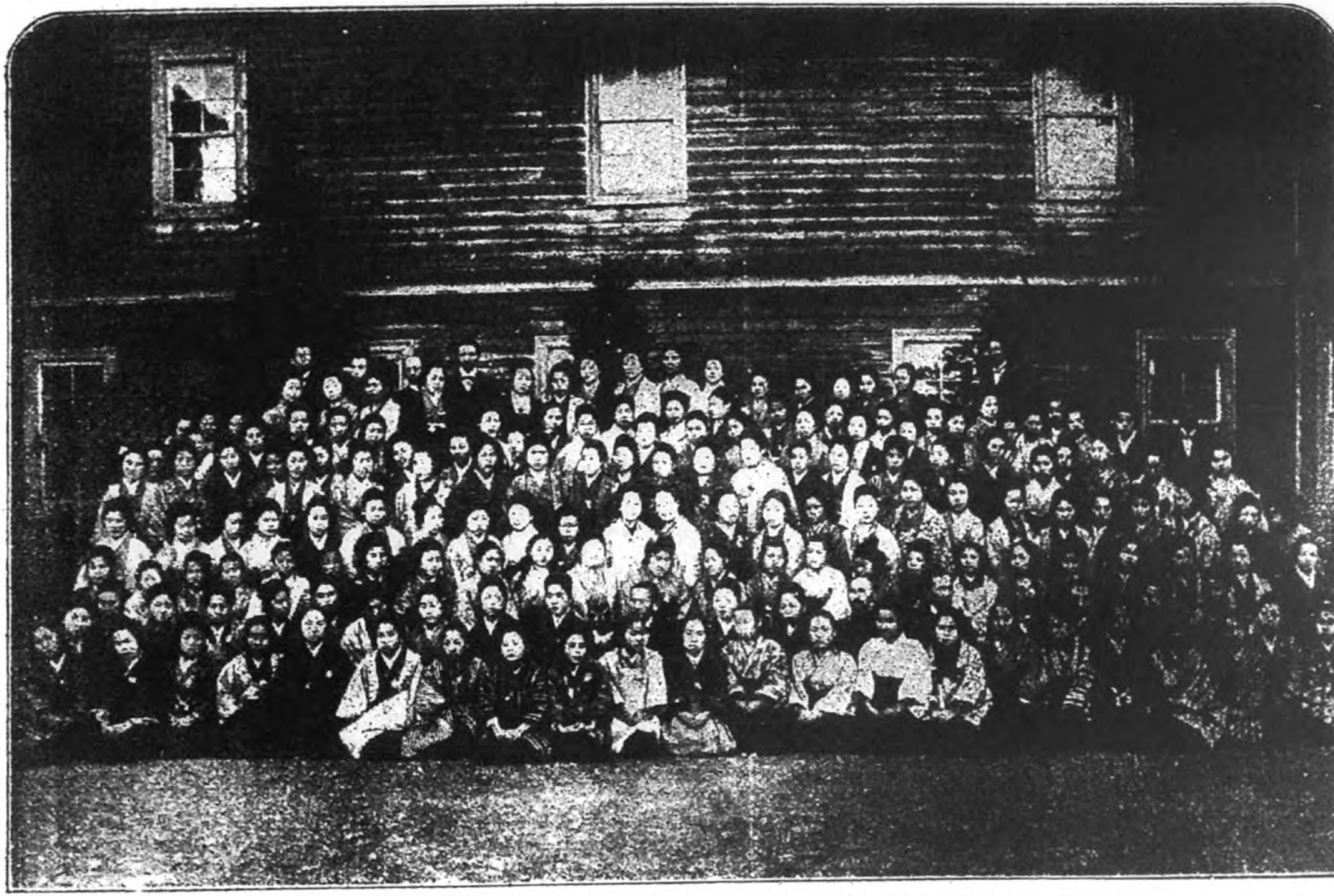
繪畫教室

女子職業學校の內部



造花教室

女子職業學校の内部



東京女子師範學校と東京府第二高等女學校職員及び生徒



成女學校生徒

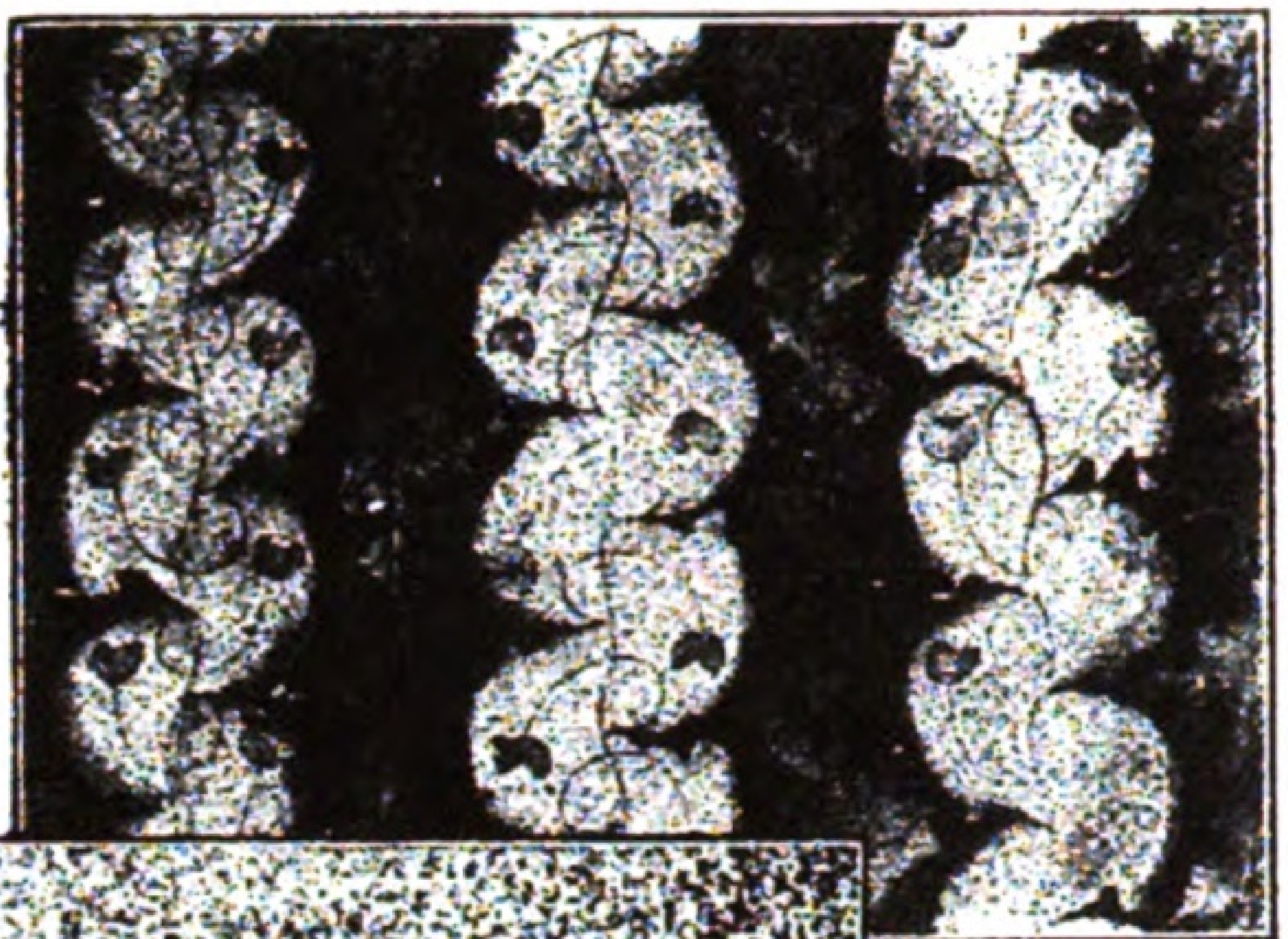


戸板裁縫女學校第五回卒業生



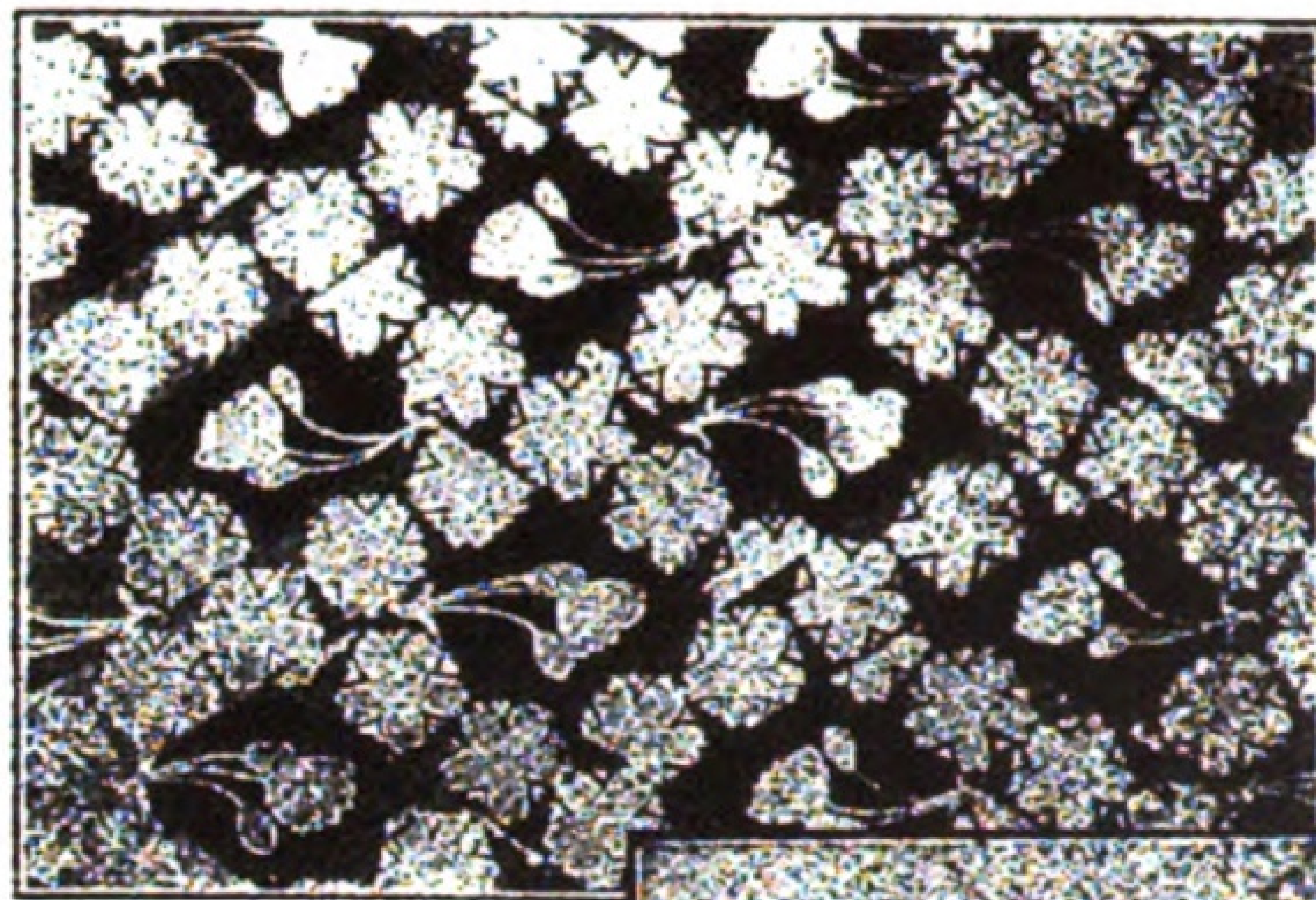
三輪田高等女學校の紀念撮映

米の花



（鹽川きん子）

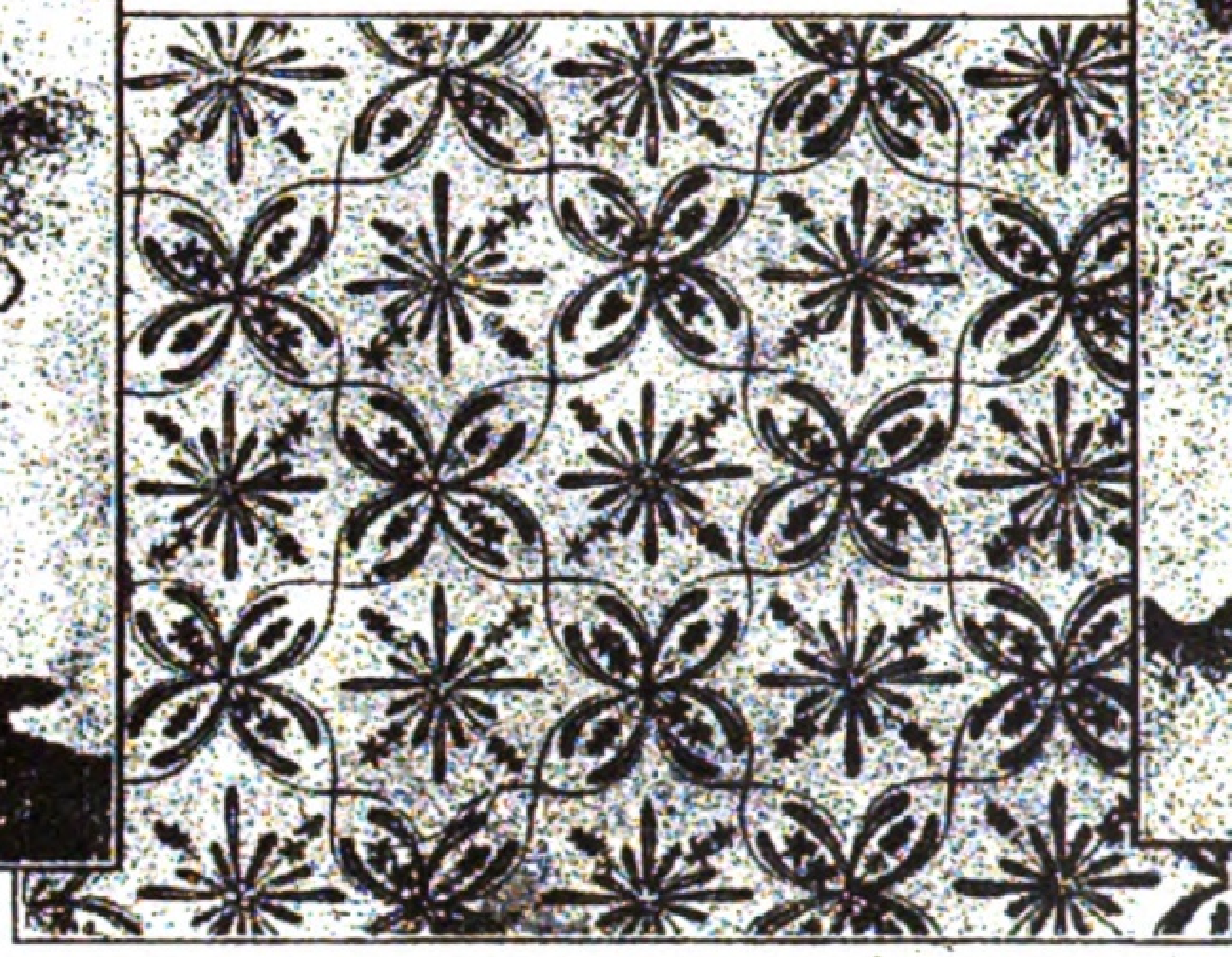
櫻



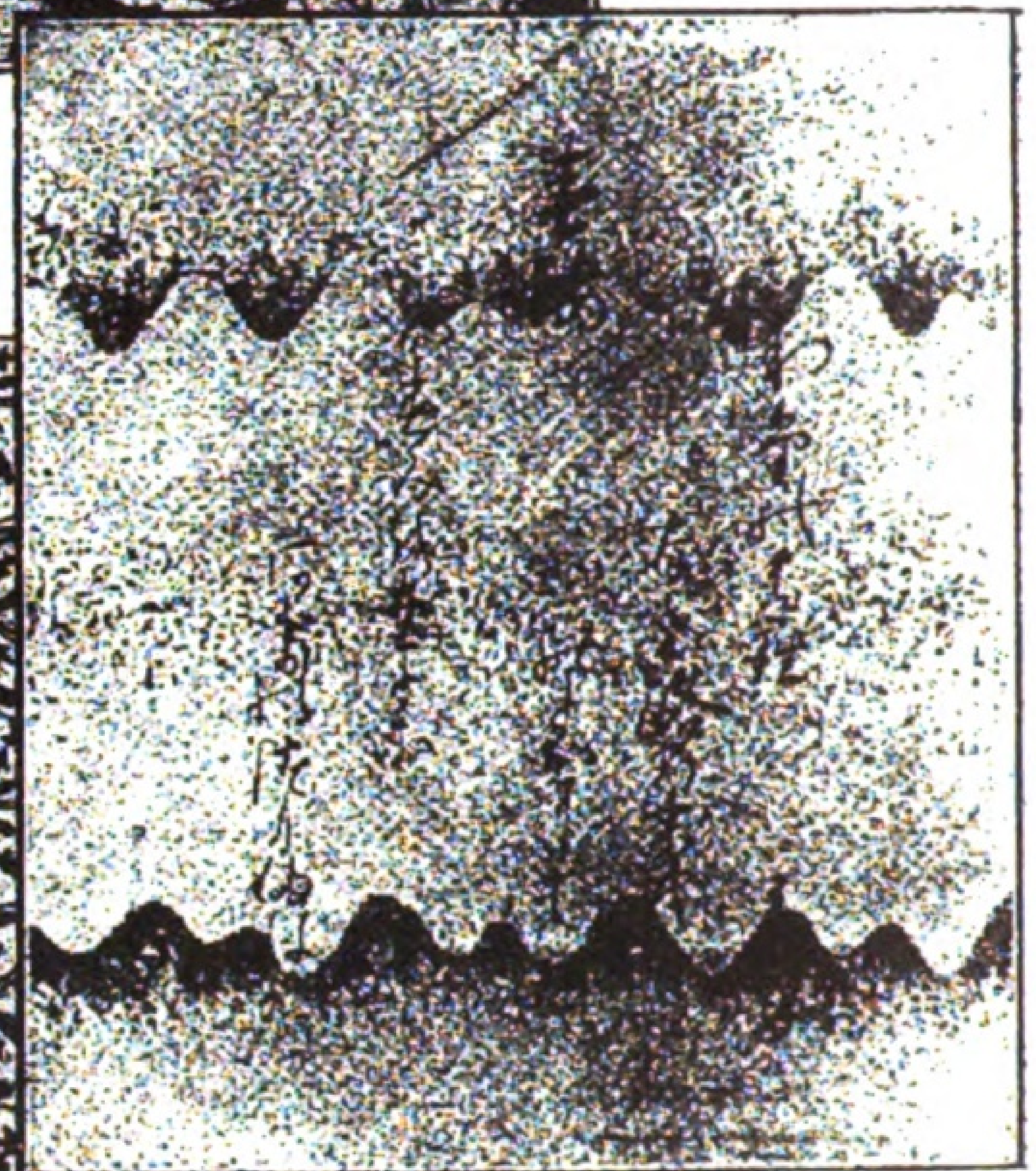
（天野ふく子）



東京女學館生徒作色紙



菫（京坂英子）



第二高等女學校生徒製作圖案

總裁 小松宮頼子殿下
副總裁 鍋島侯爵夫人

大日本女學會

新學期を開き會員を募る

本會は女學の講義錄を發行し女子をして居ながら學藝を修めしめ日本女子の地位を高めん事を目的とす●本會は明治卅八年の創立にて已に二萬千人の通信講習終了者を出せり●本會の講義は第一流の名家に囑託せしものにて極めて有益多趣にして而も平易なる文章に假名と傍訓とを附しあれば何人にも解し易し●本會講義錄は女子素養の程度に應ぜんため簡易高等の兩科に分つ會費は簡易科一個月金二十錢高等科同金四十錢也●詳細なる會則希望者は郵便はがきにて請求あれ直に進呈すべし

東京市麹町區下二番町卅七
大日本女學會（電話番町一三三〇）

大日本繪はがき會發行

日露戰爭繪はがき

海戰の巻（六枚一組） 特製金貳拾五錢
陸戰の巻（六枚一組） 上製金拾五錢
郵税一組貳錢

日露交渉破裂し宣戰の**大詔**下り數千の艨艟海に動き巨萬の貔貅陸に躍る實に**世界未曾有**の**大戰爭**なり**本會**茲に斯道大家數氏に乞ふて砲火迸發鐵騎突進の壯觀其他を**石版極彩色**で發賣せり而して本會は**利益金**の全部は**恤兵部へ獻金**するの目的也蓋し**兵士**への進物には勿論時節柄の通信には國民の志氣を壯にし敵愾心を奮勵するの良材ともなれば此際大に御使用の上御高評を賜はらんことを希望す

◎**旅順の海戰**（寫眞版敷色刷十二枚一組 定價金拾貳錢 郵税貳錢）

發賣元
東京市日本橋區本町三丁目 **博文館**
東京市神田區表神保町 **東京堂**

（その二）

新刊豫告

農學博士佐藤昌介君序　農學士原田友作君著

園藝新說

全壹冊洋裝總クロース製金文字入插圖百枚石版極彩色花卉蔬菜圖入
正價郵稅未定

佐藤農學博士の序に曰く我邦の農業は概して動物もなく器械もなき農業にして其栽培耕耘の眞相より觀るときは農業といふよりは寧ろ園藝といふ方適當ならんとは内外識者の常に唱ふる所たり然し全國五百萬町歩の田畑は園藝的小規模にして其栽培耕耘の周到なり農村到る所公園的美觀を呈せざるはなし世人亦我邦を稱して世界の公園となすは敢て山水明媚天然の風光に富むのみならず、農村に於ける其趣味の深き田家の光景は益我國をして世界稀有の一大公園たる景況を添ふるものと云て可ならむ（中畧）原田農學士玆に見る所あり多年研鑽の結果今回本書を公にせらる余就て之を見るに凡そ蔬菜果樹、花卉類の栽培に於て最新の學理を應用することの整はざるはなく蓋し近來の好著なり我邦の新園藝家たらんことを希望するの士は勿論一般の園藝的農業者に取りて實に好伴侶たるを失はず余原田農學士の勞を多とす云々以て本書が如何に斯界最新の好著たるを知るに足る

尙行文は言文一致に依り尤も平易に趣味深く編述せられたるは本書の特色とす

既刊書類

高橋農學士著　**園藝通論**（全壹冊洋裝）上製五拾五錢郵稅拾錢　並製四拾錢郵稅八錢

江原春夢君著　**園藝全書**（全壹冊洋裝）正價金六拾錢　郵稅金八錢

江原春夢君著　**續園藝全書**（全壹冊洋裝）正價金六拾錢　郵稅金八錢

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（乙の三）

★輕便 瓦斯の煮燒 德用★

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

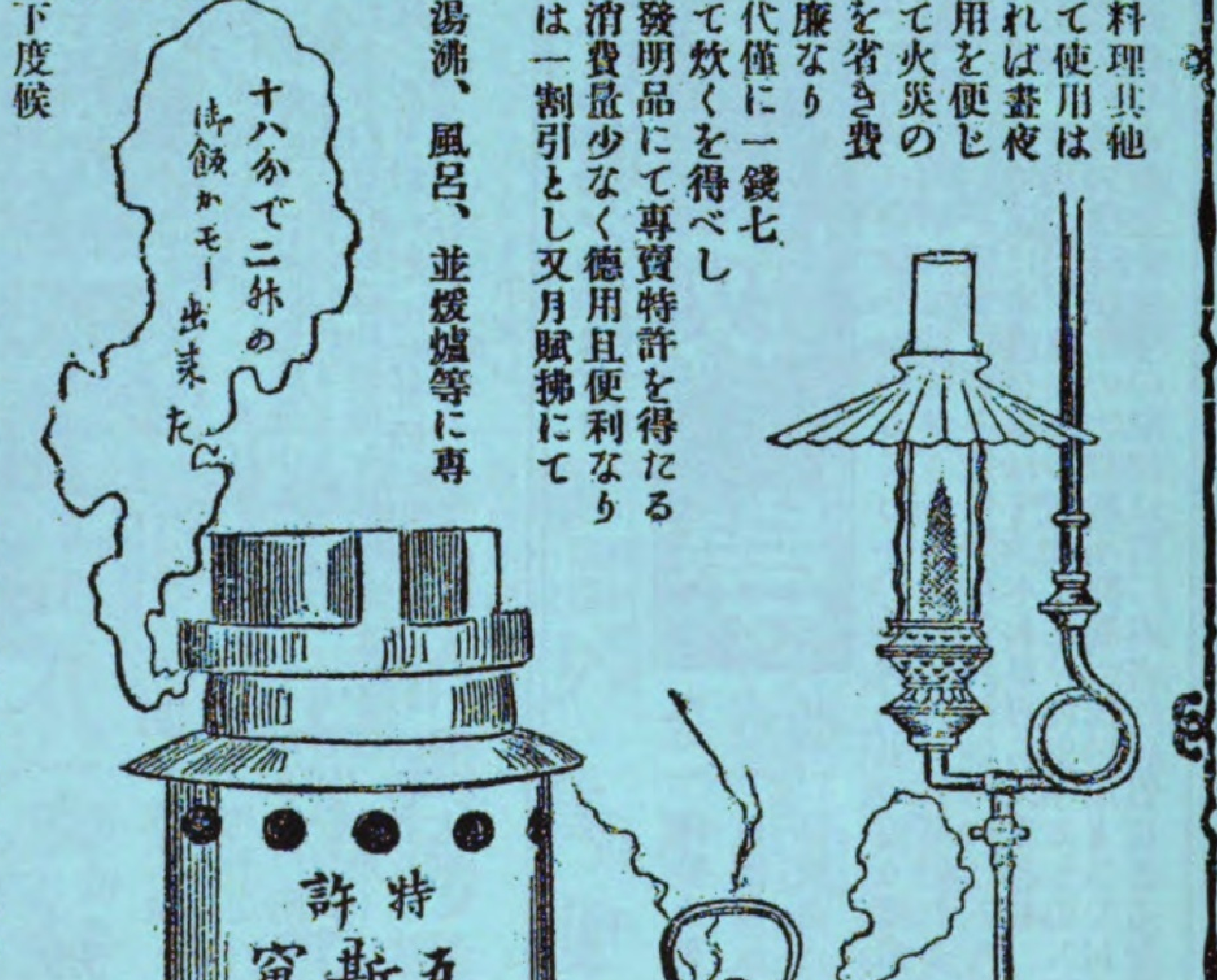
○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂、並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尚各種瓦斯器具は當社構内陳列所又は銀座陳列所等へ陳列縱覽に供居候御立寄御一覽被下度候



神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

電話本局 一三番 五四八番 二三〇三番

(乙の五)

工業叢書

工學士 町[illegible]駟君著

紡績一斑

全一冊

(製本既成)

洋裝並製總クロース
正價金八拾錢
郵稅金拾錢

我國紡績の業比年悲運に沈淪し今や更に一大打撃を蒙らんとす、其前途の暗憺なる容易に恢復の望なきか如し、然れとも、是れ發達期中に免るべからざる一階段にして其改善進歩は之を以て鑑となす、見よ大工場を整理するもの、若くは大合同を實にするもの比々皆然るに非ずや、當事者たるもの專心鋭意此難關を展開して進まば、庶幾くは以て我大工業たる紡績事業の基礎を建つるを得んか、本書此際に出で、後進の技術者及び技術以外の當事者をして最も明瞭なる知識を保有せしめ、進んで斯業の發達に就て大なる貢献を與ふるものは、蓋し本書也

工學士 重見道之君著

工業數學

全壹冊

(近刊)

洋裝上製總クロース
正價金……未定
郵稅金……未定

工業の進歩は其實地を經濟的に發達せしむるにあり、吾國工業の遠く歐米に及ばさる所以のものは主として實地工業者の學理に精通せざるに因る、特に其基礎たるべき應用數學の智識に缺如せるを以て、其端緒を得るに苦み遂に學理を詐術のものとして茫然自失せるもの少しとせず著者茲に感ありて遂に本書を著はす。本書は專ら工業學校、工手學校、鐵道學校生徒の參考及び土木、造兵、造船、建築等の實物工業に從事するもの、獨習用たるを期すれ共、又尋常中學高等學校入學受驗生の物理數學問題の練習用として最も親切なる方法を採れり、初學者が高尚なる研究をなすの階梯は實に本書の特質にあるを諒知あれ

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(乙の六)

●文武堂出版書類廣告●

東久世伯爵題辭　樺山伯爵夫人題詠
佐々木信綱先生　最美雅子女史共著　新刊

新撰女子用文

全壹冊菊判洋裝美製本　正價三十錢郵稅六錢

婦女諸君の生涯を通じて、最も必要なるものは書翰文なり。しかも最も易きに似て最も難きは書翰文かくとなり。その一見易きが故に、顧らるゝこと少くして、爲によくかく人の多からぬはいと／＼恨むべき限なり思ふにこの恨をもちつゝ、學ぶべき師なく、書なきにくるしめる人世に少なからざるべし。この女子用文は、さる人々の爲につくられしものなり。その文雅に偏せず俗にかたよらず、よく當今の女子が、以て則とすべき躰をえたれば、或は世の需むる所にかなふべきか。殊に附錄としてそへたる『作文心得』、婦人百人一首、修身百人一首、近世名家歌集抄は、相まつて初學の人々を益すること尠少ならざるべし。

中島義式先生著　本版插畫數十個入

新撰女子作法書

再版出來
全壹冊菊判美本
正價金二拾五錢
郵稅六錢

著者は東京府女子師範學校其他の學校に於て多年實地に教授せられたる教授案を高等女學校禮法教授要目に照し削正し各種心得を丁寧懇切に緻密なる插畫もて説明を加へたるものなれば禮法教科書として、はた家庭に於て作法を修めんとする婦女子の要書なり。

若松賤子女史遺稿　櫻井鷗村君編纂　桂舟畫伯意匠

忘れかたみ

全壹冊四六判上製　金文字入頗美本
正價金壹圓　郵稅拾二錢

目次

◎忘れかたみ◎雛嫁◎せーらくるー物語◎我宿の花◎波のまに／＼◎いなつくあーでん物語◎入學前◎ひろひ兒◎林のぬし◎鼻で鮹◎邪推◎榮公の誕生日◎淋しき岩◎黃金機會◎ろーれんす◎女房演說◎お向の離れ◎おもひで……以上

元良文學博士評論　戸澤文學士譯
●小說　**愛と心**　櫻井鷗村君譯　正價金三拾五錢　郵稅六錢

●飜譯小說　**少看護婦**　讀賣新聞社編纂　正價金拾五錢　郵稅四錢

●**明治閨秀美譚**　讀賣新聞社編纂　正價金拾錢　郵稅二錢

●**名士の父母**　讀賣新聞社編纂　正價金二拾五錢　郵稅四錢

●**明治の令孃**　櫻井鷗村君著　正價金三拾錢　郵稅四錢

●**現代女氣質**　正價金三拾五錢　郵稅六錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館
發兌元　東京神田表神保町　東京堂

（乙の七）



女學校生活

女學世界定期增刊
第四卷第四號



慈善家エリサベス、フライ女史の生活の規則

（一）決して時間を徒費すべからず、日々慰安と快樂の爲に消する時間は必ずしも是を徒費と言ふを得ざれど、常に何事なか爲し居るの習慣を作るべし。

（二）眞理を謬ること勿れ。

（三）他人に善あるを知りつゝ、其の惡を語るべからず、又た他人に對して親切に話すのみならず、衷心にも爾く感ずべし。

（四）他人に對して怒り易く、不親切なる行爲あるべからず。

（五）必要ならざる奢侈品を斥くべし。

（六）萬般の事皆熟慮を要す、若し正義を行ふに於て困難を感ぜば、偏に自己を助くる神の御力に信頼し、斯くして我が力の及ぶ限り猛進すべし。

高尙なる思想

隨感錄

安井哲子

近頃都下の新聞雜誌にて女學生に關する問題を掲げ、或は女學校生徒の品行を彼是言ひ其學校の缺點に及ぼし、甚だしきは女敎師の批評を試みて自然其學校の名譽を下さんとする者のあるのは、女子敎育の爲め誠に悲しむべき事なり。是等は何れ其事實の眞僞相混合して居る者と考ふべけれど、兎に角女子敎育盛大ならんとせし今日、斯る反動的の現象が見へ來りしは如何にも殘念なる事なり。此際に於て女子敎育に餘程注意を加へざればならぬ事なるべし。斯く女生徒が八釜しく世間の評判を受くれば、學校も心配し、兩親も心配し、成るべく其監督を嚴にして惡評を其生徒や娘に受けさせたくなく考ふるのは自然の勢ならん、これ至極尤の事にして從來の如く確なる監督者もなきに、無暗に東京に出し、出して後居處に困るやうなる迂闊な事では勿論いけませんが、併し唯監督を嚴にする計にては少しも危險なしと言ふべからず、何故なれば敎師や監督者は朝から晩まで其生徒や娘と一處に居らるゝものにあらず故に若し心得違ひの行爲をせんと思はゞ何時にても出來るなり。極端に申す時は、是等の嚴重な監督者の眼の前にてもしやうと思へば惡い事は出來るものなり、且又生徒監督の意味は自分の學校の名譽を損せざらん爲や、其家名を傷けぬ爲にはなくして、其生徒や娘其自身の爲なれば、自分の手許に居る時のみ無事なりとも自分を離れて後に其道を誤るやうにては何の役にも立たざるなり、且又敎師や兩親は幾年も限りなく其女子を指導する事の出來る者にあらず。夫れ故に女子を敎育する上に大切なるは、身體の監督よりも心の監督にて、心の監督は他人には充分出來ぬもの故、自分でさせる習慣を養ふより致し方はなきなり。即ち自重心の養成なり。之は女子をして充分に自己の價値を認めさせ、自分に對して充分に責任を感じ、我が名譽の爲め、我が人格を保つ爲に行爲するといふ習慣を養成する意味を言ふなり。

吾邦女子の學問がやうやく發達しかゝりし今日にあつては、少しく高尙なる學問を修むれば、自分自から大層ゑらき樣に考へる女生徒も出來るなり世人は之を見て女子に己れの價値を知らしむることは、女子をして益々傲慢ならしむるものなりと危ぶむ人もあれど、傲慢と自重とは非常の相違なり、自重心に富める人は傲慢にあらず、何となれば傲慢は我が人品を下ぐるものなればなり。又女子をして成るべく女子らしく敎育せんと欲し、只偏へに尊長に從順なるやう躾くるものあり、時としては腦の全く空虛にして自己の意見といふものゝ一もなき無主義のも

のとなるなり。夫れ故に如何なる方針に向つて其身を處置してよきか少しも分らぬなり、極端に言へば人格を傷けられ、又耻辱となるやうなことありても、他人に背かぬのが從順であるかのやうに誤解するまでになるなり、故に我邦の女子に希望する處は、温順、且つ謙遜でありながら、心の中には一の主義あり覺悟ありて、唯他人に對する義務のみならず、自己に對する義務をも同じく責任を以て我が行爲を指導する事の出來得るものとならん事を希望するなり。

英國あたりにては、女生徒が吾身を重んずる爲に、又社會の制裁を恐るゝ爲に、學校がやかましく言はずとも、男子を自分より訪問するやうな輕卒なる事なし、又特別なる用事もなきに女子が夕方一人でブラ〱市中を歩くといふ如き事もなし、此の如き心の態度を作るといふ事は吾邦の女子に必要なる事にて、人の意見にのみ服從して謹愼であるよりも、寧ろ自分を重んずるより起る謹愼の方が、遙に價値のあるものなり。舊來の習慣上、吾邦の女子は自己に對する責任といふ思想が養はれて居らざるなり、從つて又自己を重んずるといふ思想は誠に乏しく、學校にても唯教師の命令に服し、校則を犯さざれば善良なる生徒のやうに誤解するものなきにあらず、（勿論從順は生徒の美德には違なけれど）是等の人々が何かの出來事に遭遇せし時は、如何に其身を處して宜いか少しも分らなくなり、其時に折惡しく相談する人がなくて、却て世才もあり經驗もある誘惑者に出逢ふ時はつい其氣になつて、終には其身の處置を誤るに至る者も少なからざるなり。夫れ故に吾邦の女生徒には淑女として有すべき尤も高尚なる思想と一定の主義又は覺悟を與へて常に其身を處する方針を指導し、機會あれば、成るべく自分で責任を以て其身を處置する練習をなさしめる事尤も必要なり、夫れには學校の訓練法も教授法も成るたけ生徒が自分の腦を使ひ自分から考へて事をする樣に仕向けて行かざるべからず。例へば或る英國の女學校附屬の私立寄宿舍にては非常に親切な堅い婦人が監督して親の如くに生徒を取扱ひ、生徒は一身上の事に付ては萬事相談すれど若し男子の面會者あれば、生徒より其教師に相談し、或は教師の同席を乞ひ、或は拒絶する事もあるなり、是等は皆生徒が其身を重んずる爲に自分自から考ふる事にて、斯る狀態に生徒を仕向くる事は我が唯一の希望とする處なり、かくてこそ誘惑の中に一人出して遣りても安心なり、唯教師の命令に計り從ふて居るものは一朝困難なる境遇に出逢ひし時に、果して正當に其身を處置し得るや否や、誠に懸念に堪へざるなり。

吾邦社會の制裁即ち公道德の餘り高からざる今日にては、女子に對する誘惑も頗る多く、危險も又少なからざる事故女子に尤も高尚なる思想と自重心とを養成する事今日の急務なるべし。

學生觀察

女生いぢめ

青柳有美

十年といふ歳月、女學校の先生で飯を食ふてると申上げたいが……お相憎さまにも飯は食えんのですがネ兎に角十年も女學校に起臥してゐるから、女學校生活のことを書けと仰せになるのは……これア少し御慈悲が無さ過ぎますナ。手品遣に種を明かせとお命じになるのと同じなんですからナ。或る皮肉家の說によれば、女學校の先生と申すものは、女郎が男を手玉に取る如く、女を手玉に取るのが商賣なものだそうですからネ。

一体女と申す人種は、誰れ彼れの區別なく皆な魔が魅してるものなんですが……如何に女學生は例外で、服裝から普通の女人種と異ッたところがあると申しても、矢張り御多分に漏れず皆な魔が魅してます。昔ユダヤの國では、小羊を殺して其血を門の戶に塗つて置くと、惡魔が市を荒らしに出かけて來ても、其血を觀れば其家だけはヌキにしてあばれ込まなかッたものだそうです。女學生の鰕茶袴と頭に頂く束髮とは、隨分世の無分別な青年の血を湧かし、「魔風戀風」の材料になる功德はあるかも知れませんが、ユダヤの小羊の血ほども、魔よけのお咒にはならぬと見えます。

まづ、女子教育に初めてお取りかゝりになつた初心の男先生たちを觀ますと、手前の如き古狸は可笑くッて可笑くッて、腹の皮が捩れる程なことがありましてネ、……鼻の端でフフンと輕く笑ひたくなるんですよ。それは、外でもなく、そういふ初心な御連中たちは、マア三四年もやッて觀ると、非常に失望落膽するに立ち至らせ給ふのも露さとらせられず、無暗滅法と氣違にならるゝのでは無いか知らんと、外部から御心配申上げるほど、餘りに御熱心過ぎるからなのです。

若い獨身の男が、女學校の教師になッて入り込みま

すと、これで一寸持てますから子。たッた一人の女にチヤホヤされても、總身から湯氣のたつほど嬉しがるのが、‥一体全体野郎のお目出度いところなんですから……まして況んや何十何百といふ女生悉くに大持だと感じた日にア……それアたまりませんサ。嬉くッて嬉しくッて魂魄宙天に飛ぶといふ次第になるんです。このところ大薩摩の出語りといふことになりますが、扨そう大持だと思ふのは、即ち是れ野郎特得の自惚心から來たもので、實際は左程で無いといふのが、カラクり箱を顛覆かへした眞相なのですよ。

そこがそれ……魔が魅してる證據なんですが、女といふものは、身体の何處の關節が何う緩んで、何處の筋肉が何うダレてる故なんですか、一体に顔の締りや舌の作用が充分でなく、苟も女と名のつくものでさへあれば、早や四五歳の小供盛の頃から、男の顔を見ると愛嬌タツプリに微笑つき、甘ッたるい舌の廻しかたをやるものです……娘盛の十七八歳頃になれば、勿論其ニタ／＼然たる微笑つき方と、蠟燭の溶けかけた樣な甘ッたるい舌の廻しかたとは、更に歩數歩を進めて進歩し、よろしくニタつき、よろしく甘へるのです。この大甘と此の大ニタとを浴せかけられて、よい馬鹿を觀るのが、即ち男とか大丈夫とか申す人種なりといふに至りては、世に悲しまざるを得んやてナ仕末ではありませんか。

マア女學生と銘うッて女學校に出入してるのは、娘盛の十七八歳頃ですから、それは／＼驚くべきほどに、男先生の前に出ると全心力を盡して愛嬌を裝ひ、甘ッたるく萬事を持ちかけまサア、敎室で苦い顔などは決して先生に見せる樣なことはしない。何を言はれてもニコ／＼ばかりして居ますから……子一人殘らず……。その男先生忽ちにして以爲らく――これ畢竟乃公が學識深遠にして而も人情に篤く、敎授法其よろしきを得たるが故なるべし――と。ところが、世に計らんやで、かゝる愛嬌と喝采とは、特に獨り其先生のみに限り與へられてるのでは無く、有らゆる先生（最も男のですが）有らゆる先生へ平等に振り撒かれてる

のだから、少々ギャフンと來らざるを得ざる譯になるんでサア。

それに、仲々當世の女生たちは、男に取り入る術を心得て丶ネ……これも女の持ッて生れた魔性の致すところだから止むを得んのですが……何かの用事にかこつけて、先生の自宅か或は其他の場所で、私に面會する機會でもあると、ナンのカのと其先生樣を煽りたて、妾ことは其先生樣ならでは夜も日も明けぬやうに……外の先生たちなどは有ッても無くッても些か關するところに非ずはべると言はぬばかりに、話しこまれるので、初心の先生連は……なるほどソウか、して見ると乃公の校中に於ける人望は流石にエライものだナ――乃公にしてあらずんば是れこの女學校を如何にせんこれこの數百の女生を如何にせん……など、校中の衆望たゞ我れ一人に歸したやうに感じ召さるのです。

然るに、女の書生といふものは、實に妙なもので、そこが又例の魔の魅してる爲めなんですが、これは其先生一人にのみ對して抱いてる情のやうに見せかけてるも、實は大に然らず、……コッチの先生に行ッても、又あッちの先生に行ッても、同じ樣に、其先生でなければ、夜も日も明けず、其先生なくんば學校は到底一日たりとも立ちゆかぬ如くに吹きかけるものなんです。初心の男先生は、此處の呼吸がドウも容易に飲み込めぬところからして、兎角自惚上りたがり、其極自分ひとりで學校を背負てたつやうな逆上氣味と相成、矢鱈に熱心になりなさるのでサア。つまり、女生どもの玩具にされてるので、よい馬鹿を見るのですが子。

ところでだ……その自稱校中第一の人望家たる自惚先生が、フと途中で我が敎へてる女生と出遭ッたとお思召せ。幸にして其先生が威風堂々と黒塗の箱馬車か何にかにでも乘ッてお出でなさるか、但しは少なくとも氣の利いた宿車にでも綺羅を飾ッてお出で召さるれば、まづ〳〵無難ですが子……あはれ破袴にダラりと糊の去れた帽子でテク〳〵歩みなぞと來ていらッしやれば、……それは〳〵實にミジメなものでしてね……其女生は「妾ことは此るみすぼらしき人さまを先生と

するも恥ち侍る。」そなたと我れと何の關りあらんや」と言はぬばかりに、顔を反向け、見ても見ぬ振りし、オジギの一つもしてくれるもので無いんですから。

ドウも何處まで女といふ人種は、不人情で冷酷で、ソウして見え坊であるか知れませんよ。それが又殊に朋輩なぞと同行してる時に、こんな賤しい裝束の先生にでも遇ふと、全く路人よりも烈しい冷淡を粧ひ、少しの敬意を拂ふやうな素振さへ示さず、面憎いほどトボケて行くんですからナ。拳固の二つ三つも與れてやりたくなりますサア。

世の中に慈善事業多しと雖ども、まア〱、女子敎育家――詳く言へば女學校の先生ほどの大慈善家は、十方世界に餘り類が無からうといふ說です。これで、男生だと中學あたりで骨折つて仕込んでやれば、終生其恩を忘れませんで子……折さへあれば面會にきたり、偶時に珍らしい物でもあれば、贈ッてくれたり、師弟の情誼が仲々篤くなるんですが、女の子となると、實に仕樣の無いもので、卒業でもして學校の敷居を跨ぐと一二寸なれば、早や先生のことなぞは何處かにフッ飛ばしてしまつて、正月になッたからとて禮に來るでもなければ、久しぶりだからとて尋ねてくれるでもなく、嫁にでも行くと、更に甚しい……若しや途中で古い先生と出遇ふ樣な不幸がないかしらん……八百萬の神たち別ても弓矢八幡大菩薩、なにとぞ此る災難遁させ給へと、日々出がけ出がけに御祈禱をして門口を出る位なものなんですサア。

それでもセメて、セッセと汗水を流して敎へ込んでやッたものを、少しでも頭の偶ッこに殘して置いてくれればよいのですが……これは又皆無何處かに消え失さしてしまふから、恐れ入るではありませんか。その癖、女の書生といふ奴は、敎場に居る間はドレもドレも先生の敎へたことは悉く皆な了解て飲み込めたらしい顔を作り、如何にも鹿爪らしくすましやアがッて、先生の一言を發する每に、丸で緣日の張子の虎のやうに、一々首を動かしたりなぞし、横から觀ても縱から觀ても、了解たとしか思へんのですが……實際は先生

のいふことなんチ、些かも飲み込めて居ないのだから、アキレて開いた口がアングリですよ。

よく落語家が言ひますがチ……荷車の坂を上る時に後押をしてやるほど功德になることは無いッて。これは、押してやッた方の人は其誰れを押してやッたのかを知らず、押して貰らッた方の人も、又誰れに押してもらッたのか忘れてしまふからだと言ひます、女學校の先生といふものは、まア此の坂にのぼりかけてる荷車の後押をするやうなものでしてチ、全く學校を出ると、直ぐ生徒には忘れられてしまい、折角流した汗の收獲を刈ることが出來ないんですからナ。實に女子敎育は慈善事業ですよ。お陰で死んでから極樂に行けるぐらいが關の山でサア。

それで、女の子といふものは、つまり學校で敎はッたことを學校を出ると忘れてしまふのではなく、忘れるほどのものも、學校に居る間に覺え込まなかッたので、たゞ覺え込んだやうな眞似をしてたのですからチ……女の子の學問がカラ駄目だといふのも、更に怪むに足りませんヤ。之を思ふとブル／＼と身慄いをするほど女の顏を見るさへイヤになりますが……是れだから又一方には本當の意味での女子敎育に骨を折らねばならんと思ふ勇氣も出ますがチ……一体女といふものは、何時でもシームス（Seems）でイズ（is）なことが無いんですからナ。先天性僞善者……これ即ち女の性情です。

今の初心な女子敎育家先生たちが、女子敎育に盡すたけの熱心と骨折りとを、男子の敎育に盡くしてごろうじろ……必ず眼鼻のついた位の効果はあがります。だによッて女子敎育は道樂や慰み半分にやれる仕事でなく、全くの慈善事業に取りかゝッた氣にならなければ、到底駄目です。

女學校での大禁物は、女の先生です。素人衆は、牛は牛づれ馬は馬づれ……で女を敎へるには女の敎師に限るなぞとお思ひになるかも知れませんが、これは全くの素人考で、女の敎師にかゝると生れながらにて既に罪業多き女の性情が更に一段と罪深きものにな

り、全然ダイなしにされてしまいますサ。これも一寸素人眼には異樣に聞えるでせうがネ……第一に女生の奢侈の風なぞといふものは、女先生が多く學校に居ると起ッてくるもので、男の先生ばかりだと、却て服裝でも化粧でも質素質朴に行きます。

　そこが女の又妙なところで、女の先生たちといふものは、生徒たちに蔑られまいと思ふところからなものか、皆なメカして容子を作りたがる。又先生にそうやられると、生徒の方も先生に見くびられては天下の一大事と心得るものか、又まけず劣らず服裝や化粧に骨を折り、イヤに氣取りすますことになりますものでして、玆に服裝化粧の共進會が始まる次第と相成るのです。ところが、獨身の男先生なぞで、碌々洗濯も行屆かず垢クロ〳〵の襦袢シャツに、破れ袴か何かで、日々出勤して居ると、先生に對して遠慮せねばならぬといふ氣からなものか、但しは安心するところがあるためからなものか、不思議にも女生一同更に服裝や化粧に憂身をやつすやうなことが無くなり、皆な揃ひも揃ふて巴か板額然たるものになッてしまふものなのですよ。

　よく全國高等女學校長會議なぞで、如何にせば女生徒をして鉛白を癈せしめ、服裝の奢侈を避けしむるを得るかなぞといふ問題か議事に上るやうですが、或る女教師を殆んと全く使はん女學校では、これと全く反對で、如何にせば女生徒をして今少しく鉛白をつけ服裝を飾らしむるを得べきかと研究して居るほどだそうで、女學生をして奢侈に陷らしめざるの法、決して難からず、たゞ女教師を用ひざるにありですサ。

　また、同性相反撥すといふ原理からなものですか、女の先生と女の生徒と申すものは、ドウもウマく調和のしませんものですネ……あれで男の先生の前でも、それァ飾りますサ生徒は。然し、その飾りかた粧りかたは美術的ですから、そう惡く〳〵ないものですが、女の先生の前に出ると、今度は道德的に飾り又つくろひますからネ……丸で烏賊の甲のやうに固くなッてしまッて、一から十まで美術的でない道德的の虛僞ばかりで

固める様になります。

隨て性質が陰險になり惡くたらしいものになッてしまいますサァ。それで……男の先生になら何と小言を言はれ又叱られても、別に氣にもかゝらんことが、女の先生に言はれたとなると、直ぐ氣にかゝッて腹の底がモヤつき出し、くやしくッてくやしくッて堪らなくなり、ドウもあの何某先生は意地が惡るくッて、生徒をイヤにいぢめてばかり居るよといふことになるんですからネ……實に妙なものです。女がヒステリーに罹ッてる時なぞに、親切に慰めてくれる積だらうが、同じ女の人に言葉をかけられると、病氣が更に激しくなりますが、男に言葉をかけられたのなら、氣がスウーッとするッて申しますからナ。

又、女の先生はまた女の先生で、自分の弱點を生徒に見拔かれまいといふヴァニチャーの心からなものか、これもこれで盛に虚勢を張り、何んでもない一寸したことに金切聲を出して叱りつけたり、イヤに權威張りて見たり、又遠廻しに眞綿で首をそくゝるやうな態度をして見せますので、生徒は外面でこそヘイ〳〵して居るものゝ、皆な影に廻ッては惡口雜言の棚卸をして居るといふ仕末になるんですからネ……。それでは、兎ても敎育なぞいふものゝ出來る氣づかひが無いぢやありませんか。

實に女といふものは妙な人種でしてネ……手前の宅なぞに女生徒がやッて來ましても、手前にするお辭儀と細君にするお辭儀とは、同じお辭儀でもお辭儀の性質が違ひますからナ。細君に對するのは、實に其れは其れは丁重なもので萬端小笠原流の女禮式といふ格でゆきますがネ……手前になら極簡單なもので……それに挨拶なんかでも、細君にならば、マァそれはそれは恭しくやりますサ。女と女との挨拶ほど情の無い形式的な僞善なものは無いので、尤もらしく女と女とが、差し向ひで、挨拶してるのを時々見ると、唾を口一杯に溜めてゝ、プーッと奴等の向ッ面に吐きかけてやり度くなることがありますよ。女學生の間には、兎ても本當の友だちなぞいふものゝ出來るものでありません

ヤ。皆な獨立個々でサァ。

されぱとて、又男の先生も全心全力を盡くして敎へる譯には行かぬもので、イクら熱心にハマリ込んで敎へて見やうと思ふても、或る一定の程度まで行くと、それ以上はハマリ込むことを遠慮しねばならぬことになりますんで。それ以上に進むと、師弟の情誼が忽ちに變して戀愛になる恐れがありますからネ。それでは天下物議の種になることですから、ドウしても先生と生徒との心の間には、互に一枚の膜を拵へて丶心と心とが男子の師弟に於ける場合のやうに、ピッたりと接くことが出來なくなるんで……生徒の方でも又同じく或る程度以上に懐くことは、兎角遠慮しますからネ。これも、戀愛になるのが薄氣味わるいから。

まさか、生徒が經師屋になッて、先生を張るといふわけでもありますまいが、獨身の男先生はドウしても持てます。それは妙なもので……。然し、婚禮しても尚ほ生徒に持てるやうでないと。本當の人望ではありませんサ。

餘まり長くなりますから、マァ此處らで切り上げませう、讀者諸君……定めしムカツキものでしたらうネー。お氣の毒さま。

（了）

新舊女學生の比較

國分みさ子

維新後に於ける、我國文明の進歩は、今更申す迄も御座いませんが、女子敎育は、特に著しい者で御座います、只今では、東京に府立の高等女學校が三つと、それと同じ程度の私立の女學校も、數十校ありまして、生徒の人數も、中々澤山て御座いますが、明治十年前後には、女子の學校と申しましては、小學校の外には御茶水に女子師範學校と、神田猿樂町に跡見女學校がありましたのみで、各の生徒の數もあまり多くは御座いませんでした。師範學校の方は、小學卒業以上の學力の有る者は、試驗の上入學を許しましたが、官費で

すから、そう澤山の生徒は、入れる事が出來無かつたので御座います、跡見女學校の方は、重に上流社會の令孃方の生徒のみで御座いました。その他、讀み書き裁縫位を敎へる私塾は、少しはありましたが、何れも微々たる者で、とても學校など申すことは出來ませんでした。夫れで、只今のお孃樣方に、この樣なお話を申し上げると、夫れでは、其の頃の令孃方は、さぞかしお困りに成りましたろうと申されますが、ある少數の人を除きましては、別段困るとも思は無かつたのであります。なぜなれば、其の頃では、小學校さへ卒業すれば、もう充分だと成つて居たからで御座います。夫れも、下等小學だけて止めて、裁縫でも專門に習ふ方が宜かろうと、毎度學校の先生が申されたといふ位で御座いますから、上等の卒業までする人は、極少う御座いまして、毎學年どちらの學校でも、二三名づゝ位で御座いました。卒業後猶進んで學問を仕樣などいふ人は、至て稀で御座いますが、たま〳〵高等の敎育を受けたいと思ふ者は、敎員志望でない人でも、ほか

に學校が有りませんから、仕方なしに皆師範學校に入學致しました。

當時小學校は、上等下等と分れ、各八級づゝありまして、一學年は半年で、毎年四月と十月とに、試驗が御座いました。

普通敎育が、まだ一般に行はれませんでしたから、自然就學の年齡が一致致しませんで、一組の中に、十四五歲の人も、七八歲の人もありました。私は九歲で初めて入學致しましたが、餘り遲い方では御座いませんでした。

學科の程度は、只今のに比較致しますと、概して高う御座いまして、讀みものなども、下級では小學讀本でありましたが、上級になりますと、十八史略。小學。孝經。忠經。日本外史。蒙求などいふ漢文で御座いました。この頃には、國文は丸で世間から忘れられて居りました。十四年に大學に古典科を置かれた時ですら東京中の書林をさがしても、土佐日記が一冊も無かつたといふほどでありますから、一般に國文學の行はれ

なかつたのが分りましよう。跡見女學校などでは、十二三歳の生徒に、論語や左傳を授けて居りました。數學は、珠算と筆算と御座いまして、珠算は相場割まで筆算は開平開立求積幾何まで致しました。

理科は、教授法も發達致しませぬ上、學校の設備も整ひませんでしたから、實驗などいふことは、さつはり致しませんで、讀本と同じ様に、無暗にむつかしき書物を讀んで、暗記致しました。

地理歴史も矢張理科と同しく、本邦のも萬國のも皆はじめからしまいまで暗記致しました。

家事科は、裁縫は授業時間後、毎日二時間づゝ御坐いました。夫れから、生理衛生は勿論、母親の心得だの子供育草だの、年の行かぬものにはわからぬ事まで習ひました。

まあ、ざつとこんな風で、學科によりましては、却て只今の高等女學校より高い位で御坐いましたから、小學校さへ卒業すれば、一通りの間には會けたのであります。しかし、體育などいふことは、一向無頓着で、唱歌なども無論無かつたのであります。

さて又女生徒の氣風はどの様であつたかと申しますと茶の湯生花などいふことは、全く廢れた時代で、琴なども普通の家では、大抵習はせませんでした上に、學校では、男生徒と一所にして、すべて男子と同様の教育を受けましたから、どうしても、氣象が荒ぽくて、優美の點が缺けて居りました。一寸作文を書きましても、

余一日閑を得て友人兩三輩を誘ひ一瓢を携へて飛鳥山に遊ぶ

といふ様な、漢文書き下しの口調で、柄になき事を書き並べて居たのであります。ある雜誌に「醉ふて解語の花に戯る」など書いた、女生徒の文章が、載て居たのを見た事が御座います。又時々女生徒と男生徒と分かれて、討論會を開き、随分清少納言の様な生徒もありまして、男生をへコマシて得意になつて居るのも御坐いました。又ある學校の女生徒が、江の島へ遊びに行つて、旅店てお酒を飲んで、詩を吟じて大騒ぎを仕

たといふ話も御坐いました。
服裝は、一体に質素で御座いまして、袖丈などは餘程短かう御坐いました。振袖などは、如何なる折にも、殆ど見た事が御坐いません。紋付もあまり用ゐませんでして。最初は、男子と同じ樣な、小倉や双子の袴をはきましたが、その後、隨意といふことになりまして一人やめ二人やめして、とう〳〵全く無しになつて仕舞ました。跡見女學校丈は、始終紫の袴を用ゐて居りました。髮は年齡により、お煙草盆、かつらしたじいてふがへし、唐人まげなどで束髮はまだ御坐いませんでした。根掛や簪は、極麁末のもので、只今の樣に高價のリボンや、西洋花かんざしなどは、有りませんでした。この頃は、試驗と申しますと、着物を着換へて、おつくりをして參りましたが、夫れでも、藥玉の簪に、ぱら金の根掛位が、一番上等で御坐いました。お話を致しますとまだいろ〳〵御坐いますが今日はこの位に致して置きましょう。

實踐女學校寄宿舍

支那留學婦人の生活

中村鈴子

青山高樹町の實踐女學校假寄宿舍に起臥勉學せる支那婦人現今の狀況を尋ねるために、敎頭時任たけ子女史に面會して其大略を聞き得ました。

▲姓名

一時七八名居つた留學生が病氣其他の事情のため、次第に歸國して目下三名だけ寄宿して居り、一番古いのが一昨年四月入塾した錢豐保孃で、此校に來る前一ケ月間四谷の愛住小學校に通學したさうです、次は一昨年八月入塾した陳彥安孃、次は昨年九月に入つた龔圓常女史であります。

▲年齡と風姿

錢氏は芳紀二十二、中肉中脊の優形で鼻筋通り、重瞼の涼しい目元と小さい口元に限りなき愛嬌を湛へ、飽

まで白い肉色に淡紅を呈した双頰、房々とした鬢髪、延々とした手爪先、一點の瑕疵なき風姿は、丁度希臘古代の女神に桂舟流の美人を加味した者とでも評したいのです。陳氏は本年二十四、小柄で上品な婦人、切れ長の單瞼に遠山の眉、締つた唇から僅かに現はるゝ糸切齒中々に可愛らしく、漆黑の頭髮を根加減よき花月に結びたる様氣品高く、白く落付いた肉色は如何にも沈着温良な態度を表して居りました。龔氏は尤も年長けて二十八との事ですが、其體格の偉大なるに似ず、無邪氣で壯快氣で顏色の艶々しさ、漸く二十歳位に見受けられ、嬋妍の容姿は前二氏に比して少しく劣るやうですが又一種の威風に富み、鷹揚にして氣力ある婦人の品性を表はして居ります。此三婦人打揃ふて年齡より六つ七つ若く見えるのは容顏の秀麗と態度のこせつかぬとに依るのでせうが、一つには富豪の家に成人して莽生の内から延々と育つた故かとも思はれます。

▲許嫁と配偶

支那では極幼少から娘に許嫁の夫を定めて置く風習で此婦人達にも各其人が在るのです、尤も龔氏は既に上海人、萌若木氏の妻女で夫婦諸共留學生として渡來したのです。錢氏の未來の夫も日本に在留、目下成城學校の生徒として學窓に勵みつゝある由。陳氏許嫁の良人は章仲和氏で、既に日本の法科大學を卒業し、當時北京の大學に聘せられた紳士であります。彼地は十二歳から婚するの習で十五歳になれば後れるのを氣遣ふ位だ相ですから錢、陳二氏の如きは稀な特志學生と申すべく、親密な友達には折々未來の家庭談を語ることもある由、既婚せる龔氏は素より貞靜なる陳、錢二氏が胸中に蓄きつゝある愛の泉は如何に清く深くありませうか、徒らに深窓に垂れ込めて狹く哀れな情火に身を焦すの螢とは異り、廣き文明の流れを味ふために其志を同うして暫らく其居を分ち、功成つて後相携へて赫々の光を放たんものをと、互に將來の好家庭を相樂しみ相夢みる事でありませう。渡來の初は俄かに自由の空氣を吸ふた心地でしたが、許嫁の人と時々往來したり、書信を往復する傾があつたのを、時任女史は

其潔白は充分認めて居れど、萬一を慮つて懇ろに注意を與へられて後は、斷然是等の交際を廢したそうで、總て敎師の命を奉ずるに潔いのは感心だと女史は語られました。

▲性質

我邦の女子に比ぶれば頑固ですが、一旦理解すれば飜然命に順ふこと驟雨一過して晴天の現れるやうな氣性があり、其着眼の遠大にして感情よりも寧ろ理性に富めること、初對面の人に怖ずして潔く己の精神を述ぶること、事業に執着にして輕々しく朝變暮改せざる事なぞは誠に稱すべき美質だ相です。勿論此三婦人は高尙な家庭に育ちし上特別の希望を抱て渡來したので、彼國婦人の鑑ともせらるべき者、これを以て一般を代表するわけにも行きますまいが、槪して重厚堅忍の德に富める者と思はれます。一昨年留學生監督と共に來りし胡彬と云ふ十五歲の小孃が初めて此校の教場を巡覽した時、毫も憶する色なく黑板の前に進み其渡來せし目的と今後の希望、及び日本諸姉に對する初對面の挨拶をすら〳〵と記載したので、一同其沈着慧敏の態度に感服したとの事です。

▲家庭敎育

貴族富豪の家では、家庭敎師を聘して共に住はしめ娘の敎育を司らせ學問禮節を仕込むので、比較的此點には發達せるとの事、併し時間と規律との觀念がないために入塾の當分は朝食の時も間に合ひ兼ね各自も一寸困難しましたが、追々周圍に化せられて、此頃は他生に少しも後れぬ由。

▲言語

最も日本語に通せるは錢氏で後進二婦人のために少なからぬ便宜を與へたのです。尙入塾後直ぐに暑中休暇になつて日本の寄宿女生が代る〳〵筆談で交際を試み先づ上品なる世俗的の言葉より注入して遊嬉快樂の間に語學を發達させた相ですが、記者に挨拶せし三婦人の語調緩ならず急ならず奧床しく聞えました。

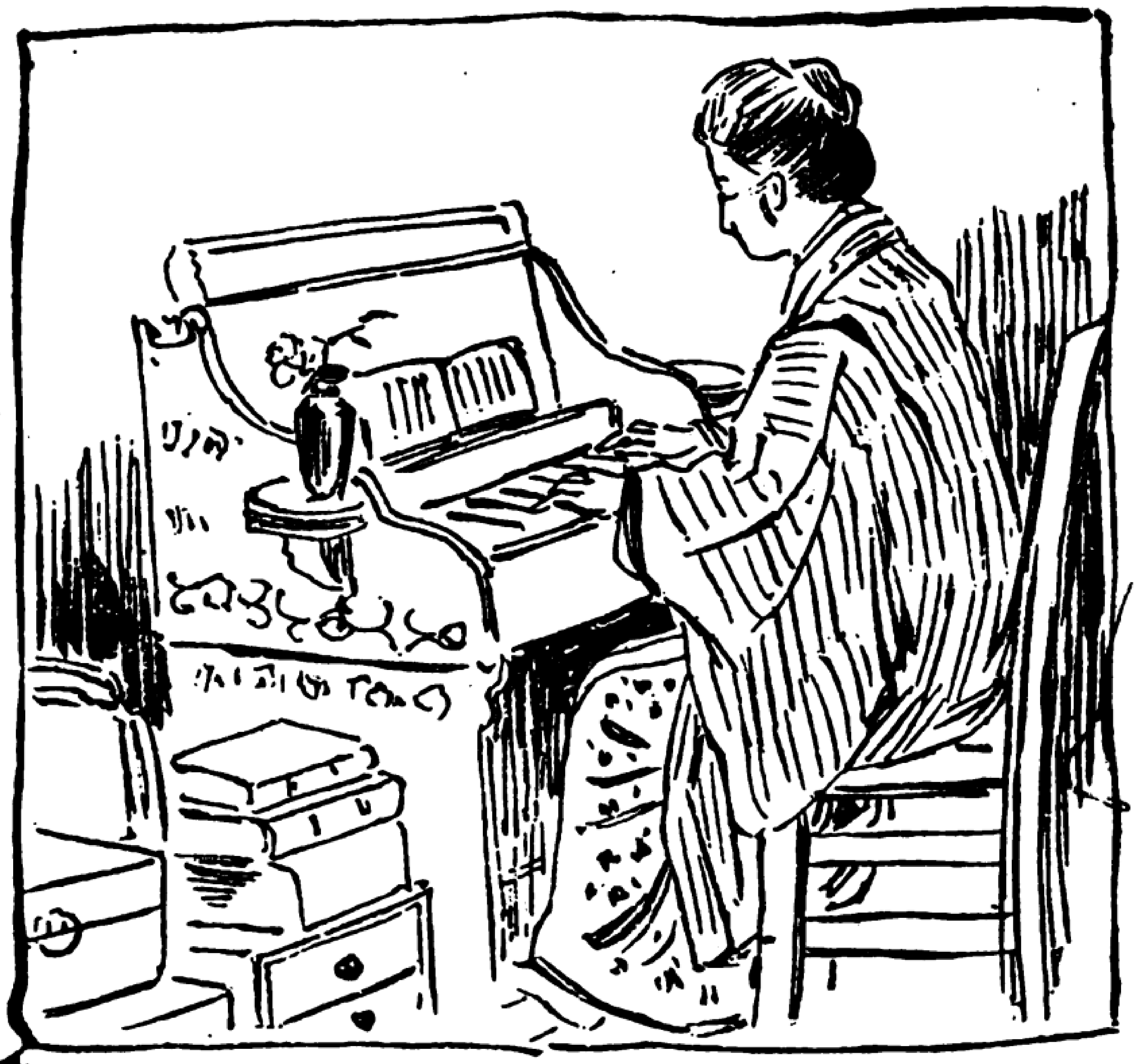
▲學科

其好めるは歷史、音樂、繪畫等で、其得意なるは習字

手藝等ですが、最も難儀らしいのは和文であるとの事、是は左もあるべきです。

▲體　質

何れも上流婦人ではあるが、體質は皆強壯で少しも醫者の手を煩はさず、嚴寒の際も日本婦人より綿入れ一枚位は薄着なれど感冒の患もなく、又日本婦人より殆ど倍程も健啖なれど腸胃を損する樣子もなし、最も世話のないのは女學生の通有病と云ふべき頭痛を起さぬ事であると時任女史は話されました。倘纒足のため不自由なりし歩行も餞、陳二氏は大に慣れて他生と大差はない樣ですが、龔氏は日淺くして足の裏に未だ結束の跡を存して居り、最初纒足を延す時には何れも痛たさうで氣の毒でありしと云ふ。



支那留學生陳彥安孃

▲食　物

南北京の各地に依り多少嗜好の差異はあれど、最初は日本料理より洋食を好く傾があつたが、當時は大概の日本料理を食べるやうに成つたのです、其中一番好くのは卵で何んな料理にしても第一の御馳走と喜ぶ故祝日など他生に平日と異つた菜を附る際には、支那婦人丈にいつも茶碗蒸を供する由（但し生卵、半熟は決して食べませぬ）。他に好む物

を擧ぐれば五もく飯、櫻飯、小豆飯等總て味附の飯、蕎麥、饂飩、素麺、蕃椒、生姜、胡椒等の香料一切、福神漬等の鹽辛き物、鷄肉、豚肉の内豚肉は一般の嗜好品ではあれども料理方に依ては少しも食べませぬ、其好める料理法は大切れの肉を鍋に入れ鹽を加へて凡そ三時間程煮詰め、湯汁を捨て油氣を去りたる物、或は砂糖と鹽にて煮詰めたる物だ相です。魚類は總て好まぬが天麩羅とすれば何魚にても喜び餅も雜煮の四切れ位は食べるとの事、唯嫌ひなのは味噌汁で之れがために毎朝別に澄し汁を拵へるのだそうです。

▲衣服と粧飾品の趣味

衣服やリボンなどは色合紋柄の高尚優雅なる物を撰定する趣味があるので、畢竟古き國柄の故と思はれます



支那留學生頤固常夫人

渡來して一週間下田歌子女史の邸に居る間に日本服を着け習ひ、ほんの必用品だけを調製した相です、丁度教場から戻つた彼婦人は、更紗或は新銘仙の羽織に同種類の綿入れを着け、此校の制服と鼠色改良服を被ふて居る風情は、毫も我邦の女學生と差異はありませんでした。

▲新聞雜誌

新聞は東京朝日を讀み、雜誌は太陽を愛讀して居り、此太陽は讀み終つて後本國へ送るとの事。

▲愛國心

遠く外國に在る人が深く我が本國を愛慕するは自然の情でありますが、此婦人等も特に此念が盛んで新聞に雜誌に油斷なく目を注いで居り、昨年滿州事件の在つ

た際に其號外を讀んで、三人俄かに額を集め何事か潛く〳〵と語り合つて食時にも膳に向はず、憂慎の色面に表はれ行李を調へて支度する樣子が見へたので、時任女史は夫れと悟り懇々と其誤解を諭された處、忽ち其言に服して心を安んじ平日の通り學科に就いたとの事。

▲看護婦養成の希望

右の事件あつてより國家的感念が愈々強くなつて日本の長處を習ひ得て之を本國に擴めたしと晝夜心を碎いた末、先づ赤十字社の組織に着目し己れ等の財產を擲ちても何卒我が本國に看護婦を養成したいと健氣にも計り定めましたが、自から先づ看護の方法を講習して歸國したならば、他日赤十字社の卵と成つて多くの看護婦を孵化する事が出來やうと考へ、夫れから一同特志看護婦の生徒となり、會日には如何なる事情が在つても休ます出席して勵みつゝある相です。

▲淸潔

彼國の缺點は不淸潔に在りと心付いて居る故、洒掃を初め萬般の淸潔法を精細に研究し、他日本國の改善を計らんものと、他生の働振を看做ふて自から實驗しつゝあるとの事。



支那留學生錢豐保孃

▲部屋の有樣

以上の話を續られた時任女史は、記者の乞を喜び諾して樓上なる三婦人の部屋に導れました。部屋は十二疊と八疊、廣き硝子窓より差し入る夕日は淡紅色の壁紙に映じ明るい淸雅な室であります。机は脚あると

低きとを備へ坐るも腰掛るも自由、本箱、鞄等は其側に列び、室隅オルガンの臺上に薔薇一枝を挿した小花瓶を飾り、室の中央に大火鉢一個を置いてありました三人は先程教場より歸つて制服を脫ぎ鼎坐して睦しく語らひ居る處でしたが、記者に向つて恭しく一禮し坐蒲團をすゝめて如才なくもてなし、時任女史は具さに記者の來意を說明され各の名刺を出させなどしたる後記者の乞に依つて互に嬌羞を帶びつ。辭退する三婦人を模型にならしめて寫生の便を與へられました。夫れより銑氏の揭ける風景とライオンのチョーク畫、及び鴨の毛筆畫を一見して暇を告けましたが、渡來の初めより慈母の如く愛し嚴父の如く導かれし女史の眞心は深く彼等の腦に印象されてあると見え、其敬慕する樣は一見した記者にも嬉しく感ぜられたのです。

女子大學寄宿生の生活

S N 女史

目白臺の中央、地高く氣淸き女子大學の寮舍に。起臥勉學する五百の女學生の狀況、其概畧を紹介致しませう

▲寮舍の大別

東方校の棚內、八棟の接續せる建物を內寮と總稱し、棚外三棚を豐明寮と云ひ、表門と對した二棟を華山寮と名け、尙少しく離れて自敬、益子、玉成の三寮を具へ、合計十六棟の寮舍であります。各一棟を一寮とし是に各三十人づゝの生徒を住はせて一家族の生活を營ませるのです、斯樣に區別したのは多數寮生の監督に便利のためで、素より十六寮內の狀況、同じ樣であります。

▲寮監

一人の寮監が三十人の生徒を受持ち、師となり母となつて大體の取締を司どつて居ります、寮監は大抵此校諸學課専門の教師で、是迄他の塾舍で永らく取締を勤めた年長者を選定したのです。別に生徒中より主婦二人を立て細事の始末を任せますが、これは一寮中の生徒が評定の上二箇月毎に推選し、國文科生と家政科生年長の大學生と年少の高等女學生と云ふ風に、偏らぬやう組み合せて立るのです。

▲自炊制度



女子大學寮舍の臺所

寮舍は總て自炊制度で賄ひ方と云ふ者はありません、寮生の食料は一人に付き六圓、寮費一圓の定めで寮監は毎月之を纏めて一旦事務所に渡し、事務所より諸商人へ支拂ひて剰餘は主婦が預つて細かい買物に拂ふのです。米麪包、醬油、味噌、瓦斯コークス類は皆通帳にして買ひ入れ、月末に事務所へ出すことになつて居るから料理表を作るに却々寸分の油斷は出來ません、若し御馳走が過ぎた月は拂が上つて事務所へ借が出來る、特に冬分

は燃料が夏分に比べると倍も掛るので竈の火氣も無益に使はれぬ、成る可く無駄な費を省いて食料には滋養に適當な物を用ひ度いと云ふ考は、寮生逹の頭腦から須臾も離れぬのであります。此實驗法は經濟學研究の妙藥で、又各生感情疏通の機關ともなるのです。倘感ずべきは單に消極的の節約に傾かず、經費に剩餘ある月は必要の勝手道具、室內裝飾品類を買ひ、又は數月貯蓄して自轉車一輪を求め互に乘り習つて快活な娛樂を試むるのであります。

▲寮生の御土產

寮生が寮監へ御土產と云ふ贈賄的風習を禁ずるため、寮監室には茶菓を備へ付けず、來客あれば主婦又は當番か臺所より持運ぶ規定であります、最初は如何程嚴禁しても御土產の習慣があつて困つたので、縱令僅かの土產物でも一寮全體に分ける事と定め、菓子類なればお八つに開き、乾物類は保存して度々副食に用ひ、器具なれば待客用、或は臺所用に充てる趣向を立てゝより、各々其意を解して鄉里から歸寮する際は甘藷一俵、又は椎茸、干瓢、豆類など其地の名產を一家族一同への土產として持歸るやうになつた相です。

▲當番

一週間に交替する當番の順序は其役割を表に作つて食堂に張り出してあります、先づ雨戶の開閉より炊事前後の係、前後庭園の掃除、樓上樓下の拭掃除、洗面所係、金盥磨、下駄箱、靴の始末などまでを各々三人位づゝの受持と定め、一齊に手配りして片付るのであります。

▲起床

夏冬共に午前五時三十分の規則で、校舍の宿直小使が號鈴を鳴すを合圖に寮監、寮生、下婢一齊に起き出で洗面場に入り、冷水で全身を拭ふもあり、風呂場で水浴をする者もあり。當番生は直に役目に取掛り、非當番生は手早く髮を結びて運動場へ出掛けます。

▲早朝の運動

早天運動場へ出て樹間を徜徉するもあり、鞦韆を試むるもあり、體操及び薙刀の復習を勵むもあり。星の光

漸く消し頃より廣濶な庭園に集つて新鮮の空氣を呼吸するのは、寮生の大なる快樂であります。

▲室內外の掃除

庭掃除番は竹箒、芥取を携へ垣根及び玄關の內外裏手、臺所の周圍等を掃き淸め、生垣の際には四季折々の草花を培養して園藝研究の一助として居ります、室內掃除番は白キヤラコの縁付前掛を締め襷がけ甲斐々々しく立働き、便所の掃除まで受持つて居ります。

▲朝食

朝食は六時半から七時までの間に了ふので、丁度五時半から一時間程で支度を整へるのであります、此の寮では近頃朝晩の二食を主に洋食と定めたが、折衷料理ゆゑ格別入費もかゝらず、衞生上にも至極宜しい。最近一週間の朝食表は、火曜が靑豆ソース水曜が白味噌ソース及びポテート、木曜が小豆、金曜がポテートソース、土曜がライスカレー、日曜がおさつ飯及味噌汁、月曜が滋養スープ、此他に麵包と砂糖を添ふ。晝飯は下婢一人にて料理するため一番手輕であります。



女子大學寮生就寢前の運動

▲晩食

五時半から六時までの間に始るので、三食中一番手の

こんだ料理と定めてあるから、非常番の寮生でも有志の者は割烹の手傳を致します。一箇月に一二回互に他の寮監を招く時は、寮生相應の饗應を備へるので、食後の菓子までも手づから拵へます。一週間の晩食献立の例は、火曜が豚の角煮、水曜がスチュー、木曜が豆腐プッヂング、金曜が鰯のフライ、土曜がすし、むきみ汁、日曜がハイムシ、月曜が腸詰、これに麵包とバタを添ふ。一寮舎で一回に炊く米は凡そ四升で、晩の洋食に用ゐる肉は五百目弱との事。目下出入の米屋は音羽の越才、肉屋は傳通院前の西川、水道町の色松だそうです。其他野菜、魚類等の購求は寮生達が時々水道町邊の商店へ出掛けて、出入商人との相場を比べ油斷なく掛引するとの事。

▲食堂

十四疊程の廣間に巾廣の食卓四脚を列べ、白金巾を掛けて食器を置き、一脚を八人にて圍み、年長生と年少生と組み合せて行儀を見習はせ、寮監も此中に加はり談話の習練を促すなど樣々の注意を與へます。此室には茶棚を備へ、偏額、花瓶等を飾り付てあり、時としては應接間又は會議室、大祭日の式場にも用ひるとの事。諸新聞は何時も此室の卓上に置き朝晩の食後に讀ましめるやうにして、生徒の室へは持ち行かぬ定であります。

▲寮室内の體裁

六疊に三人、十疊に五人、十二疊に六人の人數割です。机、文房具、琴等は各自郷里から持ち來つたまゝで樣樣の體裁に飾り付け、花瓶、掛額、知巳の寫眞等各々の趣味に任せて雅致な裝飾を施してあります。各寮生中に風儀係を設けて服裝及び室内飾付に殊更注意させるので全體によく整頓して居り、衣服も品質は極質素ですが清雅な物を着けて居ります。

▲郵便

郵便函は各寮の門口に二個づゝ掛けてあり、一は受信函、一は發信函で、門衛が一日に四五回位取集めと屆け入れとに廻ります。通信先は入校の際に親族、知巳、關係者の印鑑を取めしめ此範圍の家だけを許すので、

出し入れには勿論寮監の印を貰ふのです。

▲休日の外出

日曜其他休日の外出先も亦前例に從ひ、各生に外出簿一冊づゝ渡し置き出入の際寮監の印を與へるので、訪問先から辭し去る時其家の印を貰ふ規則にしてあります、歸校の時限は夏は五時半まで、冬は四時まで。

▲各寮生親睦運動

一棟に起臥する寮生は異質の姉妹の如く友愛も格別ですが、寮を異にすれば交際の度幾分か冷かになる傾がないとも言へません、此弊を防ぐために授業後は各寮生互に訪問する事を奬勵し、又多數團欒して遊嬉する方法を設けてあります、それは一週間に四度、午後四時から五時までの間に組合運動を試みるので、內寮と外寮各半分づゝ二百餘名を一組とし、甲の一組は月、金、乙の一組は火、木と區別し校舍の廣庭に雲集して或はバスケットボール、ダンス、鬼ごつこなど多人數の遊嬉に適當な運動を催して、快樂の中に交情を溫めるのです。

▲自修

晩食後七時より九時までを自修時間と定めてあり、寮生は各自の室に閉ぢ籠つて復習又は明日の學課を支度するので談話は一切嚴禁されてあります。寮姆も亦此時間に臺所で勉學し寮生が一人づゝ每夜交る／＼敎授致します。斯く勞働の間に充分普通學を修め得られるので、寮姆の希望者も澤山あるが、宿元も確かに性質も篤實な女でなければ抱へません、八時から三時までは各寮空家同樣になるから、性行堅固な者を要するは當然の譯です。

▲就寢前の運動

嚴肅な自修も終れば一同食堂に集り、寮監は中央に坐して簡單な修身談を試み、又衞生上の注意を與へ、衞生係の寮生は帳簿を控へて各生腸胃の工合より便通の加減まで一々之れに記入します、夫れから寮監は樣々の新案を應用して四肢及び胸肺の疲れを囘復させるので、其一二を擧れば、體をそらして大きい呼吸をさせ或はエーイーアイオーユーの數音を一呼吸の間に幾度

も操り返へさせて肺力を強うさせ、又は兩手を上下左右に伸して活動を與へるなど面白い運動凡そ三十分斗り在つて後互に一禮して室へ退き就寢の用意を整へます。

▲寮監の見巡り

十時の號鈴を鳴せば悉く瓦斯を消して全く寢に就くのですが、各室に鐵網の雪洞と燐寸とを置いて不時の用に備へてあります。寮監は全寮暗となるのを待て此雪洞を携へ一室毎を見巡り火の元から戸締りを篤と見届けて後床に入るのです。

▲日曜及び祝日

外出しない寮生は琴を彈ずるもあり、縫物を爲るもあり、自轉車に跨つて庭に遊ぶもあり、時としては親睦會を催し演説を試みます、天長節又は年末には全寮生の大親睦會があつて、互に精神の修養或は卒業後の目的を語り合ひて後、餘興としてピアノ、彈琴、活人畫、表情體操などを催しますが、活人畫の裝置も有合せの物品を巧みに變化させて工夫するのだ相です。(完)

女子英學塾の瞥見

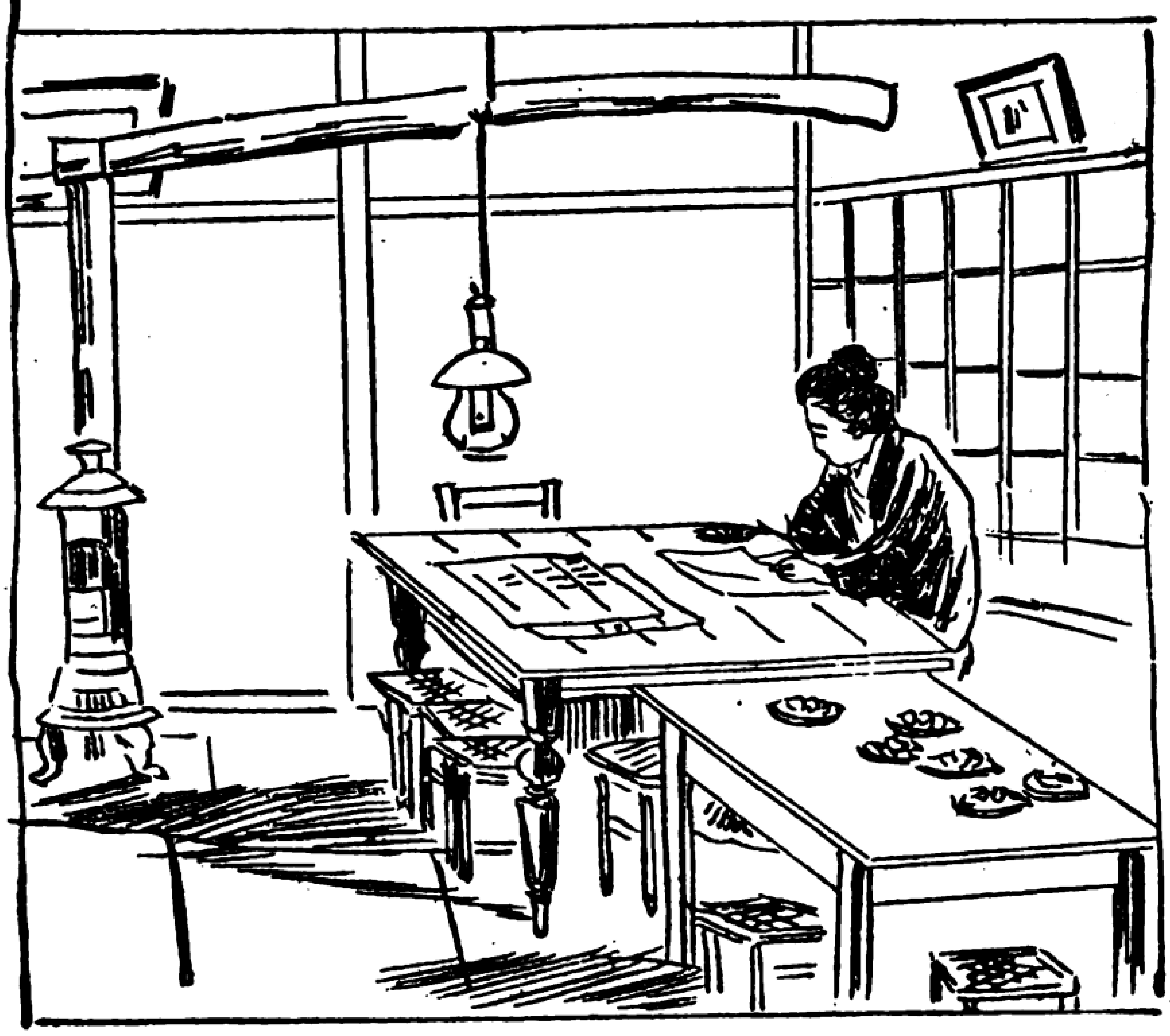
（津田梅子女史創立）

彌生女史

麹町五番町に新設せる塾舍は、南向の日當りよき二階建で、六疊五間、四疊半九間、他に應接室食堂兼自修室、風呂場、臺所、物干等の完全なるあり。入塾生は三十人、通學生は百人を限り、成る可く多人數一室に混住するを避け、四疊半に二人、六疊に三人位の割合を以て配置せり。校長梅子女史は濫りに門生を募集して亂雜に流れしむるを厭ひ、少數を懇ろに薫陶して遺憾なき事に勉めらる、故に其主義とする所は死したる規則を以て活ける女學生を束縛することなく、家庭組織の塾風を作つて各生に自由を與ふるにあり、而して起臥、出入の概則は其宜しきに適し、洒掃飲食の諸係りは其分を全ふし、整然欠點なきは此塾の美風なるべし。

▲起臥

朝は七時十五分までの食事に間に合ひ、夜は九時より十時までに寢に就けば可なりと定め、餘り微細の嚴則を設けざるなり元來此塾生は高等女學校卒業の力ある者にして幼齡者は少なく、且自から確乎たる目的を立て入學せる者多きが故に、一より十まで監督者の命令を煩はさゞるも、各生自から守るに巧者なるは當然の事とす、朝も種々の事情にて起き出るに僅かの遲速もあるべけれど、食時に後れるは誰れも恥辱とするを以て不揃の心配は絶へてなし、夜も之れと同じく都合により少しく遲くまで復習爲し度き者もあるべく、僅かの事は寛大にゆるし置くと云ふ。



女子英學塾の食堂

▲燈火と火鉢

夜間は塾生皆ランプの光輝ける自修室に集つて復習し、各室にランプを置く事なし、但し廊下には點じ置きて不便なからしめ、又蠟燭は室內に備へありて不意の用に供す冬夜暖を取るにも亦自修室にストーブを焚ひて充分に寒氣を防ぎ、後室に歸りて寢に就くが故に各室內には火鉢を置く事なし、畢竟失火の憂を豫防するためなり。

▲土曜日

毎土曜日の晩食に料理の實習あり、四五人の生徒組み合ひて、原品の見積りより分量、煮焚まで悉く擔任して練習するなり。洗濯も此日の午後に爲さしめ、又生徒の中裁縫に未熟の者あれば此日の午前半日間舍監に敎を受く。

▲金曜日

月曜日の學課の支度は此日に於てし、土曜と日曜には雜用を辨ずる事とせり。

▲木曜日

此日一時間、時事問答と云ふを設け生徒互に新聞の記事に就て時事を話し合ひ、智識を交換するを勉む、此際には米國敎師グリイン孃臨席して問答の列に加はり、各生皆英語を以て談話するを練習し樂しき研究をなすなり。隨意科とせる薙刀の稽古も此日に在り、敎師は小松崎古登女史にして目下就ける者十四五人なりと云ふ稽古は體操塲に於てし木製薙刀五六本、同胴鎧一本を此室に具備せり。

▲日曜日

日曜には聖書を研究する者多しと雖も、宗敎學校的に之を規則とせるには非ず、

▲塾室の談話

平日の要話も雜談も大槪英語を用ふる事とし、專ら實地研習を勉むれども、校外に出でゝ妄りに滔々と英語を喋る等は互に堅く戒むる所なり。

▲新聞雜誌

新聞は時事、婦女新聞等、雜誌は女學世界、女學雜誌、婦人界、等にして其他諸方より寄送せらるゝ物多し、此新聞、雜誌及び書籍の取始末をなさしむる爲に、一ケ月交替の整理係を生徒中より撰定す。

▲室内の洒掃

樓上、樓下の拭掃除、室内の取片付、挿花の係りも、各〻順番を定めて秩序よく繰り廻はし居れり。

▲敎授の練習

本科三年の生徒は、練習のために一週に二時間敎授を受持つ事と定む。

▲校長の食事

楫子女史は毎日朝と晝の二食を塾生と共にし、其際社會的、精神的、或は經歷的等の各方面に就いて談話を試み、和氣藹々の中に敎導を勉めらる。

▲茶菓子

毎日三時に手輕な茶菓子を與へるの定めなり。

女子學院塾舍の生活

矢島楫子刀自の談

中村鈴子

矢島女史を訪問した日は、彫刻家青山氏のためにモデルとなつて、机邊に端坐せられてありましたが、快く記者を傍に引いて塾舍の內容及び御自身の舊時敎育談を爲されました。

▲校舍塾室の狹隘

此處の地面は千七八百坪ですから、總ての計畫に對して廣さが匹敵致しませぬ、夫れ故建物を高くして漸く間に合せて居りますが、此頃は燒け出されて食堂も塾室も敎場に兼用し大混雜と云ふ始末で、一寸平生の有樣を失つて居ります。

▲塾生の組み合せ

九疊に五人、八疊に四人、六疊に三人、四疊に二人の定めで、其組み合せは成る可く各生の望みに任せるのです、先づ同級生は互に硏究したり同じ參考書を用ひたりする都合のために同室を便利とし、又同鄉里の者は自然友情が厚いから同室を望みます、此他種々各自の都合で望みがありますから、壓制して分配する次第に參りません、充分望ませるだけ彼等に望ませます、併し監督者は其望む儘に放任はしません、其を程よく參酌して組合を指圖するのです。各室には必ず一人年長けた者を入れて室頭とし少い者の身のまわり、髮あげなどの世話を致させ、病人があれば幹事に屆け出させます。必ず一室の組の中には老練な世話好が居て旨く取り計ふものです。

▲年齢

最も少さい者は十二歳で二十三四歳位が先づ一番年上です、此校は豫科四年、本科四年、高等科二年で隨分永いやうですが、十二歳位で豫科の二年に入れば丁度二十歳で卒業する勘定で、英語の發達も著しいから得で御坐います。又年を取てから入る者は、皆經驗もあり英語も相應に出來、確とした望を立てゝ三年位で卒業の出來る資格の者ばかりですから世話がありません。

▲塾生俗務の分擔法

どこまでも家族的制度の主義ですから出來るだけ俗務を分擔さする樣に致しますが、日々の學課に追れるので悉くは出來兼ます。學生の細かい小遣は自分で始末しますが、生活上の會計を受け持つのは無理な仕事で學課の妨げとなりますから、會計係りは別に一人定めて置きます。雜事は生徒十人づゝが一期(一年を三期に分つ)を受け持つ事とし、給仕番、後仕舞等の食膳係りの他に、應接間、勉强室、廊下、階子段等の掃除係りを定めてあります。

▲給仕番

朝、晝、晩の各受持を一期即ち三ケ月間繼續させ、五十人に就て十人の給仕番を立てます、これは五十人の給仕を爲しながら自分達が食べるので却々忙しい役です。朝食係りは大抵卒業前の生徒が受持ち、洗物片付は新入生又は年少者が致します。下女は夏冬共五時に起出で、係りの生徒は六時に起き身支度を整へて食膳の世話に取かゝり、七時三十分までに悉皆片付終るのですが、皆手順よく迅速に用を片付けます、七時三十分に勉强室に集つて感謝の祈を捧げるまでに間に合はぬのは耻辱として働きます。又食卓に向ふまでには皆髪を結び上げて、亂れ髪で食卓に就くものは一人もありません。

▲晝と晩の食事

晝は十一時半より支度にかゝり、晩は三時二十分に授業終りし後隨意運動を試み、四時四十分より食事係が出て來て五時に食卓に就くのです。それで三食御菜の

例は、朝が味噌汁に昆布の煮付と香の物、晝が肉類或は魚類、晩が澄し汁又は乾魚、貝類を入れた味噌汁に煮豆、先づ此樣な取合せです。御飯は衛生のために割麥を少し交せます。

▲家庭的食物

金曜の御晝には鮓、お萩團子、赤の御飯等生徒の喜ぶ物を拵へます。又休日にも此樣な物を生徒自身にも拵へさせて製法を習練させます、永い間學校に居る事ゆゑ成るべく家庭的の食物を與へ趣味を養つて與れろと、會計



矢島揖子女史

係へ私が懇々頼んで置くのです。

▲號外

火曜の三時頃にお八つが出るのを號外が出る〳〵と言つて生徒が喜びます此お八つは秋は柿、冬は蜜柑、三月は豆煎り、五月は槲餅と云ふ風に其時時の物を食べさせるので一つには生徒の希望を充たし一つには世俗を離れさせぬためと思ひまして夫れから正月殘つて居る生徒は雜煮やら重詰やら一家の通りに拵へさせます。

▲掃除

日々の掃除の他に土曜の午後から大掃除を致します、階子段だけでも澤山の事ですから一役です、雑巾掛は棒の先へしばり付けて推して歩くのです、庭掃除は塾室の周圍だけは生徒が致し、全部は出入の植木屋、車夫女中などが致します。

▲燈

敎場の主なる處と廊下には電氣を點じてあり、生徒は敎場に集つて八時半まで自修いたし九時まで廊下を自由に運動などして九時半に寢に就くのです。部屋には明りを置きませんが廊下の電氣燈で寢支度は充分出來ます、但し敎員室と卒業前の人の寢臺部屋にはランプを置きます、是等の人は最早ランプで粗匆する心配はありません。寢臺部屋と云ふのは西洋間の事で、卒業前の人に洋風家庭的の事を慣らさせる爲に設けてあります、元來此校は英和の學を同じやうに發達させる目的ですから萬事其積りで敎育するのです。ランプ掃除は年取つた叮嚀な人を撰んで受け持せて居ります。

▲ベルの係り

諸係りの中で最も六づかしいのはベルの役で、卒業一年前位の人に受持せます。目醒、各稽古時間の合圖、食事用意、御膳、夜の勉强の始めと終り、寢る前の禮拜、寢支度、就床等其都度の正しい時間は皆ベルが當ですから、責任の重い役目なのです。

▲監督

三谷民子、水登みす子の二女史が監督で、何れも多年敎育に從事し學識のある人達です。初めは年寄の人を頼んでも見ましたが、忙しい學生生活の管理には却て壯年の人の方が巧者でもあり、且自身が寄宿生時代の經驗があるから同情が深いやうです。

▲箱入は不可

生徒を箱入にして閉ち込めて置くのは、監督者が世話はありませんが、學校を出てから役に立たず又過が在りやすいのです、それ故成る可く何處へでも行て見させ、何の演説でも聽かせに遣ります、其代り外出の際は自ら守るの注意だけは充分與へて置きます。

▲日曜日

午前は皆教會へ出で午後からは日曜學校を教へに行く人もあり、用足しに出掛ける者もあり、自由に致して居ります、此校に居る者は是非共教會へ出よと勸めは致しませんが、大槪私の主義を信じて來られる人達ですから、會堂へ參つて說教を聽く事は皆喜んで居ります、日曜の晩に皆が勉强室に集り各々勝手な事をするのを共勵會と稱へます、これは吾が主義に向つて唯居るなと云ふ旨意の會で、聖書の硏究をしやうが、編物をしやうが、又は下足番をしやうが各好む處をするので畢竟唯居ない事に定てあります。集り場は高等科生と本科以下の學生と各二室づゝに分ちてあり年少生は其れ相應に會堂で聽て來た御話を致し合たり讃美歌を歌つたり却々感心な事をして此夜を過します尙此會に集まる時は各々一錢づゝ持ち寄り、此積立金を以て各地の飢饉、水害などの義捐金に備へるのであります。

▲地久節

畏れ多い事ながら天長節を祝して地久節を祝さぬのは物足りないと云ふ問題の起つたのは、私達の仲間が二十年前に唱へ初めたのでありました。米國では大統領夫人の誕生日に全國婦人が大ひに祝賀して夫人を招待する由、日本でも何卒皇后陛下の御誕辰を祝し奉りたいと頻りに唱へ出したのです。丁度其頃日本譯の新舊約全書が出來たので、祝文と右の聖書を獻上致したいと種々盡力致しましたが、遂に願が叶ひませんでした、其後常に遺憾に思つて居りました處一昨年から市會で地久節を女學校の祝日とされたので、私達は豫ての希望が達した事と一同喜んで居ります。

▲軍人袋

此校の生徒達も目下戰地に向はるゝ軍人方のために、何か寸志を捧げたいと云ふ熱望で軍人袋と云ふ物を澤山拵へて納める事に致しました、これは更紗の切れで紐付の袋を作り其中へ綳帶、腫痛膏などの外科用品と鋏、糸など一寸綻びを縫ふ道具を入れる趣向です。ホンの心ばかりの獻品でありますけれど、生徒達が親をせびつて無理にお金を出すのでなく、自分等がリボ

ンの丈を短くして集めた極可愛らしい赤心を以て軍隊に寄附するので御坐います。

▲刀自舊時敎育談

私が出京したのは明治四年で、猿樂町の屋敷に居る實兄（矢島直方氏）の家へ參つたのですが、其頃彼の邊は旗本屋敷ばかりで、酒屋へ三里、豆腐屋へ一里と云ふ淋しさ、杜鵑の聲は何時でも聴かれました。兄は唯今で申す堤防橋梁係りで土木局へ勤務致し百圓程の月俸を頂いて居ましたが、家族は郷里に殘して獨りで此邸に住ひ、書生を大勢置いて始末する者がないために借財が出來て居ました、私は食客を悉皆斷り、同居したい者には食料を出して貰つて整理をつけ、三年程の間に四千圓の借財を拂ひました。其頃虎の門の舊東京府廳內へ敎員講習所が出來まして、少しでも敎育に關係ある者は此處の免狀がなければ公然門戸が開けぬ事に定まり、假令三人でも生徒を集むる者は敎育法を講習すべき規則となつたから、男女共糊口のために通學する人が澤山あつたのです。或時兄の友人が私に此講習所へ入れと勸めました、畢竟私は郷里に居る頃好きな道とて女大學、烏丸などを少しばかり女子供に敎へた事を知つて居るから、丁度小學敎員に適當だと思つたのでせう、私は其時既に四十歳の昔者で新智識は無し迚も及ばぬ事と申した處其友人が「今の小學敎授法は大學や中庸も要らぬ、襷がけで臺所へ出て俎の始末が出來れば充分で、貴女には適任だ、嘘だと思ふなら講習所へ往て御覽なさい、人參や大根が轉つて居ますよ」と云はれたので私も行つて見る氣になりました、講習所では五十音、單語、連語の敎へ方及び筆算等を研究して時々生徒ともなり敎師ともなつて講習するのでした、婦人連は皆私より若い方ばかりでしたが、互に最も困つたのは暗算でしたね、中にも私などは兄の家で初めて數字を覺へ、筆算訓蒙を頼りに加減乘と、一桁の除法だけ獨習した位でしたから、口早に言はれる暗算の出來やう理はありません、併し默つて答へないのは損だ、間違つたとて耻でもあるまい盲滅法に答へやうぢやありませんかと隣席の人にも勸

め矢鱈に答をした處、不思議にも至難の問題が二ッ程出來たので評判がよくなりました、一年半で講習濟の免狀を貰ひ明治八年に初めて常盤小學校へ月給六圓で敎員となり、後五六個月で櫻川小學校へ轉任しました、其頃女子敎育が勃興して男女同權論も盛になり外國へ留學する婦人も出來ましたが、夫れはホンの一部の人に止り全躰の勢から見ると却々道が開けて居りません、辛苦して小學敎員となり了せた處で八圓や十圓では獨立の位地は保てない、何樣しても英學を一般の婦人に發達させて見解を擴め活動の道を開かねばなるまい、又道德に於ても東洋の狹苦しい理窟ばかりでは迚も追付かぬと、斯樣考へ付いては何時までも小學敎員に安じて居れなくなりました、併し私は普通學は勿論、英學とてもウィルソンリーダーの二まで習つた位で全然暗闇であつたので、今から自分が研くのは迂遠な事、寧ろ女子敎育周旋の責任に當つて目的を遂げたいと思ひ、親の如く慕はれた櫻川小學生徒に涙と共に別れを告げ築地の新榮女學校へ入りました、今は故人となつた此校の敎師ミッセス、ツルーと云ふ寡婦が、片腕になる日本婦人を頻りに需めて居た折柄、傳導師が私をツルー女史に紹介して招聘させたのです、私は此女史に接して話を聽き熟々其目的用意の周到なのに感じました、女史は敎育と宗敎を貧民に施すよりは成るべく上流社會の家庭に及ぼしたいと云ふ主義で、私に日本上流社會の言葉使ひを學ばれました。私は此校の幹事役を三四年勤める間に、外國人と交際するだけは略慣れまして、洗禮も此處に居る內に受けたのです。

▲櫻井女學校へ轉任

親友のちか子女史が良人と共に敎育と布敎の目的のため北海道へ轉居する計劃を立て、其女學校を是非私に引受けて呉れとの賴み。私も任が重過るから再三斷りましたが、ツルー女史も自分が後見するからと勸められて遂に明治十四年に引移りました。此頃寄宿生二十五人と附屬小學校、幼稚園に少しばかり生徒が任つたが、二三年の內に大に盛に爲り大學敎授の夫人方も

發られ一時熱心に通學されました。併し此夫人方には私が最初から、とても續くまいからお止なさいと忠告しましたが、案の通り僅の内に御止めでした。實際月謝の集りは宜つたが、成功する人が少くて困りました。

▲女子學院の設立

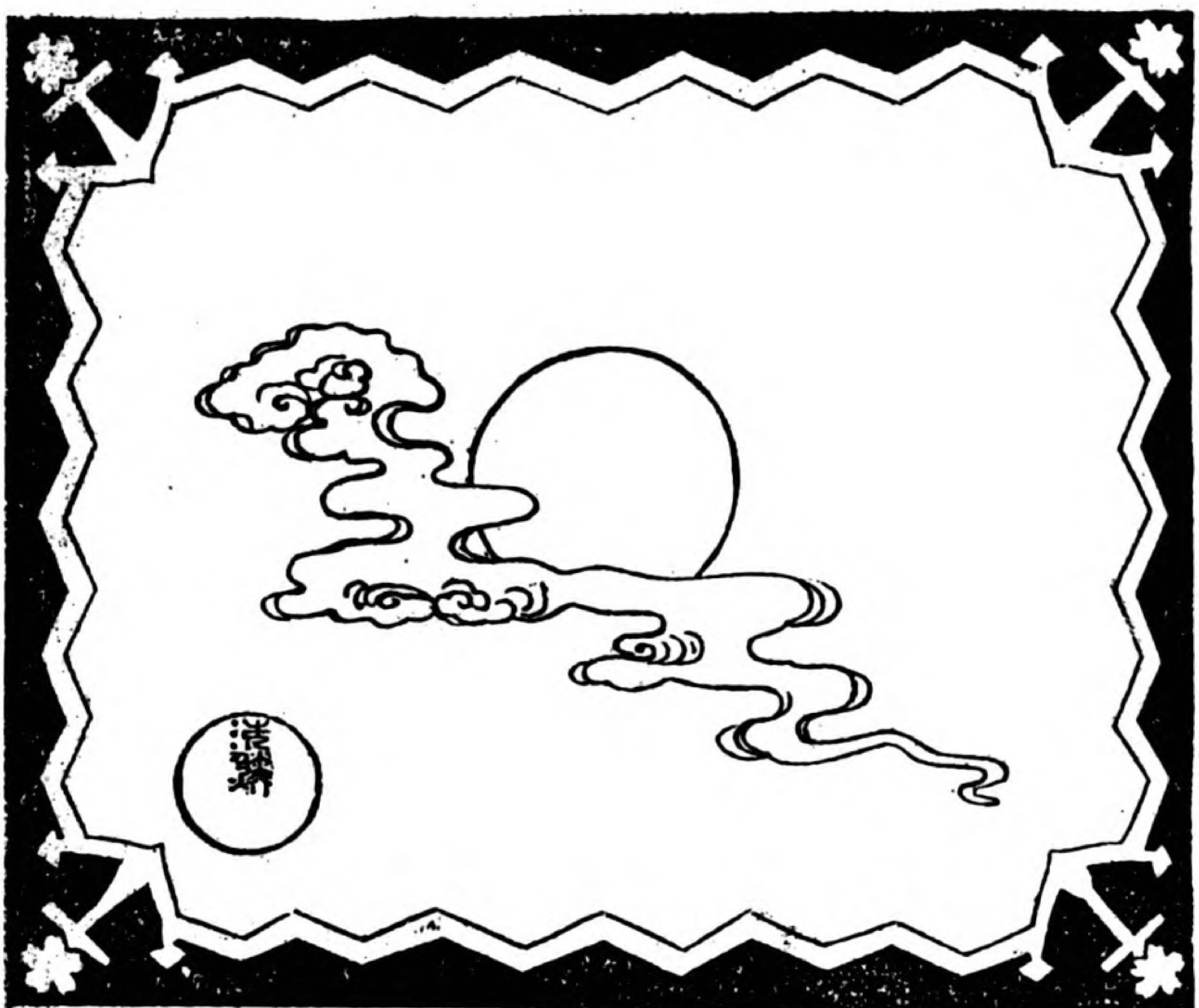
櫻井女學校も追々手狹を感じ中六番町へ家を建て、不足の分は近邊に借宅して寄宿生を置き間に合せて居る内、新榮女學校の方でも次第に狹隘を來したので、建築資金の都合上度々交渉の末、愈々明治二十三年に合併の相談が纏り六年間に漸く全部落成したのであります、斯樣に永の年月無學無識の老の身で學校生活の經驗をいたし、追々盛んに爲りましたのは、偏に神の御惠と皆樣の御盡力の御陰だと感謝致して居ります。

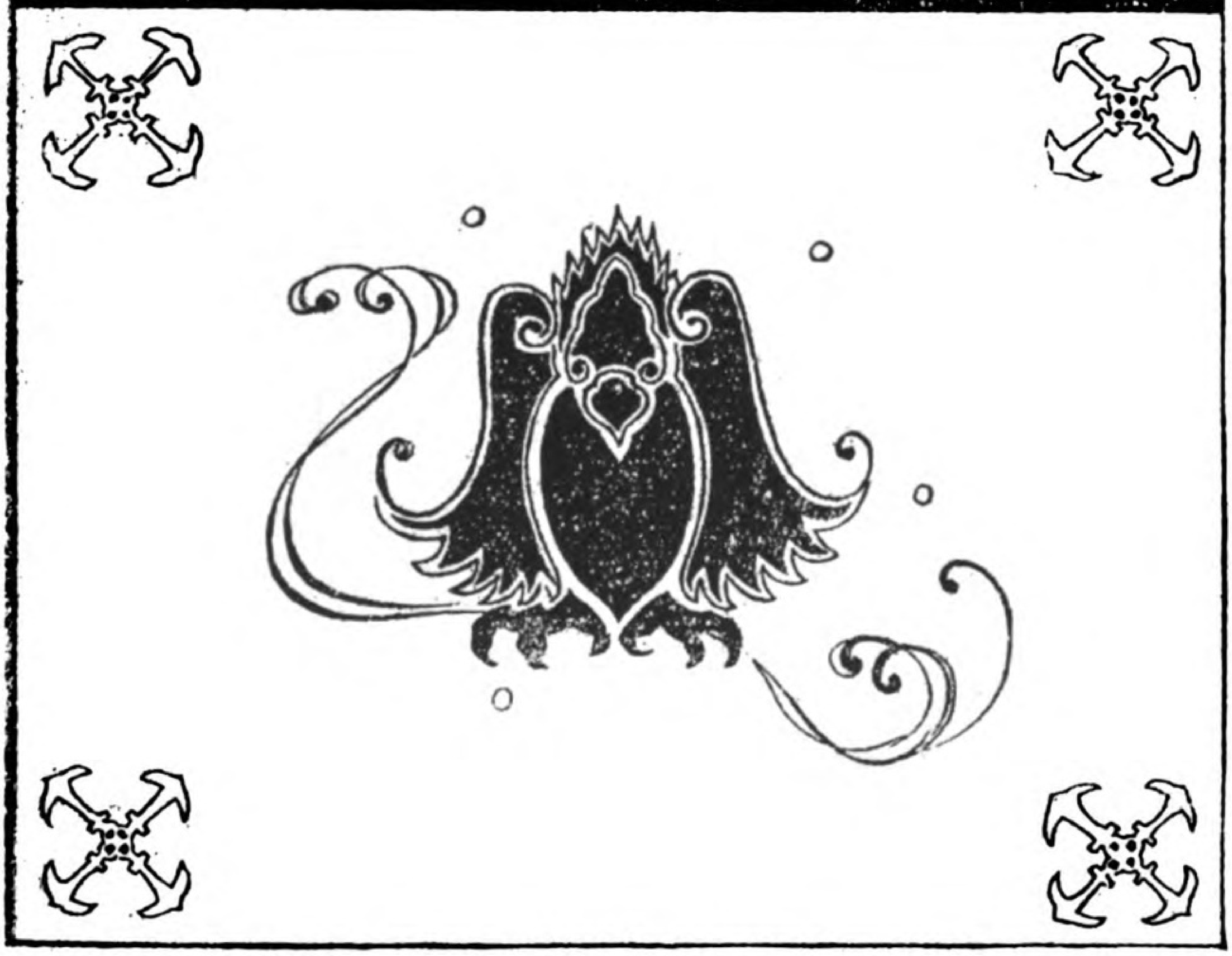
尙私の目的を繰返せば英語を早くより一般の女生徒に練習させたいのにありますが、餘り幼少からだと英語の方が覺へよいために日本の普通學が疎になり全然西洋人化して仕舞ふ弊害がある、又年を取過れば容易く習練致しにくい、先づ十一二歳から充分に仕込むのが良法だと思ひます、尤も當時は高等小學から英語を敎へますから遺憾はありませぬが、成る可く此英語を日本の學問と相並んで充分完全に發達させたい希望で御坐います。

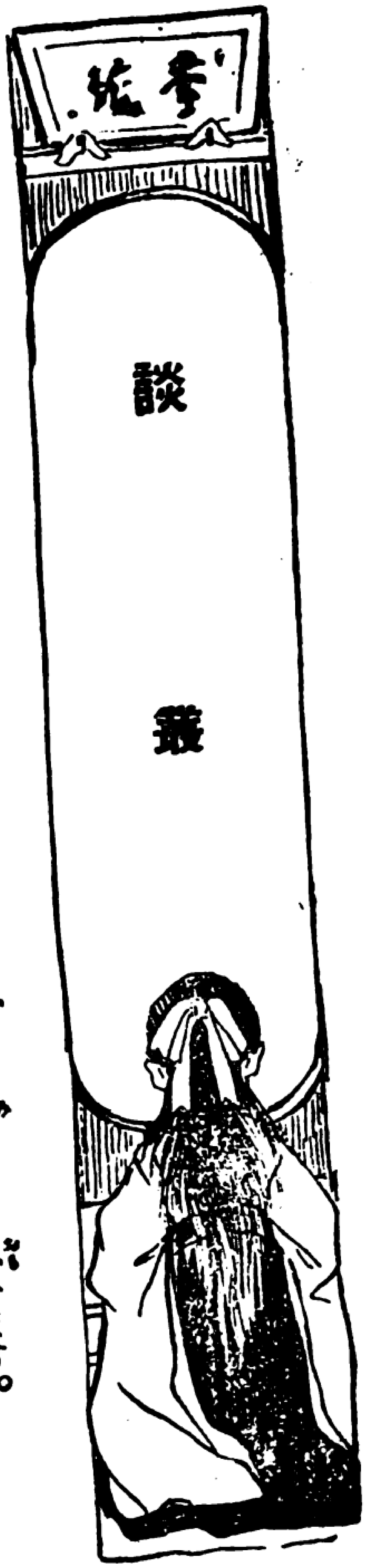
（完）

露國の女子

今より二百年前の露國女子は極めて窮屈なる位置に餘儀なくせられ各戸とも内房とも云ふべき女部屋特に設けられて近親の外には決して男子に面接するを得ず未婚の女子は其結婚前は決して男子に接するを得ず只だ一揆杯の起りし時相方相見るを得るに過ぎず現時にても宮室の祝節には皇后及び近侍の婦人等古代女服の遺物なるかつぎ(頭衣)を着するを例とし又村落にて結婚式行はるゝに當りては之に立會はしむる爲め老女を這はす古代の風習今尚ほ行はれ聖彼得堡若くは莫科に住する者の若き妻君は大概夫の生地なる村落に一人殘され金錢も與へられず自由をも與へられずして舅姑の膝下に殆んど奴隷の如くに待遇せられ若し其の生兒一人なるときは天井より埀下せる籠の中に之を入れて耕作に從事せざれば姑より叱責せらるゝを常とす、數年前まで露國には中等階級なしと唱へられしが現今は之に反し富み且つ勢力ある中等社會漸次に其根底を固ふする有樣なるが此等の勢力家は概して猶太人、獨逸の血統若くは少數の露種血統を有する者に占められ純粋の露國人は多く貧乏なり此貧乏なる露國人の娘等は醫學校に入りて研究に餘念なく目下ペルヌ大學にある女子の醫學生は三百人餘なりと云ふ。







米國の女學生

女子高等師範教授　井口あぐり女史

私は米國の女學生に就てお話致して見ませう。尤も米國と申しましても廣うございますが、私は主もにボストンに居りましたので、從つてお話も其局部に止まつて居るかも知れませぬ。併しボストンと云ふ處は、亞米利加の中でも學問の中心點とも云ふべき處でございますから、周圍の光景も商業風の紐育等と違つてどちらかと云ふと着實な方に傾いて居るのです。

デ米國の女學生と申しますと、大層範圍が廣くなりますが、先づ高等女學校、それから大學校と、此二つの方面から言ふて見やうと思ひます。

▲萬事が無邪氣（お轉婆？天眞爛熳？）

高等女學校程度の生徒は、何處でもさうですけれど、わけても亞米利加の高等女學校の生徒は、誠に無邪氣な、罪のない、天眞爛熳と云ふやうな風がございます。例を擧げて見れば、マア自分の思ふことは遠慮なく言ひ、自分が斯うと思込んだことは誰れの前でも決行すると云ふ風で、初めて日本あたりから行つた者の目には、女として些と愼のない、謂はゞお轉婆とも見える位であります、かう云ふ有樣が丁度女子大學の――女子大學は大抵四年位ですが、其二年位までの間に、行

はれるので御在ます、それが大學の三年位になると、ズーット落付いて來まして、其振舞も自ら閑雅に、自分で自分を省みて、つまり女其もの、風になるのでございます。



女子職業學校生徒製作の繪畫

それで高等女學校の生徒と言へば、丁度日本などゝ同じ位の年齢で、大抵十七八歳です。それから大學に行くと、二十歳か二十一位になるのですが、初めて日本などから行つて見ると、どうも非常に生意氣な、亂暴な、お轉婆な、惡く言へば殆ど野卑のやうに見える位です、けれども、段々交際つて見ると、實に無邪氣な、可愛い所があります。日本の人で彼國から歸つて來た人の中には、能く亞米利加の女學生は生意氣で仕様がないとか、お轉婆だとか云ふことを言ふ人がありますが、それはまだ眞に交際つたことのない人の言で、能く交際して見ると、誠に飾のない、無邪氣な人達なのです、人の見て居る前だから柔順にする、人の見ない所であるから不作法なことをするとか云ふやうな、物事に表裏の行はしませんのです。それであり

ながら親切と云ふ心が大變強く、同情の心が厚い、殊に私などに對しては、異國から行つたと云ふ所からであつたかも知れませぬが、年齢に似合はない程心付いて、色々と面倒を見て呉れました。

さう云ふ風に自分の言ひたいことは言ひ、憤りたい時は憤ると云ふ中にも、人を誹るとか、人を傷けるとか云ふやうな風は少しもありませぬで、たゞ罪もない、可笑げなことをお互に言ひ合つて笑つて居ると云ふ風でございます、一口に言へば交際に巧で、快濶の中に眞實な所があり愛らしき同情に富んで居るのでございます。

大學の一年或は二年位はさう云ふ風な有様でありますけれども、三年位から上になりますと、前に申上げたやうに大變落付いて、言葉使ひから、總ての擧動までが一切變つて、つまり女らしいと云ふ風になつて、言ひたい事があつても愼み、笑ひたいことがあつても餘程控目にするやうに見えます。併しそれにしましても日本の女學生などから比べますると、何處かにさつぱりとした、快濶な所がございます。勿論行を表裏にするなどゝ云ふことはございませぬから。

▲家庭教育の關係

私の考へますのに、家庭の教育と、學校の教育とが大に關係して居るのであらうと思ひます。女學校時代の生徒と云ふものは、恰で子供と同じやうな取扱を受けて居るのでありまして、十六七になりましても、矢張り十二三位と同樣に親達は見て居ります。從つて其行動に就ては餘り檢束を加へず、行儀作法なども、さう八ケ間しく言ひませぬ。尤も餘り粗暴に流れるとか、人に害を與へるとか、又は品格に關するやうなことでもあれば、注意を與へますが、餘りに拘束をせずに、大抵のことは、子供達の自由に任せて置くのでございます。

それが今度は年も取り、大學の上の級になりますと、別に人から忠告を受けるでもなく、又親が小言を言ふでもなく、自然に社會の風潮につれて、自分たちの考

が幾分づゝか進んで來るものと見え、女らしい、閑雅な氣になつて來るのでございませう。
さう云ふ風ですから友達も、小學校時代から引續いて交際して居る者とか又は同級生であるとか云ふ者は、それが男子の友達であらうがどうであらうが一緒になつて無邪氣に遊んで居り、兩親もそれに向つて少しも干渉は致しませぬ。併し若も其友達の中に、一緒に遊ばせたくない、良くない人物だと親達が認めますものがあれば止めも致しまするが、さもなくば親たちも一向平氣で遊ばせて置きます、併し社會が一般にさうでありますから、ある意味の惡い弊害は考へやうとしても考へられないのでございます。若も多くの人の中に一人か二人の風儀の惡い人があるとしますると一般の人から、彼は紳士でないと卑しめられて、忽ち仲間から排斥されますからさう云ふ風な者は殆ど無いと云つて宜うございます。



女子職業學校生徒製作の繪畫摸寫

それから學校の敎育の仕方でも、日本のやうに智育の方に重きを措いて、無理に智識を生徒の頭に注ぎ込む

と云ふのではございませぬ。又教へることも大抵は實際的の教方で、直ちに實物をもつて教へまして、理窟よりも習つた智識を直ぐに應用させるやうにして居りますから、生徒の方も覺えるに餘り難儀もせず、又實際のことに當つて、少しも困難を感じませぬ。それから一方では學校に居る時分からして、巧に交際をするやうに仕向ける、巧に交際をすると云ふと、なんだか奇怪いやうですが、つまり人と圓滿に交際をするやうに教育するのです。ですから學校に於ても、時々學校が主になつて色々な會を催しまして、御客樣を招んで生徒も一緒になつてその間を斡旋するやうにさせるとか、或は舞踏會を開いて生徒を娛ましめるとか、旁々交際に熟れさせやうとして居ります。

▲寄宿舍の狀態

それから生徒の樣子が、日本の女學生などのやうに忙はしく見えませぬ。何となく沈着て、餘裕があるやうに見えます。毎日學校の授業が濟んで家に歸りますと直ぐに遊びに出かけまして、家に居る者はございませぬ、大抵の者が戸外へ出て、春夏秋冬夫々の運動をして居まして、一日の中豫習をするとか、復習をするとか云ふことは大抵二時間位でございます。それから運動に出ますにも、男の友達も女の友達も一緒になつて誠に無邪氣に樂しく遊んで居ります。それから或る私立の女學校で、寄宿舍を設けて居るのがございますがそこなどは、學科の方よりは、寧ろ人物を作ると云ふ方に重きを措いてありまして、寄宿舍の有樣などは、恰で家庭と同じやうな組織になつて居ります。私の親しく見ましたのは、スミス大學の寄宿舍でございますが、此大學の寄宿舍は幾つにも別れて居りまして、澤山に生徒の居る室は四十人少い室は十人位でございました。それに日本で言ひますと舍監とでも云ふやうな女の方が居りまして、小い室には一人、大勢の室でありますと三人位で一の室を受持つて居るのもございます。又大學の女の教師で遠方から來て居られるやうな人も、其處に一緒になつて寄宿して居ります。さうし

て生徒は其室を自分の家と見て、裝飾の工合、總ての体裁に意匠を凝して、各自が競爭――と云ふでもございますまいが、皆なの便利の宜いやうに整へて行くのでございます。

デ此寄宿舎には四つの大きな室が附屬して居ります。それは食堂と、應接室、それから日本で言つたら何に當りませうか、Sitting room と云ふのと、それから今一つ客間と云ふものがございます。食事の時間になりますと、各自が自分の室ですつかり支度を致しまして、どの寄宿舎の生徒も一緒に、時間に遲れないやうに行つて食事をするのです。殊に夜の食事の時には、皆なが着物を着更へて、身の廻りを奇麗にして、さうして食堂に臨むのですが、此時が一番にぎやかで、又一番面白い時なのです。つまり自分達が一日の中にあつたこと、感じたことなどを語り合つたり、或は最も親しい友達などを招くとか、或は大學の先生方も其處へ來て召上ると云ふやうな風で、實に愉快な面白い處です、さう云ふ風で、教師などからも色々な話を聽きますから不知不識の間に智識も得られまするし、互の交際も親密になつて行くのでございます、それで食事が濟みますと、前に申しました Sitting room に集りまして、



女子職業學校生徒の製作繪畫

舍監のやうな人が何か話をして聽かせるとか、或は生徒の中の或者が新しい本でも讀むとか、新聞を讀むとかして、暫らくの間其處で遊ぶのです。まア休憩室と云ふやうなものです。又大勢お客樣でもあると、其室で舞踏などもあるのでございます。

それから前にも申上げた通り、寄宿舍は幾つにも分れて居りまして、十人位から三四十人も集まつて居りますが。それを自分の家と見て、他の室の人を招んでお茶を御馳走するなどゝ云ふ事がございます。さう云ふ時でも、たゞちよいと居らつしやいと云ふ風に招んで來るのでなく、世間でお茶に招くやうに、自分の室を一の家として、他の室の人をお客樣として、色々に款待すのでございます。又一年の中に一度か二度位、或る室の人達が主人になつて其寄宿舍全体の人を招んで或は芝居をするとか、又は舞踏會のやうなことをして樂むことも御在ました。さう云ふ風で、學校に居ても交際を巧くするやうにしてありますが、併し平生は服裝などゝ云ふことには餘り注意致しません。さう申すとチト粗暴と云ふやうにも聞えますが、粗暴と云ふ方ではなく、矢張り女としての身だしなみはあるので御在ます。故に化粧をするとか、飾るとかでなしに、謂はゞ清楚と云ふ風なのです。尤も改たまつた場所に出る時には、身分相當の風をしますが、平常學校などに居る時は金滿家の娘であるからどうの、中以下の娘であるから斯うのと云ふ差別は學生の間には見受ませぬ。それでも感心なことに學生時代でも自分の身分と云ふことを考へて居ると見えまして、他の人が良い衣物を着たりなどして居つても、自分は自分相當の所で滿足して恥しいとも羨ましいとも思ふやうな風は見えませぬ。又金滿家の娘であるからと云ふて高ぶるやうな風も、マア見へませぬ。

それから學校の授業時間は一日大概三時間か四時間位で、前にも申しましたやうに、教授の方法が多くは實際的で、理窟の方は第二にして御在ますから、從つて早く理解して行くことが出來るのです。尤も日本の生徒などゝ違つて、語學と云ふことに、さう頭を腦ませ

ない點もありませうが、學校の授業が終つて自分の室へ歸るが否や、天氣の好い日なら散歩に出かけるとかガルーブなど、云ふ遊びや、或は端艇競走や、テニスや、又冬なれば氷滑などをして、少くとも一時間以上は戸外に出て居るのです。

▲學校の組織

それから學校の組立は日本など、餘り變つて居りませぬで、日本の尋常小學に相當するのがプライマリースクールと云ひ、それが四年、それからグランマリースクール、高等小學に相當するものが四年、其上がハイスクールと云ふて、日本の高等女學校位の程度のものが三年、それからカレーヂになつて四年、大抵二十一位で大學まで濟むのです。それで女學生の中にも、さう金持でない者で學問をしやうとする者があります。さう云ふ人は獨立で金を拵へて學問するのでありますから、時に依れば半年か一年休學して、又學校へ入ると云ふ者もありますが、さう云ふ人にも大體都合が好



女子職業學校生徒の製作繪畫

く出來て居て、例へば今年二年級を修業して、途中一年休學しても、矢張り三年級へ編入して呉れますから、さう云ふ人の爲にも大層都合が宜いのでございます。文章の達者な人は新聞や雜誌に寄稿するとか、或は夏季休暇を利用して良家の傭に傭はれるとか、手藝に巧な人は色色な細工物をするとか、學資を得る道も種々あるので御在ます。

其學資を得る方法なども種々ありまして、

とうも私の見ましたのは、一局部に止まって狹うございますが、マア一體に日本の女學生などに比らべて見ますと、夫れはもう實に快濶で、愉快らしく、何處までも無邪氣な、厭やみなどゝ云ふものは露ほどもないのです。日本の女學生は、一寸見た所は誠に柔和な溫順しさうに見えますが、其の裡面に廻つて見まするど、隨分甚いことがある樣です、或は人を誹謗して見たり、人をけなして見たり、殊に近頃は餘程生意氣と云ふ風に傾いて居る樣です。亞米利加の女學生のやうな、無邪氣であり、擴張して居ながらも、何處までも親切氣のあると云ふ者は、日本の女學生中に見ることは誠に少いです。それ故私だけの考ですが、こんな風で進んで行くよりは、寧ろ昔のやうに唯々柔順と云ふ一方で敎育する方が、或は宜いかも知れぬと思ふ位で御在ます。ヂ之を矯正して行かうとするには、なかなか一朝一夕では出來ませぬが、亞米利加などで親が兒女を敎育するのを見ますのに、實際に拘束を加へず、性質そのまゝを、すなほに育て上げるのでありますから、それで、十六七歲までと云ふものは、眞個に天眞爛熳、仇氣ないと云ふ風で男女とも隔意なく遊んで居るのです。それですから厭やらしいことなどは、口に言はぬ許りでなく、全く心にも思はぬ樣であります。斯う云ふことは必竟社會の制裁に起因するのでもありませうが、又實際餘り敎師や父兄が干渉しないで、敎育した結果であらうと思ひます。デまア日本などでも、追々は斯う云ふ風な無邪氣の、親切な、快濶な、又淸楚なる女學生の出でむことを希望するのであります。

（了）



舊竹橋女學校
（帝都に於ける洋式女學校の開祖）

高橋貞子
石橋思案　共述

上

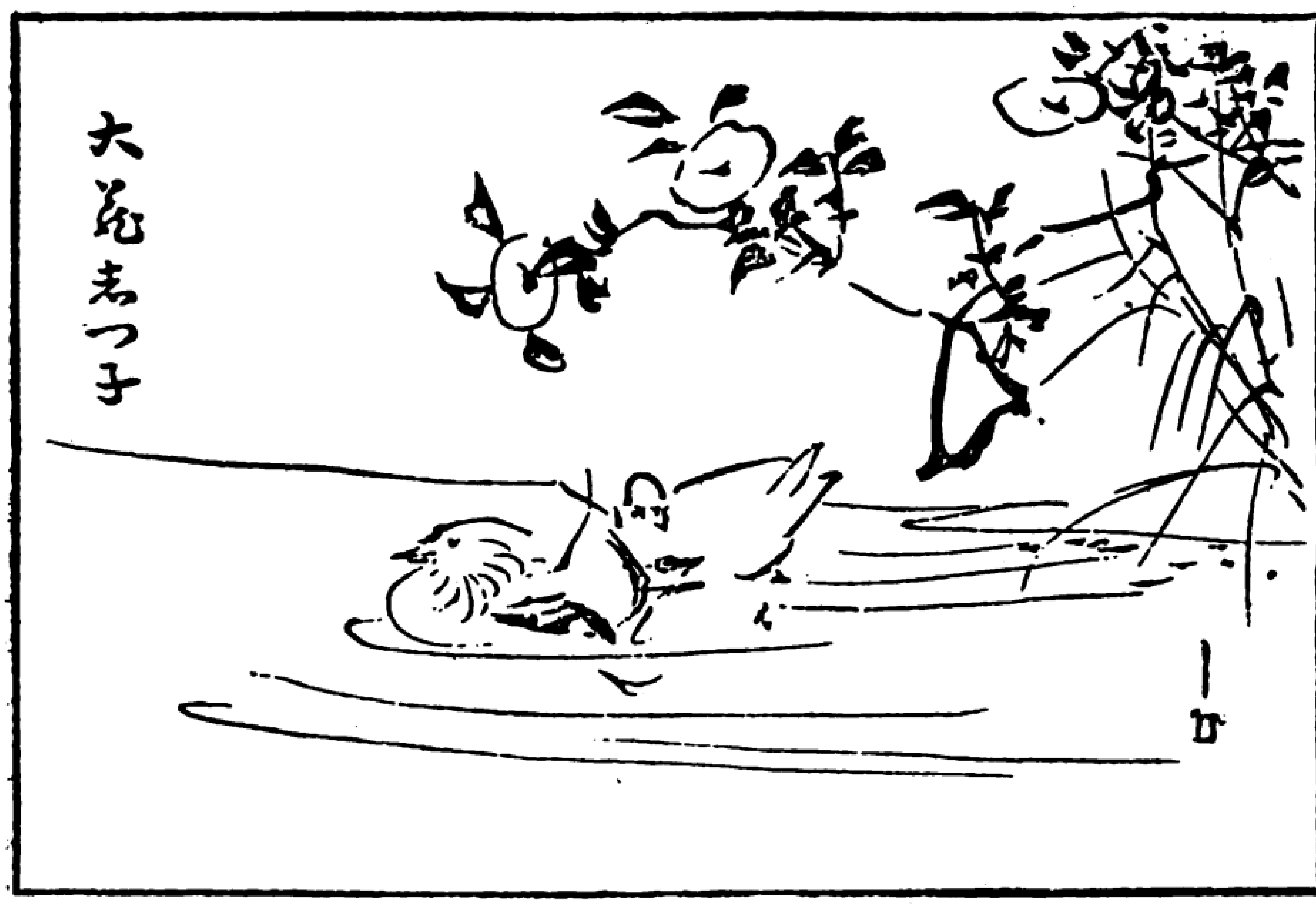
（思案）姉さん！　貴姉も御存じの『女學世界』の定期増刊『女學校生活』に、東京で最初に洋式の女子教育法を施した、――日本女學校の開祖とも謂ふべき名譽を擔ふ――舊竹橋女學校の懐舊談を……元其所の生徒であつた貴姉から聞いて、私に何か書いてくれ！と、同雜誌の主筆、松原廿三階堂さんから頼まれたんですが、お忙しい所を寔に濟みませんが、其の時分の事で記憶えてゐらつしやるだけを、どうぞ私に話して下さい!!!（貞子）是れは何のお頼みかと思ひましたら、私の參つて居た舊竹橋女學校の事を話せとの事ですか、何に致せ……明治七八年の頃――私の十二三歳の時ですから、到底も纒つたお談話を爲るだけに、記憶えては居りません。それに私はお前も知つての通り、至つてメモリーの弱い方ですから……。（思）アハヽヽ、記憶の惡い方では、私も貴姉には負けは爲ませむ。姉さん！　過日も可笑な事があつたんですよ。ソラ彼の『二六新報』の婦人記者の竹内まさ子さんが、私の二階の書齋へ訪ねて來た時、「一番お總領のお孃さんは、今年お何歳におなんなさいます？」と尋ねられて、私は鳥渡即答に支へたんです！　半ダースの娘の内で、一番上のを腦水腫で取られて、現在五人居る事は知つてますが、節子の齢は能く知りません、が、豈敢に自分の娘の齢を記憶えて居ないとも言へませんから、「左うです今年取つて……十二歳になります。」と答へる言葉を、

丁ど學校から戻つて來た節子が、「可厭なお父さまだよ。十二歳だなんて、私は十一歳ですわ。」と校正されて、私は實に面目玉を踏潰したんです。(貞)オホヽヽヽ、お前の非だから、那麽事もあるでせう！ 有樂町の三丁目へ移轉して、區役所へ寄留替屆を爲た時、自分の生年月日に附箋されて返戻されたと伺つてましたから、娘の齢を知らない位は、まだ罪が淺い方でせう！(思)アハヽヽヽ、姉さんも却々口が惡いのね。私は始終左う思つてますよ。どうも日本人は、自分の齢を記憶え過ぎて不可い！ 三十歳になれば乾と家を有ち、四十歳になれば腰が曲り、五十歳になれば、噫！是で人間の定命は盡きたもの――人間が其の一生に爲すべき事業は終つたものと、貯蓄んだ小金の一つも貸金の方に廻して、直ぐ樂隱居の群に入らうと爲る事ばかり考へて、生きてるのか死んでるのか、世間から忘れられて了ふ……ではない、世間を忘れて了ふ方面に全力を盡すのは、例の東洋流の忌むべき點で、人が此の世に生れた來た以上は、呼吸の通ふ内は、何か動いて居なければ濟むまいかと、私は固く信じて居るので、二十世紀の日本人の中で、一人でも這麽間違つた考慮を有つて居るものがあるから、國が弱くなつて……何時までも大國民になれないだらうと、私は常に……竊に歎いて居るのです！(貞)……またお前の氣焔を聞かされるのかい？ 私に女學校の事を聞いて置きながら、自分ばかり饒舌つて居ては、困るぢやないのかい！(思)ヤッ、是れは失敬！ 飛んだ方に話が外れて濟みませんでした。どうか其れざやア其の竹橋の事を話して下さいませ！

(貞)竹橋女學校と申しても、其の以前は暫く雉子橋外の――現今女子職業學校の場所にあつて、學校の名も慥か……雉子橋女學校と言たやうに記臆えて居ります。其れが明治五六年の頃、竹橋の――現今文部省のある場所へ移つて、學校の名も自然竹橋の二字を冠するやうになつたのですが、其の頃英語教師の通辯を爲すつてゐらしつて、其の後米人ハウス氏に見込まれて、其の養女とおなり遊ばして米國に赴き、數年前再び渡

米して、歸朝後、只今では士官學校の囑托教師黒田太久馬さんの御家内でゐらつしやる青木こと子さんは、私等（一）とは違つて大變記憶力の强いお方ですから、四ッ谷のお宅に出向いて、親しく昔の事を伺つて見ますと、全で夢のやうに思へた事が、旋て幻とも變り、其の幻が歷然と目の前に形狀となつて現れて來るやうですが、開校當時の女學生は僅に三十五六名しかなくつて、校長は諸葛さんで、肝心の英語教師は Mrs. Veeder.（良人は開成學校の御雇教師）で、習字の教師は關先生でした…。

（思）成程！　其れで校長も解り、英語教師も習字の先生のお



女子職業學校生徒の製作

名前も承知しましたが、其の頃の教科書も伺ひたいものです。無論學校の良否が教師の善惡にも依るのは、今更いふまでもありませんが、教科書の適不適も、大に其の學校の價値を上下する事が出來ますから……。

（貞）教科書といつても、何しろ其の頃は、髭を生やした御役人樣の中でも、英語の綴せる方は指を折る程で、況して婦人の癖にＡＢＣを囀るなんて、何たるお轉婆だらう！　と人人から後指を指された時代でしたので、教科書は甚しく幼稚なもので、ユニオンの第一讀本にスペリング……其れに

少々許カンバセーションを爲た位なものでしたが、其れでも幼少の頃から泌込むだ學問は、其の人の一生涯に恐ろしい感化力を有つたもので、學校を退てからワイシカ外國人と言語を交へるやうな機會もありませんが、其れでも假令片言混の英語でも、向の人に解るから不思議だと、只々其の頃お教へ下すつた敎師さん逹の御恩を、身に泌みて難有く思つて居るのでございます！（思）……何だか今度は姉さんの氣焰を拜聽するやうになつたやうです……。桑原々々!!!（貞）オホヽヽ桑原なんて失禮な！　先日其の黒田さんの所へ上つた時も、黒田の奥さんの御氣焰は、却々私の今のやうなものではありませんでした。斯う敬仰るんですよ。

「近頃は女子の敎育が非常な勢で盛になつて行つて、此の東京ばかりでも女學校の數は大したもので、惡くいへば、女學校が一雨毎に殖える！など申しても可い程でございます。其れで私も少々許女子の敎育には、經驗もございますし、又現今の女學校の狀態を知つて、斯ういふ風に爲たい！　彼あ爲なければ成らぬ！と、

隨分所々の女學校を參觀して、其校の英語敎授法を見ましたが、悲しい哉！　中年から英語を習つた方々の英語は、其の本國の人に聞かせると、一向解らないさうで、例のチヤパニース、イングリッシユだから困るんです！　其所へ行つては、舊竹橋女學校で稽古した方々の英語は!!!」と御自慢遊ばしましたが、幾分か左ういふ點もあるのでして、語學は殊に幼少の時から學んで置かないと、何にも爲りませんので、少し英語が話せて來たかと思ふと、それ〳〵嫁入して奥樣にもなれば、お子持にもなるのですから、『三つ兒の魂百まで』の諺を利用して、若し英語を談さうと思ふのなら、少しも若い……幼い頃から、英人なり米人なりに附いて、敎はらなければなりますまい！（思）實に……其れは全く姉さんの敬仰る通です。何の學問でも中年から始めたのは、好結果を收める事は出來ませんが、殊に語學と來ては、カラモウ生久地はありません！　私だつてお父樣が古くから外國人と御交際なすつてゐらしつたお蔭には、二年や三年洋行したハイカラには、語學では

負けん稱りです！(貞)オホヽヽヽ、又氣焔の蒸返ですか。困りますね。

(思)何うでしたか、其の頃の教授法で記憶えてゐらつしやる事は有りませんか。(貞)左うです……其の時分には、現今のやうに何年級なんて級で分つ事はせずと、第一等第二等と等で生徒を分つたもので、宛で汽車の切符を買ふやうなものでした。其れでまた可笑いのは、同じ教場……教場と申しても哀れな教場、其の一教場に二等からの生徒が、左右に分れて居て、それぞれ先生が、片方ではエー、ビー、アップと綴字を教へて居れば、片方ではイット、イズ、エ、ドッグと讀本を教へて居る始末で、現今から考へて見ると、能く彼れで學課が進んで行つたものかと、不思議にも思はれますよ。(思)へヽエ！　同一の教場に、二組の生徒を入れて、二人の先生が教へるなどは妙ですね。手もなく先生と生徒との内地雜居(！)を實行して居たんですね。(貞)可笑いといへば、まだ可笑な事がありました。毎月一度づゝ小試驗があつて、毎年一度づゝ大試驗があつたんですが、試驗といへば大層難しいやうにも聞えますが、隨分學課の出來ない方では人に敗を取らなかつた私でも、一度も落第した事はありませんでしたから、易しかつたには違ひなかつたんでせう！(思)試驗が易しいといへば、私の御厄介になつて居た、其の頃一ツ橋外にあつた大學豫備門の試驗の易しかつた事は、いまだに忘れられません。試驗は只何の位までに習つた事を記臆えて居るかと、其れを試みるのが、試驗の最終目的で、教へも爲ない難問題を出して、學生の腦を痛めさせるのは、立派な人間を作る手段としては、極めて間違つて居は爲ないかと思ふのです！(貞)那麼難しい問題は、私には解りませんが、それ程勉强したとも思はない内に、何時しか級……ではない、今申した等が減つて行くんですから、可笑いぢやありませんか。

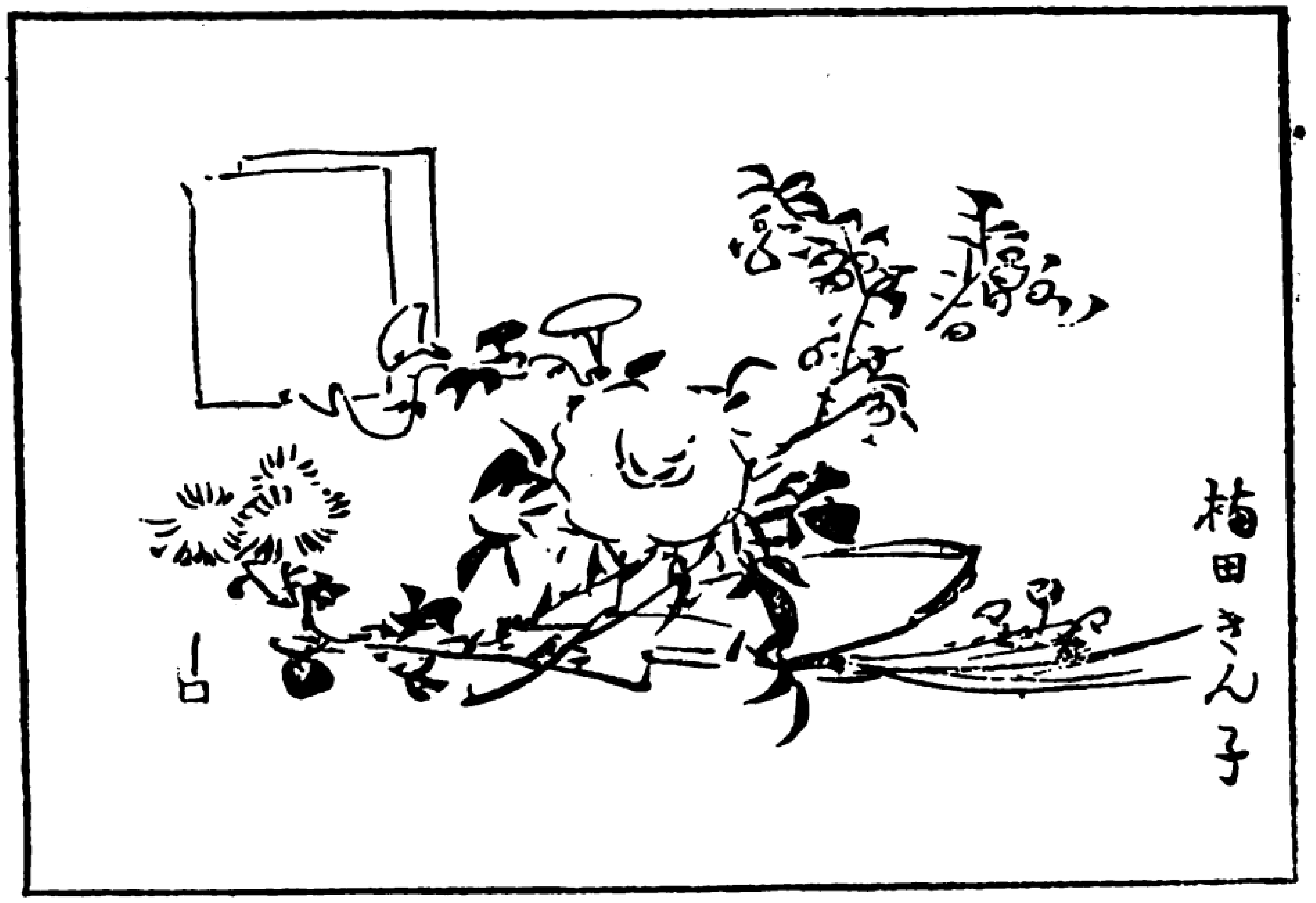
試驗は其の通易しうございましたが、何時何日文部省のお役人樣が、學校を參觀に入らつしやるからと前觸が來ると、さア大變です！　誰は何を爲てお目に掛

ける、彼は何を讀むでお耳に入れるといふ騒ぎで、其の前の日に黒板に地圖を書いて置く役を吩咐つた私が、都を脱かして大騒ぎを爲たお話から、其の頃同窓であつた人々のお話は、一杯お茶でも頂いてから、お話し爲る事に致しませう！(思)ちやア其の間に、私も鉛筆の端でも削つて戴きませう。

下

(貞)いよ〳〵明朝文部省の御役人樣が學校へ御參觀遊ばすといふので、其の旨を先生から生徒にお言渡しになつて、誰は讀方、誰は會話と、それ〳〵役割を振られたのですが、其の頃の生徒は……現今のとは違つて、まア比較的人の好い方で……といつても、何も現今の生徒さん方が、人の惡いお方ばかりといふ譯では決してありませんが、畢竟官尊民卑の氣風がまだ脱けませんでしたから、其の時分の御役人樣ですから、下々の方でもえらいお方のやうにも思ひ、また御自身も餘程おえらい方のやうに思召していらしつたので、其の時代の事を考へますと、日本も餘程進歩したには違ひありません。どうも官員ばかりが、邦國を作つて居るやうに信じて居る時代は、宛然起きて居ながら夢を見て居るやうなもので、其の國は甚しく他の文明國から進歩が遲いやうに考へられます。ホイ！どうも話が兎角他道へ逸れて恐入りますが、其時の私の受持つたのは、慥か地理かと記憶えて居りまするので、何でも其の前日は、定時刻より後くまで學校へ殘つて、黒板に歐洲全圖を書いたのですが、辛との事でそれぞれ山川湖海から都府まで名を振つて、「先づ是れで明朝御役人樣が御覽になつても可い！」と、ほつと息を吻いて、其の頃住つて居りました神田區南神保町八番地（現今は原胤照さんの出獄人救濟所）の宅へ歸る道すがらも、何處か肝心な處を遺しはしなかつたらうかと、其の地圖の事ばかり氣に爲て戻つて參りますと、兩親は平常より私の歸宅の遲いのを氣遣つて、「何うして這麼に遲く……？」と尋ねますので、是れ是れであつたと答へまして、其の晩また念の爲めモ一

レイの地圖を調べて見ますと、是れは萬事休矣！　露西亞の莫斯科を全然遺して了つたのを發見け出して、「サア大變!!!明朝は意地惡く午前七時から、彼の御役人樣等が御來校になるので、其れまで書き入れる間はないし、最う其の夜も更けて九時過ぎ……何うしたものか」と娘心に千思萬考！立つたり居たり……眞箇に途方に暮れて了ひましたが、偕恁くてあるべきにあらざれば……と、直ぐ御近所に住つて居らしつたお朋友に願つて、二人して寂しい竹橋外の學校へ參りました。(思)成程！其れはお困りでしたらう！



女子職業學校生徒の作

子供の時代には、那麼事があるものです……其れから姉さんは、何う爲さいました？

(貞)其れがね、最う……學校へ辿り着いた頃には、十時ですもの。學校の門は疾うに締つて居りましたので、門番の住つて居た窓外へ來て、是れ是れ恁ういふ譯で、是非今夜中に教場へ行つて、黒　板に書いて置いた地圖を直さなければ……ではない、書き加へなければならないと、泣くやうにして門番の老爺さんに頼むと、其の老人が常平生から私達に大變親切な人でして、「左うでございますか、其れは誠にお氣毒な事でございま

す……併し其れ程までに貴嬢方が、學問に御熱心なのは、果敢い門番をして居りましても、學校に居りまするお陰でございまする！」と、ほく〳〵喜びまして、早速小門を開けた上に、手燭まで點火てくれまして、闇い〳〵奥の〳〵教場まで蹤いて來て、漸く其の地圖を滿足に描き上げて、「やれ嬉しや！　是れで明朝何程早く文部省の御役人樣が入しつても差支はない！」と我家へ戻りましたのは、夜も早や更けて十一時過ぎでしたが、慍ういふ可笑な事もございましたよ。（思）其れから姉さん！　先刻伺つた女教師の Mrs. Veeder. の他に、外國人の女教師がありましたか？（貞）はい、ヴイダア夫人の他に、Miss Griffis, Mrs. George Rice, Miss Washington などの諸先生がいらしつて、其の中のワシントン孃は、後で Ewing さんの夫人となられました……まだ此の他にも、外國の婦人が先生となられたやうにも記臆えて居りますが、重な女教師は是れ等の方々だと記臆えて居ります。（思）先生の方は大概其れで、お名前が解りますが、姉さんと同級（ではなかつた）同等の生徒で、お名前を記臆えていらつしやる方方はありませんか？（貞）はい、第一期の日本銀行總裁であつた吉原重俊さんの奥さんにおなり遊ばした赤井よね子さんや、中央新聞社長の大岡育造さんの先夫人であつた添田てい子、學農園長津田仙さんの御嬢さんで、是れは今は亡き人の數に入られた共仁さんやも、慥か學校で深い御馴染でありましたが、現に第一土木監督署長工學博士日下部辨次郎さんの奥さんでいらつしやる日下部巽千尾さんなどは、私とお知己の生徒でございました……（思）其の日下部さんは、私の親友巖谷小波君の實兄で、其の小波君と毎日一處に机を列べて居る……姉さんは姉さんで、其の以前同じ女學校へ通つていらしつたなどは、何處までも盡きせぬ縁とでもいふのでございませう！　イヤ世間は廣いやうに思はれて、存外狹いものですな！　此の他に何方か姉さんの記憶えていらつしやる方はございませんか？（貞）まだ他に澤山生徒もあつたのですが、何しろ殆ど三昔にも近い以前の事ですから、想ひ出す事が出來ません！

(思)左うでせうとも、三十年も前の事では、姉さんが想ひ起す事の出來ないのも御道理でせうが、其の竹橋女學校が何うして廢校になつたのでございます?(貞)其の竹橋女學校が永續しない事實に關いては、玆にまた一條の物語があるのです!其の内に文部省で、女子の教育を普及させる爲め、先づ女教師を養成しなければならないといふ目的で、お茶の水橋の今でも女學校のある處へ、女子師範學校が出來たのですが、既に女子師範學校が出來た以上は、同じやうな女學校が竹橋にもあるといふのは可笑な譯で、只今では同じやうな學校が何校あつても構はないので、其の數の多いだけ女子の教育が進歩するのですが、同じ文部省の管轄の下に、二つの同じやうな女學校があるのは理窟に合はぬと、竹橋の方は自然南風競はずといふ譯で、殘念な事には明治十年の正月十日に、哀れ!閉校の悲運に遭つたのですが、其の時の生徒は開校當時の卅五六名からは、ヅッと殖えて百六十名餘でした。(思)オヤオヤ!今姉さんのお談話を伺ふと、結局女子師範學校に竹橋女學校が併呑されたやうな次第ですね!(貞)全くさういふ譯合で、まだ竹橋の方を卒業しない私なとは、其れから直ぐとお茶の水へ通學するやうになつて、私と同様轉校した方々も澤山にありました。で、二年許りして私は師範學校を卒業して、其れで私の學校生活は終結を告げたのでございます!

(思)何うです?姉さんが師範學校を御卒業になつた當日の光景を記憶えていらつしやいませんか?(貞)忘れッぽい私は詳しく當日の事を記憶えて居りませんが、畏くも皇后陛下がお親臨になりまして、私は陛下の御面前でバイブルの一節を暗誦して、其褒美までを頂戴致しましたが、私の一生涯の中に、此の時ほど光榮な日はございません!(思)姉さんの其のお談話で想ひ起しますのは、私が元神田の錦町にあつた學習院に通學して居た頃、天皇陛下の御面前で、理化學の實驗を爲たのと同様で、這麽名譽な事はございますまい!私は其の時の事を能く記憶えて居ますが、水素瓦斯を玻璃管の中で燃やして、一種の音響を發して

御聽きに入れたのですが、若し水素瓦斯が不充分で、巧く音響が發ないと大變だといふので、掛替の瓦斯を別の瓶に貯へて置きましたが、好い鹽梅に其れを使用せずとも濟むで、私の同級生が私共都合五名ありましたので、他の四人も私の次に其れ〳〵實驗を天覽に入れましたが、學事に御熱心の 陛下は、龍顏殊に麗しく玉歩を私共の教場にお停めになりまして、校長が御先導申上げるまでは、教場をお去りになりませずと、他教場よりは一番私共の教場へ長くゐらしつたのは名譽だと、其の後々まで同級生とも語り合つて大層喜んだのでしたが、首尾好く 御前の實驗を終つてから、彼の取つて置きの水素瓦斯を藏つて置いても……と、燃やした上玻璃管を其の焰の上に翳すや否や、爆然たる響と共に玻璃管は破裂して、其の破片が實に……つい先刻まで 陛下がお立ち遊ばしていらしつた處へも飛んだので、私は恐くなつたので、若し前のが巧く行かないで、此の方の瓦斯を用ゐたならば、其れこそ大變な事を仕でかして了ふに……と、子供心にも顏を眞青に爲て、顫へ上つた程で、いまだに其の時の事を能く記憶えて居ますのです！(貞)成程！ 何程無鐵砲なお前でも、其の時は吃驚したでせうね！(思)吃驚り爲た處の段ではございません、ぶる〳〵ッと顫へ上つたのです!!!

姉さんが女子師範を卒業した時の校長は何方でした？(貞)校長ですか、校長は彼の明治の教育界には偉大の功勞のあつた中村敬宇先生でした。其の時お前は私の通學した學校の隣りへ行つてたぢやアないのかい。(思)左うです！ 其の頃私は姉さんの學校と隣合せの師範學校附屬小學校へ通學して居ました。雨の降る時などは、我家から寄越して下すつた人力車に、姉さんと合乘して歸つた事がありましたね、其の頃の事を思ふと、姉さんは何ういふお考へか知れませんが、私は最一度生れ替つて、彼の時分のやうな子供になりたいのです。學校からの歸途に神田川の堤に生えて居たスカンポを取つて、其れを途上しやぶりながら、時には友達と抱き合つた儘、堤からくる〳〵〳〵ッ！と

轉がり落て、「覆車の俵」の眞似を爲た事もありました。其の時分から私は人一倍惡戯者でしたが、此の惡戯だけは、髭に白髪が混つて來た現今でも、同樣で、齡に對しても、寔に恥入る次第です！

姉さん！竹橋女學校の月謝は、何程でしたか記憶えてゐらつしやいますか？（貞）左うでしたね、慥か月謝は一圓五十錢でしたが、其の月謝が可笑いのです！保證人が奏任官以上だと一圓五十錢で、判任官以下は其の半額でした。（思）アヽヽヽ、判任と奏任とは、其の子弟の月謝までが、半分違ふのは、不思議といへば不思議ですね！（貞）で、去る明治二十七年の五月に、私共の同窓の方々……故岡山兼吉さんの未亡人等が御發起あそばして、創めて舊竹橋女學校同窓會といふのを毎年二回宛開く樣になり、現今に永續して會員が舊交を温めて居りますが、其の席上では隨分面白い昔話が出ますから、また其の内にお談しする時機もありませうが、何に致せ記憶力に乏しい私の事で、纏つたお談話の出來なかつたのは、讀者に對しても濟まない事で、どうぞ主筆の松原さんにも、お前から宜しくお斷りを爲て置いて下さい！（思）畏りました!!!

（完）

女子師範の寄宿舎

麻軒生

東京府女子師範學校の寄宿舎を觀やうと思つて、校長林吾市氏を小石川竹早町の同校に訪ねました所、氏には私の來意を諒として、直ちに寄宿舎に導き、舍監の神通せき子氏に紹介して呉れられました。

そこで私は校長と舍監の親切なる案内に從つて、階下の舍監室より初め、階上の廊下に沿ふ各室を一巡見廻ることに成りました。

先づ自修室の摸樣を見るに、廣さは何の室も十五疊敷——六人詰で、周圍は白壁、二方硝子窓に成てゐるから光線の透入は申分ない、それに二條の十燭電燈が裝置してあるから、夜分の勉學と雖も、明るさは明る

し、火の元を要愼する樣な心配は更に無い、而して室內に一個の大火鉢と三脚の共同机とが方形の陣取をなしてゐる、机は二人差向ひのもので、書架に據て其の間を劃つて在る、其柄、入口の左方の壁際には一間の袋戶棚と三尺の開戶とがあり、戶棚の方には生徒の着替、手荷物、書籍の類を納め、開戶の方には掃除用具や、修飾用具を秩序正しく仕舞つて在る、總じて女子の寄宿舍丈あつて、整然と能く片付いては居るが唯だ遺憾とすべきは、餘りに空漠で、且つ寂寞で、何となく物足りない感がすることとです。何しろ室內を裝飾すべきものと言つては、正面の壁に懸けた花瓶の梅花唯だ是許ですから、か丶る念の起るも其の筈、女子の部屋としては今少しく有益なる裝飾を施して、家庭的趣味を加へて貰ひたいのであります。

室內に於ける寄宿生の組立は、年齡別にせずして、上級生と下級生、即ち年長者と年少者とを、順よく配置して一室を構成させてあるから、年長者は室長と成つて年少者を監督する義務ある爲め、自然その身を愼み、又た年少者は年長なる人の指導と感化を受くるが故に、兩者相俟つて頗る良好の結果を寄宿舍生活の上に及ぼすのである、——尤も此の組立は寄宿舍を管理するには一番都合の好い仕方といふ所から、今は大抵何處の寄宿舍でも此の法を用ゐて居る樣であります。

私の參看した時は、午後の二時半頃で、未だ授業が終らない時であつたから、舍內は寂然閑として、何の室を覗いて見ても人影一つなく、唯だ更紗木綿の坐蒲團ばかりが机の前に御留守居役を務めてゐるので在つた。けれど或る室の如きは、入口の戶を堅く鎖し、廊下側の硝子窓に窓掛の白布を引張つてあつて、中には人の蠢動く氣配が致します。

で、舍監に仔細を聞いて見ると、此の白布を殊らに窓に引張つてあるのは、病人のある室といふことを標榜したものであるさうな、丁度其の頃は寒い盛りであつたので、流行性感冒の犯す所となつたと見えて、そこにも、こ丶にもといふ程、數ヶ所に於て此の白布を目擊したのであります。

私は嘗て友人の女學生より斯ういふ話を聞いた「寄宿に居ますと、規則が八釜しう御在ますから、窮屈には違ひありませぬが、馴れると何の事は御座ませぬ、多勢のお友達の中で好きな勉强が出來るんですもの、家に居て阿母達に小言を言はれながら、家事の手傳ひを致しますより、いくら氣樂だか知れませぬよ、けれど善い事許は無いものでして、ヒヨツト病氣にでもならうものなら、夫は〳〵心細うござんすわ、授業中は皆さん學校の方へ行つて被爲居いますから、唯た一人置去にされて、廣い部屋の隅この方に寢て居ますのよ勿論火の氣も無いのですから寒うござんすわ、それでも皆さんがいろ〳〵と氣を採んで下さいますし、舍監さんや校醫の方も時々見舞つて下さいますから、別に案じる事はないやうなものですけれど、それで矢張心細いんでしてね、家に居た時の事を思ひ出し、其が爲に郷愁病と申す恐しい餘病を惹き起すので御在ますしと。私は今此のうら寂しき舍内の光景と窓の白布を見るに及んで、端なく此のはなしを想ひ浮べたので在りました。

▲寢具室

次に校長等は私を寢具室といふに案内された、此の室は寢道具を納れて置く所で、廊下の折曲る角々に設けてある。こゝには板敷の上に棧棚が据えて在て、それに夜具、蒲團が一具づゝ行儀よく載せてある、而して風通しを善くする爲め、周圍の窓及び入口の戸は總て開放してある、校長の談によると、從來の如く、光線と空氣の流通を雍塞した押入の中に寢具を押込んで置いて、而も居室に接した處にあるは、衛生上甚だ有害であるといふ理由から、懸隔れた所に寢具專用の一室を設けて、朝夕此處より出入させる事にしたものであるさうで、此の如きは眞に生徒の健康に意を用ゐた最良の設備と言てよろしい。

▲洗濯場と湯殿

それより洗濯場に行て見ると、入口二間奥行四間の長細いタヽキ土間の上に、洗濯臺が据え付てあつて、左右二側に亞鉛張の桝形の箱が箝込んである、而して

箱の數は一側が九個で、其が二側に向ひ合せてある、で、上部の龍の口を捻ると之に水が落ち、底の栓を拔くと其の水が下流しに流れ落ちるといふ仕組である、試に手を入れて箱に浸けて在た襦袢を揚げて見ると水面には氷の塊が泳いで居るといふ仕末だから、寒中洗濯の冷さ辛さは實に思ひ遣らるゝのである、然し是も家事を修業する一つで、寄宿舍生活をする女生徒の爲めには、誠に善い練習場であります。

洗濯場に續いて洗面所あり、浴室あり、浴室は中々大きなもので、多人數の入浴にも差支ない程の廣さである、一週に四度(月水金土)湯を立てゝ、四十人宛交代に入れる規定であるとか。

▲割烹室と食堂

次に割烹室の樣子を見るに、折しも教授中で在たので、白い割烹衣を着た生徒達が、教師の指圖に從つて庖丁を動してゐる、正面の黒板には其の日の教授題目たる「一、天麩羅、大根卸、合せ醬油」「二、菠薐草の浸し——」「三、蕎麥饅頭」の三項が書出してあつて、其を几上の生徒が筆記してゐる、而して黒板の傍には厨庖用具を容るべき材料戸棚を備へ、ストーブの裝置まであるから、割烹教場としては完全なもので有りませう。

食堂は割烹室に隣れる廣土間であるが、何しろ百八十人からもある生徒の食臺が並べられあることゝて、自由に通行もならぬ程狹められてゐる、床は土間でこそあれ、奇麗なタヽキに成てゐますから、板張も同じ事、それに周圍は四方共硝子窓である爲め、眩い程明るいのである、而して食臺には黒塗膳を配置し、茶碗小皿醬油瓶、箸箱等を載せ、傍に杓子と飯櫃とが添へてある。玆に尙ほ注意すべきは職員席が設けてあることです、是は本校の職員が晝食に限り生徒と食を共にするからである、又た食堂の一隅を見ると樂器が据えてある、舍監は之に就て『食前、食後に音樂を奏しまして、生徒に唱歌を歌はせますので、御覽の通り食堂に風琴を備へて置きます』と言はれたが、無論是は生徒の爲めに其の會食の機會に於て團欒的娛樂を計らう

といふ趣意に出でたものと察せられます。

扨て此室を出で、再び割烹室を通り、炊事場に來て見ると、煙突付の大竈が据付て在て、燒芋屋で見る樣な大釜と、大鍋とが懸けてある、而して其の縁一杯に切込んである燒豆腐は鍋の蓋を持上げ、釜よりは盛に湯氣を吹立てゝゐて、今や方に夕食の準備最中なのでありました。

是で先づ寄宿舍生活の模樣は一ト通り見終つたからこれよりは筆端を改めて、舍監より聞いた管理上の事を記すとしませう。

▲日々のつとめ

五時半起床……（此間身支度及び室内の掃除）……七時朝食（振鈴と共に寄宿生一同室外の廊下に整列して人員檢査を受け、扨後食堂に入る）八時登校……此間授業……十二時晝食（食堂に集る、舍監職員亦た食を共にす）……一時……此間午後の授業……三時歸舍。三時……（此間自修、外出、入浴、洗濯、又は運動）……五時半夕食。五時半……自由運動……六時。六時……（此間各自の室に在て自由に談話し自由に遊戯することを許す、足を延ばしても宜いといふ位自由を與へてある）……六時半。六時半……默修時間……八時半。八時半……質問……九時就寢準備（振鈴と共に室外の廊下に整列し人員檢査を受くること朝の如し）。九時半消燈寢臥。

▲舍內の役員

舍監（三名）は寄宿舍を取締り且つ監督する上に總ての任務を負ふのですから、毎日出勤する外に、毎夜交番に一人宛居殘つて宿直する、神通せき子、小寺あや永田けいの三教授が今此任を兼てをられる。

室長（各室一名）は其の室内の同居者を指導監督する役目ですから、孰れも年長者たる上級生が此の任に補せられてゐます。

週番（二名）は室長が一週間交代で勤むる所の役目で在て、其の週間舍監と生徒との間に立ち、何呉と世話をし、時としては舍監の代理をも勤めるのであります。

整理番（主任一名助二名）は寄宿舍全体に關しての整理を掌る、其の重なる仕事は洗濯物の世話、寢具室の窓の開閉、寢具の整頓、下駄箱の仕末等である、主任は三年生が勤め、その補助として二年生と一年生より各一人宛出るのであります。

清潔番（人數は整理番と同じ）の分掌する重なる事務は洗面所や、洗濯所のあたりを掃除し、且つ之を監督するのであります、又た。

炊事番として三年生より二人二年生より四人、一年生より四人、都合八人の者が一週間交代に出て働くとに成てゐます、其の役目は三年の者が主任に成つて献立を作り、炊夫の監督は申すに及ばず、計算の事より、商人との懸引、食膳の世話に至るまで、炊事一切の事務を司るのであります。

御承知の通り、本校は所謂官費生を養ふ所でありますから、食費の如きも給與金の內から支



辨されるのである、今食費として給與せられる所を聞きますと、一日に一人前僅か十四錢の割當なさうな、更に之を內譯にすると、朝三錢五厘、晝六錢五厘、晚四錢の規定だといふことである、尤も一概に斯う許はゆきませぬ、日に依て御馳走に甲乙あり、賄勘定に過不足を生するは蓋し免れぬ所であるが、其等は一週間の計算を平均して、互に償ひ合ふ事にしてあるとか申します、扨て通例の場合に於ては土曜日の晚に一週間中一番の御馳走を振舞ふことに成てゐます、加之も此折は割烹科にて習覺えし所を實際の用に立て丶、手料理の鹽加減をも味は

れると云ふので、寄宿舍生活の生徒達は此の日を最も樂しき日の一に數へてゐる。時によると先生達を招待して、有益な話をして戴くやうな事もありますから、此の土曜日の晩餐を生徒たちは指折り數へて待つのであります。

尚それから間食は規則上一切許されぬのですが、茲に一つの特例が設けてある、其は外出中他家より貰ひ受けた品ならば、一應舍監に其趣を屆けて許可を得、扨て後之を食する分には差支ないといふのである、併し家庭生活の自由に慣れた者の目から見ると窮屈千萬の樣に思はれます。

▲取締規則の一例

外出は日曜日の外に一週に二回、放課後より夕食時間までを門限として許されるので、其の出づるや必ず出入携帶簿を携へ、之に先方に着いた着宅時間と、先方を出た出宅時間とを明瞭に記し、保證人の印を貰つて來ることに成てゐます。尙ほ又た一寸した小買物にも同行二人以上なければ、出ることが出來ませぬから何角に付け屈劫此上なしです。

或は又た、一寸逢つて話して來やうと思つても、面會人は保證人の面會證を持參すること、但し特別の場合舍監が差支なしと認むる時は此限りにあらずといふ正條に照らさるゝので、據ない用事の外は見合して了ふと云ふやうな事になる、勿論多くの妙齡女子を預つて居るのですから、此位嚴重に爲なくてはなるまいが、思へば隨分欝陶しい事です。

▲生徒の費用

生徒の學費は凡て府費ですから、生徒自身の負擔は甚だ僅少です、即ち給與金として食費、需要品費(薪炭油等)被服補給費等を金で給與さるゝ外、給與品としてカシメヤの袴(在學中一具)綿カシメヤの袴(每年一具)靴(每年一足)等が出るのですから、生徒は唯だ教科書、文房具の類を自費で購ひ、それに小遣錢を少々家から仕送つて貰へば善い故に學費に乏しい方方は此校で十分御修業なさるが宜しい、無費と申しては甚だ失禮な申分なれど、殆ど無料に等しき費用を以て、相當の學問が仕込まるゝのみならず、追て卒業の

上は、敎育界に獨立の地步をさへ獲らるゝのですから少し位の窮窟は忍んでも、此の關門をお潜りなさるが一生の得策であらうと思ひます。

日本女學校の一日

永廻鱸江

▲校舍の外觀

本鄕の切通しを上つて來ると、町並の人家の屋上から劇場かとも思はれるほどの宏大な建築物が、その半身をヌツト現はしてゐるのが見える。これぞ府下に於て尤も生徒の多いので以て有名な日本女學校である。西の方から來ると、入口は何處にあるのか、チヨツト分りかねるが、少し行き過ぎて、ふりかへつて見れば、湯島麟祥院の寺院の門と並んで狹い門があつて、こゝに日本女學校の標札と女子大學設立事務所と書いた看板とが見える。門を入れば直ぐに出入口で、職員生徒いづれもこの一方口から昇降するので、履物棚、傘臺、踏臺など、所狹きまで土間を塞いでゐる。左側に受附があつて、そこへ刺を通じて來意を告げると、受附の中を通つて、次の間なる疊敷の應接所へ案内された。窮窟なズボンを忍んで、そこへあぐらを組んで暫らく俟つてゐると、やがて校內參觀の案内として來られた職員が、『本日は校長が……生憎く病氣で休んでゐまして、殊に他の職員にも病氣な人があるので、補缺の授業が多うございますから、その御積りで……』といふ挨拶を聞き流して、まづ階下の各敎室から參觀し初めた。

▲敎室の槪況

受附の次の室は職員室で、その次が幼稚園の開誘室になつてゐる。昨年開園したので、目下三十名ばかりの幼兒が通園してゐる。二人の保姆がついてゐて、丁度手工の時間であつたらしいが、勿論兒童は自由に腕白に活動してゐた。その次ぎの敎室は豫備科即ち高等小學一二年程度の敎室で、以上の諸室と廊下を挾んで相對してゐる一方の敎室は、本科即ち高等女學校程度

の一學年の敎室である。廊下の突當りの一室は土間で薄暗い陰氣な室であるが、體操場に使用するものと見えて、今や本科三年の生徒が切りにピヤノのピン〱ポン〱いふ音に合はせて遊戯をやつてゐた。その右手に小い一室がある。これは唱歌と割烹と兼用の敎室になつてゐて、唱歌の敎授中であつた。この二室の物音で、近傍の敎室は、大分迷惑であらうと思はれた。

階上は本科二三學年及び家政科專修科の各敎室になつてゐて、三階に專攻科及び本科四五學年の敎室と裁縫室兼講堂用の大廣間とがある。校長室は二階にあつて、最後にこの室に入つて、種々案内の職員から、校内の摸樣を聞いた。各敎室の敎授は一々參觀したが、僅か數分間の觀察で批評しては、正鵠を失する虞れがあるから、唯概評に止めて置かうと思ふが、それは敎授ぶりが概して注入的であつたことである。これは私立學校に免れ難い弊で、敎授が進みさへすれば、生徒が喜ぶといふやうな缺點が、何處の學校にもあるやうに思はれる。從つて十分練習や應用にとる時間が乏しいやうだが、高等女學校の程度では、今少しこの點に注意してもらいたいものと思ふ。

本校舍はもと、勸工場として建てたものを京華中學が一時借入れて授業してゐたことがあつたので、それを今の女學校に使用したのだから、大體の建築が麻がら普請で、學校としての建築でない。であるから階下の各室から天井を眺めると、二階三階の重量を支へる爲めに、種々の手入がしてあつて、如何にも危險に見える。併し幾たびも切つたり接いだりして修繕したので、どうにか今日差支なく授業はしてゐるもの丶早晩他へ移る必要があらうと思ふ。幸に今日までは何等の異變がなかつたが、萬一の事を思へば、ゾツとする譯で、殊に光線も空氣の流通も不十分な體操室で、バツ〱と塵芥を揚げて遊戯してるなどは衞生上甚だよろしくないと思ふ。又理科博物等の特別敎室といふものがない。これは大缺點で一日も早く増築したいものである。といつて餘地のない今の敷地では如何することもできぬから、早く他の適當な處へ移轉するが急

務だと思ふ。

▲分科及び課程

本校には、豫科、本科、補習科、專攻科、家政科、專修科、別科の七科があつて、これに幼稚園が附設してある。校長の考では、主義一貫して教育をして行くには。幼稚園から大學までの各科を組織する必要があるといふので、昨年から幼稚園を設け、尚進んで尋常小學校に相當する一科をも置く計畫だとの事である。

○○豫科は高等小學一二學年の程度を教授する處で、○○本科は高等女學校程度、○○補習科は本科卒業生が一ケ年間教師たるべき準備的教育を受ける仕組で、○○專攻科は女子大學設立の準備として特に設けたもの、修業年限は三ケ年で、勿論本科卒業以上のものが入學するのである。○○家政科といふのは實用的なので、修業年限は二ケ年、高等小學卒業以上の學力あるものが入學して、主として良妻賢母たるべき準備的教育を受ける處である。本科の方は進んで高等の學術を修めるには適當であるけれども、退いて家庭を作るものには、不適切である。即ち家事に關係した修養が足らないから、といふ理由によつて、特に家政科といふものを設けた次第で、從つて學科も本科の如く多岐ならずして、大體修身と家政との二科に區分して、それを更に左の如く分けてある。

修身科━━倫理、國漢文、地理歷史、
　　　　體操、音樂、
家政科━━家事、算術、裁縫、
　　　　圖畫、割烹、

これは教育上適當な考で、目下我國中流の家庭を作るべき女子教育としては、高等女學校程度のものよりも、この家政科の方が、最も適切だらうと思ふ。併し教科の定め方には多少の異論があるが、この方針には大賛成を表する次第である。○○專修科は修業年限二ケ年、本科に入るべきものと同等の學力を有するものが入學して、主として裁縫の技藝を專修するのである。併し必要な修身、國語、家事、習字の四科を教べるやうになつてゐる。○○別科は尋常小學卒業以上の學力があ

つて、十四歲以上のものが入學して、點茶、挿花、彈箏、割烹、薙刀の內いづれか望のものを專修する仕組で、年限は定めないといふ事、殊に學科は少しも授けないのだから、恰も民間で所謂師匠の處へ御稽古に行くと同じことを學校で習はしてゐるのである。

以上述べた所によつて、本校の分科の有様は知れようと思ふが、如何にも系統が立つてゐて、一科として不必要なものはない。否、目下女子の修養に向つて必要な各科を一校に網羅したといつてよろしい。成程八方美人的に、誰にでも入學が出來るやうに、各種の分科を立てゝ置くことは、生徒を吸收するには、大層都合がよからうが、あまり一時に多くの分科を立てるといふことは大に考ふべきことではあるまいか。まづ本科が整頓したらば、他の科にも手を擴げるといふ具合に、秩序的に擴張して貰ひたいものだと思ふ。然らざれば、徒に二兎を逐ふものゝ愚を演ずることになりはせぬかと、同校の爲に竊に心配する次第である。

▲生徒の取締

生徒の總數は、目下六百九十五人で、豫科に三十人、專攻科に二十人、家政科に六十人、專修科に二十五人、幼稚園に三十人、殘りの五百三十人が本科生である。勿論此中には通學生が大部分を占めてゐて、これには通學簿を渡して、學校と家庭との連絡をとるやうになつてゐる。即ち毎朝登校するときに、本簿を持參して、主任教師に差出し、降校のとき、これを受取つて父兄又は保證人の檢閱を受けるので、出缺、早退、遲刻等の記載は勿論、學校家庭相互から通信する欄が設けてある。別に他の學校と異なつた取締法はないやうである。

寄宿舍は、未だ學校に附設してないので、目下校長の自宅を寄宿舍に充てゝあるとの事で、寄宿生は六十名もあるさうだが、これは教育上至極結構なことだと思ふ。校長が家族と共に、寄宿舍內に起臥してゐるといふことは、舍監だの取締だのに一任してある寄宿舍よりは、餘程家族的に訓練することができるだらうと思はれる。外國では、多く學校の構內に校長の住宅が

あつて、寄宿舍をも監督して、眞正に家族的に訓練し實蹟が著しいといふことだが、我國では官立公立の學校は、この種の實行が出來かねるけれども、私立學校は、かういふ重寳な仕組が立て易いから、どうか永くこの方針を持續してもらいたいものと思ふ。目下寄宿舍設立の計畫があるやうだが、別に設ける必要はないから、目下の寄宿舍を擴張することになつたらば、至極結構だと思ふ。少し迷惑かも知れぬが。

ふゑりす女學校

M・K・生

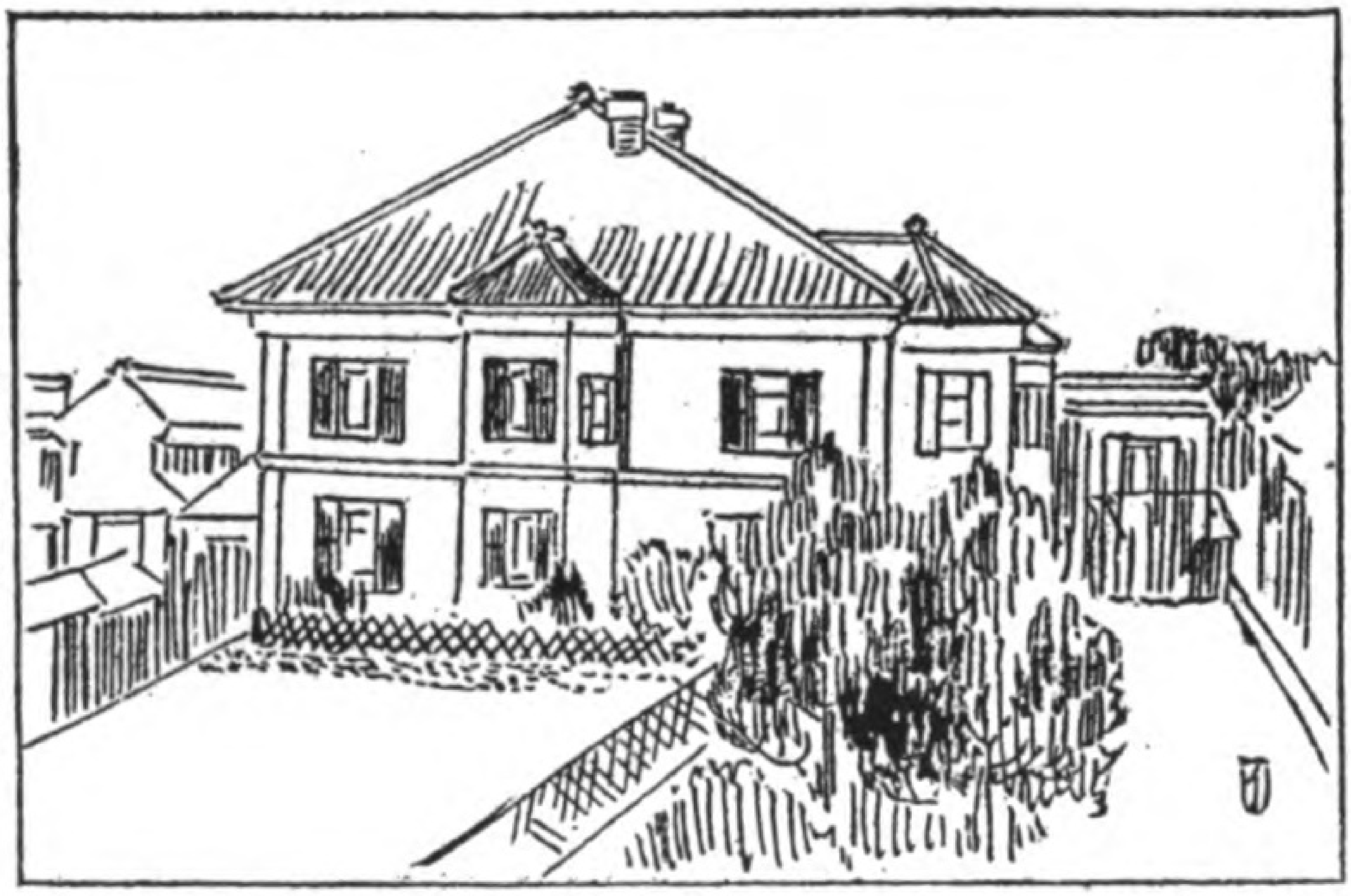
横濱でふゑりす女學校と言へば、直ちに市の南、山手の丘上にある赤塗の校舍を指して、「アレ」と敎ふる程名高く成てゐる、學校の位置が高臺の一角であるのに、校舍が巍然たる四階建で、加之も赤塗なのであるから、何よりも先づ外觀の美しさが殊に目に立て、ふゑりす學校と言ふよりは、赤い學校と言つた方が通りが善い位である。然し此の學校は啻に外觀に由て名を知られた許でなく、其の由緒といひ、其の敎授法といひ、將た又た生徒の生活法といひ、他に一寸類の無い、特色異彩を有て居るので有名なのである。

抑々此の學校は米國ダッチ、リフォームド敎會の管下に屬し、明治八年即ち西曆千八百七十五年の創立であるから、日本にある基督主義の女學校中、否な、基督主義といはず、凡ての女學校中に在つても、最も古い學校の一である。ふゑりすと云ふ校名は、本校に功勞の有た故神學博士アイゼック、フエリス及令息神學博士ジョン、フエリス二氏の名譽を紀念せんが爲に、其の姓氏を冠したのであるとか、今の校長はユー、ゼヌ、エス、ブースと云ふ米國人で、千八百八十二年此の學校に來られた以來、二十餘年の星霜を經る今日まで勤め續きの老人である。本校の出身者で社會に名を成した者は、彼の女學雜誌で有名な故若松賤子氏、虎の門の帝國女學館に敎鞭を執れる林歌子氏及び芝の裁縫女學校々主として籍々の聲名ある戸板關子女史など

で、此の他にも有らうが、先づ此の三氏が重なもので ある、現在の生徒は總計百二十名で、其の内寄宿生が八十名ある。

▲本校の分科

本校は高等小學校程度に始り、高等女學校程度に登り、更に女子大學程度に至るまでの各分科が整然たる一系統の下に設けてあるから、學科の數も多いが、殊に英語の一科に於て、他學校よりも高尚で、又た優等の成績を擧てゐる、蓋し本校は米國敎會直轄のミッション、スクールではあるし、又た之に敎師たる者は英語國の婦人ではあるしするから、自然英語に力を注がるゝ結果では有らうが、現に本科四年を卒へた者は、優に高等女學校の英語敎師として聘せらるゝに足る丈の實力ありと明言さるゝに據て見ても如何に其の高程度なるかゞ分る、又た他からも認めらるゝ所である。是れ實に本校の特長として自ら任じ今左に各分科を示すと。



フエリス女學校庭園の一部

一、豫　科三學年——高等小學校程度。

二、本　科四學年——最初二ヶ年は高等女學校の上級と同じ程度で後二ヶ年は更に其以上の程度に於て高等の學科を授くることに成てゐる。

三、高等科二學年——女子大學部とも云ふべき最高等の程度)

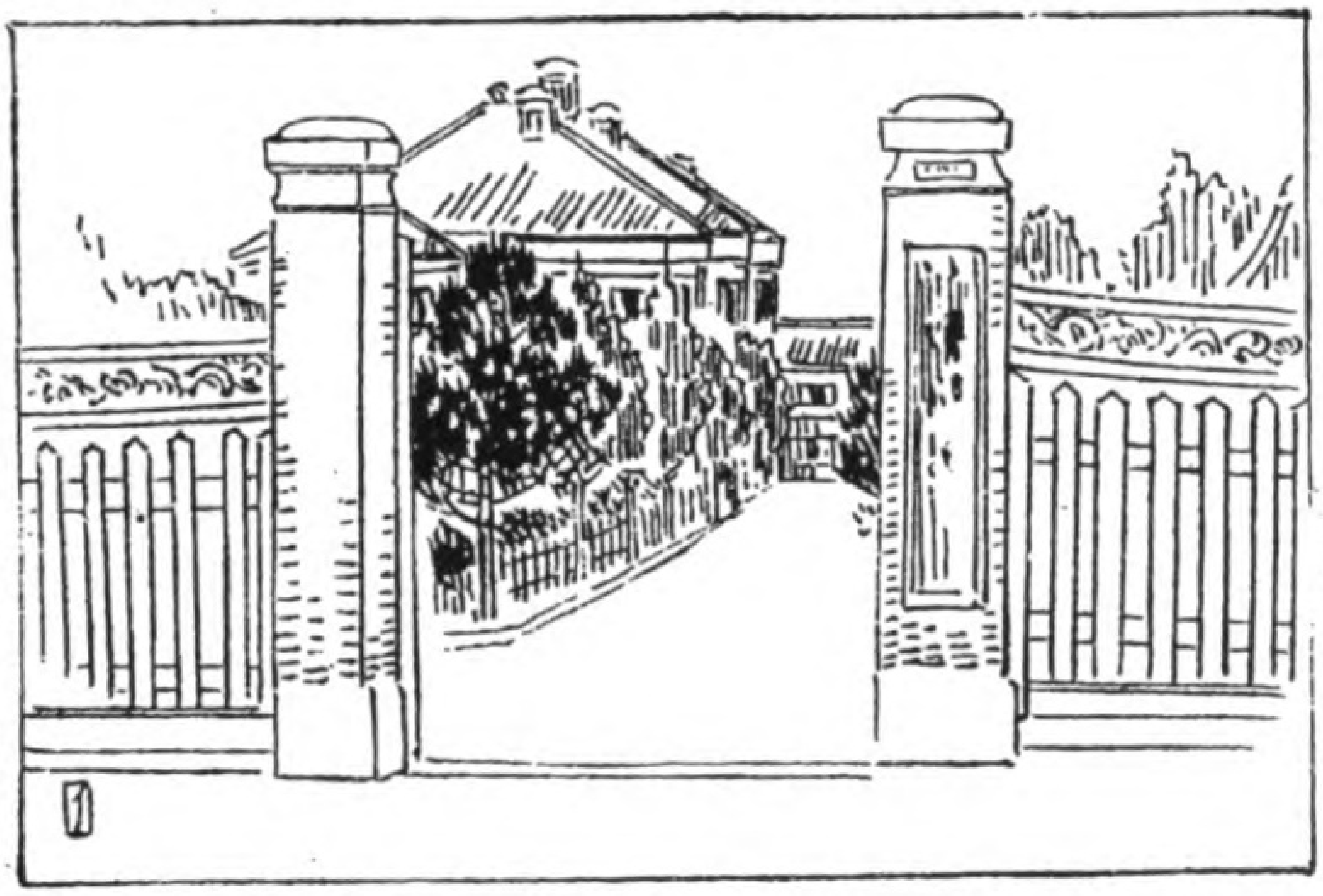
倘ほ此の外に隨意科(音樂、茶湯、生花)といふのがあり、英語師範科と云ふのがあり、聖書研究科と云ふのがある。英語師範科は高等女學校程度の學校に英語敎師たらんと欲する者を敎育するのが目的で、其の修業年限は二ヶ年である、又た聖書研究科は英語にて聖書を研究したいと望む者、扨ては將來宗敎的の事業に文學に身を委ねやうとする者の爲に設けた所で其の

年限は二ヶ年である。

▲校内の巡覧

扨て是より教場内の模様と寄宿舍生活の狀態とを紹介するのであるが、便宜の爲め、余が參看した時の順序に依て記すとしやう。

余の參看したのは午后の一時、恰も教授中であつたので、舍監世良田春子氏の案内により、教場や寄宿舍を遍く見て廻ることが出來た、先づ最初に見舞つたのは本科二年級の教場、扉を開いて這入ると、廣さは僅かに十疊敷許、之に二十脚の机が四側に並べられ、二十人の生徒が各々其一を領して居る、机の形は他の學校に類の無いもので、聞けば此頃米國より取寄せた最新式のものであるとか。此室では今やミス、タムソンといふ西洋婦人の教師が文典の講義を授けて居る所で在た、此室を出で丶、次に本科三年の教室に行くと、矢張廣さは前のと同じ位であつて、二十人程の生徒が授業を終へて自由の休息をなしつ丶あつた。そこで周圍の壁を見ると、正面は申すに及ばず、左右も、背後もグルリと黒板で張詰めてある此時正面の黒板には手紙の文が書いてあり、右手の黒板には代數の算式が記して在つた。黒板と言つても普通の學校の樣に木板ではない、殘らず石板であつて、而も其が四面の壁に成つてゐるのだから、教場の邪魔になる憂ひもなく、塗替へる手數もなく、至極便利である。



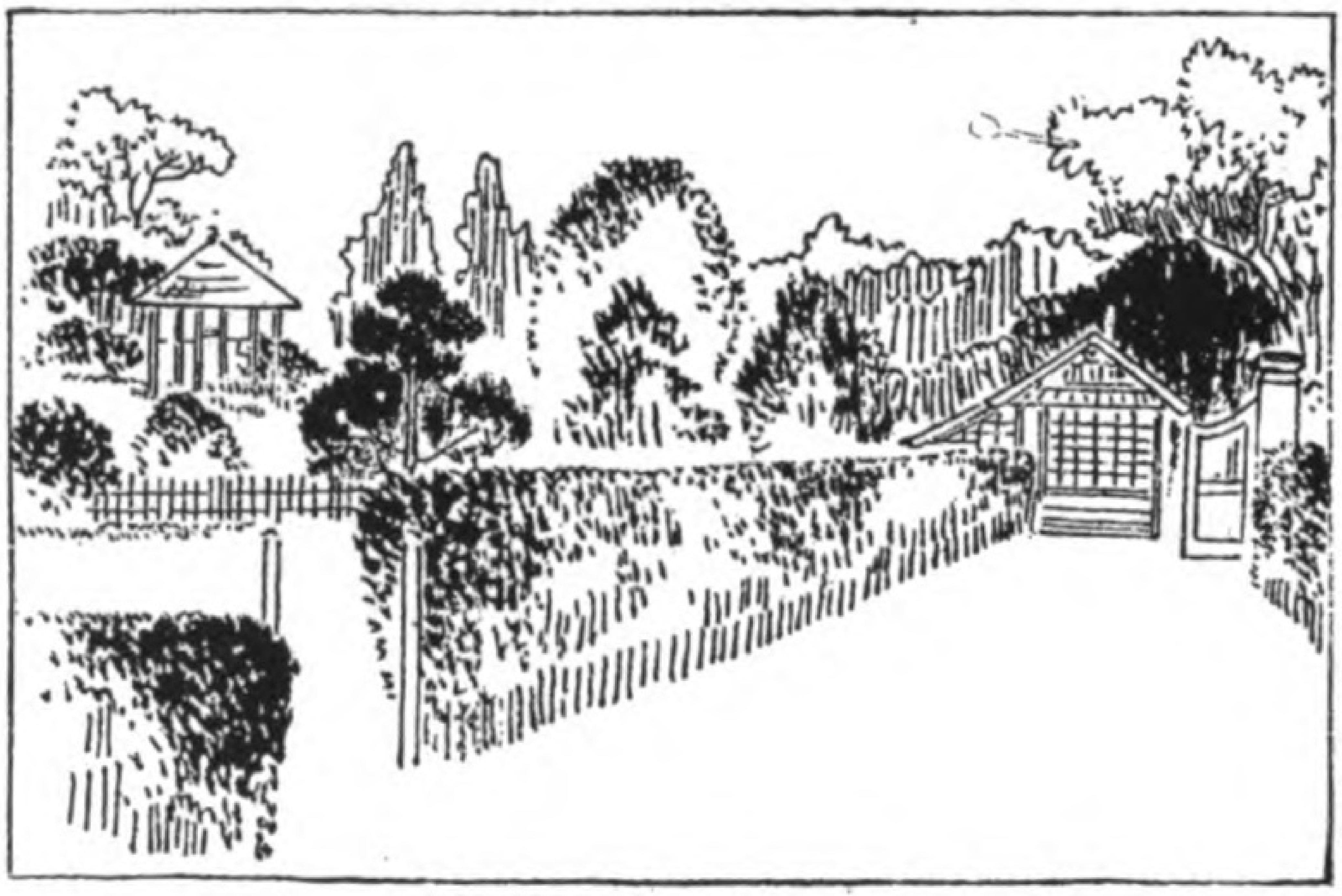
フエリス女學校表門

其より豫科の四學級、專修科の一學級、音樂教室、讀書室等を瞥見して、本科四年の級に案内されたが此室では漢文の教授と見えて教頭の

岩佐琢藏氏が孟子を生徒に開かせて、婦人の三從と云ふことに就き講述して居られた。

扨て其より階上の寄宿舍を一巡して、三階の大廣間即ち大講堂に案内された、是は學校の講堂兼祈禱の會堂であるから、其の結構は善美を極めて居る、只見る天井の裝飾と云ひ、左右の窓布といひ、正面の演壇といひ、洋琴といひ、其側の黒板にWhat, Would, Jesus Do? と書いた白墨の痕といひ、其他暖爐、電燈のやうなものに至るまで、總てが宗教的の威嚴を備へてゐるので、何の事はない、立派な寺の本堂に這入つたやうな氣がする。

此の講堂を出でゝ、尙う一つ階子を昇ると、そこが体操の敎場で、廣さは四百人の生徒を整列させるに足りる位である、余はこんな高い所にこんな廣い体操場が在らうとは思はなかつたので少しく驚いたので在た何しろ四階といへば此の校舍の最高部であるから、天井は至て低く、加之も棟を支へる爲の柱が場の中央部に林立してゐる、けれども總体の建築が丈夫の上に、床を嚴固な板で張てあるから、スケーチングの樣な活潑な運動を行ふ場合でも、些の響をも下の敎室に及ぼさない相である、体操場として此の高所を撰んだ理由を聞くに必しも建築上の都合ばかりでなく、より淸い空氣を呼吸する利益があるからだと說明された、其の可否は兎に角、かういふ設備は他の學校では見られぬ所である。



フエリス校の庭園

▲寄宿舍（晝寢の奇習）

扨て寄宿舍の模樣を見るに、二階と三階の奥深い廓

下に沿ふて設けられた三十何室といふ部屋は、何れも日本風で、尤も以前は椅子卓子の西洋式で在たさうだが、今では全然日本風の部屋にしてある、そこへ年長者と年少者とを姉の様に又た妹の様にして同居さしてあるから、室々一家族の体裁をなしてゐると言て宜い室内は井然と整頓して一糸亂れず、而も隅々まで奇麗に洒掃されて一塵浮ばずと云ふ風に成てゐる故、机上の水仙花も爲めに其の淸新を誇るかのやうに見受けられた、而して何の室を見ても柱の所には必ず、彼等の日常を訓戒する所の「朝の敎」が掛けて在る。

朝の敎といふは、大福帳大の横綴の紙に日附と聖書の語句とを印刷したもので、謂はゞ坐右銘帳とも言ふべきものであるから、基督敎的家庭を理想とする本寄宿舍には誠に相應しいのである。



フエリス女學校應接室

それから入口の外には各室に一個宛消火藥を仕込だ硝子瓶が配置してある、是は何樣各室の密接した階上のことであるから、萬一の場合を慮つての用意であるとか、從つて生徒の勉强も、晝の內は寄宿舍に在てするも差支ないが、夜は一切寄宿舍內を禁じ、各自の敎室に出張させることにしてあるさうだ。

今左に舍監より聞いた寄宿舍生活の時間割を示めさんに

五時……起床
六時より六時三十分まで……體操の時間、
六時三十分……朝の食事、
七時より……廊下敎場の掃除、
八時より八時三十分まで……朝の禮拜、
八時三十分より九時まで……聖書の研究、
九時より十一時三十分まで……授業の時間、

（注意）本校にては三十分を以て一授業時間としてあるから
二十五分稽古しては、五分休憩することに成てゐる

十一時三十分より十二時まで……唱歌の時間、
十二時十五分……晝の食事、
十二時四十分より　一時廿分まで……晝寢の時間、
一時廿分より　三時三十分まで……授業の時間、
三時三十分より　五時三十分まで……自由の時間、
五時三十分……夕の食事、
六時三十分より　七時三十分まで……自修の時間、
七時三十分より八時まで……晩の禮拜、
八時より九時まで……自修の時間、
九時……各自の室に歸り九時三十分……寢に就く、

右の內、奇習とも云ふべきは晝寢の一項である、是は實に他の寄宿舍には無い所で、本校特設の規定なのである、其の理由に就て舍監は次の如く說明せられた『本校に於て此の晝寢の時間を特に設けてありますのは、多く腦を使ふ者は其丈の休息を要するといふ趣意に出でたので御在ます、是は校長が米國に歸へられた折、或る醫師より晝寢の必要を說き示されたので、歸來、其を此學校に行ふことに成たので御在ます、之を行ひましてからは、生徒が一体に健康に成りまして、殊に頭痛を病む者なぞは殆ど無く成たので御在ます、デ、十二時四十分の鐘が鳴りますと、皆な各自の部屋に歸つて、夜分寢みます時と同じ樣に、矢張床を展べて、一時廿分の離床時刻迄、本當に眠つて了ふので御在ます、それで寢る時間にも眠られないで居るとか、起る時間が來ても寢過して居るとか云ふ樣な事は御在ません、心が平和でさへあれば、總ての事が規律通りに參りますから、寢るにも譯なく眠れて了ひ、起きるにも言ひ合した樣に目



生徒製作の水彩畫

を醒して了ひ、決して時間を誤るやうなことは御在ません云々」

▲本校の教旨（人物養成）

それより舍監は余を階下の一室に導いて、教頭岩佐琢藏氏に紹介せられた、ソコで余は本校の教旨沿革等を聽くべく岩佐氏に申出でた所、氏は其の意を諒して、直ちに語り出でられた、曰く、

「本校の目的とする所は人物を造るのである、換言れば格段なる人物を造るのではなくて、平凡なる人物を造るに在り、平凡の人物と申すと誤解する人があるかも知れませぬが、私の申すのは凡俗の婦人といふ意味に於てゝは無く、普通一般に實用ある人物といふ意味に於て申すのであります、然らば如何にして人物を造るかといふに、先づ第一に自己を知らしむるといふことが肝要である、即ち婦人をして自己の性情と能力とを自覺せしめ、益々其を發達せざる樣にしなければならぬ、是れ女子を正當に教育する者の勉むべき所である、されば本校では新入の生徒に對して劈頭第一に「汝は何であるか」と問ひ、「女子であります」といふ答を待つて更らに「女と生れたは幸福であると思ふか、不幸であると思ふか」といふ問題を課して見る、すると十中八九は「女は割の惡いもので女と生れたは不幸である」といふ樣な事を言ひます、斯の如く自己を以て不幸の者となし劣等の者となす思想は、甚だ間違つた考で、此の誤解を打破するのは正に女子教育者の任務なのであります、故に私は之に向て、女子は人類の半面であるとい



生徒の製作の木炭畫

ふと、高尙なる天賦の職分を有するといふと、男子には出來ない能力を持て居るといふと、即ち女子と生れたは幸福であるといふ所以を說いて、婦人其物を正當に理解させるので御在ます、男子の世界は既に業に開拓され盡して居るが、女子の世界は幸ひに未だ開拓されずに在るのだから、これから鍬を入れて發掘すべき寶は頗る多いのである、即ち將來婦人の營むべき事業は多いのである、誠に婦人の前途は洋々として、大なる希望が輝くと言て宜い、果して然らば如何なる事業に從事すべきかといふに、矢張女子は女子の性情に從つて行動するが宜しい、一体女といふ者は獻身的で、己を棄てゝ人の爲めに盡くすと云ふ尊い性情を持つて居るのだから、何處までも之を發達させてゆかなければならない、孟子の所謂三從「人の子と成ては親に從ひ、嫁しては夫に從ひ、老ひては子に從ふ」といふのは婦人が有ゆる場合に獻身的であるといふ眞理を說いたもので、能く婦人の性情の尊い所以を言ひ盡してゐる、又た聖書には「婦人は子を產むに由て救を得」と言ふてあります、之に由て之を觀れば婦人は自ら人物となるにあらずして、人物を產むのである、而して其の發達の爲めに己を犧牲にして了ふ、是れ實に婦人の尊い所以で、古往今來少しも渝る事なき天分なのである、故に婦人の事業は宜しく此の方面に向て成功を求むべきである、要するに女子敎育の目的は、自己を理解せしむると共に、其の高尙なる性情を圓滿の域に發達せしめ、實用ある人物を養成するに在るのです、本校は實に此の主義に據て女子を敎育しつゝあるのです」氏は又た敎授時間に就て左の如く語られた『本校では三十分を以て一授業時間としてありますから、一日の授業回數は中々多いのです、而して午前と午后の授業中に敎場に入れたまゝで、前の授業が終ると直ぐ後の授業を始めますから、生徒は先生の送迎に遑ない樣ですが、之が爲めに學科の趣味をいろ〳〵に改めることが出來、且つ毎日同じ學科を一度宛繰返す事が出來るから、敎授上の便益は非常に多い、生徒も亦た之が爲めに心の轉換を速かにして、將來一の事業より他

の事業に移るといふ樣な場合に必要な敏活の習慣を養ふことが出來る、謂はゞ心の操縱を自在ならしむる事が出來ます云々」

談、終つて、氏は窓外に集まる横濱灣頭の景色と、双眸中に落ち來る富士箱根の遠景とを指し、若し地理が人を敎育するものならば、世界の船舶が常に輻輳する港灣を瞰み、自國の美景を眺むる此の位置は、世界大の精神と愛國の心情を養ふ上に、大效あるものと思ひます」と言はれた、成程本校は此の點丈でも慥かに優勝なのである、まして其の設備の完全なる、其の敎授の周到なるに於てをや。

婦人の大學敎育

獨乙のミユニツヒ大學に於いては今回全然婦人にも男子と同じく入校の自由を與ふる事となりしが、是れ從來例なき事象として頗る人目を惹けり、最も以前は諸方の大學に於いて婦人の聽講を許し、適當の試驗を經れば之に學位を與ふる制度となしたれど、全然男子と同じく入學の自由を與へたるは之を以て嚆矢とす可く、ミユニツヒ大學の總長評議員は、確かに急進的態度を取れる者也。

ミユニツヒに於ては今後獨逸人と他國人とを問はず、婦人も男子と同樣の學課を履修するを得べく、而して獨乙に於ける高等學校の卒業者は、直ちに正則の學生たるべく他邦人は故國に於て受ける學位、若しくは特別に課せられたる論文試驗などに合格すれば、同じく入校の權利を得、各分科大學の試問に合格すれば、學位を享け得べし、但し後者は只聽講生として入學を許さるゝものにして、ヤムナヴウムに於けるアビツリアの學位を有する獨乙の婦人學生とは、一樣の權利を與へられざるなり。

獨逸の敎育界に於ける此顯著なる進運は、英米特に露國の婦人學生を、多くミユニツヒに吸收するならむ、而して吾人の特に注目すべきはミユニツヒ大學のかゝる決斷を爲すに至りしは、明かに獨乙婦人の精神生活が大に高上したる表明にして、彼等は之より從來享樂し得ざりし敎育上の恩澤に充分沐浴し得べきなり、日本には女子大學の名目あれども、その實質に於ては、遙かに男子の學ぶ專門學校以下にあり、吾人は日本婦人の精神生活が大に進歩向上して、獨乙婦人の夫れの如く、最高の學藝を玩味するに至らむことを切望して措かざるなり。と報知新聞の雜報に見へたり。

雜錄

我女學校生活

藤葉女史

特殊の例外を除いて、此せち辛い社會の中で最のんきに最も愉快に暮す事の出來るのは、男にしても女にしても其學校生活の時代でありましよう。都に家のある人は格別なれど、遠い郷里を後にして、恩愛深き父母や兄弟に離れて、修業の爲に一人來て居れば、時雨そぼふる夜半、心知れぬ朋友の間の爭などある度に、あゝ古郷なつかし、たらちねの君の許にありたらばと人知れず袖をしぼる事も無いではないが、若き血潮の燃え立つ時代に何でこんな事に毎日泣き暮す人もなく學びの庭の暇には朋友揃つて上野の森に一日を盡し或は用なきものまで流行につれては人に劣らず買つて見たく國の兩親が娘には夫と知らさねど家計不如意なるも可愛ゆきもの丶爲には代られず、種々に工面して送つてよこす十餘圓を後々の爲と一錢でも冗には費さじと思ふ殊勝な人は、少なく有れば有るたけ使つてしまつて、もう家から來そうなものと待つ頃には、嚢中には一文の錢もなく、あゝこんな事なら此間の雜誌や毛糸は買はんで置くので有つたものと、空しくなつた紙入をひねくり廻して之では日曜が來ても遊びに出るは心細く、晴れ渡つた青空を窓から眺めて、外行く人を羨しそうに終日籠城して暮す日も決して無いとは云はさぬ。

▲學窓の希望

或は多くの朋輩の内でも晴天自分は衆にぬきんで丶、一ツでも餘計に物を知つて、先生方のお覺えも目出度又は自分の身の光りにもし樣と、他の人が面白そうに打興じて空に時間を費す暇に、之は又神妙に机に寄掛

つての大勉強、出効は容しからず、三月の來る度に錦の衣一枚つゝ増した樣な嬉しさ、社會に出たら　家庭を改良して、社會を改良して、何とかゝんとか未來の樂しさを、ついうたゝ寢の机の上に夢みる無邪氣さ、此時代が恐らくは人世の華で有ふ、以上は學校生活と云ふ事を書くに付けて即席に胸に浮たまゝを表はしたので、扨そんなら自分も同じ學生の身の日々何な事をして居るか筆のまに／＼物せん。

高等女學校を卒業して來て、一ッは猶奥深く學びの林に分け入らんとの優しき心より、今一ッはあらわに夫と口には云いねど高き譽を得んものと遙々古郷を旅立ちて誰れ一人知る人もなき他人の間に、自ら進で入りし　未來の希望の爲、心配して居た試驗にも、首尾よく級第して、漸く落付き、さあ之からは一生懸命に勉強して、三年の内にはどうか人並の者になりたいと寮舍の初めての朝の決心、洗面處で顏を洗つて室の掃除や、庭掃きに今迄お姫樣育ちの人は我が家に居れば斯んな事は仕なくても濟むこと、心の内では思つても、去りとて定められた規則のせぬはけにも行かず、優しい手に豆の三ッ四ッ拵へて漸く夫もすめば食堂受持の人の用意も整いて、打ならす鈴音に一同食堂に集る、さて朝のおかづは何かと見れば、味噌汁に香の物、今迄贅澤にして居た人は顏しかめても、腹の減るのは辛らく、漸くの事にかき込で跡片付をするものは襷に前掛して、昨日迄のお姫樣も今日は純然たるお三どんとなつて立働く、其餘のものは各自の室に歸つて、其日の豫習をなすもの、又は手紙をかくもの等八時の鈴の鳴る迄は種々樣々であります。

朝の八時からは殆ど學校全体の生徒が隨意科の英語時間で、勿論方々から集まつて來たのであるから、まだエービーさへも知らぬ人あり、そうかと思へば又會話も自由に話せる程の人もある、其力に依つて分けられたもの故、三十近い人も、十三四の人も、皆ごちや交せで、多くの組に分たれてある夫故此時間に學校に行つて見るならば、何れか教師も殆と英語の聲で充たされて居る、隨意科としては、また外に色々有つて、各

自の撰定に任せられてあるから、名々の空時間に練習するのである夫故向ふの室ではウアヰオリンの音がする、此方の室では花を生けるやら、茶を立てゝ居るやら、又ずつと離れた方に行くと、此寒い日に板の間に素足で薙刀の掛聲凜々しく殺氣を帶びて聞えるなど、實に千差万別とは此事で有りましよう。

▲割烹

（料理番の狼狽）

學科の内で最時間のかゝるのは和洋の料理である、兩方共に其道の名高い専門家が來て熱心に教へられる、先十人位は白き前掛をかけて先生の指揮を待つと、先生は初めに献立を書いて其品に付ての説明をされる、夫が済むと實地に取りかゝるのである皆でする程宜い事は無いが、人數が多くて出來ぬから、當番を定めて置て後の者は見て廻る位のものです大抵三時間位で、又其献立は三種位五六人前のものを造つて一同が只塩梅だけ見ると云ふ様になつて居ます西洋料理も大抵同じ様さ、手傳をする人は四五人で、



表情體操（狐と猫）

（新式體操姿勢十種の内(其一)）

後のとのは先生のされるかを見たり筆記するのであります、料理は重に佛蘭西風の料理で、その名前などは一度聞た位では到底覺えられないから、一々書き止めて置くのです、そんなら實際に應用する事は出來ない樣な高尙なものかと云ふと決して然ではなくて、學校の委員會を開くとか珍客を饗すとか云ふ場合には生徒迄寄合つてその獻立を定めて、夫々買物に行く人もあり、食堂を裝飾するもあり、又は園丁から花などを集めて飾つたり、額を造つたり、皆自分の家を裝飾する樣にして少しも勞を厭はずに働きます、料理番のものは材料の集るのを待つて夫々料理に着手する、其間には又授業時間も有るので中々忙しい、スープを造るもの、肉を取扱ふもの、菓子を燒くもの、等各自分業的に負擔して一人の主人を置て夫の指揮に從つて勞働くのですそれが實におもしろいのです、馴れない内は菓子を燒き損じたりなどして大狼狽をする事もなりますウェーターになる人も豫め前から定めて置て美しき衣服を着ね並も清潔に小ざつぱりと髮も亂れぬ樣にかきあげて、食堂に待するので、客は皆揃ふのに料理はまだ出來ぬ、主人役からは催促されると云ふやうな場合もあり故にウェーターとなつたものは、料理場に百度詣をするやら氣が氣でないのです、漸くの事で出來上つて客にも夫々出して珈琲も終る頃ほつと息をつくのであります、一体料理など云ふものは實際練習のものでありますから、分量はいくら間違へない樣にしても肝腎な火加減手加減で不出來になる事があります。ですから万一失敗したらばと云ふ心配は非常なもので首尾よく出來上つて客にも滿足を與へて歸した時には其嬉しさは非常です、之で充分其日の勞力は償はれるのであります。そんなわけ故將來家庭に充分應用の出來るものであります。

此料理實費として生徒は一ケ月に三十錢づゝを納める夫から種々の研究や何かの參考書を買ふのにも一人々々買ふのは不經濟ですから、皆が一の本を代り々々に見る爲に毎月十錢と云ふ圖書費を出す、其他に此學校は大變に體育に重きを置くので、色々の運動具を買た

り、又運動會の準備に五錢づゝ出す、凡てゞ月謝が二圓五十錢校費が五十錢寮舍の食料として六圓五十錢、（尤之は物價の高低に依つて增減せられる）寮費五十錢夫に小使が二三圓でどうしても一ヶ月の總費用として十二三圓は儉約しても必要です、小遣は人に依つて異ふが書籍費なども相當に要るので多い人は四五圓以上も使ふ人がありますが、贅澤にすれば切りなしで凡て學生時代は足りないがちの方が宜しいのであります。

▲科外講義、實地見聞

夫は扨置き時々土曜日の午後からは都下著名の士を頼んで色々の講話を聞くと云ふ事になつて居ます、今迄は本や雜誌の上でのみお近づきになつて居た人に目のあたり逢つて話を聞くのでありますから、從つて話にも身が入つて生徒に取つては學科以外の學問になるのであります。夫から暇のある時は講話に聞た事を實地に見にゆく、例へば應用理科學の內で麥酒釀造の話を聞た時には麥酒會社を見に行き、人類學の講義の後に帝國大學の人類學教室、古物室を見に行くといふやうに誠に百聞は一見に若かずと云ふ如く、數万言を費した理論よりも實際に行つて見れば一目に分つて而も永く忘れないものであります、是等が追々都に出て勉强する御蔭とでも云ひましようか、其他に又大家や名士の家庭などを訪問する事も有ります、之も中々爲になる事が多く、大家の奧向、家庭整理の模樣など見ると將來の爲め大智識を得るのであります。

又三年級には理化實驗室と云ふものが有つて、先生から種々の材料を貰つて色々分析をして見ると云ふ組織になつて居ます、之も初めの內は何から見ていゝのかさつぱり分らないが、次第に馴れて來ると非常に興味が起つて實驗をするのが樂しみになつてまいります、符合は、化學式は知らず識らずの內に覺えて了はれます、之に一週間の內の一日や二日はつぶされて仕舞ひます、何でも只本や講義を聞くよりは自分が出來ないながらも實地にして見るのが何より効能があります、

頭を痛めて何でも詰込み主義に只書物とにらみ比するより實地研究して實際と理論と照し合せて行く樣にするのが成功の最近路であると思ひます。日本の學校はどうも此點に欠けて居る樣に思はれますが、將來は次第に改良して、机の上の空論は止めにしたいものです。

▲興味の一つ

併しこんな事ばかり云ふと毎日研究とか何とか云ふ事に計りあくせくして居る樣でありますが、よく學びよく遊ぶと云ふ主義で以て其一として体育などは最盛で熱心なる教授の下に日々新しき体操を習ひつゝあります、秋期では大運動會が催される之には生徒皆全力を注いで準備をし本氣になつてするので、年を追ふて發達して行くと云ふ有樣此時にも大部分は体操で勿論中には競走も勝負遊戯もあります、之等は只義務的でなく眞面目に本氣になつて行るのですから、行る人も見物する人も自然に興味が起る、併し負けたから何の勝つたから何のと云ふ樣な卑屈な考へは誰も持て居ない若し中にそんな人が一人でも有つたら此學校の生徒として一文の價値もない人なのであります今一ツの樂しみは此學校の創立紀念日と天長節の晩の夜會とであります此會の時には此學校に關係のある人々を招待して種々樣々有益な話をして貰ひ、其後で名々の考案した餘興をするのであります。最も多く出るのが活人畵で之も初めは皆下手で寧滑稽で有りましたが、此頃ではだんだんに進歩して其衣裳から邊りの飾り付け迄眞に迫つて居る樣なものが澤山出來ます、次には狂言とか彈琴ヴアヰオリン、ピアノ等の音樂琵琶歌等皆生徒の手一ツで種々の藝をする、之等も年々進歩して中々面白く夫に伴ふ茶菓の饗應、福引等で滿堂愉快充ち滿ちて何の不平もなく不滿もなく、打解けて一家族の如く九時の鈴が鳴つても猶興盡きずして殘り惜しく寮舍に歸つてから、又一時其話で寢る事も忘れる位。

▲入浴の事

寮舍の事は一向に云はなかつたが午後の三時から四時頃迄には大抵皆學校から歸つて來るので夫から寮舍は一しほの賑かさ。沐浴は寮を二つに分けて一日置きになつて居るのですが、いざ湯が出來たと知らせて來ると誰しも新しい内にはいり度く皆我、先にと三ッ道具、否學生の事であるから二ッ道具位をかゝへて飛び出すので、一時は中々の混雜緩くり來ればこんな目には逢はないのにと、裸になつてぶる〳〵震へて居ると云ふ様な仕末、湯の中は恰も芋洗ひの如く、体と体とすれ合つて大抵の垢は落ちて仕舞ふ、お湯に入るものも種〻で、頭の先から足の先き迄極く精密に洗ふ人もあり今來たかと思ふともう着物着て出て行くと云ふ早風呂の人もある、兎にかくお湯にも入つて一休みすると間もなく夕飯となる一日の内で一番御馳走のあるのが、此時で、各寮に主婦と名の付くものが二人居て、日々の献立を定めるのであるから、此人が肉類が好きなれ



旌旗翩々 Flag Drill.（才媛講演欄内女子大學運動會の記參照）

新式体操姿勢十種（其二）

ば肉が多く出ると云ふ風で、其人々に依つて異ふのであるが、是れを定めるのが中々容易ならぬことです、大勢の人の口に合ふ樣にするのでありますから、中々氣骨が折れるのであります、調理の法も色々で學校で習つたのを應用することが多い、間食は一切禁じてある代りに、大抵二日置き位に（夕食後）一人前二錢位の菓子、果物を添て出す、之が何より樂しみで、此次には何を出すのなど〻主婦の處に聞きに行くほど待ち遠い、いぢきたなしと笑ひ給ふな、かくてそろ〳〵夕餉に取りか〻る頃に必ず郵便とどなつて配達係りのお孃さんか澤山の郵便を持て來る、なつかしき國元からではないか、別れたお友達からではないかと、首をのばして待つて居ると、やがて上から順々に渡される、呼ばれた人は何より嬉しく、無かつた人は失望の余り恨めし氣に悅ばしそうな人の顏ながむるもあり、一人知らぬ他鄕に居れば手紙の來る程嬉しい事はなく、郵便配達の來る時程、たのしみなものは無いのであります。

▲夜の寄宿舍

やがて夕飯もすむと六時迄は隨意な時間であるから、多くは運動場に散歩に出掛ける、其處では自轉車に乘る人もあり、鬼ゴッコする人もあり、玉(?)の樣な聲で讃美歌を歌ふ人、或は夕陽山に沒する西の空を眺めては、限りなき考へに沈んで人知れず暗涙にむせぶもの、人の顏の異なる如くに夫は〳〵種々であります、自修時間の鈴がなると、讃美歌の聲も笑ひの聲も一時に止まつて、各かじ〻室に歸つて、夫から九時迄は默讀時間であります、夫故勉强家は勿論の事、そうでないものも詮方なく机に向ふ、自分は極く〳〵のんきな遊び好きで有つたから、神妙に机に向つては居るものの、さて何を一心に勉强するでもなく、明日あるものの下ざらへをする位が關の山で、其あとはついこくりこくりと白河夜舟をやりかける、同室の人には又初つたと笑はれても眠い時には何の慾も無くなつて仕舞ふので、いくら止そうと思つても何しても止められない、

時には遠慮く机の上につゝ伏して居る時など、寮監やら校長やらが廻はつて來られて、友達に袖引かれて何事かと眠き目こすりつゝ、あたりを見廻して初めて氣が付き狼狽てゝ禮をすると云ふ滑稽を演ずる事も時々あります。

九時のベルが鳴ると皆食堂に集まつて其日有つた色々の事を話し合つたり、寒い折には体操をしたりして廿分計りを費し、お休みなさいを最後として一同室に退き、寢る仕度をするのであるが、色々の冗談を云つたり、ふざけたり、滑稽をやらかしたりして、中々寢る迄には行かないが、最後に寮監が見廻りに來ればもう口を利く事は出來ないので、今度は布團の中で手でいたづらしながら何時の間にか寢てしまふ。

土曜日の晩には自修時間と云ふものなく、大抵は六時七時頃から食堂に寄合つて、寮監から有益な話を聞くとか、種々の滑稽對話や、隱し藝などを出して、茶をのみ菓子を食べながら九時迄は騒ぐので、彼方の寮でも此方の寮でも中々賑です、それが一週間の内で最樂しい時であります、夫に翌日は、外出が出來ると云ふので猶更に何となく樂しい。日曜日では平生の寢坊も早く目を醒して、氣もいそいそと手早く支度して、或は教會に行くもの、朋友の家に遊びに行くもの、暖い自分の家に歸るもの等、皆夫々に希望を以て嬉しさうに出て行くのですが、歸りには皆疲れて活氣なく、朝の元氣に引かへてぐんにやりとなつて歸つて來る。

こんな事を日々くりかへしつゝ暮すので其内にはだんだんと夏休みも近くなるもう幾つ寢たら國に歸られるなど、くだらない事ばかり算へて、やがてその日も近づいて來ると歸り支度をとゝのへる、弟への土產やら着物やら、行李に詰め込んでは出したり入れたり、授業に出ても少しも氣が落付かず、そわ〳〵してむづかしい算術を考へる片手に、懐しい古郷の景色が現はれて、ついうつかりと考へ込で、飛でもない時に返事をしたり、歸つたら何しよう、斯うしようと云ふ樣な事にばかり氣が取られて、僅五日か六日が、二年も三年

も待つ樣に待たれて居る、漸くの事に閉校式もすんで友達の誰彼に挨拶もそこ〳〵に、威勢よく行李と相乘の人力が新橋のステーションに着た時の嬉しさ、之からは暫時學校生活を離れて樂しいホームの内の人となるのであります。

（完）

女學生と體育

女子大學講師　白井規矩郎

女子殊に女學生にはドウいふ運動を課すべきかといふ問題は未だ一定して居りません、或は男子と同じにするがよいと申すものもあり、又た女子には女らしいものを行はせよと申すものもあり、諸說、紛々、各々見る所を異にして居りますので、第一女學校の體操敎師などで眞に此事を研究いたして居るものは頗る迷惑を感じます、我國唯今の有樣を見るに其大部分は女子に男子と同樣の體操を課して居りますが、恐らくは唯だ無意味に課して居るのでは無からうかと思はれます、それと同時に少しでも運動の眞似をしてゐるのは全く運動をしないよりも優であらうか、又たは女學生に男性的の擧動をさせるのは、反て害がありはしまいか、といふやうな重大問題が起て參ります、是れに付いては自分も數年前から研究いたして居りますが、此頃伊國チユーリン大學敎授博士ユー、モツソー氏の話されました事は、目下我國の女子體育の上にも參考になることですから、一寸御目に掛ませう。

女學生の體育といふ事は何れの方面より見ても、男子の體育よりは一層重要であると考へられる、其れで近頃新らしい體操法や遊戲などを學校に施行しやうとするに、隨分過激な反對者もあり、又た大の贊成家もあつて、大分敎育家連の注意を促がした樣だ、一體女子の體育は男子の樣に兵役に就く用意でもない、女敎師に射擊の上手なものを作らう爲でもないから男子の體育から比べて見れば誠に容易である、即ち其の目的は、唯慈愛といふ目的を十分に達することが出來得る

だけで、滿足であるのだ。

體育上最も適當と認められる年齢は、十四歳から二十四歳までの間である、此年齢に達したなら自然に運動の度を殖しても差支はない、當時吾國(伊國)の體育は頗る衰へて居る、二三十年前の少年は随分活潑な運動をしたものであるが、今の少年は一向運動といふ事を重んじない様だ、誠に歎かはしいことである殊に若い貴婦人は、體育といふ事を蔑視して居られるが、是は全く體育を小供の遊戯かの如く、



啞鈴体操 Dumbells Drill.

(女子大學にて寫生)

新式體操姿勢十種 (其三)

思はれるからであらう、自分は世間の母に對して切に希望する——善良なる體育を與へて、其兒の健康を圖られん事を——

▲發動期と體育

博士ヂー、バンヂ氏は、此頃或る少女に就て貧血病の原因を發見せられた、其人の話に總て少女の身體は春氣發動期になると、多量の鐵分を内部に蓄積する必要が起る、即ち此鐵分は生れながらにして備はる貴重な血液の元素であるからして、之れを胎兒に遺傳するのである、牛乳は胎兒の生活に足るだけの鐵分を含

んで居らぬゆゑ、母たるものは、別に方法を求めてその子の生る丶前に、多量の鐵分を養ふのが極めて必要である。左もないときは生理學上自然の道理として、疾病を惹起し易い、斯樣に將來に於て必要な鐵分を要する機關であるのに、之れを養成することに注意しないで、其が爲め血液の消耗を來すといふのは誠に愚の極であると。

女子の身體は男子よりも發達の力が弱いから、男子よりも特に注意して消化作用を活潑にしなければならない、攝生を過つたり、心氣を勞したり、或は鬱悶し或は衰弱を來すなどは、何れも少女の成年を妨ぐるものであるから、女子の十四歳から十五歳になる間は、成るべく身體を運動して機關の發育が生理に適ふ樣に、注意しなければならない。或る人は女子の春氣發動期に於ては、暫く運動を中止したがよいと云ふけれども、生理學者は決して此說に贊成しない、否全く反對で、運動を活潑にするのは自ら血液の循環と攝生とを助くる効能がある、と云ふて居る。

▲ヒステリー

ヒステリーといふ病氣に付ては種々の議論があるがツマリ常に坐食して身體を動かすことが尠ないので、神經に衰弱を來たした結果である。この病には婦人とか虛弱な人などが罹るもので、之れを豫防しないで痼疾にしてしまふのが大分見える。併し之れを治療する良法は別段にない。唯だ身體を十分に動かして、內臟機關の働を活潑にするだけである。到底服藥などで治るものでない、室內に閉籠らないで廣々とした處へ出て、適宜の運動をして精神を活潑にするのが一番宜しい。

▲運動と體育

少女の常に座食するもの、怠惰で精神錯亂せるもの、夜間常に惡しき夢に襲はれるもの、疲勞せるもの、呼吸音聲の錯亂せるもの、消化器の鈍いもの、心志定らずして喜ぶかと思へば直に悲しみ、躁ぐかと思へば直ぐに憂鬱し、笑ふかと思へば泣き、顏色蒼白で、時に蒼青になるものなどを見る度毎に、運動が不足である

から斯樣な衰弱を招いだのであると、說諭したいと思ふて居る。

ヒステリーに襲はれんとした時、之れを豫防するには成るべく心志を勞する樣な事を禁じ、神經を亂す樣な過度の運動を止め、廣々とした野原へでも出て、絕えず適度の運動をするのが一番宜しい、其故自分は遊戯を以て女子の心を慰めたり、女子の體操場を增設して、生理に適する運動の便宜を與へたいと思ふ。



輪圈体操 Hoop Drill

新式体操姿勢十種の内（其四）

伊太利で勢望ある人の說に、體操の効用を十分顯すには、勉めて猛烈に且つ迅速に之れを行へと云ふのである、之はこの人が軍人の氣象があるから、自然斯樣な猛烈性急な運動を希望するのであらう、けれども彼の普魯西軍人の特質なる步行の方法や、小銃を取扱ふに過急なのは生理學者なり技術家なり、決して賞讚して居ない、女子の體育としては、猶更不適當なことは分り切つてゐる、自分は古代の慣習に就て記憶して居ることがある、其は針醫が患者を治

療するとき針匣を患者の掌上に置いて、患者をして之れを壓搾させたり又た掌上に回轉させたりする、則ち僅かに筋肉を動かすのみであるが、之れが大に血液の循環を助ける手段と成つてゐる。

力士が土俵へ上るとき、油で全身を塗擦し疲れて歸れば復たこれを塗擦して、氣力を補ふことがある、これを醫的療法としたなら、誠に陳腐な方法であるが、紀元前百年頃にアスクレピヤズといふ人が、此方法を以て徐々に筋肉を動かす功ありと主張して、當時の醫師の説明まで得て採用せられた、其説は筋肉を收縮させないで啻だ摩擦だけの方法でも、身體を强壯に且つ肥滿にさせられると云ふのである、この事に付て博士エー、マジヲラ氏が、近頃我が化學工場で試驗せられた成績は斯樣である。

體育上殊効驗のあるは、徐々に身體を運動するにあり、一定の時間を以て猛烈なる運動を與ふるよりも、血液を循環せしむるの効顯る多しとす、不斷適宜の運動を與ふれば筋肉の發達を助成し、劇烈なる運動を與ふれば發達力を薄弱ならしむ。

瑞西式といふ體操法則ち瑞西に行はれて居る體操は我國のものとは大分違つて居て、過激な方法がないので頗る良結果を得たといふ事であるが、自分は此方法を採て全然我國人に摸倣せよとは云はない、唯其體育法の基く所の原理が日耳曼組織から見ると、生理に適つて居ると云ふだけである。

有名なオリバセスの著書の中に、今瑞西に行はれて居る體操の原理を論じたものが數章ある、氏は運動の方法を區別して、

▲緩徐なるもの、

▲過激ならずして、迅速に行ふもの、

▲過激なるもの、

との三段にせられた、自分はこの別け法は實に近世體育法の基礎だらうと確信して居る。

十五歳の頃には活潑に全身の運動をさせるのがよい、ケレドモ此年齡に達したものでも、よく注意して正しく行はせるのが必要である、自分が見る所では近世の體操法は、啻だ身體を激烈に運動させやうといふ目的で、腕力を以て全身を高めたり、一運動毎に確と

區切りをつけて直角的のものを奬勵する傾がある、多くの人の筋骨をして強壯にさせやうといふのに、斯樣な運動を與へるのは間違つた話である。

自分は全く之れと反對で、筋肉を強壯にして發達させやうといふには、僅の時間でもよいから極めて手輕いもの、例へば箒なり棒なりを持て運動するのが、最も効能があらうと考へた。

嘗て博士マンカ氏と共に八歲から十二歲までの少女に、この趣意で體操法を試みた、處が十五日斗り經て調べて見ると、確かに其腕力が二倍するものや三倍するものが出來たといふ好結果を得た、けれども若し他の機械、啞鈴（特に女兒用のものは格別）とか球竿乃至は横置した梯子などを使つて、全じ結果を收めやうとしても迚も得られない、なぜとなれば此等の器械を取扱ふのには、筋肉の作用が生理に適はないから。

近頃自分は龍動で、或る女子體操の、利益ある方法を發見した、其れは希臘古代若くは西班牙の踊舞法なとを參考して、一の運動法を設けたもので、之れを音樂に伴れて運動する時は身體に技術的の姿勢を與へて閑雅優美にするから、女子體育の上に將來良效果を得るものだらうと思はれた。

其各擧動に就ては一切號令を使用しない、又た其運動を連續的に排成して、而かも生理に適するのは、實に此方法の特色であらう。

我國の母達が自分の娘に、歩行するに付ての容儀の方法を敎へるのは、ドノ位困難であらうか、少女が風姿を正しくして歩行するのは、則ち運動を均一にする一つの方法である、其れにも拘はらず吾國の少女の多くは、怠惰で生理を解するものが尠ない、（否母として之れを敎へるものも尠なからう）歩行するのに猫背にして頭を前に傾けるといふ風が多い樣だ。

米國女學生の自活法

一記者

女子敎育は十九世紀の末から廿世紀の始へかけて、

世界一般の大問題となりました。一國文明の程度は直ちに女子教育の如何によッて定まると云ッてもよい位我が日本では日清戰爭の後、國民生活の增進に伴ふて俄然として女子の教育が盛んになりましたが、今日では正にその頂上、否、いまだ猶進歩の途中にあると言はねばならぬ。女子の教育が、その內容、分量ともに男子に比較して敢て讓らぬといふ位までに至らねば進歩の頂上とは言へないのであります。勿論、男子は男子、女子は女子といふ教育の目的、方針は異なるにした處ろが、兎に角、男子と對等の智識、男子と對等の教育の要素は養はなければなりません。

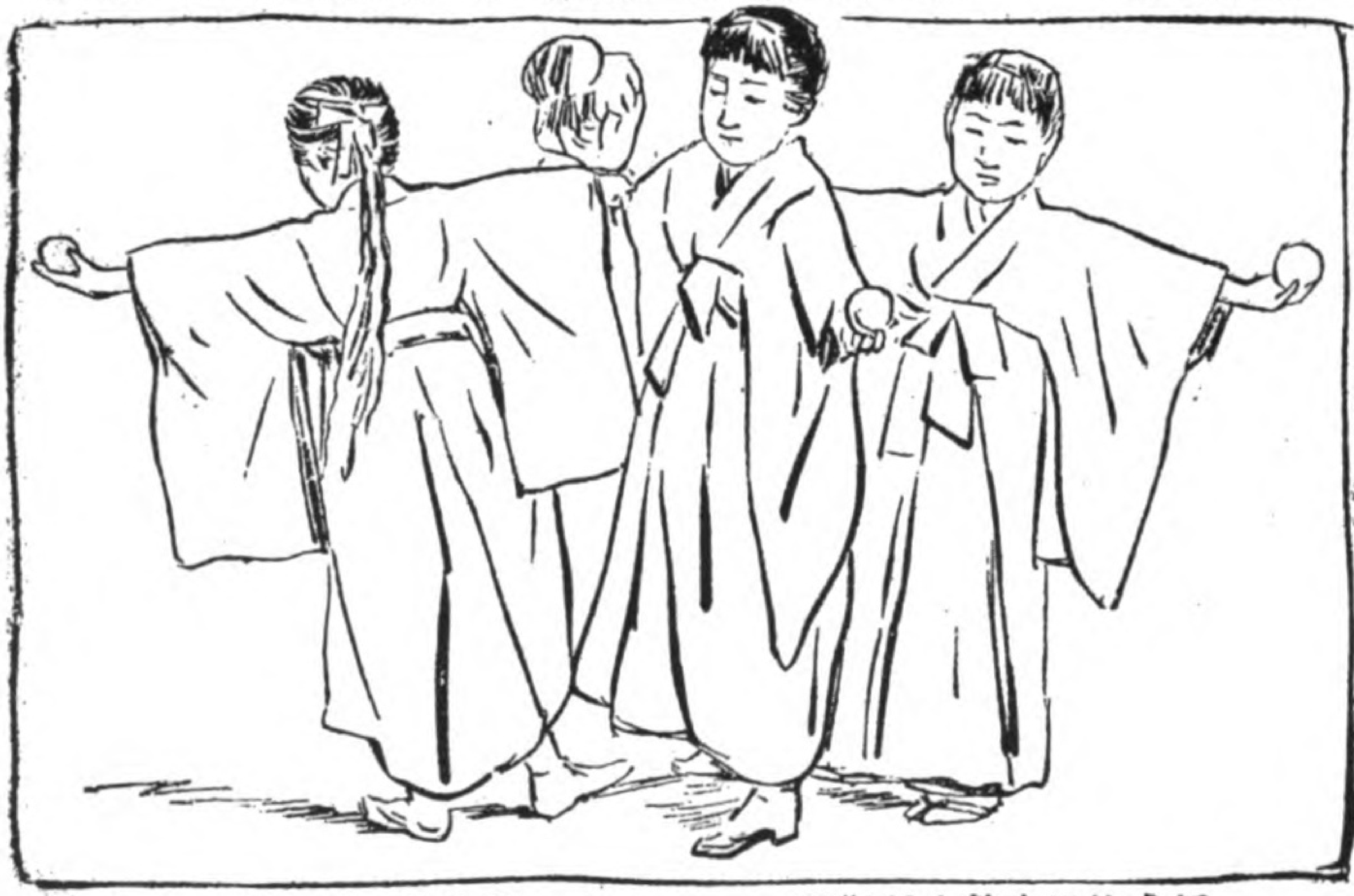
今日、日本が露西亞との戰爭に就て國民一般の對外心が一致した處ろは實に凄まじい勢であります、元より今回の戰爭は日本始まッて以來の大事件、開闢以來の大變事には相違ないが、又今回の如く國民の心が一致して世界的の意志を發揚した事も又實に開闢以來の現象といつてよろしい。今回の戰爭は軍人と軍人とが戰爭するのでなくて實に國民と國民とが戰爭するのである、軍人や兵士は唯我れ／＼國民の手足となつて働らくものであるから戰爭の責任は悉く我々國民の一身に脊負つて居るといふ事までも三歲の小兒すらもよく聞き分けて對外心を一致せしめたといふ事は、是れは實に國民教育の結果で、つまる處ろは國民の根本、即ち家庭の教育が進歩した結果と言はねばならぬ、女子教育の影響の偉大なる事は此の一例を見ても大約察せらるゝのであります。

▲女子教育の價値

されば女子教育は國民智識の根元であつて一國文明の源泉は必竟こゝから湧き出すのでありますから社會の隆頽、興亡は直ちに女子教育の如何にあると言はねばなりません。就ては茲に女子教育の模範國、否女子教育の急進國として世界各國より瞻仰さるゝ所ろの米國の例を擧げて聊か諸嬢の參考に供しませう。

勿論茲に女子教育と云ても米國は男女混淆教育の制度であるから我日本の如く何々女學校、何々高等女學

校、女子大學といふやうに特別に女子の爲めに設けた學校とては澤山にありません。大概は男子と一所で、男子と同一の學校に入り、男子と同一の教場に机を並べて男子と同一の講義を聞くのであります。この制度は日本は勿論、歐洲諸國とも大いに趣きを異にして居ります。これは米國の教育家の考へには女子は男子と體質こそ殊にして居れ、智識、能力、其の他の點に於ては双方共に同樣の素質を備へ又同樣に發達し得べきものであるからその天性を發育せしむる教育上に於て



新式体操姿勢十種（其五）　Ball Exercises.　毬体操

も又男女別々にする必要はないといふ考へが勢力を占て起つた事であらうと思ひます。そこでまづ小學校から申しませう。

●グランマスクール

直譯をすると文法學校となりますが、何も文法を敎へる處ろではありません、つまりこれが日本の小學校で低度の國民學校です、大抵六七歳から十二三歳までの兒童は皆この學校で教育を受くるのであります、此學校の卒業に優等と尋常との二種の區別を附けてありますが優等生は無試驗、尋常生は或課目の試驗を經て中學校に入るのであります、修業年限は八ヶ年となッて居ります。

この學校では生徒の監督は極めて嚴重にしてあります、欠席、遲刻は非常にやかましくて一々父兄保證人の證明を要する事となッてゐる、それ故校長が生徒に向ッて訓責、詰問する有樣は中々用意周到なもので、生徒の行狀に就ては父兄も及ばぬ責任を持ッて居ります。それから萬事規律が嚴重で教室への出入は必らず引卒員の號令でするし着席、退席も自由勝手に許しません、つまり小兒をして將來社會に出でゝ事を爲すに就て規律を重んじ、秩序を守るといふ習慣を養はせたものであります。

●ハイスクール

ハイスクールは高等學校となりますが、それは決して高等學校ではなく丁度日本の尋常中學です、修學年限は三ヶ年、乃至四ヶ年のもあります、此の學校でも規則は矢張嚴重です、學科の內體操は普通體操、兵式體操の兩樣あッて男子は勿論、女子も共に鐵砲を擔ひて郊外へ練習に出るのであります、其他ベースボール、フートボール等の野外遊戲は中々盛んなもので、又此時代に舞踏、手踊りなど交際的遊戲をも一と通り嗜むる事となッて居ります、夫れ故青年男女にして少くとも此の二つを能くせぬものは殆んどない位です。

それから此の尋常中學から他の專門學校、又は高等學校へ進む教育上の連絡は何樣かといふに、學校によッては無試驗でカレーヂ（專門學校）又はユニバーシチー（大學）に入る事も能ますが、悉くそうとも參りません、それから今一ッ注意すべき事柄は物理、化學動植物などの科學は書籍上の理論よりも實驗に重きを置く事であります、之れが爲めにや米國人は概して學理應用の智識に富んで實際上の仕事が發達して居ります、日本の女學校の如く學問を徒らに机上の智識として他日家事を取るに當ッて少しも應用する事が出來ぬなどとは格段の相違であります。

●ユニバーシチー

これは大學であります、米國で大學といへば中々澤山ありまして一州には必らず一個以上の州立大學があります、其他に私立の大學、專門學校がありまして四

五年前の統計によッて見るも四百何十といふ大學の數がありますヽ、それで敎授、講師の數が約九千人、內女子の講師が千人以上もあるといふ、それもその皆是等の大學に入校して居る生徒の數約十二萬人の內女生徒の數が三萬二千人といふ大數乃ちザッと四分の一强となッて居ります、日本の女子大學幷びに女子高等師範校などが大概同じ位の程度でせうがそれにしても今日では兩校合せてまだ千人には滿ないのであります。今日女子敎育の進歩を唱へて居る日本で公私の高等女學校全体の生徒數が約三萬に上ッたといふ事で、丁度米國にはそれ丈の女子大學生がある勘定になります。

プルム体操 Plume Exercises.

（女子大學にて寫生）



新式體操姿勢十種（其六）

▲混淆敎育の利害

前に申した如く米國は男女混淆敎育で下は小學校より上は諸種の專門學校、大學校共皆同一の方針に依ッて居りますが、男女共に敎室を同ふして同一の講義を聞くといふ事に就ては澤山の學科の中に自然女子に不適當なものも有ませう。譬へば文學、美術醫學、敎育學などの學科は自然女子に適當して居ませ

う、併し工科とか、法律とかの內には隨分女子に不適當なものもあります。併この混淆教育といふ事は米國多數の學校が採用して居にも拘らず今日猶教育界の一問題となッて居ります。それは經濟上、管理上、又道德上に就ていろ／＼と論が別れて居ります、成程男女混淆は大躰に就て至極便利な仕組であります、同一の建物、同一の教師、同一の管理者の下に於て同一の順序方法によつて同一の學科を授くるのであるから經濟上管理上の便益は至つてよろしい、けれども此の便益に伴ふ弊害は道德上、風儀上に現はれて來るのであります。

尤もこの仕組は男女互に相助け、相勵み、以て互に進歩するの益はあります。男子は女子の天性に感化されて文雅優麗となり、又女子は男子の雄壯活潑なるを見て彌々氣力と體力を養ふに至るから大に賞すべきである、又彼等兩性の往々にして戀愛に陷ることがあるとも其の場合には卒業後必らず伉儷の式を擧ぐるのであるから、敢て不可はない、のみならず、男女相識るの深きより概して其の結果はよろしいのである、彼の廣き社會で男女相識る事の淺きより結婚後往々家庭の圓滿を欠くの弊あるに比ぶればこの自由結婚は寧ろ有益であるといつて米國では社會から許されて居るのである、勿論多數の男女中には恐くそうとは言はれない徒らに青年血氣の劣情に驅られてホニームーンの翌日直ちに破鏡の嘆を見るものも間々ありますからこれは一概には言はれない。

▲女學生の德操

右は道德上風儀上から見たお話であるが、こゝに又混淆教育に就て男學生の反對があります。これはいづこも同じ男優、女劣の思想から來たもので、男子と女子とは元々體質を異にすると同時に能力にも差がある、隨ッてその天職も自然異つてゐる故に社會に負ふ處ろが男子と女子と同一でないといふ樣な意見からである。それ故男子と女子と同一の學校で學ぶべきものではないといふ。尤もこの混淆教育の學校では多少女

子に斟酌をして學課程度を比較的低くして居るのが多い。あまり高尙な、むづかしい事を敎へては自然女子の腦髓に入り兼る、重荷であるといふ處ろから手加減をしてやさしくしてあるのが男學生反對の原因らしい。されば斯る學校で女子と一緖に敎育を受けるのは我々男子の不利益である、又恥づべき處ろである、故に斷然分離すべしといふのであります、成程これにも幾分の眞理はありませう。是等の說に鑑る處ろがあッてか米國でもニユーヨーク其他東方の諸州では女子の敎育を男子と分離してある樣になッて居ります。

▲社會上の勢力

要するに米國では女子敎育に對して非常に寬大主義を採り、何につけても十分便利と待遇とが與へてあります。獨逸や伊太利などは勿論の事、世界中に家庭の尤も重んせられてゐる英國、一家の勢力と權利とを擧げてその細君に托してゐる處ろの英、佛諸國でも女子が社會表面上に於ける地位は少しも占めて居らぬに拘らず、この米國では女子が猶社會表面上の一勢力となッてゐる、否一大勢力と見做されて居るので、それ丈け又種々社會上の便宜と待遇とを與へられてゐる、それ故米國では女子敎育を以て公共事業中の肝要なものとして居ります、隨ッて思想界にも實行界にも非常の勢力と位置とを有して居るのであります、總じて勢力のある處ろにはその勢力に伴ふた責任がある、又責任のある處ろには必らずこれに伴ふ德操がある、米國の女子は勢力のある代りには責任を重んずる事も又深く隨ッて彼等に大なる德操があるので、彼の天眞爛熳たる靑年男子が嬋娟窈窕たる妙齡佳人と相接し相交はり、意氣投合せる情人兩々手を携へて綠陰深き處ろに散步し、又共に輕車を驅ッて郊外に趣き、或は一葉に掉して湖心に浮ぶなど我々日本に育ちし者の眼より見れば甚だ危險と思はるゝに拘らず、而かも高潔、淸淨些の塵念なく能く靑年の体面と品格とを維持する所以のものは必竟米國女子の德性の高く、その責任を守るの一點に歸せねばなりません。

▲教育と婚期

米國では商工業家の女子の大多數は公立の豫備學校で教育を受けます、これは西方諸州に於て格別に多數でありますが、東方卽ちニューヨークの方面では女子に向つて特別に數多の私立寄宿學校、又は晝間學校が多く設けてあります、これは大抵高等の豫備學校ですから今一層進んで高等の教育を受くる女生の數は却て男生の數より多數を占て居ります、其の所以は男子は出でゝ實際の仕事に就き、生活の法を立つる必要があるからでせうが、之に反して女子は一方に於て精神上の快樂を滿さん爲め、又他方に於ては餘暇があるからです、此時期に於ける女子の年齡は大概十八九歲です、御存じの如く米國では二十歲以前に結婚するものは至つて少數で大概は二十三四以上甚だしきは三十歲位までも未婚の女子が澤山あります、これは社會の進步に伴ふ自然の傾向でありますが、かういふ譯で女子には男子よりも却て靑年期の時日に餘裕が多い、この點は全く日本と反對で二十二三歲を過ぐればもう嫁入の口がないなど、米國の人が聞いたら驚ろくでせう、若し十七八が嫁入盛りだなどゝ言へば米國の女子は寧ろ冷笑するかも知れません、社會の習慣とは言ひ乍ら斯くまでも違ふのは不思儀なやうです、又こゝに一ッ注意すべき事は米國の教育の缺點です、彼の國で男女に拘らず中等、高等の教育を無報酬で自由に授くることは下層社會の女子に身分不相應の欲望を起さしめ、その結果自分の運命の果報なきを嘆じ、失望の淵に陷らしむることが多いといふ點であります、尤もこの傾向は單に米國にのみ限りませんが、米國では殊にこれが多い樣であります。

▲女子體育

體育は男女に拘らず、歐洲各國皆務めて行ふて居りますが、殊に米國ではこれが盛んであります、米國女子の體育の有樣を見ますに、彼等は小學、中學、大學を通じて殆んと男子と同樣に運動をしてゐます、それ

故中々荒々しい、まづボートも漕ぎます、乗馬もやります、それから自轉車、兵式操練、男子のするほどの事は大抵行ひます、而かも中々巧みで、殊に乘馬の如きは、鞍が男子のとは異ッて腰掛る樣になッて居りまして、餘程困難でありますけれども男子と共に、常歩、速歩、駈歩、何でも行ります、然るに近年或る人が女の鞍の不便な事を論じてから男子のと同樣跨がつて乘ることが行はれる樣になりました、それから馬車を御する事も又巧みです、それから是れは日本人の眼から見ては如何にも奇異に見へませうが近頃

（此運動の説明は才媛錦叢中女子大學運動會の記に詳し）



新式体操姿勢十種（其七）アマゾン舞 Amazon Drill.

では相撲までも行るやうになりました、郊外の競走、登山は元よりの事、木を攀ち登る事も盛んに致します、凡そ日本婦人の眼から見てお轉婆と言はるゝ程の物は概ね米國女學生中の立派な運動家でありませう、その代り米國の女から日本婦人を評したら、病人、無藝者、臆病者、日蔭の草と言ふかも知れません。

▲女學生の自活

以上は一般女子教育の梗概を述べたばかりでありますが、その教育に就て或る社會程度の女學生には自然

に自活といふ事の必要が起ッて參ります、それは元來この米國では獨立獨歩、自營、自活といふ事が社會一般に尊重せられて居るので、勞働は神聖なり、額に汗して麵包を得るのは人生の本義なりといふ事が米國人一般の主義道德となッてゐて、又よくこれを實行します、それ故、學生で父母の資力に依らず自から勞働して自から學問するといふ美風がよく行はるゝ、隨て自活法に就て種々便宜な方法も備はつてゐるのであります。

米國の女學生で專門の學藝を修め深遠な學問を窮めやうとの志望はありながらも不幸にして其家の貧しく、又は何かの事情で思ふ樣に學校に入ッて勉强する事の能ないものは皆それ／＼自活の方法を考へ、その道を求ねて、それ／＼自分の性質に適した學問、（醫學、文學、美術）を研究するのでありますが、勿論ニューヨークとか、ヒラデルヒヤだとかいふ樣な大都會では其の市中に各種の專門學校なり大學校なりが設けられてゐるから、男女共に居ながら高等の敎育を受ける便宜がありますが、少し遠い地方へ參りますと幾ら米國でもこの便宜が乏しい、田舍で僅少な土地を耕やし、これで以て漸く其日の生計を立てゝ居る家では我が娘を如何して敎育し、どうして獨立させやうか、如何にしたらば人並に幸福な生涯を送らせる事ができ樣かといふ事は其父母が日常不斷の苦心であります。

勿論斯かる農家の主人、即ち女兒の父親は槪ね高等の敎育を受けた事のない人々でありますが、貧しい暮しをしながらも、どうか自分の娘には立派な敎育を授けて遣ッて幸福な生涯を送らせ樣と將來に向ッて種々な希望を抱いて居ります、そこで差し當り學資金の問題となります、これが米國で地方人の定語となってゐる

▲大學生、敎育園

であります、エヂユケーショナルカーデン即ち敎育園といふのは地方小農家がその子女に學資金を得さする爲めに若干の地面を與へてそれへ玉蜀黍とか、馬鈴薯とかいふ樣な野菜を植へさせて彼等が毎日小學校へ行く前に一度田圃を見廻り、或は耕し或は耘り、やが

て又學校から歸りて來ると植物の培養にいろ〳〵と手を盡して、丹精して得た收穫物を市へ持ち出して賣ッて來る、その收入を年々預金にして置き十一二歳の頃から十六七歳やがて大學校に入る樣になる頃まで貯蓄して置くのであります。これからコレッヂカウ即ち大學牛といふのは、右地面を與へる代りに若干の金を與へて乳牛を買はせる、それで少女自からその牛を飼ひ、乳汁を絞り、バタを製しそれを又市場に運んで賣り上げて代金を貯蓄し、他日大學に入るの資金とするのであります。それから又鷄を飼ふてその卵を採り、之を賣ッて貯蓄するのもあれば又、草花を培養して市場へ運ぶのもある、斯樣いふ按排に少女自から手を下して生產に從事し、父母の厄介を掛けずに自から他日の學資金を作り出すのであります。これは實に小農家に取ッて女子の爲めに便法であるのみならず、實に米國人獨立の志想を養ふ特殊の美風と言つてよろしい。

▲家政部の補助

校婢といつては少しく穩かにないかも知れませんが、大學の家政部に補助として雇はるゝのが又一ッの自活法であります。乳牛を飼ふても傳染病で斃るゝ場合もあり、土地を貰ふても凶作で思ふ樣に收獲のない事もあり旁々して收入が豫定通り上らぬ場合には二時間なり三時間なり大學の家政部を補助して應分の學資を作る事も出來ます、今その勞働の種類の一斑を申せば、食卓の拭き掃除、食堂の整理、食器の洗淨、料理番の手傳ひ、それから、應接所や、音樂室、敎場など一應下婢の掃除をした後拂拭整理をするのも自活生の役目である、又來客の取次や、始業、終業の號令を司る事、或は衣服恣掛の裁縫をしたり、時には學校監督者の命令を奉じて其書記役を務むるなどいろ〳〵あります。

尤も一日三四時間勞働に從事するものは普通一般の學生に比較して多少時間を損する樣に思はれるけれども實際は決してさうでない、他の學生が散步したり、遊戲をしたりする間に自分は十分自營の計をする事が出來るこれが爲めに別段學科上に差支を生ずる樣な事

はありません、寧ろ却て自活生の方が他の學生よりも成績佳良で、滿點を得る樣な事があります、彼等は毎日大前垂を掛けて食堂の仕事を助け、食器などを洗ふて纎弱な下指も爲めに凍へ、痺れる事もあるが用事が了ればその手でピヤノ或はハープを奏づる、午前は下婢の如くに働けど午後は天女の如し斯くて勞働に從事するもの、せざるもの皆同一の教場で同一の教授を受くるのであります、學生は勿論、教師とても自活生だからとて決して蔑視するなどいふ事はありません。



鼓の行進 Tambourine March.

新式体操姿勢十種（其六）

▲職業周旋所

近頃市俄府に創立された大學の學生自活法は頗る新奇な方法です、この法は大學の家政部を補助するのでなくて多くは大學外の個人の家に仕へ或は下宿屋で朝夕家内の事務を助けなどする事です

そして大學内には職業周旋所といふものが設けられてあつて、職業を得たいと望むものは五十仙の手數料をそこへ拂つて周旋を依頼するのであります、すると、職業局はそれ〴〵學生の望に應じてそれ〴〵相當の地位を周旋するのであるが、中には私立學校、又は夜學校などの教師となつて行くものもあれば又は新聞社の校正、書籍館

の書記となるものもある、或は高等なる家庭の保姆やら、語學教師やら、官吏、事業家の信書發送を掌るなどの事もあります、さうして一日四時間づゝ勞働して一學年の間大抵三百弗乃至三百五十弗(六七百圓)の學費を儲け出す事が出來ます、又大學に居てする事はタイプライター、速記、又教會では唱歌を掌るなどの事も自活法の一個條であります。

▲暑中休暇の活用

米國では暑中休暇が殆んど學生自活の餘裕を與へる爲めに設けられてあるかの如くなッてをります。一年一度の暑中休暇は實に米國大學、中學の學生が學資を作り得べき恰好に出來てゐてその種類も又千種萬種であります、殊に此際女子の爲し得べき、職業は中々種類が多くて普く仕事に行き渡つて居る樣です、それで暑中休暇中に作られる學資は二三百弗から四五百弗に上りまして大抵これで一學年の資金を便じ得られるのであります。

斯樣な有樣で女子の自活生が近來増殖した爲めに、通常の下婢は追々自分等の職業の範圍内に切り込まれ段々と其の職業を亡ふやうな次第になりました。

▲社會の同情

前述の如く自活生の數が殖へて段々下婢の本職を奪ふやうになるなぞといふ事は好ましくないが、兎に角志あッて學問する爲めに勞働をするのは甚だ嘉すべき事である、それ故各學校共に之に對する方法も自然に完備して居る、近年は學校のみならず學校所在の市長などが大に同情して種々協力して與れる、多くは其家に下女代りとして雇入れる、(勿論下女と同一に待遇はしない)又下宿屋などでも雇ふべき普通の下女を雇はずに貧困なる大學生に其の地位を與へて自活の方法をつけさせる事になッて居る。

▲自炊の方法

男女に拘らず自活生は普通の寄宿舍には入らないで大概何處の大學校にもキャープホームといふ特別の寄宿舍が設られてあります、これは自活的學校生活を營むに適當した處ろで大概一週間に五十仙で相當の一室が

借りられる、そして室内には附属品としてフライ鍋、珈琲瓶などを始めとして自炊に必要なる道具は悉く備はつて居るが、朝飯のオートミールは彼等が朝その着物を着代へるまでの間に出來上り、晝飯には一方に羅甸の文典を調べる間に馬鈴薯が煮へる、之に鷄卵の二三個、又は罐詰物の穀類などで食事を濟し、さて晩飯となッて時には麪包に肉の一片を添へて献立をする事もあらうが、まづ大抵は廉價な野菜で濟すのが多い。

自活生の中に附近の農家に故郷のあるものは、兩親より時々見舞を受ける、その時には麪包、野菜、鷄卵、又は手製の菓子、果物などいろ〳〵土産物が到來して自炊上に頗る利益する事がある、そして彼等が此のキープホームに居る費用は部屋代、燃料(石炭)燈火、食費までを加へて一週間一弗六七十仙(三圓二三十錢)位の少額で濟む。併しこれは天性の家事的才能を備へた婦人でなくては出來兼ねる事です。

▲職業と報酬

女學生自活に就ての職業はその土地の繁閑によッて種々樣々であるが、まづ普通は以上擧げた所の大學家政科の補助、即ち校婢といふ事を外として學校外の仕事としては圖書館の助手、化學實驗所の補助、洗濯屋の手代、家庭教師、書籍店の手代などであるが、是等は女學生の職業としてやゝ適當したものであッてその報酬は年額百弗、乃至二百弗に上るのである、併し幾何報酬が多いにした處ろが、修業中の學生が雜貨店の番頭になッたり、麪包屋、肉屋の手代になッたり、又はホテルの客引などをしては忽ち世間の物議が起ッて來るから道が進んで從事するものもありません。兎に角彼等は金を得るのが最後の目的でなくて卒業證書を得るのが結局の目的であるから。一弗でも澤山に得るといふよりは一日でも早く得るといふ方に腦髓を傾けるのであります。

（完）

巴里の婦人社會

上村左川

男尊女卑が自然であらうか、女尊男卑が自然であらう

か。とにかく泰西の文物が輸入せられてからは、東洋古來の習俗であつた男尊女卑の風は漸く癈れんとし、我國に於ける婦人の地位が高まりつゝあるは事實である。勿論從來東洋流の男尊女卑は甚だ謂れの無いことで、一種の蠻風と信ぜられるのであるが、さればとて又或西洋心醉者の信ずる如く、女尊の度の高い程文明の度が高いとは云はれない。現に西洋では女尊男卑の弊害に苦しんで、男子擁護策を講じつゝある國があるさうだ。西洋は東洋に比べると、概して婦人の地位が高いが、中にも飛び離れて殊に高いは巴里である。巴里婦人の勢力と、其社會に及ぼしつゝある利害關係は如何なるものであるかを知るは社會改良上の參考にならうと信ずるから、茲に久しく巴里に棲居せる匈牙利の文人ノルドー氏の巴里婦人に對する批評を抄譯して紹介することにした。

佛蘭西のものといへば、文學なり、美術なり、哲學なり、演劇なり、皆それ〴〵精密なる研究を値するものが多いが、更に是等のものよりも著しく研究に趣味あるものは、恐らく巴里の婦人であらう。巴里の婦人は其天然の常規を外れて、實に一種特別の者に出來あがつて居る。彼の植木屋は樹木を矯め歪めて、勝手に我意匠通りの形に造ることに工夫を凝して居ることであるが、如何に巧みな植木屋でも、巴里の婦人が其境遇上自つと全く天然の形を變化して居るやうな具合に、自在に樹木を變形させることは迚も出來まいと想はれる程である。ユゴーの書物に巴里には一種の奇異な職業があつて、健全な小供を、金で買つたり、或は誘拐したりして來て、其身体を種々の木框やうのものへ嵌め込み、斯くして不思議の畸形兒に仕立てあげて金儲けの種にする者があつたと云ふことを書いてあるが、今日の巴里人は實に悉く此種の職業をやつて居ると云つても可い位のことで、唯小供の身体を不具にするのみにては慊たらないで、右同様の方法で心をさへも畸形に仕立てるのである。

其結果は則ち所謂「巴里婦人」なるものが出來あがるのであつて、身体、精神、容貌、言語を始め、歩き振り

から其他汎べての動作に至るまで、天然の儘なるものは何一つとして無く、彼等は實に土人形を作るやうな具合に、捏ねて、煉りあげて、種々様々に引延べたり押着けたりせられた擧句に、鉋削られたり磨かれたりして、只もう巴里好みの形に仕成されるのである。譬へて云つて見れば、先づ巴里婦人は、生れ落つるが否緊密なコルセットを着けさせられて、それから寢ても覺めても、平時でも病時でも、一生涯脫ぐことを許されないと同じやうな具合である。獨りで歩かれるやうになると、直ぐにもう其足には踵の高い靴を絏りつけられるので、珍跛ひくやうに跳びはねるやうに、是非もう趾でチヨコ〳〵歩きをせねばならぬことになる。それからだん〳〵大きくなつて、學校に行くやうになると、眉は黑く塗り、頰には粉をつけられる。それから又脣や耳を染めるやうになると、一段と心が發達して、最早母の差圖でなく、當人の考へで化粧しだした徵候である。

四歲位の時に、先づ最初に受ける敎訓は化粧のことで、化粧室内の事には漏れなく精通することになる。實に此化粧室内の物は、男にはもう何時までも、只夥しい珍品奇物の博物館のやうに見えることで、種々様々の、箱とか壜とか、或は銀や鼈甲や硝子、陶器などの壺とか、汎べて其種類のものは、形の不思議なと同じく、何の爲めに用ゐるのやら、目的さへも男には一切判らないのである。女子が六歲位になると、婦人たるものが化粧をするといふ事の理由は充分に合點が行つて來て、十歲になればもう三十錢以内位で出來る化粧の評價が出來るやうになる。

小供の中には心に男女區別の無い極無邪氣な時代があつて、女の子が同年配の男の子と同じやうな考へを持つて居ることがあるものだが、巴里では決してそんな事は無い。女の子は少し物事が合點が行くやうになりだすと、もうあどけない小供では無く、一個の小婦人となりすまし、男とは違つた地位に在ること男とは反對主義なるを自認して來るので、それから兄を苦しめ父親にさへも荷の重さを感せしめるのである。男の來

訪者に對しては、可笑しくすまし込んだ素振が必らず見えるやうになり、折々男の子が自分と遊びに來ると、、おつに慇懃に、改まつて、馴れ親しむといふことが堅く出來ないやうに持ちかける、先づ最初母や祖母や其他褓姆下女等から何時とは無しに仕込まれた思想といふは、即ち此世界は婦人の物であつて、男はもう當然婦人の奴隷となるために出來たもので、婦人の中でも「巴里婦人」は殊に優れて美しい花で、其中でも又自分は一番優れて美しく上品な花であるといふ事であつて、汎べて其身の將來の教育といふものは皆此思想が土臺となるのである。

新式体操姿勢十種（其九）



木環体操

RING EXERCISES.

さて十歳から十二三歳になると男の子と同じやうに寄宿學校へ遣られ、茲に全たく母親の感化は受けないことになる。此寄宿學校では、極めて無學な尼等が教育の全体を受持つのであつて、全たく實用に立たぬ教育を施し、只淺薄な外形上の知識を授けるだけである。古い寓言小説などの暗誦

をさせられ、文典綴字、修辭、其他每日の復習、作文或は歷史、地理と只無暗に教へ込まれ、分不相應の知識を授かるが、數學とか博物學とかは一切教へられぬのである。稍上流の學校になると、勿論外國語が教へられるが、それも唯外形だけで、實際は英語なり獨逸語なりが讀め、或は會話がうまく出來る女は巴里には殆んど無いと云つて宜い位である。又繪畫や音樂も學課中には加へてあるが、是亦極めて淺薄なものである。

然るに一方では又此尼連が一心に宗教上の教訓をする。教義問答とか、供養とか、懺悔とか云ふことは斷えず行はれるので、自然と娘等の心は固陋なる忌はしい迷信が盛んになる、始終此寄宿學校にばかり居て、他と交通もせず、又進歩した智識も授からぬのであるから、其迷信はいやが上に强くなるのである。

斯くて十八歲になつて此寄宿學校を卒業し、父母の家に歸るのであるが、さて此場合に於ける娘連の樣子が實に觀物で、美人といふ方は少いが、其擧止態度は頗ぶる規帳面なものである。他の感情を害するなどゝ云ふとは更に知らず、巴里といふ土地に育つた爲めに、街上や博物館や公園などで自然と色々樣々の物事を見聞して、何時の間にか虛榮を張りたい氣が盛んになつて、自分が主權を振ひたいと云ふ希望が抑へ難くなり、母親の威光にも容易に服せなくなる。此時分は血色は惡く体は虛弱になり、心機に著しい變化を來して、心は斷えず極端から極端へ變り、其時々の出來心が、前以て更に窺ひ知ることが出來ない。表面は平然とすまし込んで、頗ぶる沈着に見えて居ながら、其內心には實に想ひがけなく出來心の破裂する噴火山を包藏して居るのである、時々諸所の大通りや公園などを步いたり、或は劇場寄席などへ這入つた時に氣を注けて、遊蕩社會の有樣には早く熟し、自分が實地の見聞と、近頃の小說で讀んだ事と相和して、胸中には一種の腐敗世界か出來るのであるが、それは往々一生涯胸中に潛んだ儘で畢れど、又折には溢れ出る機會を求めることである。

實に只神經の塊りと云ふべき此娘連は、大都會の斷間

なき刺激に慣れ、大きな事には平氣であるが、却つて小さな事を氣にかけ、それに宗教上の事には、暗黒時代の迷信を有し、世間の事は全く不信仰で、又他と交るにも冷やかで、同時に亦決して口に顯はさぬ希望と漠然たる念願とを有し、何事をも只夢想して、少しも實際を知らないと云ふ身で、さアこれから誰かと結婚すると云ふことになるが、其夫になる人を、婚禮のつい二三週間前まで、當人も更に見たこともなかつたといふ塲合が普通で、其位だから勿論好いた人と結婚すると云ふことは至つて希である。そして巴里の娘は人の妻になるのに家事經濟などゝいふ心得は皆無で、唯容儀上の天才とも云ふべきものと、我客室と化粧室に於ては無限の勢力を以て主宰するの大決心のみを有して嫁ぐのである。

此主宰權は概して早速與へられるのであつて、夫はもう當然の事として第二の地位に坐るのである、中流社會では、店の帳塲へ坐つて帳面をつけることを始め、客の取扱ひ、品物の賣買、業務の監督から、將來の企畫、他店との交渉など、汎べて妻君がやつてしまひ、夫は唯命是奉じて働らくのみであるから、妻君は夫の商買の相談對手とは云へない、實にそれ以上であつて、夫は先づ妻君の番頭で、それが機敏な番頭であつてくれたなら、妻君頗ぶる滿足と云つたやうな塩梅。佛蘭西の法律でも此邊の關係が見てあつて、妻たる者は當然夫の財產の半額の所有權があることになつて居る。猶結婚契約に依りてはそれ以上の額に對する權利をも得られるのである。畢竟立法者は妻の功勞が少くも夫と對等であるべきことを認めて居るからであらう。小供を持つ樂しみと云ふことには巴里婦人は一向冷淡で、大勢の我子に圍繞かれるのは恥辱とするところだ。巴里では夫婦間に二人以上の小供のあるは希である。小供……殊に男の子は多くは母親の方へ懐いて父親の前では變な具合に改まつてしまふ。それと云ふのは、我が爲めに金を貯蓄し万事身の將來の世話をしてくれるのは皆母親であるからである。

上流社會になると、妻君たるものゝ地位が又餘程

進つて來る。夫はもう其妻をして何處までも勝手氣儘に振舞ふことを許すのであるから、華美騒奢の大氣の中に、妻君の氣隨は思ふ儘に飛び廻つて、唯社會の風儀といふことを顧慮する外には、何一つ憚るものはないのである。實に貴族の令夫人は孰れも昔のセシラミス女王のやうで、其恐れる罪惡と云つては唯誹謗ばかり、其尊ぶ德義と云つては唯我出來心を滿足させる事ばかりである。世の中は我足の下に在ると云ふことは知つて居るけれども、或陰謀を企てる場合の外には、猥りに其大勢力を用ゐることをせない。我れの容色に迷ふ男子を心中では冷笑し、我頭を下げる人と云つては唯一人、それは人の懺悔を聽いて其罪を赦すことを司る僧である。況へて上流社會の巴里婦人は自分の老いたことを知らない。頭には白髮が交りかけても矢張若いつもりで居る、舞踏會で見苦しい老婦人連が、恥かしげもなく艶麗な服を着て、年紀に不似合な素振りをするのは、歐洲でも巴里より外には殆んど見かけられぬのである。實に巴里婦人をして其の老いに氣づかしむるは一大難事で、鏡が有の儘を映すけれども、それには又一種の藥品を用ゐて、此鏡といふ正直な證人をも瞞着するのである。こつてりと厚化粧を凝して鏡の前に進み、嫣然媚笑を呈する我が俤を見て滿足する。大きくなつた我娘が側に見て居たなら、定めて我年齡にも氣がつくであらうけれども、其娘は十歳ばかりから寄宿學校へ引移つてしまひ、卒業して歸ると直ぐに婚禮してしまふのであるから、殆んど側に居ることがない。今迄多年の間、我れの愛を惹かうと周圍に群がつた紳士連も、何時しか側を遠かつて、最早我奴隷では無くなり、只お世事に折々優しくするだけのことになつて居るのに、それでもまだ氣がつかず、此年になつてもまだ若い男の中へ出て交際したがり、只管其歡心を得やうとするが、後には其若紳士連も唯形式的に手を接吻してくれるだけのことになり、情を込めた秋波も、あらん限りの化粧も、最早更に男の心を動かすことが出來なくなるまでは、目が覺めぬのである。さて茲に至つて始めてもう到底駄目だと云ふことにやつ

と氣がつくと、仕方なしに戀愛の舞臺を退場して、これから政治上の陰謀に與つて其腕前を示すことになるのである。

尤も政治上と云つた處で、眞に國家の事を憂ふるなど、云ふ念は毛頭ない、唯娛樂にするのであつて、餘程政界の事に身を入れて居る婦人でも、眞に政治問題の要點を解して居る者は皆無である。彼等が目的とする處は、其虛榮心を滿足し、身に從來のやうな勢力を保持し、是迄は容色に迷はして、我が掌中に翻弄した紳士連をして、今度は別の手段で相變らず我れに服從せしめんとするに外ならぬのである。然らば今は如何なる手段に依つて之を仕遂ぐるかと云ふに、それは庇護である。巴里社會の組織に曉通して居る人ならば、婦人の庇護と云ふことが如何に有力であるかは直ぐに判ることで、官衙の書記を始、醫師、辯護師、建築家など皆婦人の庇護に依て成功するのであつて、教授、屬吏、外交官、大臣に至るまでも、其昇進は誰



棒竿体操

POLE EXERCISES.

新式体操姿勢十種（其十）

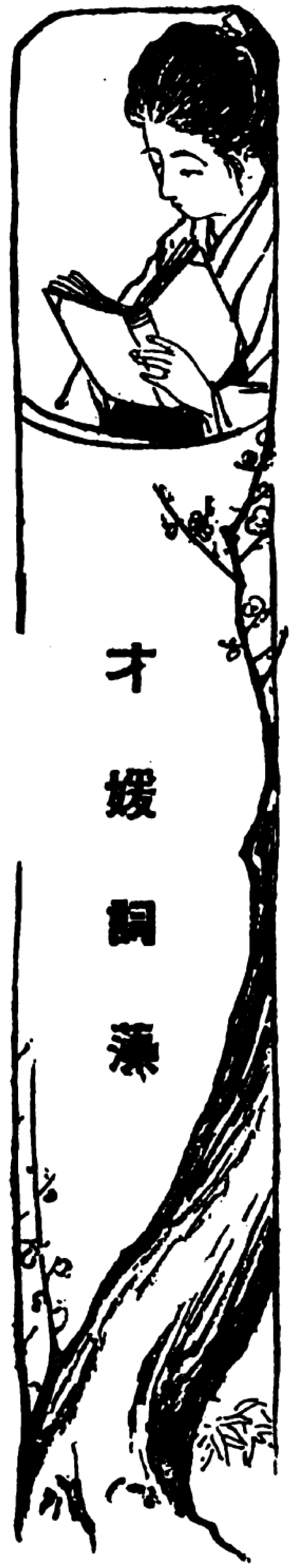
か其相識たる婦人の周旋のお庇を蒙らぬものは殆んど無いと云つても可い位である。若し自分が誰かを引立て、昇進させやうと思ふ場合には、巴里の貴婦人は遠慮も何もあつたものでは無い。朝は大臣の官邸へ押しかけ、午後は自分の友達たる縣知事の夫人へ攻め寄せ、夕方は監督牧師と食事を與にし、夜中には又何處かで或老代議士を捉まへ、石でも感動させるやうな詞で懇願するのである。ところで懇願せられる男子の方も、婦人の勢力の強いことは少年の時代から見慣れて心に沁み込んで居るから、佛蘭西人は此種の相談に逢つては頗ぶる脆いもので、相識の婦人からの頼みを、反ねつけると云ふことは至つて希れである。殊に他日又自分が其婦人の庇護を受ける場合が來た時好都合であるから、喜んでこれに應じて頷くのである。

二

巴里中流社會の婦人は不屈不撓の精勵を示し、實に國民事業の大半を仕遂げつゝある傍で、上流社會の婦人は道義の腐敗を醸し、社會敗頽の種を蒔きつゝあると云て宜しい。而も其原因は兩者とも等しく婦人の勢力の大きいといふ事實より生ずることでありながら、斯くの如く全く反對の結果を來しつゝあるは寧ろ奇といふべきである。畢竟前者の方に於て、商工業上に右の如き好結果を及ぼしつゝある婦人の活氣精力其物が、後者の方に在りては、何か飛び離れた新流行の發明に凝ることに費されるのである。又此妻の勢力が夫よりも非常に強いといふ事が、前者の方にありては、唯一家の些々たる範圍内の事柄……殊に其利害は概して夫婦の双方に關する事柄に結果を及ぼすばかりであるけれども、後者の方にありては、國民全体の利害に關する事柄に不幸なる結果を及ぼすのである。

婦人の勢力の爲めに、僧侶の權勢を保全し、又諸種の改良をして困難ならしめつゝありとの點は度外に付するも、苟も立身を希はゞ、是非婦人の庇護を仰がねばならぬといふ事實は、自然男子をして一般に婦人に媚ぶるの傾向を帶びしむるに至つた譯である。佛蘭西にても近來識者の間には婦人に對する批難の聲が聞え、巴里婦人をして再び其本分に還らしめんと努めつつある者がある。

噫、或國に於ては、婦人を救護するといふことが、社會改良者の一理想であるのに、此佛蘭西といふ國では、男子を救護することが、識者の焦心苦慮する一問題となつて居るとは、奇なる現象ではあるまいか。(了)



才媛詞藻

大和魂

伊勢　河原芳子

一　召集令狀

昨夜、華燭の典を擧げて、四海波靜かに收まつた、高山家の新夫婦が、思ひ思はれた、胸と胸とに、美しい光明と、潔白な希望とを融和しつゝ、互に不言不語の媚羞めでたう、おもはゆげに向ふた朝の食卓の、何となく嬉々しいのが不思議な程で、莞爾笑つて盃を手にした文雄、伏目勝に酌する花嫁喜代子の、上氣した顔抑へかねた胸、弱手にひゃく頷きを流眄に見て、未だ嘗て觸れたことのない崇高な感應に醉ふたのであつた。

此刹那!。一家は忽ち動搖して、けたゝましう驅け來つた母の、眞蒼になつた顔色只ならず、

こ、これがッ……。と文雄の前へ差出されたは、讀ますと知れた、召集令狀!!。

愈々戰爭だッ!!と叫んだ、文雄。

えゝッ……。と駭いた、喜代子。かねて覺悟の上ながら、三人は今更のやうに眉を顰めたのである。

二　かくす涙

令狀を手にして、幾度となう繰返した文雄は、さすが軍人の子だけ有り、又堂々たる日本軍人だけ有つて、

嚴然と心を靜めた態度は、畏くも大元帥陛下が股肱の臣と頼まれた、騎兵少尉の天晴な男兒振、凛凛とした眉字の間には、美しい決心の色がありくと浮んで、些が氣後れはしないのであつた。

おッ母さん、御心配の程は万々御察し申しますが、男兒の面目、家の名譽です、日淸役に亡くなられた、父上の偉勳、國家の爲には代々忠勤を欠かさない高山家の系統に生れた不肖、遺恨重なる碧眼奴を鏖殺にして、大日本帝國の稜威を宣揚するのが本懷ですから、私は、喜んで征途に上ります、喜んで軍馬に跨ります。かねて覺悟の今日、おッ母さんも御氣丈に居らッしやる可き筈、又喜代子も承知の上だから、衆人に指をさゝれる樣な、其樣な卑怯な所置に出ではならない、何處迄も武士氣質で、活潑に行つて貰ひ度ものである。家の事は万端、舍弟に委托すれば滿足だから、何も心を痛める事は無からうと思ふ。

と斷乎宣言した文雄は、更に言葉を次で、

實に愉快です、千秋の大快事です、身は文學士の、教育に從事して居ても、籍を軍人に置て居る丈に、愉快な戰場に逞しい馬を驅け入れて、先祖傳來の寶刀を醜虜の頭に加へるの、又と得難い快事に會ひました。地下に居らッしやる父上も、嘸、嬉しう思はれるでせう。おッ母さん、私はこれからお墓へ詣つて、父上に此事を申上げて來ますから、どうか、喜代子に夫々への通知狀を認めさして、報告の勞を執つて下るやう御願しますよ、第一、舍弟を電報で呼寄せて下さいよ、中學宛でねえ、おッ母さん……。

と盃を啣んでの、立派な決心。語は簡單だが、意味はなかく深長であツた。

母はさすが女心の、胸は麻の樣に亂れ立つたのであるが、我が子の健氣さに奬勵されて、取直した氣は有耶無耶の境。

其處迄、お前が決心して、呉れるなら、私も安心が出來るといふもの、親甲斐もなう氣を取亂したは、亡き夫へも恥かしい次第だよ。嬉しい其英魂、立派に出發して下さい、家の名譽です、喜代子には氣の毒

なが、後の事は案じなくとも可いから、潔う戰場に花を咲かして下さい。其他に何も言ふ事は有りません、お墓へ詣つたら、舅父上はお喜びなさるだらう、喜代子も此度の報告旁々、同伴するが可からうと思ひますよ。

と言ひ放つたもの丶、亡き夫のそれと同じ樣に、名譽の最後を毒丸の下に遂げることか、と思ひやると、もう取直した氣が元の樣に亂れて了つて、涙は瞼を溢れやうとする。

涙は不吉、名譽の門出、亡父の志を繼承で、潔々しう出陣する我が子に、後れを取らしてすむものか、昔は自殺して迄、子の決心を固めさした親さへあるに、何で未練な振舞が……、國家に對して不忠實なそんな後めたい事の露ばかりも有つてはならないのだ、と思ひ返して。

喜代子、潔うして下さい――と座を起つた母。

はい……。とふり仰いだ喜代子。三度盃を取上げた文雄の胸は、實に、千萬無量の血の涙!!。

三　覺悟の上

か丶る場合に結婚したは、喜代子も文雄も覺悟の上。日露衝突が時々切迫しつ丶あるのを知つて、私かに非常召集に應ずるの準備を整へ、いざと云はゞ其場からでも、直ぐ發足の出來得る樣、總ての必要品を大小行李に詰込んでの決心、宣戰の詔勅が今にも煥發されやうとする一髮の間に、愛情の覊絆たる可き妻を迎へたのは、少しく其意を了解するに苦しむ次第であるが、實は餘儀ない情實と、すばらしい注文とがあつて、遂に此事を行ふに決したのである。

其餘儀ない情實、すばらしい注文、お丶此二ヶ條の註解は實に、槪略左の如きもので。

四　餘儀ない情實

文雄の祖先は濱松の鄕士で、最も富有な、勢力のある家柄であつたが、旗本八萬騎中に其人ありと知られた塚本某とは至極懇切な間柄の、斷るに斷られぬ義理立

てを、互に固く取交はして居る内に、或旗本の株を世話されたので、高山は、塚本と肩を並べて江戸城に出入する程の格式と成つた、夫れからは一層意氣が通じて、兄弟同様に交つて居た、互に義理固い家風であるから、其人々の子、孫と代々、同じ交りを繼續して來たが、維新の際、曾孫に當る兩家の人々、即ち、文雄の父と、喜代子の父とは、血を啜つて共に上野に苦戰した勇士。文雄の父は世が治まつてから官に召されて、陸軍少尉となり、臺灣、西南の兩役を經歷して、大尉に進むだが、二豎の犯す所となつて、暫く、休職、後復職して少佐に進み、中佐に進んで豫備役に編入せられたが、日清戰役の起るや、忽ち召集されて清韓の地に指揮刀を揮つたのであつたが、無慘、牛莊の激戰に流丸の爲名譽の戰死を遂げられた。

喜代子の父は、其後實業に就て閑散な生活に甘んじて居たが、時には髀肉の嘆聲を洩らして、昔語りに熱涙を迸ばしらすのであつた、で意氣相投じた兩人の父は文雄、喜代子の兩人を夫婦にしたいとの相談一決、善は急げと其場で直ぐ、正式に許嫁の手續を履行して、八千代の盟ひを幼ない兩人に取交はさしめた、が文雄の父の戰死すると間も無く、喜代子の父も病歿して了つた、夫れは丁度、文雄が第一高等學校に、喜代子が高等女學校に勉學して居る時で有つた。

余儀ない情實とは、これなので。

五　すばらしい注文

兩家の交情がかく濃厚に繼續されて、可愛い子と子とに夫婦の契りを結ばしたのであつたが、兩人の父は其前途をも見ないで白玉樓中の客となつて了つた。

喜代子の方は母親と兄が二人、文雄の方は母親と弟が一人あるばかりであるから、可成的早く喜代子を迎へて樂しい家庭を作る可きで有つたが、今を大事の修業盛り、前途に多大な希望を有つて居る身の、頓挫を生ずるやうの事があつては、と双方の熟談穩かに。文雄は親の奬めに從つて大學に入り、文學科を卒業して、後、一年志願兵の任務に服して、豫備騎兵少尉を拜命

した、夫れは一昨年の事で、近來は縣立中學校の長となつて敎育家中錚々の名聞を博して居る。

其間、高等女學校を卒業した喜代子は、更に女子大學に入つて才媛の聞え高う、傍ら看護婦の實務を研究しつゝあつたが、昨年大學を卒業して、芽出度故郷へ歸つて來たから、直ぐにも文雄と結婚式を擧げさせうと塚本一家は矢の催促を試みた、けれども其頃は恰も日露交涉が開始されて、天下の形勢穩やかならざるの秋であつたから、文雄は明らかに情實を盡くして、戰爭後迄延引して與れ、と申入れたが、其情實を服膺した喜代子の、いつかな合點せず。

夫れは覺悟の上ですから、是非お許しに預り度、若し、日露開戰の曉には、文雄樣の出發を祝ふて同時に、篤志看護婦を志願して、同じ戰地に赤誠を捧げ度です、夫と生死を共にし度のであります。

とすばらしい注文。

夫程迄に決心して居るものを、強ちに斥けるも不本意であると云ふので、文雄は喜んで、其請を許したのであつた。女丈夫と軍人、佳人と文士、此二つの美しい姿は、かゝる因緣と、覺悟とがあつて、高山家の歷史に一大光彩を加へたのである、崇高い精神を發揮したのである、日本男兒の本領として、日本婦人の特色として、偉大なる龜鑑を殘さうとするのである。

非凡の覺悟が無くて、何で召集間際に華燭の典が擧げられうか。

兩人は、實に旭に匂ふ山櫻である。

六　わかれの歌

かくて文雄は喜代子を携へて父の墓に詣で、つまびらかに兩人の胸中を披瀝した時には、一掬の紅涙、四つの瞼から溢れて、地下の英魂を咽ばしめた。

家に歸ると、親戚故舊、さては遠近の誰彼が、潮のやうに寄せかけて、泣くものもあれば、元氣づけるものもある、物をも言ひ得ずに歸つて行くものもあつて、其騷動は一通りでなかつたが、文雄は悠然と構へて、應對は應對、挨拶は挨拶と、何一つ遺漏無いやうに、

いそ〳〵立ち働らいて居る、母や喜代子をおだやかに指揮しては出入の人々に別れの祝盃を、例の活潑な口調もて、千秋の快事に遭遇するの光榮を述べて、滿座の客に多大なる歡喜心を喚起せしめたのである。

　　やまとをのこよ家な思ひそ
　大君のまけのまに〳〵ふるひたつ

と母は肌付に、

　女子のよしや力は弱くとも
　　やまと心にかはりあらめや
　やがて行く十字の旗の下影に
　　あはゝあひてんあはれ脊の君

と喜代子は紙衣に、水莖の跡美はしう、熱情もゆる胸の中を、三十一文字に言ひ盡した、雄々しさ、凜々しさ。

文雄は再三吟誦して丁寧に押戴いたが、莞爾笑つて。

　荒鷲の翼を破り胸を裂きて
　　踏みにじりてむ醜草の上に
赤心をたつる十字の旗風に
　名譽の傷を吹かせてしかな

と意氣昂然、騎兵少尉の軍服を着飾つて、さらばと立上つた最後の訣別。

弟、お前にはおッ母さんを頼むだぞ、俺の分も孝行して呉れよ其報酬には快戰の模樣を委しう報知するから帝國萬歲を大叫して呉れ、可いか頼むだぞ。

鼎より重い兄の言葉に、弟の武雄は唯々として、見戍つたばかり。

數千の人々に送られて、汽車に乘つた文雄の、潔よい門出には、感涙を催さぬものは無かつた。

幾干もなく、喜代子は篤志看護婦となつて、戰地に赴いた、健氣な心。

あゝ、この夫ありて、この妻あり、この親ありて、この子あり、高山家の義勇奉公は實に聖代の花として、社會の耳目を聳動さしたのである。　（完）

（評）結構嶄新といふべからざるもよく事變に處して綽々餘裕ある日本男子の面目を活現せしめたるは才筆といふべし、佳人才子出陣の光景見るものをして紅涙滂々たらしむ。二十三階堂

看護婦

山形高等女學校　池田光子

兼て御話し申上候如く小生赴任の儀愈々確定いたし申候、明後日上野一番發にて出立仕る考へに御座候、任地は奥羽の山形に候へば山川風月彼等は又余が心を慰むる事と其れをばせめての樂しみに暫時世を忍ぶ雲水の身と相成可申候、却説日露の平和破れたる今日貴孃には何程か御憤慨在らせられ候事と存居候、貴孃が妙齡の御身を以て硝煙彈雨の中に行かるゝ其至誠丈夫も一歩を讓らざるべからず、此壯擧に際して御勵し申度は山々に候得共何となく御別れ申事の悲しく涙脆き小生が心中御推察給り度候、情緒亂れて盡く能はず願くば御推量あらん事を祈り居候早々

花村

駿子様

國亂れては良將を思ひ、家貧ふしては良妻を想ふとか、過ぎつる日清戰爭に雷名を轟かしたる山科將軍とや、云ふのがあつた、星移り物變り早や十年の昔しとはなつた、茲に未亡人爲子は將軍が形見の令孃駿子を相手に浮世をしのぶ哀れさ、世間の榮華、彌生の花、此身に取つては何かあらん、唯一向に此一枝とはごくみ育てし甲斐ありて其顔ばせの美しき、其眞心の健氣なる身は犧牲の看護婦となつて淸楚の出で立ち、想ふ昔し父は異鄕に屍を曝らし、夫は黄海の藻くづとなつて、何の世にか此恨みをば晴らさんものと、終生の希望を抱きつゝ職務の傍ら語學を學んで過ごす內、念力岩をも通してか日露問題の此時機に會したは此女に取つての好機、幾春、幾秋となく磨き上げた彈丸を錦の胸に秘め置いて、イザ一ト打ちの心懸け、實にや是大和の櫻花、朝日に匂ふ時なるべし、

空はどんよりとした夕まぐれ、母と娘の差向ひ、前きなる手紙に對して何やら云つて居る、

「コレ、駿子や、疾から云うと思つて居つても、遂云ひ

得なかつたが、今日と云ふ、今日、是非云はねばならぬ塲合、何卒や聞き入れて呉れまいか」と娘の顏を覗いては見たものゝ流石の母も云ひよどんだ、「外でもないが此お手紙を下さつた花村先生……實はノウお前を貰ひ度いと幾度となく手を替へ品を替へての御所望、此母もつく〴〵思案に餘つて、あの松原のお叔父樣へ相談をかけた處、叔父樣も篤と花村樣のお身元迄調べて下さつて仰やるには品行と云ひ何と云ひ申分のないあの樣な立派なお方に貰はるゝと云ふは何たる幸福者ぞ、殊に文學士と云ふ肩書もあり何から何迄揃ふた此樣な良緣は又とあるまい、早く取り極めるがよいと昨夜態々叔父樣が來て下さつたのだ……ほんにお前さへ承知してくれゝば此母がどれ程嬉しからう、お前だとて生涯獨身でも居られまい、だが今、今と云ふ事にも行くまいから一通り極てさへ置けば宜いと思ふのだ」と云はせも果てず駿子は其れをさへぎつて、「阿母さんや叔父さんがさう仰しやるのも皆私を案思て下さる事で決して逆らひ申事はないけれど、今と云ふ今、取り極めて置くなど〻云ふ事は斷じて出來ませぬ、ツヤヤ先生は恩人でありまする、私が一通りの語學が出來る樣になつたのも皆先生のお蔭と思ふて居りまする、其れは師弟間の御恩と思ふて永く忘れはいたしませぬ、何の世にか報ふべき時もありましよう其は又別物として私をお望み下さると仰しやるからは一つ申上ねばならぬ理由がありまする、」

と中半云ひかけて、頭を垂れ、兩手をついて、母に詫ぶる心根の可憐さ、實にや櫻花の雨に惱みし其風情、「あの、阿母樣、其れと申は外でもない、……亡くなられた兄さんの事で……假りに兄さんと申て居つたけれど其實は私が未來の夫となる人だと母樣の膝に抱かれて居る時分より、振り分け髮の頃迄も始終敎へられて居つた事は忘れられませぬ、ほんに中睦じうあれ程私を可愛がつて何時も兄さんの書齋へ行くとあの鋭いお目で私を見て「駿ちやんお前は將來あつぱれ軍人の娘よ妻よと云はるゝ樣に身を立てゝお呉れと仰しやつた事、…………」其迄云つたが後は言葉とては出ない、

さながら當年の有樣を思ひ出したであらう、今を去る十年前、彼の日清の戰役に我夫は松島に乘り込まれてあつた、愈々出立と云ふ前夜清い、淨い、月の下で互に誓つた彼の言葉、胸にヒシと抱きしめて死ぬ迄忘れはせぬものを、

或時は夢に見たり、まぼろしとなり顯はれて淋しき夜半の音信や、空しき閨の物語り、其程愛し合ふ中を今むざ／＼と引裂いて他の人に行かれようかと其れやこれやを思ひ出し燈火を見詰めてぽんやりと、

駿子はやがて口を開き「阿母さん今となつて見ると尚更思ひ出されるじやありませんか、ほんに昨夜の夢にもお父樣が戰場からお便りを下さつて敵をみなごろしにしたなど丶云ふ愉快なお手紙が來たり、さうするかと思ふと兄さんからは露國の軍艦を打ち沈めて、靑眼玉を引き拔いたなど丶云ふ例の勇しいお手紙が來て、アラ嬉しかつたと思ふて、ふと目を覺まして見ると其れは號外、……此嬉しさを思ふに付けても……」と云ひさして又もや忍び泣き。實にや亡父の靈魂遼東の野にさまよふてあり、又亡夫の遺恨は彼の海の結氷となつて溶ける間とてはなきものを今や彼の女が至誠を穢して花村學士の戀に從はれようか、アヽ駿子が心は石にあらず轉すべからず、席にあらず卷くべからず、始終を聞き居る母人は又貰ひ泣き、六疊の室は深い／＼淚の谷と變じて仕舞た、

森とした夕、通行の書生連美音を放つて、

墨田之花可レ醉。蓮湖之月可レ吟。………

櫻花爛熳月沈々。………

やをら駿子は起き上り、

「アヽあの詩は兄さんが得意の詩であつた」と、

宛然亡き夫を慕ふかのように立て窓を明けた、空を睨んで物思ひ、暗い、暗い、暗い闇の夜に輝く星は二ッ三ッ、月やあらぬ、春や昔しの春ならぬ、此身一ッは元の身で幾春秋をさすらふも戀に焦れた魂魄は億萬里外の異鄕の空、果敢なく風に散る花も春來れば又咲きぬべし、急いで歸る雁も秋去らば又歸り來ん、歸らぬ國に行きまし丶我が亡き夫の慕はしや、

幾度か無言の祈りを捧げて居つたらしい、斯くして母は啜拂ひの後、「お前は何と云ふ清い心だらう、一點の曇りもない月の樣な其心。御身が報國の爲め遠い彼方へ行つたなら父上や兄上は滿洲の野に双の手を開いて御身を抱きしむるであらう」と勵ましては見たもの丶是程迄に身を犧牲にしやうとは思はなかつた、是程迄に亡夫を慕ひ居るとは思はなかつた、あはれ十有餘年が今日迄も一ト筋さへも亂さゞる此黑髮の愛らしさ、夫婦と云ふは名のみにて一ト夜の契りも結ばずに果敢ない緣にしの此娘の身の上、思ふに付けても淚がこぼれ、心は千々に結ぼれて言葉とては出ないのである、

いつしか空もかき曇り、降りみだれたる春雨は軒のしのぶに傳ひ來て唯哀れ氣に滴々と。折柄郵便と威勢よき一聲、是や、夢ならぬ便り。開き見れば、花村學士より送られたる寫眞一葉、大判にフロック、コートの全身。悠然とした其の姿、廣々とした額際、秀た眉に鋭い目付き、鼻下にはカイゼルの美髯切れ長く、見惚れる樣な好男子である。

（評）趣好には相應の苦心ありしと見ゆ、されど叙事を等閑にして一意叙情に走りたるは此作をして成功せしめざりし原因の一つなるべし、されど他に比敵すべきもののなきを以てこれを大等とす　（選者）

樫の花

東京　菱花女史

妾は其時十二でありまして恰度其今夜のやうに樫の花が咲いて居りました。

悄然として女は語り出した。

甲府の基督女學校に寄宿致しましてから二年目で、妾よりは六才上のお百合さんといふ方が最上級の生徒で生徒の取締をも兼ねて居りました、妾は一体變屈な性質で御友達は一向に無かつたもので御座いました故かそのお百合さんは妾を甚く不便がつて、冬の朝や夏の夕べや妾が遊歩場つゞきの樫の森に獨で散歩して居りまするとお屹度おいでになつては『人といふものは正直にさへすれば神樣が守つて下さる』『自分の義務を怠ら

ないやうにすれば屹度幸福が來ます」と妾を妹のやうに可愛がつて下すつた其のお百合さんは今は亡い人、思ひ出すと今でも胸が張裂けさうで堪りませぬ、

九月二日の晩でありました、平生の通り樫の木林の中を散歩しまして、それから裏に廻つて寄宿舍の臺所の前まで來ると出會頭に、水桶を持つて水汲に出て來た婆さんに「お百合さんの御病氣は」と聞きますと「どうも好く有りませんですよ」と額に皺よせてそれなり水汲みにすた〳〵行つて仕舞ひました。

すると十間計も距つた處でつるべの音が暮れてゆく空に冴えて身にしむやうに淋しく聞えますと既う何時か日がとつぷりとくれて寄宿舍の二階の障子の破れ目から洋燈の光りがパッと洩れて櫨の花が一杯に咲いて居るのや杉の木や青桐や蜘蛛の巢だらけの松の木がその光をうけて薄絹を引いたやうな夜の色を、ぼんやりと夢のやうに綾取つて居りました、妾はなほも其處此處と種々の事を考へながら歩いたので御座います、此一月ほど以來お百合さんに逢つた事が無く肺病で二階の一號の部屋で寢た切りで大變瘦せて顏の色も眞靑になつたとは聞いて居りましたが忽ち「人は何時死ぬか分らない」と口癖の樣にお百合さんが云つて居たのを思ひ出して急にゾッとするほど淋しく悲哀の念に打たれて、何だか懷しい樣な戀しいやうな、世中が果敢ないやうな事そ一緒に死んで仕舞ひ度樣な氣持がして、急にお百合さんに逢つて彼の靑白い顏に自分の顏をすりつけても見度く、やがて急ぎ足に自修室に歸つたので御座います。

今と違つて十五年も昔しの事で、加之も甲府外れで御座いましたから、耶蘇の學校〳〵と一口に蛇の樣に嫌つて、彼の學校では生徒の生膽を拔くの、外國に伴れて行つて淫弄物にするのつて大層土地の人から厭がられて居りましたから、百人餘りも容れる事の出來る寄宿舍が唯だ十人餘りしか無く通學生を混せて二十人不足で、あれが耶蘇の學校でなければとても立行きませんのでした、勿論那麼評判でしたから貧乏人の女子でなければ孤兒か、拾子なども大分拾つて養られてたの

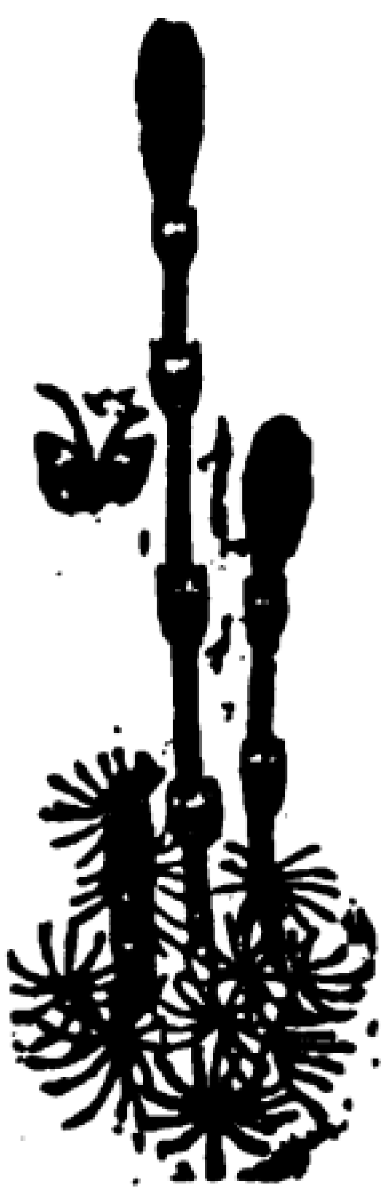
が御座いましたさうです、これはお話が横にそれましたがそれから妾は自修室に這入つて勉强を致さうと思ひましたが、そのお百合さんの事が氣にかゝつて薩張勉强が出來ません、寧そ寢て仕舞うと思つて二階の十七號の妾の寢部屋に行つて寢間着を着かえてねましたが奈何してもお百合さんに逢ひ度くつて／＼眠られません、その中に十時が鳴ると妾の側には同級の生徒が寢に來まして、十一時十二時、一時がなつてもまだ寢られません、そつと起返へつて見ると皆んなよくねこんで陰の方に洋燈が淡く點いて、、一人二人三人と皆なの寢顔がうすぐらがりに數えられる位、妾は心は眠いけれど目が冴えて腦が頻りに鐘でもついてるやうに神經は大層鋭敏くなつて來まして既う堪えられ無く、そッと立上がつて寢卷のひもを引しめ、ねむつてる皆なを氣遣いながら拔足して十六もある寢室の前を忍足にお百合さんの部屋まで參つたんで御在ます、すると腐つた空氣を出す爲めか扉戸が半分開いて居りましたから、覗いて見るとお百合さんの寢臺の側に帷帳が吊つて有てたゞ蒲團の裾の方が見える計り、帷帳の此方側には附添の看護婦が寢て居りました肺病だから誰れも側に行つては成ら無いつて嚴しい校長の命令で誰も側に行く事が出來ないのですから、妾は看護婦の眼のさめない樣にそうッとお百合さんの寢臺の側に行つて帷帳を揭げて覗かうとする時、もしやもしや死んで居ては、死骸では無かと俄かに冷水をあびせられたやうに固くなりましたがやつとの事帷帳を揭げて見ると、蒼白い頰肉も落ちて額うすくあらけた顏色、けれどすやすやと安らかに眠つて居りました、「お百合さんお眠んで居らつしやるの」と少さな聲で呼びましたら眼をさまして「お信さん貴女では無いの？」と透き徹る樣な細い聲で「最う二時頃でしよ何しに茲に」と不思儀さうに妾の顏をまんぢり眺めました、「貴女に逢い度くつて……貴女が大層病いと聞いたんで妾奈何しても眠られないの」左樣云ふとお百合さんは瘦細つた冷い手で妾の腕を握つて笑いながら「丁度好い處へ來て下すつた既う貴女にはお別れですよ」ときゆうつと妾の

手首を握締めました『おや何處へ被行しやるの』『えゝ遠い處―最う歸れない處』『いやあお百合さん』と跡を云はうとしても喉が塞がつて、悲しさが一時にこみあげまして妾は涙があふれて堪えられずに俯向きましたお百合さんも何か云はうとしたら力の無い咳が幾つも幾つもつゞけて出て血の綿でも引くやうに苦しさうに又一陣咳込みました、もしや看護婦が起きは爲まいかと氣遣つて振向いて見ましたが、好い鹽梅によく眠つて居りました、暫して『お信さん、立つてゐちや寒いでしよ、妾と一緒にお寢なさいな』と云はれましたから妾は嬉しくつて云ひなり次第に掛け蒲團をひつぱつて一緒に掛けてねました、又暫時するとお百合さんが徐かに『お信さん妾は眞個に幸福ですよお信さん、決して嘆いてなんか下さいますな嘆く事は些とも無いのですからね、誰れでも人つていふ者は一度は死なゝければ成らないが、妾の病氣は痛くも苦しくも何とも無く靜かに次第々々に死ぬので妾の心は死ぬるまで穩かなのです、妾にはお父樣もお母樣も無いから死んでも嘆く樣な人は一人もなし、又妾が生きて居たとて一生出世するのでは無し死ねばね天國に行かれます、惡い事を仕なければ乾度天國に行かれますよ』お百合さんは其物云ひの大變に落ちついて居ます事、妾は幼心に天國といふのが非常に奇麗な所の樣に思はれて『お百合さん、妾も好い事をすれば天國に行かれますか、而して貴女にまた逢はれるの』と聞きますと『えゝ誰れでも惡い事仕ない人は皆んな行かれます、天國に行くとね、お父樣やお母樣よりも尙と可愛がつて下さる神樣が居らつしやるのよ』『左樣妾も行き度いのねえ』何處に天國が在るかしら、天國とは何處かしらと思ながら其中に妾は眠くつて堪らなくなりましたから、腕を確かりお百合さんの頸に卷附けて、それは天國に迯げて行か無いやうに、妾は赤兒がお乳でも呑むやうに顏を胸に當てゝ眠りかゝるとお百合さんは機嫌よく『左樣ならお休みなさい』ともう其聲は妾の夢の中で御座いました。

その翌日起きて見ますと旭日が眞紅に差込んで居まし

て妾は獨りで自分の寢所に寢て居りました後で譯を聞きましたら曉方近く看護婦が眼が醒めて見ると妾はお百合さんの頸に確手抱き附いて、お百合さんの腕を枕にしてよく眠つて居りました、お百合さんは……と語る女の、顏は白んで其の聲は最早震えて、いふべく難し、我は悲愴の感に打れて聞くに堪えず、朦朧たる月光の中に一際黒ずんだ樫林の、今其の花は此方を向いて眞盛りである、恰も此の物語を謹聽してゐるかのやうに（をはり）

（評）造作なく書き流したる様なれど、筆に興味ありて間々深刻骨を刺すの概あり、薄倖なる女の境遇を寫し出して同情溢るゝがごとし、これを別選とす



庖廚座右銘

一、庖廚は一家生命の源、理科の智識は庖廚學の生命なり。
一、厨房より漏るゝ笑聲は客を門に誘ふ、苦き顏を以て調構せる料理は甘からず。
一、料理は一に養ひ、二に風味。
一、宜きに適へる滋養成分の配合、變化に富める獻立
一、材料は其時々の物其他の物を用ふべし、材料の眞價は廉代價に平行せず。
一、疑ある材料は用ひず、銅眞鍮の器具は用ひず。
一、殘物及廢物の活用は大事なり。
一、藥味香料は使ひ惜むべし、小兒には一切禁物の事。
一、健全なる胃腸に對しては餘り多く消化不消化を言ふ勿れ。
一、厨房を蠅や黴菌の殖民地とせず、清潔は健康學の第一義、健康は家庭圓滿の要素。
一、茶釜に鐵瓶、錆びたる庖丁、此類の家蠹の如しと雖鼎の輕重を問はるべし。
一、料理法、料理の材料、設備器具の改良工夫に關する失敗は永久の損失にあらず。
一、不潔不規律なる下婢を傭はず、下婢の教育を厭はず。
一、入るをはかりて出るを制すれば憂なし（河西天放）。

寫生文

我校の運動會

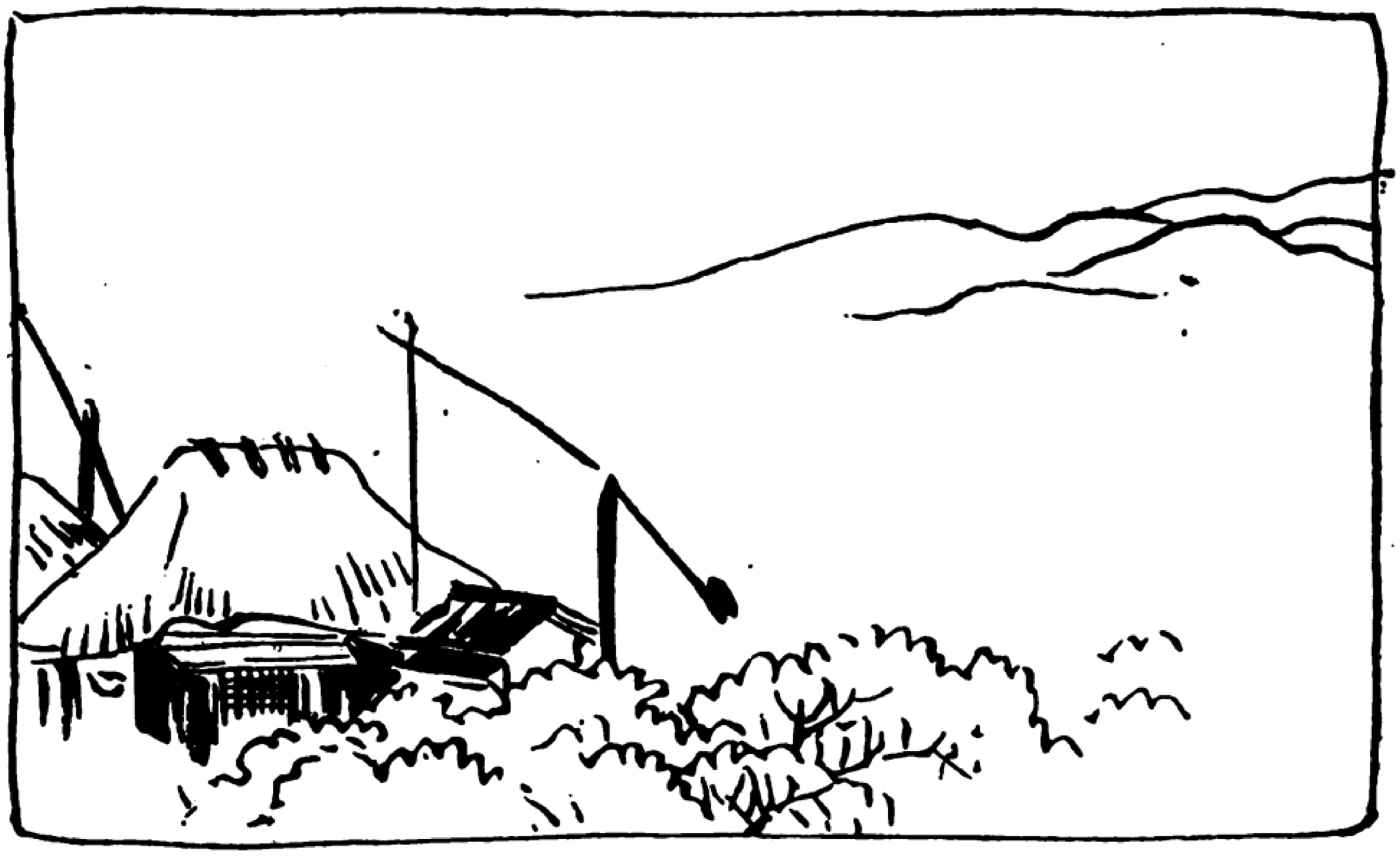
高知　小西雅子

二月十一日、けふの佳節なれば心のかぎり祝ひまつるべくこゝに我校は盛大なる運動會をこそ開きたれ。全校生徒一同、清らかなる遊歩場にあつまりぬ。青々と心ゆくばかり晴れ渡りし大空に輝く日かげも尊き心地せられ小鳥のこゑもちよ〳〵とけふをことほぐらむやうにきこゆなる。はつ春風のかよひきてもゐなむとする梛の枝ゆるくそよぎいづことも知らず梅が香のほのかにさまよひ来るもいと心地よし。

一同は整列し師の君達も皆見ゐ給ひしかば會は直にひらかれぬ。清らかなるあめつちに冴ゐ渡るピアノにつれて生徒一同をもて日の旗を形づくり、かくて紀元節の歌うたひてけふを祝ひまつれり。これより一同が嬉しくうれしき今日の心をうたひし「けふこの時」の唱歌あり。次に一年生の遊戯、ポーランドファンセー終れば補習科生及び四年生の唱歌「夢」あり。うたふものもきく者も夢心地になりゆくぞこの歌のすぐれたる處なるべき。三年生、二年生の遊戯カドリール、海老茶袴目もあやにひらめきていみじう花やかなりし。次に「みいづの光」補習科生唱歌なり。あはれ今やみいつの光は天つ日と共にかゞやき渡れり。草葉の露のいかで消ゐざらめや。四年生の「瑞典式體操」こは縣下にてはわれ等をもてはじめとす、あらんかぎりの力出したりしが人はいか樣にや感ぜし。次には一年生の唱歌、日本軍艦及び觀兵式あり。あゝ日本軍艦、日本軍艦、云ふべからざる感にうたれて心は遠く黄海のあたりへ……。次は補習生の「幼兒の遊び」にて、風車、鳩ポッポ、われ等の毬などありき。いづれも愛らしかりしがそれにもまして愛らしかりしは觀客のうちなる七つばかりの少女、おさげに紅のリボンしたるが小き手うちてあどけなうほゝ笑みしなりき。こを終りし頃は恰も正午なりしかばしばしやすみてひろげなどものしつ。やゝありて時を報ずる音と共に各はじめの席につきぬ、これより競爭數種あり。いづれもめでたくぞ見ゐし。次に二年生の唱歌「雲」を終りし時しも、「日本艦隊の爲にやぶられて露の東洋艦隊は全滅せり」の文字あざやかにかゝげられしかば一度に呼ぶ萬歳のこゑは天にひゞき地にどよみ、時ならぬ雷の感ありき、次には補習及四年の遊戯フンサー、この時のピアノの音の妙なる、思はず氣もうきたつばかりなり。殊に奏したまふ師の君のけだかきみ姿、何となう尊き女神の御像のやう仰がれぬ。二年生、一年生の方形行進、三年生の唱歌、お寺の鐘の音、鼠、終れば補習科生の體操、アンヴイルコーラス、なり、其手は石にあらずや、其足は金にあらずやとぞ疑はしめし。四年生の日本海軍勇ましう歌へば、三年生の徒手體操見事に、次には種々の行進、一年生のクロスポルカ、二年生の跳躍、補習科のスケーチング、三年生のメングライゲン二、四年生の擔重あ何れも興しう終れば又競爭數種ありき、最滑

重なりしは補習科の女子の責任、アルメイ山と女子の責任とを肩にかけて走りゆくなりけり。中には女子の責任よりもアルメイ山の重きがやゝ見ゆるなどありてなか／＼に興多き競爭にぞありける。最愉快なりしは四年生の朝の露、と三年生の露の命、いづれも同じく朝日に消ゆむ露の命のはかなきをしめせるものにて終りに、日のみ旗かゞやかしつゝ凱旋の歌高らかにうたひしこそ誠に快よき極なりけれ。次に全校生徒一同の唱歌「名は萬代」を終ると共にけふの會も果てぬ。かぎりなき愉快のあふるゝ胸いだきて各かへりぢにつきしは日も傾きそめし頃なりき。

あはれ樂しかりしけふの日や、快かりしけふのまとゐやと思ふにつけてもしのびいでらるゝはとつ國なる師の君がおん上、あはれ異境の空にこよひの御夢やいかならむ。



はるがすみ

歸省日記

松本高等女學校　高木百代

○

若菜つむ、うらゝけき小春日和を、古里へ歸らなんと、新しき光、地に、のぞまんとする朝まだき、懐なる友の門をいでぬ。

○

くだかけ、の聲聞へて小雀とんで万象は、やゝに夢よりさめ來る。

あゝ、自然の色彩の如何に美しき事よ。塵塗たる人世の畫たくみが如何に、一枝の彩管に精をこめて揮はんも、如何で、如何でこの自然の一刷毛に及ぶべしや。

○

日いづる程に、人の世の塵はまたも、舞ひ立ち初めぬ。

臈たき乙女の、寐亂れ髮、に、まだ春の夢が香。殘りてん、まなこ、仲々に興深かり。

○

行く程に、道は陽炎もへ、新樹の香、かぐわしく春の光、のどかに、柔かき若草を蹴すほとりに出でぬ。

こは、恰も彼詩人プラトーンがその著シンポウサムの内に記せし、愛の神の住み給ふ

知き處にてありき。

○

ゆき行くに。右手に櫟、松、杉などの並木續けり、彼黒く冷き、冬の御神が人の世にのぞみ給ひし時、訴訟の音を遠く傳へて、行客をして旅情、側微の感に堪へざらしめしもの。

○

そこはかとなき感興にふけりつゝ歩むに、いつしか我村の名物と歌はれし神代杉の傍にありき。顧りみれば百八拾町霞たてこめて。又も都の戀しきは、なべての人の情なりかし。

○

おゝなつかしき故郷、小學校、鎭守の森、友の家、松茸山、……
我幼馴染の風物は怡然たる温容を以て我を迎へぬ。
五平と云ふ親爺。不相變、がんじやうに肥桶、擔ひつゝ通りすがりしが。
我を見て痛く驚きし様なる面地にて、その粗なる齒齦を見せつゝ。
「エラ、ヘー。大キタナラッシャッタ」嗚呼、其少しもかざらざる言の葉。ひげ生ひし男の子さへも。うれしと云ひしものを。ましてや、まだ
赤き切ほしき、われ。涙の出づる程うれしかりき。

○

折しも。弟の三郎、わが歸りを待ちわびてありしが。無邪氣なる笑。浮べつゝ驅け來りて。すがりつきたる愛らしさ。われは。その頭撫でつゝ
提げ來りし土産の包。渡しゝにそをもちつゝ我より先に家へかけ込みしは。亦も手柄顔にわが歸りを知らせんとなるべし。

○

やがて我、たらちねの御顔を拜して寄る年波を知らざる如く在すに。先づうれしく。風呂は沸きたり。とく湯浴して來よ。都の人の情は如何に。
食物は如何に。なぞ、宣ふに。いとも有難く。われは。無上の光榮に泣きぬ。

○

女々しとのみ笑ひ給ふな。エンゼルの愛のさゝやき。人の子の情に觸れん時。誰か涙の滂沱たるを禁め得べき。

我が學校生活

駿河　栗田よし子

人世の快樂は種々ありて其情も又様々なるべけれされど思ふに何の苦とてもなく全く樂しき生活をなし得るは學頃學びの園に一家團欒をなして惠みの露に生い育つ頃の樂しき時は又と再び得られざらん御情深き師の君は我れ等を愛し給ふ事恰も子の如く風れる節にむちうちて麗ろに花咲き匂ふ文の林におく深く導き給ひて一時も早くほまれの花を手折れかしと敎へ給ふぞ忝けなけれ心へだてぬ友どちは皆姉妹の如く互しと欲め慰しといさめつ諸共にまけじ劣らじと秘々胸に空想をゑがきて螢を集め雪を積み其いそしみのいさなしあらん事を祈りつゝはげみなば日々の樂しき諸學科はます〳〵面白く思ほへけり日曜日等は友どち打つれ立ちて花咲く春の野に山に蝴蝶を追ひつゝ庭の内を散歩してあまたの花を摘み學びの園に返りては打集ひて其庭の花をば名調べするなど中々に面白き極みなりされどあたり淋しき秋の夕べ窓に差入る月を眺め折り〳〵空高く聞ゆる雁が音を聞きそゞろに古里なつかしく我れは物學びの爲め此處に來れども父母の君はいかゞおはすらん可憐の弟妹はいかに遊ぶらん戀しき里に歸らまほしなど思ひし夜半もありつれど今は手に取る樂しげさに樂しつ事もまゝならずあまたの友と彼の閑にありて語らまほしく思へどもいかゞせん思ふ心のまゝならずあゝ今一度幸ありて樂しき園に住まゝほしや去りてもなほなつかしきは學びの庭したはしきはあまたの友どちにこそ

運動會

伊勢　花涯女史

四月三日、二見の浦に於て、春期運動會を催す。

此日、一天麗らかに霞み渡りて、濱の松風波を枕に眠り。油の如き海原、往來ふ船の白帆ゆたかに。岩の上の鴎、漁夫の口笛に馴れて遠く飛ばず。

遠山櫻咲き匂ひて、天の羽衣かけたるにも似たりや。

あはれ、此長閑けき白砂に下り立ちて、浩然の氣を養ふ遊びよ。

優しき風の手に、紅白の旗は翻りぬ。競爭區域は綱張りせられぬ。數多の女生が凛々しきいでたち、集りては綾を織り、散じては錦を成す。喇喨たる音樂は、其繊手より起り、颯々たる喊聲は其唇より洩れ初めぬ。戯遊競爭は行はれぬ。テニスは催されぬ。徒歩競爭、折紙競爭、さては詠歌競爭など盛に開始されぬ。日本男兒の母となり、妻となりて、第二の國民を養成す可き女生の、健全なる精神、壯快なる身體は、須らく責任の下に充分の發達を期せざる可らず、かくて、身体の發達を充分にして、日本婦人の特色を發揮せざる可からずなりぬ。運動會に依つて得る所の効果、豈一時の娛樂のみならむや。

我は何となう心浮き立ちて、總ての競爭に加はりぬ。總ての力を試みぬ。テニスに戰敗よかりし我は、徒歩競爭に矢を報きぬ。されど折紙競爭に敗

れし我は、該歎說爭に其耻辱を雪ぎぬ。

　ますらをがとり佩く太刀のつかの間も
　　忘る可きかは君のみめぐみ

題は、鳥居。時間は、三分。僥倖にも月桂冠を戴き得て、翌日の家土產に花を飾りぬ。拾ひ得し貝の數々は、らうたき妹の拙文にて。會は果てぬ。

蝴蝶舞ふ、菜畑、麥畑、參宮道者の歌賑はしき二見街道を、興じ合ひて、歸る家路に日は落ちぬ。夕榮の空を仰ぎて、別れを惜ぐる子、あゝ、また、今宵の夢に樂しき遊びをくり返さん哉。師の君さらば。友垣さらば。

歸省日記

石川君子

七月二十七日、晴、とく〳〵目さめてねむられず。時計を見れば、また三時なり。もどかしさに、枕かいやり其處に座りて、故郷のことのみ思ふ。漸う夜の明けたれば、食ぶるものもそこ〳〵に、ひたぶる旅の用意す。八時車來る。荷物のみのせて、先づ舟橋樣迄やり、我は此家の人達に暇告げむとて殘る。榮ちやんの、名殘惜しげに、我面ばかり見つめて、いつになく言葉もなし。「榮ちやんさよなら、御機嫌よう」と云へば、「さよなら」とのみ、勢よく云ひはなちて、母樣のそばにはせ行き、小さき聲して、「母さん、來年は、きつと、石川さんと一しよに伊勢へ行くよ、來年になると坊は十だもの」と云ふに、皆々笑ふ。可愛さいふばかりなく、そゞろ、連れても行きたくなりぬ。舟橋樣にて、暫くお話する程に、市川なる操さま來給ひて、是非、我を新橋迄見送らむとのたまひしかど、御病後の御身、殊に、明日は仙臺へ御出立なれば、御身に障りてはと、切に止め參らす。やがて十一時になりぬ。操さまに別れ、舟橋樣に送られて、新橋に行く。

汽車にも乘りつ。嬉しさに夢心地して、こゝ迄は來つれど、一人旅なりと思へば、さすがに心細うなりて、ふと見返るに、いつの間にか、秋田樣來たまひたり。「舞鶴へよッたら、夏子に、しッかり養生して、早くなほれと云ッて下さい。一人だから道中氣をつけてれ」とのたまふに、舟橋樣も、「お金を落さない樣に、あんまり居眠りやうなら、我慢しないでどこでゞも下りてお泊りなさい」などやさしうのたまふに、涙ぐむまで嬉しくて。車は動きそめぬ。プラットホームには、見送りの人々、彼方此方に御機嫌ようの聲、さわがしき足音に交りて聞ゆ。我が乘れる室には、老いたる人、若き人、合せて十人ばかりなり。わがとなりなる可愛ゆき丸髷の人つれ〳〵にやおはせむ、いづこ迄の御旅にやと、言葉かけしが始めにて、來は、さま〴〵の物語りして、互に慰め合ひぬ。此夫人は、靜岡迄行かせ給ふ由。「あなた、御兩親樣はお達者でいらッしやいますか」ととはせ給ふに、其兩親にまみゑむとて、はる〴〵歸る旅なるをと思ひつゝ、「皆達者で居ります」と云へば、「お有んなさる時、澤山御孝行なさいまし。亡くなッてからは、いくら孝行したくても、間に合ひません。私なぞ、小さい時父にわかれまして、母と兄とばかりで御座いま

したに、其兄が、先月洋行いたしまして、出立の時、母が病氣で御座いましたけど、大した事も御座いませんし、母も、しきりに兄の洋行を喜んで、進めてやりました。其れがあなた、つひ、兄が出て、間も無く亡くなりましてね。兄は未だ、英國へ行き着いて居りませんのに。此知らせをしたら、どんなに、おどろく事かと思ひますと……。其れに偶然では御座いますけど、兄が印度を通りました時、便りが御座いまして、其はがきは、印度の繪はがきの樣なもので、お釋迦樣とお婆と、ナムアミダブツと云ふ字が書いて御座いますの。其れへ「母さま、私は今印度洋を無事に通ります。母樣はいかゞですか何卒早くよくなつて下さい」と云うて御座います。其便りのとゞきました夕こく、母が亡くなつたんで御座いますよ」など、しみ〴〵物語りたまふ。其時の事ども思ひ出し給ひけむ、涙ぬぐひ居給ふに、ひき入れられて、我も悲しく、何と云ひて、よきか、たゞもわかずたゞ〳〵お可愛さうにて、同情の涙とゞめがたし。此君、靜岡にて下りたまふ。何となく名殘惜しまれて。

ゆふべよりのつかれに、ねむけさへ催したれば。

二十八日、晴　いと〳〵暑し。大阪に着きしは、午前六時四十分なりき。福知山行は、九時過ぎと聞けば、ステーション前なる待合所にて休らふし　時間を待ちて、阪鶴線に乗りぬ。さらぬだに、いみじき暑さを、トンネルさへ、いと多くて、いぶせきこゝちいふべうもなし。生瀬道場など云ふ停車場のあるに、乗り合へる人の、ナマス、ドジヤウなりとて、皆笑ふに、をかしくもおぼえつ。

午後二時福知山につく、こゝより眞子樣のお內迄は、なほ十里有りとは聞けど、早や行き着きたらむ心地して、嬉し。人車雇ひて乗る。少しく町らしき處通りすぎてよりは、家もなき山道たどるなりけり。見る見る、車夫の背に、瀧なす汗の流るゝ見るぞ氣の毒さいふばかりなき。由良川に添ひて下る。所々、小さき茶店の有るに、暫いこひては行く。最早、こゝよりは二里なりと聞きし時の嬉しさ、とび立つ樣なり。漸う海の見えそめて、今ぞ、舞鶴の港には着きぬる。午後六時三十分なり。松陰町の秋田と聞きつゝ行く。

折から向の方より、近藤樣らしき人の、笑みつゝ來給ふに、お正樣にやと思ひつゝ、近づけば、他の人なれど、笑みて、會釋し給ひ、つとかけて行きたまひつ。

嬉し、こゝなり、此家なり。眞子さま、門迄出で來たまひて、「おきみさん……」とのみ、車より引きおろす樣にして、互に手とりかはしたるまま言葉なし。今我を迎へたまひしは、眞さまの從妹の君なりき。湯あみして、樂しう夕げ認め、つきぬ物語りに、つかれもおぼえず。さるにても、眞子樣のやつれ給ひし事よ。去年、我と寫眞とりし時は、われやつれて、眞さまいたうふとり居給ひしに、今は、うらうへとなりて、見るからに痛ましさたへがたし。伯母君、嫁ぎ居給ふ姉君など來まして、皆さま、遠き處を立よりくれしうれしさなど、いたう〳〵喜びたまふ。話はつくべくもあられども、つかれたればとて床に入る。

二十九日、晴　舟橋樣より頂きし、仙臺の九重、西洋菓子など出して、眞さまへ。此地、東京よりは、いと暑き樣覺ゆ。晝間は、たゞこし方、行末の事ども語り暮す。夜に入りて、なば樣、眞さま、いもうとの君、我と四人うちつれて、近藤樣のお內へゆく。町の樣、わが母が里なる丸龜によく似たり。さりとては、心がらにやあらむ。九時過ぎ迄、遊びてかへる。眞さま、わが肩によりて步み給ふ。今宵は、嬉しさに、いと多く

運動したれば、いたうつかれたりとて、すぐ臥戸に入り給ふに、我も。

三十日、晴　朝より、いとゞ暑し。貞さま、いまだ筆とる事かなはねば、御無沙汰がちのお内へ、文書きてよとのあつらへに、はがき三枚、封じ四本、かき終らす。いと名残惜しけれど何にても、御親の待ちて居たまへれば、明日は歸らむと云ふに、いたう／＼惜しがらせたまふものから、東京なる兄様よりは、「必らず、歸りたききみさんな、無理にとめるな」の言葉有りければとて、あきらめ給ふやうにて。

今宵亦をばさまと三人にて、散歩に出ず。あまり短き逢瀬に、言ふ事のつきれば、ふくるも知らず語らふ。車も雇ひたれば、いざとて臥戸に入れど、ねもれず。

三十一日、晴　をばさまの「お君さん、もうお起きなはんせ。三時すぎましたからな、暑うならん内に福知山へ着いとらんと、長い旅で、つひさはッたりすると、いけまへんでな」と、やさしう起し給はるに、嬉しく起き出で、顔洗へば、はやも御膳のおんまうけよ。お情の温き御飯に、門出でなれば尾頭付きをとて、小鯛の煮付、まめなやう*にとて、おいしう煮たるなど給はる。さながら、母様のやうなり。

はや、外の方に、音のして、車來る。貞さまは、たゞ無言にて、我が下駄など、そろへ給はる。さらばとて、あらためて座りし時、とみに胸せまりて、言葉も、いでず。かなしくさへなり來れば、急ぎ車にのるに、貞さま又わが手をとりて「お君さん又逢ひませうなア……」と、かたく、にぎりしめたまふに、聲も立てつべくおぼえて、今日は歸るまじきかとさへぞ打思ひつる。情を知らぬ車夫の「それでは參ります」と引出すに、何の心地かはせむ。まだあたりの家は靜まりて、物音もなく、ふり返れば、おば様のお手の提灯のかげ赤く、貞さまのかげ淋しう……。

福知山へ九時着きたれば、此所迄無事につきしこと、鉛筆もてしたゝめ、車夫にことづけやる。

ステーションにて、驛員にや、我が前に來りて、會釋しつゝ何やらむさし出すに、見れば團扇なり。「お粗末で御座いますが」とて呉れたり。暑さ、いと堪へがたき折から、よきもの貰ひける事よ。例のトンネル、暑さ、暗さ、苦しさ。生きながらの地ごくもかくやと思はれて もの凄し。


つみくさ

るれど、窓よりのながめは、いとよく、山と山との間より、湧き出づる清水、むすばゞいかに心地よからむなど思はる。いと高き谷間より、らうたげなる姫百合のさき出でたる、あるは、岩がれに腰打かけて、形白き人の魚釣り居たるなど、いづれをかしからぬはなし。

午後二時すぎ大阪につく。すぐ、車かりて川口へ。また、博覽會見物の人たちにや、船にのるもののいと多し。小さき船に人多ければ、別室に入る。風靜かなれば、船は、徐ろに川口を出づ。明日こそ懷しき故鄕よと思ひつゞくるうち、睡りにつく。ボーイの食室へと案内に來りしし、更に欲しからねば、たゞうち臥したり。ふと目さめしに、あな、風いとうく吹き出でためり。彼方此方、人のうめく聲さへするに、心細さ限りなく、心地あしくさへなりたれば、寶丹出してのむ。いたうゆるゝにつれ、窓より汐のはれ入りて、足にかゝるに、窓へかれ、ボーイを呼びて閉さしめ、心に父母の上のみひたすら思ふ。漸う靜まりたれば、又ねむる。何時頃にかあらむ知らず。

八月一日、晴　高松と聞きて、はや四國よと嬉しく、起きて顏など洗ふ。ボーイの、いざ持ちて、デッキに行き給へとて案内するに、上りみれば、いと心地よし。ミルク持ち來りくれしかど、デッキの上にて、きまりわるければ、飮まず。今日は、我が家にかへるなりと思ふに、嬉しく、樂しく、よべは苦しみし船ならぬこゝちさへす。やがて多度津につきぬ。いそぎ車雇ひて、一先づ宿に行けば、女の見知りたるが、「お孃さんお歸んなさいませ」と云ふも懷しく、「お支度なされますか」と云ふを、いやとて直ちに車にのる。十里ばかりなれど、一人のみにて行く事と定めさせて。一と村毎に近づく嬉しさ、この時のわれならずして誰かは。はや伊豫の內にも入りぬ。となり村なる峠越えし時、あゝ、懷しの村。なつかしの我が家の倉の屋根のみ、かすかに見えくるものから、車の遲さに、もどかしさ堪へがたく今日のみは車夫の背に流るゝ汗ものかは。なかなかにわれこそ汗にあゆるなりけれ。門も見えたり庭の老木の松も見えたり。今はと、車より、うち下りざまに車夫には見返りもせず。折ふし父上の玄關に居給ひしが、「おゝ戻ッた〳〵」とのたまひつゝ、奥に入り給ふ。足音は母様なり。「オヽ歸ッたかい、大かい暑かッたらう。早う湯殿へおいき。トナヤ、冷こい水を汲んでやッてお呉れ。まア其汗、顏が眞赤になッて」と、たゞそは〳〵し給ふよ。とみには、御あいさつも出でず。まづとて、水あみて衣あらため、御變りもましまさぬ父君母君のおん顏ばせ、拜し參らせし其心地、何にたとへむ。あはれ又、何とか言はまし。

女子大學運動會の記

かげらう女史

某月某日目白臺なる女子大學校に於て運動會あり、當日は稀なる好天氣のことゝて朝來參觀者陸續として詰め掛け午後に到りては滿場立錐の地もなき程にて殆ど三千人に餘れり、當日の演技の概略を記せば、

（一）双毬擲々　は二個のフートボールを䡺に擲げ天に投し交る〳〵取り合ふ競技なりしが、始めのマーチ頗る可憐にて興味ありたり。

（二）毬體操　は各自一個のゴム毬を手にして各種の動作をなす極めて日本的にして児女の好む體操ならんと見受けたり。

（三）操毬競走　番組は（十）と交換せられて茲に競走を見る各級の選手は各自二個の毬を操つりつゝ走る様餘り過激ならざる女子的の競走なり。

（四）鶏卵競走　は輪くゞりと變更せられたり。

（五）くらぶ體操　棍棒の小なる如きものを手にして行ふ、體操は無難に仕てのけられたり。

（六）風船競争　全級は二組に分れ、各自赤と紫なる玩具の風船を持て二個處の入口より出られたる様一寸面白く感じられたり轉て據處に着くや双方より用意の竿を横に掛け一發の砲聲と共に双方入り亂れて風船を竿に結び一度壺く結び終ると次には順に之れを切り放ち合ふ仕組にて紫赤の風船上空に立騰る状は一寸來觀者の目を引きたり。

（七）綱引

（八）御給仕　圓形の盆を手にしたる五十名許の一隊は行儀よく整列して御給仕をなす如き運動をなせり中に盆中より桃色の布を出して拭ふ處などいかにも面白かりき。

（九）啞鈴體操　丁抹式と雖へども其特色は能く分らず、唯だ甘く揃ふたりといふのみ。

（十）白紗　一枚のハンケチを手にして或は喜ぶ如く或は笑ふ如く或は樂む如く或は訴ふるが如く或は泣くが如く總て表情的動作を以て組立られたるものゝ如し、今一層日本的の表情とせば更に妙ならんか。

（十一）案山子競走　讃の案山子五人の協の一隅へならべられたり、走て顔を書き親て弓矢を持たせ笠を被らす、終りに鳴子を着け糸を引きて歸ると共に案山子の歌は樂隊の吹奏と共に歌はれたり、頗る工風せる競爭といふべし。

（十二）にんふ　希臘の神にんふを摸せる體操なりと聞く、動作典雅優逸極めて高妙なり。

（十三）輪抜競争　横にせる輪を二行に四個づゝ置き双方に分れて順次に潜り行く様恰も鼠の籠中を抜け行くに見ゐ思はず拍手せし人もありたり、活潑なる競爭と云ふべし。

（十四）長蛇列陣　約八十名の生徒二組に分れ二個の入口より各々六七尺の布を手にして一種特別の歩み方にて顕はれ出でたり一定の位置に整列するや一寸體操の如きものありて次に紅白入り亂れ又た二手に分れて終りに巨形を處々に作る様成る程、長蛇列陣なりと思はれたり、能く斯くの如く混雑せる方法に熟錬せしものと感服したり。

（十五）啞鈴體操　頗る長き演習を一點の過ちなく揃ひて演ぜられたり動作の緩急ある力の強弱を異にせる等從來の其れとは全く別種の觀あり且つ始終一齣も舎缺せざる等特種の方法取り扱し此等は專門家の最も注目せし處ならん。

（一六）容儀體操　二十四名の女生は白色の希臘古代樣の服を着して緩徐なる運動を行へり何んとなく神聖を感ずる體操なり。

（一七）自轉車

（一八）綱引　之れより午後に移れり午前のものと共に別に記すべき事もなし。

（一九）長竿體操　名の如く長き一本の竿に四名づゝ取り付きて種々に運動をなせり強弱平均の體操としては頗る可ならん、餘り他に見ざる體操なり。

（二〇）御手毬　演者は各一個の御手毬を頭上に載せて出で來り整列して從來の足蹈體操の如き法を行ひ終つてマーチにて退けり、此の終りのマーチは見事に揃ひて美しかりき。

（廿一）旌旗翩々　百名餘の女生紅白の長旗を手にして或は進み或は退き過て渦狀となり開いて方形を作り閉ぢて縱隊となる變化極めて多く勇壯なる遊戯なりし。

（廿二）球竿體操　複雜なる體操の如くに見ゆしも能く揃ひたり且つ十分精神を入れて演ぜる樣動作の上に表れるはおもしろかりき。



のどかな朝

（廿三）徒歩競走

（廿四）輕麗體操　體育主任のもの急に病氣との事にて是れより番組少しく混亂して障害物競走あり自轉車等ありて後ち。

（廿七）あまぞん　出たり凡そ百名の女生は例の如く双方の入口より下げ髮に白鉢卷をなし、白の襷を十字に掛けて張り臂に濶步して徐々と顯はれたる樣には滿場の觀者思はず一齊に拍手の音暫しは止まざりき、軈て一定の位置に整列するや徐々と運動は始まれり、説し其勇壯にして活潑なる恰も小巴御前の奮鬪するが如く、演者の表情ピアノの音調と合して一點の空隙なく或は弓を引く狀或は騎馬にて驅馳する如き宛然手に物のある如く馬に乘れる如く少しも空手の運動とは思はれざる程なり、蓋し當日第一の呼び物は之れならん（此時教師は疾病を強ひて出られしと見ゆ數名の看護婦と女教師とに扶けられつゝピアノの傍らに一杯の水と藥とを供へて指揮せられしは此

技をして一層の價値を顯はしめたり

(廿九)　花賣り　紅白黄等の菊花を満載せる籠を頭上に戴せマーチに依て顯はれたり、高等部の黄花調を吟して運動をなし、籠を下して地に置き花を或は摘み或は投し或は捧げ、凡てピアノの音調に合せ全生徒恰も一人にて動く如くに行はれたり終りにマーチに依て花を來賓に呈しつゝ退かれしは頗る大受けなりし、此他自轉車バスケット、ボール等あり最後に大學部全體並に高等女學校の上級生等八九百名にて一團となり軍樂の吹奏に合せて圓舞を行ひたるは最も爽快なりし。

歸省日記

北海道　越野覺子

七月二十日。いつになく。とく。目さむれば。昨夜の空に似もやらず。まどうつ雨の。おどろ〱しければ。先づ海上いかにと。おんぜらる。起床のかねなる。顔合す人毎に。天氣をかこつ。師の君はきづかはしげに。風はげしければ。船なる人は。一日またれよ。永き休のことなれば。さないそがずもがな。と。いはれしも。常になく。うべなふ人もなし。早二階より。荷物をおろしくる人。車の來りしとて。とびいづる人。むもこゝに。あらざれば。師の君もさらば。波止場まで。ゆきてみよと。いはれ。今年入りし人は。顏色をなほしぬ。とかくする間に。皆もそろひたれば。いざとて。師の君の。御心もおしはかりまつらで。二十分間の。空想のまに。波止場につきぬ。船はまさに。出帆せむとする所。風は。後よりなれば。さまで。苦しからずとのこと。皆いそぎのりこむ。船中は。なか〱混雜し。妹への。土産入りし。信玄袋行李の上に。あげてよと。いふもあれば。梨入りし籠下におきてよといふもあり。船はゆり出しぬ。川にある間は。靜かなりしも。海に出で沖に進むに從ひ。浪風はげしくなりぬ。ねむりて醉をのがれむと。船枕によこたはる。今朝のさはぎに。つかれけむ。ボーイのよばふ松が崎も。きかで。華胥の國へか。はた。故郷の空へか。魂はとびぬ。暫くして。一人の友。揺おきたまへよ。瀬波々々といふに。おどろきめさむれば。故山の緑目前にあらはれて。かなたより來る。はしけし。なつかしく。待つまおそしとのりうつる。寸時にして岸につく。一年ぶりにて。此地をふみしといふも。あれば。われおこさゞりせば。御身等は。酒田に。ゆかれしならん。などいふも。おかし。それ〴〵むかへの。車に乘り。八丁の松原永しとわびつゝ。こなたの小路。あなたの町へと。各分れ家路にむかふ。かどべに。小さき雨傘のぬしたちしがはしり入りぬ。老婢は此雨風によくかへられしといひ。母上は醉はざりしかと。問はれ。父上は何時にたちしと。きかる。妹は今朝より門にたちまちしことなど。いひ出して。早土産のさいそくをいふなど。千金にも買ひかへがたき今日の樂しさうれしさ

こゝにいたりて。二度よみ。あそりかへしよむ。かゝりし折りも。おりしかと。あゝ此愉快なる感。今世に。ゆめみ得らるゝや。否や。二とせのまに。かくもかはりはてしか。慈愛ふかき師の君の。膝下を去り。あたゝかき。父母のふところを。出て。幾百里へだゝる。他郷にうつり來

らんとは。と眼保の情にたゆやらず。沈吟久くして。涙とゞまらず。何故に。この日踏は出されしぞ。と。無我にとへばつめたきストーブ音もなし。窓外々々の。りんにうつゝにかへれば。旅順攻撃我軍大勝利露艦全滅に近しとの報。心のうきも旅順の月とはれわたり。うらゝの山に日の御旗。立つる其日も。ちかゝらんわゝたのみてしるかひこそあれや。我國の。さくらにたぐふ。やまとだましひ。もてる。ますらをと。共に生れし。てる日のもとの。我も女子。

運動會

大坂ウヰルミナ女學校　岡崎熊鶴

あやにかしこき我大君のあもらせ給ひし霜月の三日わが學び舍には河内なる四條畷へ秋期運動會を催さるゝこととなれり、されば宵の程より何くれの用意にさわぎ立ち、臥戸に入りて後も明日の有様思ひ廻らしては、容易に眠られず、漸にうと〳〵とまどろみしは一時過る頃なりき、されど幾度となく夢破れて此宵ばかりは夜の長き心地しぬ、

五時過る頃起き出でゝ先づ空打仰げばいと好く晴れ渡りて、またゝけるの星數多きに、勇み立ちて支度もそこ〳〵網島停車場に馳せつくれば師の君友等も大方は集ひ居まして、各其おもわは今朝の空の如く晴れ〳〵しう見うけられぬ、暫く待つ程に驛夫の知らせにてプラットホームに出づれば、二輛借り切りの車とていと安らかに乗り込まれぬ、やがてゆるぎ初めし車につれて、汽笛一聲を一齊に歌ひ出しぬ、妾も共に口ずさみながら窓外を眺むれば、野は一面に稲穂穰々としてさながら黄毛氈を敷きたらむ如く、小川のほとりに生ひ茂りたる尾花の黄なる稲穂ときそひ顔にうなづける、山々の木々の青葉の衣はあるは黄に或るは紅と變りていと美しく、林盡き山現はれ、山過れば川と、恰も走馬燈の如くめぐり行く面白さ、彼方の松林の陰なるわらぶき家は故郷のかしこに似たりなど思ふ折柄いつしか四條畷にと着きぬ、降り立てば行手は即ち飯盛山にて中腹に高くそびゆる銅碑こそ、大阪府獻納の紀念碑なれ、彼の頂きのあのわたりが城趾にて、此邊は敵の陣所なりしならむ、彼の鳥居こそ四條畷神社なれど一々ねんごろに指敎し給ふ師の君のみ言葉にいと興増りて自然足も勇みたち數多き石の階をいとやす〳〵と昇りつめ心あての御社にたどりつきぬ、あゝ此所こそ彼の正行朝臣が猛虎の如く攻めたる敵軍と花々しき戰ひをなせし處なるか、仰げば空にそびゆる紀念碑は青銅地に金文字もて（忠勇楠國遺蹟具贈）てふ字を記されたり、僉も登り行けばいと平らなる地に出でぬ、返り見れば大阪市は煙霧の中に包まれて遙に見ゆ、一面に黄なる野もせは沙漠にて、そこ、こゝの村落、林はオーシースにもたとへつべきか、いと延びやかなる光景に此所こそわりご開くに適當ならめと、茶店より古びたる毛布など借り來りて、敷き、皆とり〳〵にわりごしたゝめぬ、暫くいこふ程に師の君の天長節を祝さむと宣ふに各圓く立ち並び聲もいと滑らかに君が代を三唱し增穗先生の勅語奉讀終りて西野先生の御自作なる君萬歳を歌ひて式終りぬ、さるに我等が跡をつけ來りたる村人等はいと珍らしげに西の圓なる師の君

等を見てとりどりに評するなどしましゝ、やがて競技委員の審判にて大捕鼓手、鏑矢鼓手などくさぐさの遊びをなして打興じ時の移るも知らざりしが短き秋の日の暮れやすくてはや西山に傾き初めければ、歸り路につかむと師に宣ふに芳名残りを惜しみつゝ山を降り道すがらなる小楠公のみくつき所に詣でぬ、見ればさまで廣からねど、森々たる樫の老樹はみ墓の上に生ひ茂り、碑には(贈從三位楠正行朝臣)と刻まれていとも靜げき四方の様はそゞろ昔を偲ばしむ、あゝ去ぬる正平二年の秋正行卿が弟正時と共に二十二歳を一期として最し遂へたるは此所なりしか、刀折れ箭盡き身には蝟の如く箭を被り鎧はずたずたに千切れて花を欺く紅顔にふりかゝる黑髮掃ひもあへず敵陣をにらみ詰めし若武者を聯想して、妾は思はず涙にむせびぬ、かくて停車場に至り整列點呼の後もとの如く乘り移り煙りと共に名殘りをのこして驛をはなれ住の道、綾庭もとく過ぎて六時七分網島に着き、此所にて師の君等と別れまつり家路にと急ぎぬ、あはれ興深き運動會なりしよ、

早梅を送るに添へて

鈴木みき子

きのふけふ冬ごもりの庭先に咲き出でました早梅の木枯の風を他處に見て己は早やゆたけき春風を迎へにみへる様のゆかしさにおりたちて一枝手折りました花は春に先立ち私は筆に先立ちて花の宿を賞擬ました身は恰くん〱の香につゝまれた様な心地が致しましたので思はず「ホケキョー」と口ずさみました此梅が枝には早や初音がこもりて居ます神ひ清りき御文机にかなる身となりて物のあはれよう知り給ふあなた様の御側にめでられましたら初音もらしゝ此うぐゐすは申すまでもなく花も雲の間よりにほひ出でし甲斐ありとさこそうれしう思ひますでありましようくはしくは此花へ御たづね下さいませ

歸省日記

國語傳習所　八代春子

四月八日、長い〱あき〱とした船旅、今ちようど終て船頭の背に負さつて白い砂ー踏むも嬉い様な濱の上へおろされた。それはかれこれ午後四時頃。永い春の夕日が眞赤に戀の島と沖の島との間に入り込んで館山柏ヶ崎の漁士の小家が廣告の様に燈てゐる。其の煙が那古船方の方へ靡いて靜かな鏡浦の平和を永へに閉してゐる。自分は折よく歸りの車に乘て今しも沈まんとしてゐる夕陽を夕鐘の一つ鳴る毎に振りかへつて見た。やがて北條の町を抜けて田のもを一直線に走てる街道をガラ〱と走た。淡い水色の黄に裏はしい山木の黑は包まれて折々思ひ出した様に鼓調

寺の鐘がこの靜けき空氣に波動を與へる。「アレ姉さん！」驚いた樣にさも悅し相に東の物にかけ寄たので今迄の樂しい空想は破れた。……「敏ちやん……」と言たきりひしと抱いて其の房々とした黑髮を自分の嬉しき血汐にどき〳〵して居る胸にあてた。自分はちようど四年目樂しい故鄕の地を踏んだのだ。其の四年前敏ちやんは母さんの膝で「御月樣幾つ……」と片言まじりで歌て居たが直におきて「御乳よ〳〵」とむつかて居た。色々の話をしながら樂しい家の敷居を跨いだ。明き室に久し振りて父母と共に食卓へ向た時御父さんや母さんの額の年波の間には喜びの光りが滿ち〳〵て居た。食後二階の欄干で敏ちやんと黃金色に輝てゐる月の光を浴びて「御月樣幾つ……」と敏ちやんの節をまねて歌た時敏ちやんは白い歯を見せてホヽと笑った。

四月九日。敏ちやんに起されて顏洗ひに裏の井に行た。八分通り開た井戸の上の櫻は風もないのにはらり〳〵と淸いすき通た水の中へ散てゐる。瑪瑙の樣な冷水を花片と共に汲み上げてザアーと金盥に明けた水晶の樣な水玉は黃金色の金盥から氾れてゐる。顏を洗て朝飯をすますと御祖母さんと一所に御墓詣りに出かけた。先祖代々と大きく彫てある墓の傍の少さき新佛是れ敏ちやんにもわたしにもたつた一人の弟であつた深さんの新らしい土饅頭!! 誰がそなへたのであるか。白い桃まだ初々しい蕾の一枝!!! この桃、白き一枝!!! 敏ちやんの上げたのかしら？ 御祖母樣のあげたのかしら！ 嗚呼可憐なる此の桃の一枝!!!

春の樂

女子商業學校　横山さき

春とし云へば、何となう人の心もうきたちて、見るもの、聞くものにつけて、いづれ樂しからぬぞなき。

かのよろづの花にさきだちて咲き匂ふ梅の、かをりゆかしき、そが枝に、鶯のいと嬉しげに、兩の翼をひろげつゝ、高らかに歌ふ愛らしさ、げに其聲は、春の女神の音樂にやあらん。

眠りもせず、曇りもはてぬ朧夜に、秋はなれぬ月影を、つれそふみやびの友として、もの靜かなるあたり、そゞろありきするも心地よきに、まして、いと長閑なる朝まだき、軒端にさへづる鶯の聲に、夢をやぶられて、起き出づれば、隙もる風の、ゆかしき香を送り來て、ねもいはれず、窓おしひらき見渡せば、東の山際に、紫だちたる雲間より、輝き出でし旭の光うら〳〵と、白梅の梢にやどれる露の雫に照りそひて、珊瑚の玉のそれのごとく、見ゆるも美しからずや。

きのふまでは、四方の山々に眞白なりし雪も解け、澤の水もぬるみて、霞たなびき、菫、蒲公英、蓮華草、あるは名も知らぬ花まで、おのがじゝ咲きみだれ、百鳥の歌おもしろき若草野邊に、親しき友と袖ふりはへて、蝶の羽袖も輕々と、舞ひあそぶ蝴蝶を追ひつゝ、手に持てる籠も

寒きまでに、若菜摘みくらすなど、こよなう樂しきわざなり。
春もやう〳〵深うなりゆけば潮干狩あるは、山遊びなど、いとたかし。わけて、彌生の空に。白雲か、はた白雲かと見まがふばかり、眞白に咲き亂れたる櫻の花にうかれては、浮き世の憂さも、つらさも忘れはてゝ、われひとり春を領する心地せらるゝもいと嬉しきや。
げにや移りかはる四つの時の中につきても、春ばかり、樂しき時はあらじとぞ思ふ。

寒夜の讀書

女子商業學校　瀨尾うめ子

梢をはらふ木枯の聲の折々音づるゝ外は、いともの靜かなるに、ひとり文机に向ひ、燈火かきたてゝ、好める書などよみしてゆくに、心もおのづから澄みわたりて、書間は明かならざりし疑ひさへ、解けゆくに、いしいはれず、嬉しき心地ぞする。



春の若草山

古のかしこき學を得たる人々は、大かたは燈火の料さへなく、あるは雪のあかりに物を學び、あるは、螢を集めて、その微かなる光りをたよりに文の林にわけ入りつ、遂には其奧をきはめしためしもありとこそ聞け。されば、かゝる人々は、寒さいかに肌をさす夜半とはいへ、もとより、火桶などの備へなどなかるべきに、その長き年月の苦學のほども、げにさこそと思ひやらるる。

それに引きかへ、われ等は、三伏の夏に逢ひても、寒氣嚴しき冬に逢ひても、暑さを知らず、寒さを覺えず、何一つ不足もなくて、日毎に樂しく、この學びの庭に遊ぶことを得るは、そも誰が御惠ぞや。ひとへに大君の賜物なり。かくも、かしこき御代に生れあひて、文の林にわけ入らんとするもの、いづれも、昔の人の苦學のさまを思ひ較べて、勉め勵まではあるべからず、などか昔の人に劣るべき。など思ひつゞくるに、氣も勇み、心も勵みて、寒さも忘れ、眠りをも忘れ、なゑ人によりて書よむほどに、夜ぞ

火の焔いつしか衰さて、光りやう〳〵ほの暗くなりゆきぬ。

さては、夜もはやいたく更けぬらし、いざ臥なんと臥床に入れば、二十日あまりの月の影、戸の隙間よりほし入りたるに、なつかしさのあまり、起ちて窓おし開けば、松風の音もいつしか靜まりて、雪白う降りしきる景色、いとおもしろく、常には見どころもなき我が庭も、また捨てがたき眺めにて、月もむしも、いと清く澄みわたるを覺えぬ。

戰死せし軍人の遺族へ

大坂　岡崎かつ子

只今號外にて拜見致し候へば貴の君様には去ぬる八日旅順口總攻撃の際敵の彈丸にあたらせられてあへなく戰場の露と消へさせ給ひし由、豫て御覺悟のうへとは申ながら姑御様には只一人の御子息なり。あなた様には杖とも柱とも頼ませらるゝ貴の君とて御老後の程はさこそと陰ながら推し參らせ候まして君には夫婦の御語らひいとこまやかにゐまして武夫様てふ御遺子さへ在す事とて其頑是なき御ふるまひなど見そなはしては、身も世もあられず思召され候はむと思ひ參らすだにそゞろ涙の催され候されど日頃男々しく在します御君様とて已に御覺悟も候はむが此度の御戰死は實に花々しき軍人の名譽と存じ候古へは初陣の討死とか申て武士たる者のこよなきほまれと致し居候ひしにまして此度の事は十中八九敵の利ある戰なるに此度の大戰捷とはひとへに戰ひ給ふ君等の勇しき御動作に由る事と存じ候、されば君よ雄なる姿の中泣も候はれど此名譽ある軍人の妻として亡き君へ唯一の御形見は只一人の母君様へ御孝養と武夫様を好く御養育遊ばし父君のほまれを一しほ高め給はむやう務めらるゝ事のみと存じられ候いつれ御拜顔の上御とむらひ申上ぐべく候へ共、先は取あえず御悔みにそへてをこがましき事をのみあら〳〵

梅花にそへて

大阪　田中しゆん子

わが庭に芽立ちて、梅が香の早やこち風に薫り初め申候。獨ながめて散らさんは餘りに惜しければ、二三枝參らせ候間、秀で給へる新派とやらのみ歌の一首なりとも賜はらば、之にますこなたの喜びは御座なく候。實の處は。いつぞや御出の折つ、すそ高らかにかゝげ手足を土に汚しつゝ梅の手入をなせるこなたの様をかしとて、御笑ひ遊ばせしにくき御前様なれば、咲きても御眼には掛けまじと恨れ〳〵思ひ居候ひしなれど……大桶の守のみ遊ばされず、ちと、小さき樂師の妙なる調べを聞に來まさずや。其スラリとかつこう好き御姿の御前様の、のどかに素なける梅の花下蔭に佇み給ひなば、如何に〳〵配合のよろしからん。之一幅の畫！。兄事は今より繪具のしたくなして待居候。

花ふゞき

水橋しぐれ

櫻が岡の花の嵐にへだてゝ俗ならぬ谷中は枝だれ櫻の花見寺より、羽二重團子の道を尋る人が多い。

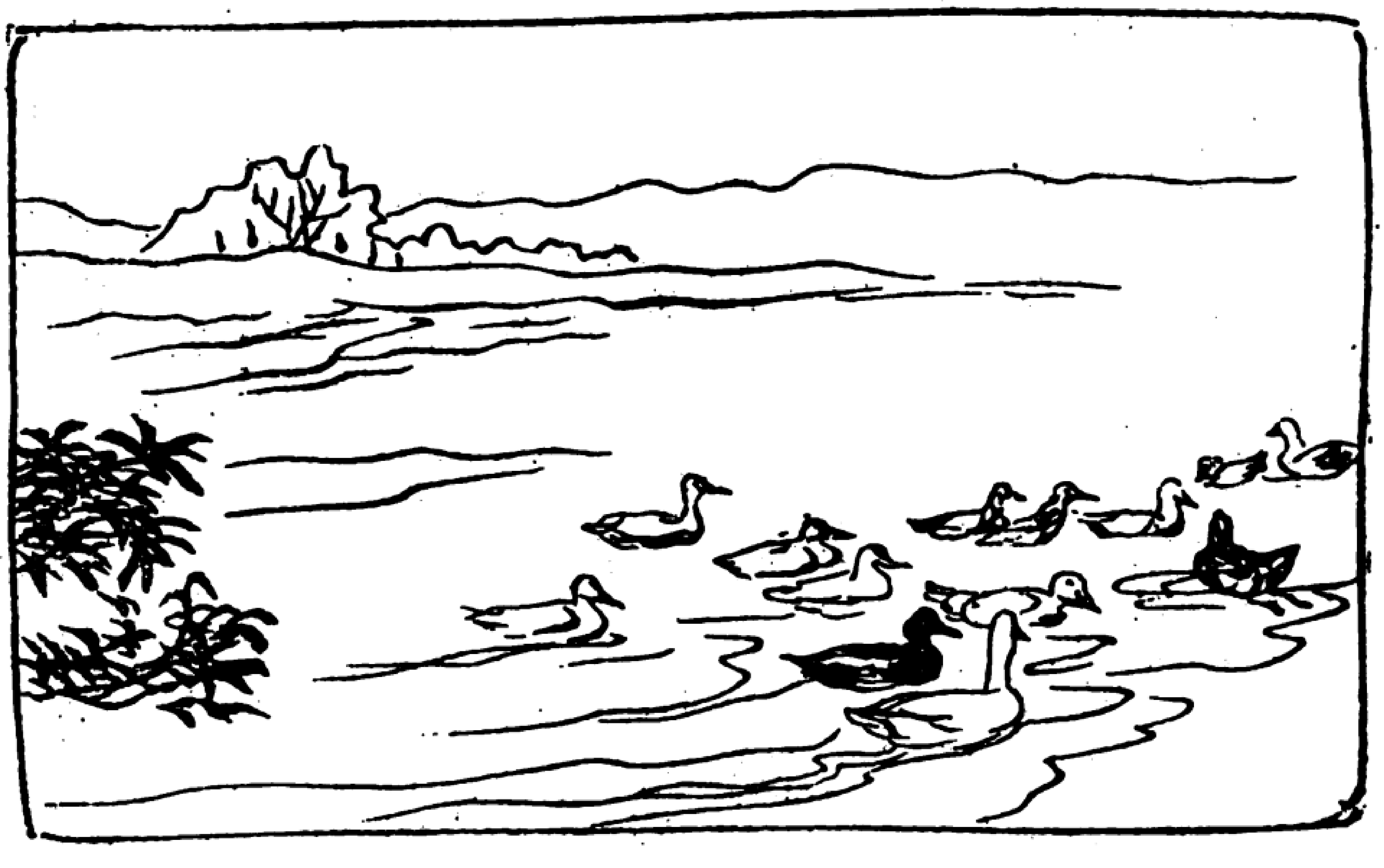
今日も打つゞいた日和の午後を暖き日の差て、花の香、若草の匂ひ、渡る微風も吹ぬか、春といふ甘い野の靉靆て、山門の仁王尊も阿吽の形屈伸とのばすかと思はるゝ温和な四隣にさへて文字口の辨宗の鋼鳥であろう鐘の音もきこゆる。

「あゝ可憐な、無むじや佛でおわす」

飛鳥絲を衣の袖でそつと遁て、獨言たれた御上人はもう八拾の御老体。麻の御法衣さへ輕くは有まじと見ゆる、雛のように清く痩てゞある。土筆たんぽゝは籠に入て、白き西洋前掛には枌櫻の花びら、菜の花は纔少かに澤山に溜て、手足の無い人形を抱て、すや〳〵と丹の上に眠つて居る五つ六つの女の童の寐顔を眺て涙ぐまれた。

「乙の姫で御愛も深かろうに、縮将御一人が御傍りじや、一番御不愍な」

抱上むとすれどいかな事、雅いとて中々老翁の力には及ばぬ、ゆり覺せばゆすられて



みやこどり

何の心地か夢に微笑と、みそつ歯のたまらぬ程可憐な

「風など召したら事じや、お雜年でも俺の力ではゆかぬてな、アヽヽ」

見返り見返り、然ながらもとぼ〳〵と、

「あゝ。悟て悟らず、元の凡夫也矣。南無……」

珠數を繰て、靜かに院に入られた。

黄と白の胡蝶が雛子の夢のあたりを飛て、石工の鑿石なきざむ音。寺院の裏は閑寂なもの。ほか〳〵と土に印する馬蹄のひゞき轍が止まると五つ紋の羽織、ぱちりと白重の裃前揃へて打竝た、さび茶に絹糸織に織たる鍋の帶。爪先に水のたるゝ艶姿。品高き奥方の三拾は三つと餘まい、ねり香の馨しやんと、床敷い千代田草履に踏爽る若芝をかるくふんで、

「供には及ばぬよ。御手輿でお氣に召ぬそうで、御機嫌の高い御催なそうだから」

侍女を待してし〳〵山門を入と、ひらひらと散櫻の、黒髮に、袖に、膝に、裾に、見上た其面差、窶すとか明御輪の徒捨られた儘の花の陰に春の佗の安息ろような、愛らしいのが目に附た。風へば忘れられぬ愛兒の年輩、行過兼て奥方はたまらず、そつ

と跪まづいてつく〳〵と見ると涙が先か頬をすりつけてまめ〳〵とした。時に、これが此兒の姉か、花の精の抜出したか繪にかいた美人のよう美しいがどこやら冷たい、少女にしては艶かみの薄い十八九のが、紫のやゝ色あせた小さな被布を持て、木陰からじつと伺つている。

女子の勉學

大阪　岡崎鏸鶴子

開け行く御代のありがたさは、女と雖も志だにあらば、如何なる事をも學び得られ、到る所に女學校は設けられ、又家門をはなれがたき女子の爲に發行する、雜誌、講義錄は其數を知らず、いかなる田舍にありても普通の事はなし得らるゝいとも有難き御代とはなりぬ、我國古へ(とは云へ近き頃なり)は男尊女卑てふ事の行はれて、女子と小人は養ひがたしなど云ひて、女は卑屈なる者、思慮淺き者と否認せられしは、つまり無教育の致す所にして、常に一家に閉居、所謂籠の鳥を栖とせしを以て、自然其見識は狹隘となり學問とし云へば、普通に女中庸女大學などを最高とする位ひにて、火は何故に燃ゆるや、米を煮て何故に柔き飯となるや、少しも其意を解せず、日常其携る家事に於てすら斯くの如し、況んや社會諸般の事故などは、其方角をすら取り得ざるなり、故に自然男子にたよらざれば何事をもなす能はず、白樂天が百年苦樂依他人と云ひしもげに理りにこそ、

されど明治聖代に生れ出でたる女子はさにあらず官省、諸會社、銀行等にも、日増に女子を使用する事盛大となり、內地雜居の今日多くの外人出入するに、女子とてもいさゝか外國語の心得もなかるべからず、故にそが勉學の機關は既に調へり、實に有かたき御代ならずや、三十餘年前の婦人達は夢にだも味はゝざる事なり、或人の二十世紀は女子の舞臺なりと宣ひしもげに理りとこそ覺ゆれ、

されど此勉學てふ事を往々誤解する者あり、曾て我師は宣ひき、彼等は何を目的として勉學するや夫れ學問は嫁入道具の看板にあらず、只天授の智を發揮し識見を博くするのみ、然して其得たる智識を好く適宜に應用して、家政を整理し舅姑に仕へ、社會に活動する夫をして內顧の憂ひなからしめ、次代の國民たる子女を好く訓導して國を益し社會の體面を保つ女子の職分を全ふするが我邦女子勉學の目的のみと、さるに偶々見る所のわが輩の有樣は何ぞや、なまかじりの英語も教場にて朋友同士話すは習練となりて好き事ながら、大道を濶歩しつゝ少し醜き女など見ればシーイッヅヴエリーフアンチーなど云ひて大笑する樣、教育ある女子の行爲としては、いと嘆じく、なげかはしき事ならずや、たま〳〵かゝる輩ある故、社會より女子の勉學を否認せらるゝなり、されど幸福なる我等許の小羊は樹幹たる道德を備へ、而して後枝葉なる學問技藝を飾り勉學の目的にもとらざる樣つとめたけれ。

和歌

佐々木信綱先生撰

河内　櫻井喜子

（天）梅

馬牽きて淺瀬を渡る夕月夜
　水の音寒く梅の花ちる

好箇有韻の畫といひつべし

岩代　菅野和子

（地）蝶

青空につゞける春の野を廣み
　かなたこなたに胡蝶舞ひ舞ふ

一讀長閑なる感胸にうかひ再讀長閑なる春の野の景目に浮ぶ心地す

肥後　馬原すか子

（人）閑村の夕

夕ぐれをはたごの馬の鈴の音に
　まじりてひゞくひな歌の聲

さいつ頃南清に遊びし折湖北省荊州城をとひて沙市に歸らむとする夕ぐれ霧深き二里の野道を轎にゆられ／＼歸りこしに日全く暮れて目の前の木立も見わかず唯荷をのせて町に歸る驢馬の鈴の響と里人かそゝりぶしの調のこゝろはわかれとあはれなるふしにうたひいくとを聞て遊子の胸いたく堪かたかりき今此歌をよむに其折思ひ出られて我には感深し

秀逸

春の歌の中に　石見　宮内登美子

我が宿の垣根の椿時すぎてうつむく花に春さめの降る

四句おもしろし、望女の歌にあなたむきても咲きいづる哉とあるも思ひ浮べられて、

春の野　美濃　千秋子

春の神の御手に育ちて春の野の八千草花咲き出ぬ

月前落花　神田　佐藤千代能

琴の音は暫しとたえて風もなき朧月夜に花のちりくる

やさしき歌、二句原作しはらくやみてとあり、いたく劣れり、

落花　千葉　森田いし子

山寺の石階くだる　順禮の　背の日笠に　はな吹雪する

春雨　長崎　志田ます子

御像きざむ京の匠がはなれ家に鑿の音低う春雨の降る

春の夜遠征の夫を偲ひて　長崎　志田照子

旅順なる君か背いかにと西の方眺むる夕春のあめふる

春雨　京都　四辻まさ子

病み居ます母と昔を語り合ふゆふべ靜にはる雨のふる

梅　筑後　宮原彌野子

少女等が遊びすてたる庭の上に小猫眠りて梅の花散る

名所の遠乘　本郷　中村八千子

あて人の駒の嘶き遠くなりて花に暮れゆく小金井の里

○　大阪　田中瑜璘子

立ち昇る煙は空にかすみつゝ桃さく村は月になりゆく

菫　上總　齋藤靜枝女

去年迄はすみれ／＼と喜びし春子世になし誰に與へむ

いづこかの雑誌の課題を撰ひし折見たる心地す他の作をひそかに盗ひて投稿する如き不德の女子はあるまじければ同案なるべし今後も作者みづから自らな審んぜられたし

利根の川邊にて　栃木　木村靜江

白帆一つ眠るが如く霞みゆきて利根の大川春の日闌ぬ

○　芝　佐藤しげ子

霧抱きて昔をしのぶ欄干に桃のはなちる行く春の夕

春雪　大阪　岡市岸子

をり／＼は囀りやみて羽はらふ窓の軒に淡雪かゝる

春月　伊勢　石玉よし枝

朧げにかすむ彌生の月おびて淀川くだる宇治のしば舟

耳なれたる心地するはわがひがおぼゐにや

佳調

春季雑詠　上總　齋藤雷子

花笑みぬ鳥は歌ひぬ蝶舞ひぬ樂しからずやこの野邊にして

春曙　伊勢　岡島いは子

朱の雲紫の雲うすれ行きて花のみしろし春の曙

春季雑題　神戸　鈴木まさ

小蝶とぶ菜の花がくれ行く小川誰がながしけむ笹舟二つ

春の歌のうちに　越後　荻野てる子

花見舟岸の木隙につながれて春雨細くちる櫻哉

春の歌の中に　神戸　鈴木雅子

少女子が歌はきこゐて赤きりボン見ゐがくれする里の菜畑

なりにふれて　越後　吉田操子

見おくれはわれを敎へます母君のみがしら白う老いましにけり

霞　栃木　木村つゆ子

一村の春をば他所に流さふる十重の霞よ永久に棚ゐされ

春季雑題　越後　高橋みどり

そゞろにも笑みかはしけり手に取りて櫻花散る朧月夜に

燕　石見　宮内豊美子
緋桃咲く賤が伏家の軒に来て去年のふるすをとふ燕かな

○　信濃　綿貫幸子
さやかなる月の宮居をうちあふぎ父なつかしの涙あふるゝ

曙花　大阪　田中つれ子
白み行くあたりは花の峯ならむ松の外山はいまだ夜ふかし

春遊　鹿児島　中野せい子
文机はちりにゆづりて花盛りきのふも今日も遊びくらしつ

花下惜別　大阪　華子
いまさらに別るゝ袖のをしきかな友とやよひの花の下かげ

浦畑　鹿児島　吉満すがれ
日影さすうらの畑のうらゝかさ菜の花さきぬ小蝶狂ひぬ

春季雑題　大分　末松千代
櫻ちる紀念碑のあたり静かにて出征の軍人二人たゞずむ

春季雑題　長門　つれよ
ゆくら〱春の日長を旅にもだにゝ夕日を遠く花野に追ひぬ

春風　越後　和歌田登子
釣床にのり　書読む少女子のりボンの上に花ちりかゝる

春雨　津市　永田かず子
つれ〲を訪はれてうれし菜のとに花まつころの春の村雨

月前の梅　越後　和歌田静子
月ゆゑに窓の戸さゝすれし夜半の枕にちかく梅かをるなり

春風　藤波女子
春雨の風やしぶきはしのげどもわが身のしぶき知る人もなき

春夢　播磨　松田千代子
春風にさゝ波よせし池水と来る[illegible]

氷解題　越後　渡邊房子
行く水の音も長閑に隅田川花も柳もかすみわたりて

春月　岡山　濱子
花ふゝきすさぶ吉野の小夜ふけて櫻にねむる朧夜の月

折にふれて　信濃　綿貫幸子
あたにおく露を拂ひて山櫻花はいよ〱色まさりぬる

折にふれて　河内　竹内歌子
朧夜の月は霞に消えそめて花の雲散るみよしのゝ里

報國　岡山　鵜上政子
梵鐘もたゞ一うちと勇ましく出たつ門に花盛なり

春季雑詠　福井　石井みき子
何處にか船をよせばや隅田川朧月夜の花の下蔭

落花　安藝　松阪梅子
水ごりをとりつゝいのる女ありて音羽の瀧に花ふゝきする

春興　河内　竹内歌子
いと惜しき春日もいつか暮れそめぬさらば別れん花よ小蝶よ

霞　下總　石渡つれ子
名物のさくら炭やく畑よりさくらが岡はかすみ初めけむ

立春　下總　石渡つれ子
山里も汽車の便りに春の神早や來ぬらしも朝かすみせり

春の月　下總　石渡つれ子
ことほぎの酒のむしろを浮かれ出でゝ春おもしろの月を見る哉

春色　大阪　堀川義子
しら濱の砂の八重路を見わたせばかすみにうかぶ沖つ島山

春　作　　東京　齋藤すみね

散りかゝる花に名殘をゝしむ間にいつしか春も暮れ果にけり

春　雨　　香川　稲家そね子

春雨は春の女神の乳汁なるか降りて色めく野邊の千草の

春　朝　　下都賀　眞弓淑子

うら／＼と黄金波よる花の上をつばさ輕げに蝶のたはろゝ

春　宵　　信濃　安孫子美津子

月も朧花もたかすむ春の宵妙さながらに鐘の音きく

春　海　　京都　木田たつ子

ほの／＼と明けゆく春の海原に霞むはいづこ隱岐の島山

折にふれて　　美濃　千秋子

菫草を摘みては捨てゝ又摘みて野遊ぶ子等のかへりをそきよ

殘　雪　　佐倉、平田すゞ子

春の月もうときき木かげの庭の面にきえのこりたるこその白雪

月　　讃岐　丸山匡子

御軍に召されし背子は今宵何處駒たてゝましてて彼月眺めおはさん

花の歌の中に　　越後　はなか女史

汐風に飛山櫻ちりわらしみぎはに寄する花の白波

春季雑詠　　栃木　一葉

菜種畑麥畑つゞくあぜ道を興のうなゐ子胡蝶おひ行く

櫻　　石見　齋藤ゆり子

世にはねし呉竹が家の裏庭に葉櫻ちりて靜かなり

春季雑題　　和歌山　西口峯子

さめてなほ枕のあたりかをりけり夢につみてし野邊のすみれに

春　雨　　名古屋　元綱千代子

なり／＼は鳥の羽風に桃ちりて声の若葉に雨靜なり

殘　鶯　　和歌山　西口峯子

ほゝゑみて耳かたむけぬ少女子は梅が香かをる鶯のねに

野　遊　　備後　筒川陸

妹と霞分けつゝ追ひ行けば花野あたりに蝶はかくれつ

折にふれて　　美濃　千秋子

朧月夜聞きとれ居れば尺八の曲は追分ふく主や誰れ

櫻　狩　　秋田　浦井松子

なつかしや君と吉野の櫻狩花の吹雪を袖につゝみて

燕　　石見　宮内登美子

花瓶にさゝんと思ふ青柳の枝をならせじと燕とび來ぬ

春　曉　　越後　しげ子

春の夜をおもひあかしてなかむれば梅の梢に月いらむとす

春季混題　　群馬　羽鳥あや子

金屏の紅きぼんぼり影ふけてひゝなが殿に桃の花ちる

春の歌の中　　上總　西藤さわ子

姫君が化粧の水汲む井のほとり旭匂ひて紅梅のちる

春　蝶　　越後　はなか女史

毛糸編むその手やすめて菜の花を離れし蝶の行へをぞ見る

紅　梅　　東京　みき子

我か宿の紅の梅咲きそめてうたふ鶯ふしもなれたり

柳　　東京　みき子

去年植ししだり柳の萌ゐいでゝ燕一つがひ日每訪ひくる

野　遊　　東京　幹子

里の子が唱歌うたひてあそびをる春の野邊こそたのしかりけれ

霞　下谷　某女

舟出するみいくさふれをおくらんとたちいでて見れば霞たなびく

春の歌　東京　みき子

梅さきてうぐひすさへもきなくなり歌よみがてらとひきませ君

霞　東京　幹子

見わたせどそこともわかずなりにけり霞やいくへ沖つ島山

折にふれて　伊勢　岸田ちゑ子

砲とりて賊を討ちにと行かましを我そ甲斐なき手弱女にして

折にふれて　淡路　磯部てい

病む妹を[illegible]にたすけて早咲の櫻にかゝる春の雪みる

本所の春　下関市　太田さと

亀山[illegible]で見れば百舟の[illegible]す限りほばしらのかげ

春の[illegible]　淡路　松月女史

遠山はかすみこめ[illegible]けちぬの[illegible]がさとる海士も春にあはまし

○　相模　真久ゝ女

[illegible]ちとめし鴬を[illegible]りて酒くみていくさを語る山守の宿

月前帰雁　神田　佐藤千代能

かへる雁せめてはかれをみるへきにあまりに月のおほろなるかな

夜梅　越後　はなか女史

苔むせる石燈籠に灯を入れて夜の梅をば眺めつる哉

都春月　香川　三崎ため子

大路行く電車の影もおぼろにて都にかすむ春の夜の月

○　伊勢　石王よし子

香にゑひて菫の花にぬる蝶の夢[illegible]かす里のうなゐ子

春の歌の中　南越　斎藤美智代子

黒衣を肩にものいふ乙女子の白きうなじに花ちりかゝる

歸雁　千葉　藤田誠子

打むれて昨日も今日もはろばろと霞める空を歸る雁がれ

春旅　大阪　前田継子

青柳の里を霞と立ち出てゝまた聞むかふ菜の花の村

春季雑題　栃木　一葉

情[illegible]に笑をかくして舞姫のよれるおばしま櫻ちるなり

○　横濱　斎藤あい子

試みに[illegible]なとへは忘れきと桃ちるかけに眠る猫かな

春季雑題　尾張　定子

今賞衣賞衣といひて稚子の指折り待ちし春は来にけり

朝の海　徳島　松浦ちゑ子

ほの〴〵と海べのあたりあけそめてみどりの上に白帆みゆけり

春季雑題　伊勢　山本しげ子

乗合の舟そよろに琵琶ひきぬ月朧なる川ぶれのうち

春季雑題　尾張　定子

花籠の花にたはれて少女子のまへにうしろにとふ胡蝶かな

初櫻　岩代　菅野和子

ひら〴〵と胡蝶の数の日に添へて千本のさくら咲きそめにけり

春季雑題　神戸　鈴木かつら

二日三日降る春雨に人たねて花の下道すみれ咲きけり

梅花盛　神戸　高井こさく

小犬ふす菜園の軒の梅数株日影のどかに今盛りなり

○　神戸　高井小菊

夕まぐれ人なき殿のおばしまをかすめて花のふゝきこそすれ

子日　周防　遠用愛子
姫小松ひかでやまめや春霞子の日の野邊はたちかくすとも

雨中鶯　長崎　古賀秀子
しめやかに降る春雨に鶯の淋しきこゑをもらしてぞなく

○　遠州　山本資子
朧月夜知らぬ山路を越ゆ出でゝ桃咲き匂ふ野邊に來にけり

春雨　山城　古川よね子
玉つばき落つる音して薮かげの芝生の上に春雨ぞふる

春月　長崎　古賀秀子
おぼろげに霞むもあはれ春の夜の月は光を花にゆづりて

若菜　長崎　横山しげ
若草の緑をいそぐ春の野につれなくのこるこその白雪

春夜月　吳　長谷川芳子
春の夜に花の香わけてさまよへは月をかすめて花の散り來る

春月　丸龜　片山ます子
咲きにほふ床しき軒の梅が香にうかれ出けん春の夜の月

菜の畑　陸前　高橋みよし子
道ほそき背戸の菜畑を少女子のかへる袂に蝶のむつるゝ

春雨　吳　長谷川よし子
をやみなく降る春雨に打しめりみどり添ひ行く青柳のいと

霞　吳　芳泉
山里は花も咲かねどほのぼのとなびくかすみに春ぞ知らるゝ

軍艦　横濱　實仲子
君のため國の爲にと武士のみくにを守る軍艦かな

聽春雨　伊勢　森露子

庭もせのしだり柳に露みせてふるとしもなき今朝の春雨

○　岡山　近藤いそ子
たれこめて今日もくれゆく姫宮にまき絵の文箱ぬれてとゞきぬ

○　岡山　近藤いそ子
那須七騎こまのあがきに音もなし草青かすむ野はひろびろと

春季雜詠　出雲　初子
夕ひばり麥生におちて馬子かへる土橋のあたり春雨のふる

春季雜詠　筑前、朱雀きぬゑ
たちかへりすむ人もなきあばら家の軒端に匂ふ白梅の花

春の曲　群馬　佐藤けん子
日は長く洞庭のうみに春滿ちて岳陽の樓上笛の音のする

鶯　和歌山　國中てる子
巣ごもれる谷の戸を出でなき初る野路の鶯めづらしき

春季雜題　大阪　田中蘭雅子
春雨におつる櫓の音もして一人さびしき夕暮のいほ

朝霞　印旛　平田すゞ子
白雪の八重かさなれる富士のねを春はかすみのたちかくしけり

○　鹿兒島　三輪樂子
櫓の音はさだかなれどもゆく舟のかげおぼろなり春の夜の月

春曙　伊勢　大關あや
月落てからす鳴なり山寺の花よりしらむ明ぼのゝそら

野邊　東京　武田すみ子
いとゆふの霞める空にあそぶ日は人さへ野べに心うきたつ

春　大分　小野光子
國里も花さきそめし此頃はまして都の春ぞこひしき

初句以決原作「花は笑ひつ鳥歌ふ都の春はいやまさるらむ」

○　伊勢　櫻子

長閑なる野べより野べにさまよひて今日も家路はたそがれにけり

山家椿　神田　佐藤千代子

まろすなくこゑもかすみてほろ〳〵と椿こほるゝ山下の庵

梅　呉　長谷川芳子

さほ姫が袖をしれてや来りけん枕に近く梅の香ぞする

○　在高田　小林静枝

わらを打つ音ものどかに聞ゆなり小雨はれたる小山田のさと

春季雑題　長門　梅田染子

花咲かば来ませと云ひし友病んで花の盛りに病なとひぬ

春季雑題　長崎　志田照子

櫻散る左近の馬場はたそかれて三日月うすく細き雨ふる

平和　近江　室谷静子

百島の寧も狹隅のうちにして胡餉の煙たな引ける見ゆ

○　京都　わかな

さし向ふ月の鏡にあすの日のよそほひこらす山櫻花

平和　近江　室谷静子

高麗の波風も静かに春たちて晴れたる空に富士の山見ゆ

春月　本郷　中村八千子

君のせて港を出づる軍艦のかげおぼろなり春の夜の月

春の夕暮　伊勢　江見すゞ子

うなゐ兒が野辺つむ煙そのまゝにかすみとなびく春の長閑けさ

時事　岡崎　清美子

君の為め身を殺するも惜せぬをなしふる親の心や如何に

春季雑題　越後　前崎照子

月かけははしら高く打かすみ軍のあとの海しつかなり

春季雑題　美濃　野村ひさ子

あるじ居らぬ宿にも梅は咲きいでゝ朝かぜにほふ破れ垣のもと

春季雑題　長崎　志田照子

都なる友が情の玉章にそへて送りしすみれ一はな

出征の兄を思ふ　長崎　志田照子

のどかなるけふの春日を旅順なる我兄上はいかにおはさん

てふ　長門　飯田ふじ

少女子か土筆摘む手も止めけむ艸に眠れる蝶の長閑けさ

てふ　長門　飯田ふじ

春の日に土筆摘み遊ぶ少女子に胡蝶とまりてゆめまとかなり

殘雪　函館　はな

春といふ名に絆されて野べとへば去年の儘なる雪ぞのこれる

○　對馬　岡永よし子

被衣に手綱とる手のたゆたひや勿来の關の花ちりかゝる

軍艦　神戸　きぬ子

あたふれのたかき帆柱うちたふしまた沈めけりわがいくさ船

霞中船　京都　西澤まつ子

沖遠く船は霞をわけ入りぬ我帆も人はさこそ見るらめ

春雨　水戸　綿はる子

更けぬるか行きかふ人の音たえて大路静かに春雨の降る

春曉　大阪　三宅眞子

いぢらしや名殘の月を惜きすてゝは別はるつぐる鐘の聲

園外春風　本郷　中村八千子

雲の峯もゆらぎて華かなる御國の御殿に春風のふく

桃花　越後　石井しん子

大空も醉へるばかりに匂ふかな岡べにつゞくもゝのさかりは

春雨　日本橋　行形よし

影淡き歩路もいつか蹊めはてゝさひしくもきくはる雨の音

春野　山城　中川さた女

紅きすみれたんぽゝ籠に頬笑みて乙女なゝやつ歌につみなき

春遊ひ　長門　飯田ふじ

思ふどち野山の花にあくがれて今日もきゝけり入相の鐘

春夜鐘　若葉

朧夜におとなふ人のおとたゑて月しづかなり山寺の庭

春の歌の中に　岡山　橋本芳子

つり床に眠る小女のくろかみにさくら一片かるくかゝれる

春季雑題　四日市　温子

なき母の心づくしの衣きてすみれつむなり姉と妹

野遊　伊予　婦志子

思ふどちかご携へて春ののに楽しくけふも若菜つまなん

春季雑題　和歌山　谷井済子

霞かり朧朧なへていそくらん花の雲ちる春のあけぼの

桃　仙台　虎谷しげ子

節賓りの劇氏長閑にはら〳〵ともゝの花散る山中の村

春雨　仙台　佐藤はるぢ子

蝶と笠柳小路を踏り行く眞葉静かに春の雨降る

我が春の心　紀伊　田端艶子

世の人の浮かるゝ春になとてかくわれのみ一人秋こゝちする

雨後春月　名古屋　村越深雪子

春雨も暫し途絶ねて山の端の花よりしらむゆふ月の影

春夕暮　長野　蝶子

夕月の影見ねそめて牧童のれり行く野路に桃の花散る

○　京橋　八代春子

病む母を肘にたすけて花園をしづかにめぐる春の夜の月

梅　山形　榴岡みつ子

さきそめし梅の初花かをるなり文よむ窓の風のまに〳〵

折にふれて　茨城　大橋夏子

我國の櫻の花を移し植ゑて祝へますら雄西比利亞の野に

原作「花のにほひに醉はしめてうてやますらを醜のわひすら」

○　高知　田中泣花

青柳に春風ゆるく音づれて蝶二つ飛ぶ川そひの道

田上艶　名古屋　はる子

わかなつむ未通女の顔もわかぬまで霞みこめたる小田の細道

春風　大阪　楠瀬すか子

いつしかと氷も今は消ねはてゝ浜花のあしに春風そ吹く

春季雑題　京都　堂子

しづかなる片山里も花咲けは都人にてにきはひにけり

雲雀　讃岐　うるしはら女

里の子に菫の床をゆづり置て雲井はるかに雲雀鳴くなり

新體詩

兵士の母

下野　渡邊ます子

一
峯の松風音訪ねて
寒さ烈しき山里の
枯木のかげの茅屋に
紡ぐ車のひゞくなり。

二
凍る霜夜の更けゆきて
細き燈火消ゆるまで
絲に纏ふ其の音は
よな〱かはることもなし。

三
面やせ頭雪なせる
老婦は腕に力こめ
眠むき眼をしのびつゝ
紡ぐ勞れやいかならむ。

四
紡ぐ勞れも何のその
御國の爲と大丈夫が
ロシヤの海邊に起き臥せる
勞れを思へばいと輕し。

五
紡ぎ終りて織りなして
やがてぞ送る白布は
ふかでに傷む大丈夫を
いやすたつきとなるとかや

六
さばれ勞れも何のその
我も大和の國民ぞ
たとひ年波よるとても
心はおなじ國の爲。

七
急ぐ車はたゆみなく
國を破りてひゞきけり
この眞心ぞ千代八千代
國の固めとなりぬべし。

評、山間茅屋の老女亦此心あり、眞に是れ國民的歌學

ナイチンゲール孃を讀みて

秋田　浦井松子

荒ぶる風の吹きしより
野邊はかばねに埋まりぬ
苦しき息もたえ〱の
折しもナイチンゲール孃
慈善に富めるみとり婦を
戰地の空に向ひけり
旅の勞も忘てぞ
ありて看護をおこたらず
衣をそゝぎ寢具まで
みとる心の優しくも
慈愛の女神と崇めつゝ
其の親切を喜びぬ
愛の光の漲ぎりて
滅する時しなかるらん
戰はげしきクリミヤの
又は痛手の武士が
露營の枕あなあはれ
其の苦みを救はんと
三十四名率きつれて
きゝしにまさる慘境に
なやむ兵士の傍らに
膿を潔め傷洗ひ
戰塵匆忙の其中に
孃をうやまふ兵士等は
あつき涙をながしつゝ
あゝ偉なる哉赤十字
孃の功業とこしへに

評、措辭拙なれど、散文を變じて韻文となしたる手際、さすがに捨て難し

菫

讃岐　はなか女史

黄金の秋ふりかざし、
花より花にあこがれて、

舞ひゆく蝶の羽衣を、
呼止むすべもあらざるか、
せまき葉蔭ににほひつゝ、
かこち顔なる花すみれ。
舞ひゆく蝶の末遠く、
夜の袖にかくるゝを、
いかに悲しくながむらん、
葉がくれに咲くすみれとて、
花の香りはあるものを、
蝶はなさけを知らぬかも。
春はきぬれどこゝのみは、
ねむれる蝶もなかりけり、
すみれの花の長しへに、
深き思ひにしづめるか、
いつきて見てもうなだれて。

評、宛然畫を見るが如し。

渡し守

陸前　渡邊しげ子

明星やゝにうすらぎて　水のもしろき朝ぼらけ
船ばた近くよりそへば　さわやかなりよ我心
みなかみ花やさきぬらん　うぐひすなきやさかるらむ
春は新に来ぬれども　身はその儘の渡しもり
富はあだなり白露の　はかなきいのち何かせむ
岸よりきしに渡すべく　我に三ひろのみなれ棹
世の人思になやむとき　夕ばえ空にみだるとき
絶えぬ流に棹させば　たひらかなりよ水の面
今日のつとめをなへはてゝ　今日のつかれをいやすべく
ひとり手にくむうま酒の　うまき味はひたれか知る
竹あむ窓をもる月に　しばしこゝろをまかすころ
夢かあらぬか松風か　声にさゝやくみづの音

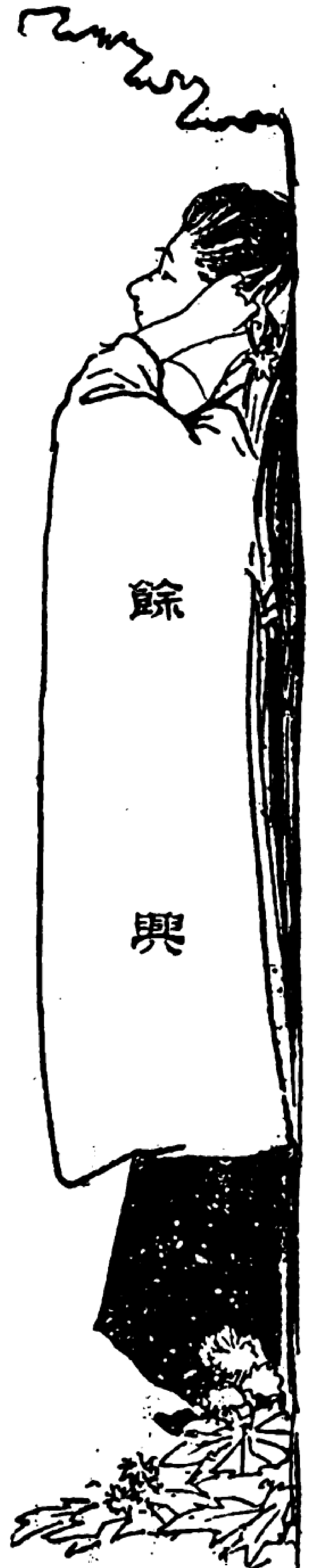
評、婉曲。

誕生

長野　高木もゝ代

夕我世を照らしたる　光涼しき彦星の
母屋の屋根に落しとき　産聲高くひゞきけり
夜の帷幄を拂ひのけ　日の神夢をさますとき
玉より清きやは肌は　ぬるき産湯をたち出ぬ
緋の産衣身につけて　楓のごとき掌
ひらくは神の授けます　希望を今につかむとや
軒端をかこむ白露の　晴れ行くめとゐ嬰子の
哀しきまで千代となき　その行末を祝ふかな

評、調も情も共にめでたし、



初の舞踏會　壹幕

（少女芝居）

巖谷小波譯

登場人名

光谷花子

同　照子

兩人共十七八歳、從姉妹同志

場所

ある大都會に於ける光谷家の邸宅

道具書割

舞臺一面花子嬢の居間、右手に大なる書棚あり、左手に鏡付の化粧臺を置く。舞臺眞中程に卓子椅子杯よろしくあり、右手に開扉。この處出入することある。

第一齣

照子、は机に凭り書を讀んでゐる、此處へ花子手に二枚の入場券を持つていそ〳〵と、入つて來る。

（花子、瀟灑とした衣服を着、顏も少しくお化粧をてゐる。）

花「照ちやん〳〵。ちよいと、まアお喜びなさいよ。あの舞踏會へ行ける事よ。疾うから行きたい〳〵と思つてゐた、あの舞踏會へ、そら御覽なさい、

入場券が二枚ありますよ。」

（照子、花子よりは服裝も劣つてゐて、此家の厄介になつてゐるらしき樣子。）

照「まア、本當に嬉しいこと、あの伯父さんは私の分まで心配して下すつたの？」

花「さうなのよ、貴方も一所なのよ。本當に私、疾うから行つて見たいと思つてたら……。まだ行つた事がないんですもの……、それに貴方と一所だから宜いわ、あゝ嬉しい。」

照「ホヽヽ、花子さんは恰で夢中ねエ。だつて貴方、まだその日までは八日もあるぢやありませんか。」

花「でもその間に、いろ／＼の支度をしなけりやなりませんわ、八日位は直ぐ經つて了ふ事よ。母樣はもう仕立屋へいろ／＼な見本を持つて來いと誂へて下すつたの。あの……私如何樣衣服にしませう。形は普通の長いのにして、色は如何樣のが良いでせうねえ？ それから地と柄ですが、あゝ何うしたら良いでせう。私又心配に成つて來たわ。」

照「何ですねえ花子さん。其樣ことばつかり氣にして、服裝なんか如何樣でも良いぢやありませんか。それよりか私等は、その日から初めて交際社會へ出る人ですから、心得が餘程肝腎ですわ。充分立派な敎育を受けた、良い躾に育てられたやうに、ちやんと見られなければなりません。若い鵞鳥が初めて世間へ出たやうに、ぺちや／＼喋つたり、孔雀のやうに羽ばかり奇麗にしたつて、何の役にも立ちませんわ。」

花「オヤ、又照ちやんのお株が始つた。貴方は恰で本に書いてあるやうな、むづかしい事を仰しやるのねえ。舞踏會ではそんな敎育なんて、むづかしい事なんか入るもんですか。中入の時も、舞踏の御對手とお談をするのに、歷史の年代記や、文典の規則なんか、ホヽヽ誰が云ひ出すもんですか。其樣ことをしたらみんな退屈して、直ぐ嫌はれて了ひますわ。」

照「あら、花子さん、誰が其樣ことを申しました？ですが眞逆男の方を對手に、御化粧の談も出來ませんし、ましてお天氣の事なんか……」

花「いゝえ、學問の事なんかよりは、普通の事が優ですわ。場所が場所ですもの。」

照子怫然とした樣子で、

照「そんな事はありませんよ。男の方にはあんまり下らないことを話すよりは、些と高尚な、身のある話の方がよろしいのですよ。」

花「では、ちよつと此處で試して見やうぢやありませんか。」

照「何を？」

花「その舞踏會でのお談話を」

照「でも、あんまり馬鹿らしいぢやありませんか。」

花「イヽエ左樣ではありません。串戯にした事でも、よく利益になることがありますわ。ですから兩人で一寸やつて見やうぢやありませんか。照ちやん貴方まア男の方におなりなさい！私貴女になりますから、それで孰方が支へるか、支へた方が負よ。」

照「そんなら、花子さん、貴方の云ふとほりやつて見ませう。では私は男の方に……若い學士のつもりで……。」

花「學士ッて文學士ですか、醫學士ですか。」

照「アラ、左樣ことは何うでも良いのよ。學士は學士ですから。」

花子は笑ひながら、

花「ぢや照ちやん。學士からお始めなさいな！」

照子は腹立たしげに、

照「だつて花子さんは、少しも眞面目にならないんですもの。」

花「イヽエ眞面目になる事よ。さアもうほんとに眞面目！——まア一通ズーッと室の内を廻つて、それからもう學問があつて、何でも知つてるやうな顏付をして、さあ初める事よ。宜う御座んすか。この室が舞踏會場ですッて、それから照ちやんが若い學士、私は貴女で、かう勞れたと云ふやうな

風で、安樂椅子に凭つて、そうして扇で風を入れてゐますわ。』

と花子はその身振りをして、眞面目な顏で、

花「オヽ大さうお暑う御座いますね。もしあの……このお暑では、寒暖計は何度位で御座いませう？列氏では、エヽ攝氏で、イヽエ、華氏ならば幾度位で御座いませう？』

照「アラ、貴女が左樣ことを云つちやをかしいわ。』

花子は平生の調子に反つて、

花「だつて、教育のある貴女なら、其樣こと位知つてますわ。それに談話は男の方の方から仕掛けるものでせう。』

照「それは左樣かも知りませんが、でも今のは餘りですわ。』

花子は笑ひながら一寸側を見て、

花「まあ今のは串戲ですけども……』

と少しく舞の調子を上げて、

花「さあ、今度こそ本當よ。』

照「ぢやもう一遍初めからやりませう。』

花「はア、よろしい。だが舞踏會でよく殿方がなさるやうに、一寸した世間談位になさいよ。さうすりやア私は、それを面白く談して行きますから。』

照「さあ初めますよ。』

花子は又椅子に凭れ直して、扇で胸の處を煽ぎながら、

花「さあ支度が出來ました。』

照子は男の樣な作聲で、

照「お孃さん！貴娘は今晩、初めて舞踏會へ御出ですか。』

花子は眞面目な樣子で、

花「ハイ、初めてゞ御座います。舞踏會と申すものは、極めて皮想的な娛樂で御座いますが、初めての舞踏會であると致しますと、何となく深い意味があるやうで御座います。總じて物の初めてと申しますものは、格別なもので御座いまして、まづ初雪、初音、初の試驗、初の節句、若いお醫者の初患者、

初こ……」
花子は初戀と云ひかけて、ハット氣がついて、
花「初東風なぞは心持の良いもので。それから歴史上でも、第一プニックの戰爭、第一革命、ナポレオン第一世なぞは、有名な者で、初……」
照子はそれを引きとつて、
照「初の舞踏！さあ私がそのお對手を願いたいものですなア。お孃さん！」
花「ハイ、どうぞお願ひ申します。さあ貴方の御名前を、私の番附に御書き下さいますか。」
と云つて花子は戲れて、
花「これが正式の受取證です。現今の證文は、白い紙に黑く書きますが、昔時は相談が極ると、手を打つたものださうで御座いますね。」
照子は眞面目で、
照「オヽ貴娘は私とのお約束を忘れて、他のお孃さんと約束をするとでも御疑で御座いますか？イヽエ、それならば決して御心配には及びません。イイエ、後で些と位お酒を戴きましたところで……」
照子は一寸自分の頭を指して、
照「ナニ澤山も頂きませんが……それにこゝの主人は良い酒を……良い三鞭酒を持つてをりますから、大丈夫で御座います。しかし貴娘は三鞭酒を召上りますか、お父樣はお嗜好でゐらつしやいますか、お母樣は如何で御座います？」
花「左樣で御座います。まあ孰方かと申しますと、澤山戴く方で御座います。一体人は、如何してお酒をそんなに嗜くもので御座いませう？何うも解りません事ねえ……併し露西亞では……。」
照子は平生の語調にてそれを遮り、
照「アラ、お待ちなさいよ、私は三鞭酒のお談をしてゐるのに、花子さんてば、露西亞人がお酒を飲む原因なんかを云つて入らつしやるんだわ。」
花子は眞面目な風をして、
花「お酒を良く飲む國ですから、其處の酒精税は…。」
照「オホヽヽヽ、可笑しい事よ！」

花「それ御覧なさい！舞踏會で此樣お談を申したら、可笑しいぢやありませんか。」

照「あら、花子さんは、私をお弄戲なさるんだわ。先刻の初雪……ナポレオン一世の續は如何なすつたの？」

花「あれは照ちやん、貴方にお談の題をあげたんだワ。初雪と云へばそれから歌も詠めませうし、小說でも新体詩でも出來ませう。ナポレオン一世については、政治學でも國際法でものお談が出るでせう。だが舞踏會で其樣ことを云ふのは、造花を普通の鉢に入れたやうなもので、面白いことはありませんけれども」



照子は思ひ切つて、

照『花子さん、それぢやア貴方と私と、役を代つて見ませう。貴方男におなりなさい！私女になりますから。さう貴方の樣にむづかしい事を云つちやア詮方がありませんもの。私もつと上手にやりますワ。』

花『さう、そんなら左樣しませう。だが私學士位ぢやいやよ。私大學教授になつてよ。』



照『あゝ良くつてよ、だが面白い事を云ふんですよ。』

照『それは解つてるワ。大學教授ですもの。』

兩人は役を代へて、照子は貴女になり、花子は男になる。

照「そんなら大學教授と、伯爵令孃とですよ。」
照子は花子がしたやうに椅子に凭れ、扇使をしてゐる。
花子は片手を背中へまわし、片手を胸に當てゝ、大股に二歩三歩あるいてゐる。
照「良う御座んすか。」
花「まあ待つて頂戴！志慮のある人は、言を云ふ前に、十分計は默つて歩行いてゐるものよ。」
照「では、まあ十分經過たとして。」
花「ぢや良う御座んすか。」
と作聲をして、
花「お孃さん！如何で御座います？この明く輝いた廣間、その中にいろ〳〵と美しく飾つた群集、なかなか奇麗で御座いませう。それから宴會の順序、それの色彩など、定めて御氣に入りましたらう。お見受け申せば、貴孃は舞踏會へは初めての御樣子で御座いますが。」
照子は冷然として、
照「ハイ、左樣で御座います。何うせ誰も一度は初めてと云ふ事を、越して來なければなりません。」
花「イヤ御尤です。初めてと申せば、一生涯の大事な第一歩ですから、これは困難なことで御座います。併し御覽なさい、此處では御婦人の足は、至つて輕いやうで御座います。若いお方は皆笑ひながら、さも喜ばしげに、初めての舞踏會に入らつしやいます。」
照「さう仰しやつて下さいますな。でも心配なもので御座います。殊に醜い者の身に取りますと……」
花「イエ〳〵何ういたしまして、飛んだ事で御座います。だがダルヰン氏の生存競爭と申す事が、此處でも御座いますかナ。」
照子はそれを遮つて、
照「オー〳〵、さうで御座いますとも、まあ譬へて見ますれば、今晩私のお友達が、コチルロンを踊る時に、花束を私よりは餘計に貰うやうな事が御座いますれば、私はそれを悔しいと思ひます。」

花『ハヽア、では丁度若い軍人が、初めて戰場へ出るやうな意氣込ですな。何の位戰利品を獲るか、何の位敵を倒すか、又若し一度雞頭を引くなら、何の位疵をうけるか。』

照『雞頭を？まア其樣ことを云ふのはお止しなさいよ。人が厭がりますから、』

花子は機嫌惡るく、

花『可笑しいわ、そんな馬鹿な事を云ふものですか。』

照子も全じく平生の語調で、

照『そら御覽なさい！あんまり知れ切つたことを云つてると、つい其樣なことを云ふやうになりますわ。』

花子は急き込んで、

花『イヽエ、其樣ことはありやしませんよ。』

照子も全じく急いた調子で、

照『おら花子さん、さうぢやありませんよ。私の云ふ事をすつかり聞かすに、貴方のお望とほりにすれば……。』

し又以前の貴方に成つて、

照『私のお化粧は貴方のお氣に入りませんか？私は美く見へませんか？如何で御座います？』

花子はます〳〵腹立たしげに、

花『良う御座います。貴方の爲さるとほりにすりやア、私は恰で案山子のやうなつて了ひます。』

照『花子さん、貴方怒つたの？』

花『知りませんよ。』

と拗ねて、

花『私は母樣の處へ行つて、衣物の見本を見て來ます。貴方は自分の思ふやうに、高尙な談話でも考へて居らつしやい！』

と花子はツイと此處を出て行く。

第二齣

照子一人殘つて、

照『オヤ〳〵到頭喧嘩になつて了つた。けども私達二人は、まるで氣質が異うんだもの仕方がないわ。』

花子さんは外見坊だから、派手な事ばかりしたがつてるんだもの。……この八日の間だつて、必然舞踏會へ出る衣服や、お化粧のことばかりで、夢中に經過つて了うんだよ。だが、その間私は何をしたらい丶だらう？花子さんに、もうちつと高尙な考をもつやうに云つてあげやうか知らん。それには、若い娘達が、夏にはもう秋の流行を、秋からもう冬の衣服ばかり苦にして、新聞を讀めばと云つても、流行欄ばかり見てゐるやうぢやアいけないと云ふ事を、よく云ひ聞かしてあげやうか知ら。それにしてもあ丶書籍を讀むのが嫌いで、何時も机の傍に擲りだして置くんだもの、本當に何うしたら良いだらう？オ丶さうだ、い丶事がある。矢張り私が馬鹿だつた。さうだ、今から私が花子さんのする事を、わざと眞似をしてやらう。だが、それと知れないやうにしなければいけない。何でも花子さんの嗜く事を好いて、花子さんのするとほりの事をして、何でも鏡に寫して見るやうにしてやらう。あゝそれが良い。さうしたら花子さんだつて、ちつとは氣が付くだらう。さう／＼、ではその積りにして居ませう。オヤッ足音が聞えるよ。花子さんが來たんだよ。』

第三齣

此處へ花子は再び入つて來る。

花『照ちやん、何うして？入つても良くつて？』

照『エー／＼良う御座いますとも。花子さん、堪忍して頂戴よ。串戲だから、怒つちやいやよ。私、私もあれから、自分の支度を考へて見てよ。伯母さんの許にまだ見本がありますの？』

花『はアありますとも、澤山あつてよ。孰れにしやうか、本當に迷つて了つたワ。』

照『さう、では私一寸見て來てよ。』

と照子はイソ／＼と出て行く。

第四齣

花子獨り殘つて、

花「それ見たことか、あの照ちやんだッて、到當負けて了つたワ。まあ私の狂言が、すつかり當つたと云ふものだ。併しこれが永く續けば良いが、あの人のことだから、御化粧の談が五分もつゞいたら、必然又退屈して了つて、また貴重な時間を無益にしたなんて、例のむづかしい事を云つて、又書籍と首引をするんだよ。何ぼ構はないと云つたつて、あの照ちやんの樣ぢやア困つて了うワ。髮もボー〳〵と亂して、お化粧なんかは滅多にした事がなく、平氣な顏で戸外へ出るんだもの、あれぢや餘り女らしくないと思ふわ。私一つ照ちやんにさう云つて、ほんとに注告して上げやうか知らん。女が少しも外見を構はないで、やれ學問だの、それ理屈だのと、むづかしい事ばつかり云つてゐるのは、ほんとに見つともないからつて……だがあの人のことだから、私が云つても聞くまいから……、……ア、何うしたら良いだらう……、オヽいゝ事がある。私が少時あの人の眞似をして、風采体裁に構はず亂暴にしておいたら、なんぼ照ちやんでも必然氣がついて、自分の惡い事が解るだらう。それが良い、〳〵。」

と花子は自分で頭髮を故意とかき亂だし、

花「頭髮もかうバラ〳〵にして、それから帶をかう曲げて、襟なんぞクシャ〳〵にして、それから袂も少し位ほころばして……。」

と花子は故意と自墮落な風俗をする。

花「さア〳〵これで出來上つた。ほんとにあの人は、何時だつてこの通りだワ……。オー照ちやんがもう來たやうだ。」

第五齣

照子は澤山な布の見本を持つて來て。

照「アヽ〳〵目移がして本當に困るのよ。花子さん何うしたら良いでせう。智恵を貸して頂戴な。私はねエ、この空色のを上衣にしやうと思ふのよ。だ

けどもこの薔薇色の方が、質が柔で、着よいだらうとも思ふのよ。まあ一寸花子さん！オヤ何うしたの？あら聞えないの？』

花子は入場券を手に持つて、一生懸命に見てゐる。



花『ほんとに良く出來てゐる事、餘程いゝ趣向だわ。この亞剌比亞文字の活字が良い格向で、そして此輪廓の旨く出來てゐること。アール、ヌー、ボーの上乘だわ。』

照子は見本に

見惚れてゐて、

照「何うしても迷つて行けない、この空色のにしたら、



條は黃にしやうか、細い黃金にしやうか、黃金の方が今の流行だけれど、何うしやう。オヤ、花子さん何を其樣に考へてゐるの？」

花子は書棚の傍へ行つて、一寸中の書籍を覗いて、

花「エート、さうだつた。古代の希臘だつた。」

と照子の云ふ事が聞えぬ風である。照子は少し怒つ

て、

照「花子さん、其様なことは何うでも良いぢやありませんか、古代の希臘は古代の希臘で良いぢやありませんか、それよりか私等の初の舞踏會の支度をするのが、今一番大切ぢやありませんか。」

花「だから今、舞踏と云ふ事を調べてゐるんだわ。照ちやん貴女知つてませう。古代の希臘には一風變つた舞踏があつたことを……オヽ韻律運動！……これが大切な問題なんです。何でも古代を穿鑿してからでなければ、現今の事は解りませんからねエ。」

照子はそれを遮つて、

照「ですけどもネ、私は思ふワ。今は最新流行の化粧法を、よく研究するのが肝腎ぢやありませんか。古代の毀はれたギプス細工なんぞは、如何でも良いのですワ。この花模様は似合ひますか。一寸見て頂戴な！」

と大きな布の見本を身体につけて見る、そして花子を見て、

照「オヤ〱、花子さん、貴女の髪は何うしなすつたの！大さう亂れてゐますよ。あら、帯が曲つて、アラ袂が綻びてるぢやありませんか。」

花「エヽ打つちやつてをいて下さい、構やしません、面倒ですもの。」

照「でも誰か來ると見つともないぢやありませんか。」

花「今、そんな事をしちやアゐられません、古代希臘を調べなけりやなりませんもの。」

照「オヤ、花子さん、貴女は何うしたの、私迷つて困るから、貴女一寸見て頂戴な。ねエ、孰方が良く似合ひませう。そして色は何が良いでせう？万一廣間にある長倚子が、深紅色だつたら、私、空色の衣服が良く適合るだらうと思ひますワ。」

花「さうでせうかねエ、私、まだ色の配合についちやア、餘り研究もしませんが、併し色彩解剖の學理上から云つたなら……。」

照子は腹の立つ樣子で、

照「お止しなさいよ、そんなむづかしい事が、どうして流行に關係するもんですか。ぢや良う御座んす、私伯母さんの許へ行つて、新しい時好雜誌を借りて來ますワ、それで私は極めて了ふからい丶…………。」

と照子は出て行く。

第六齣

花子殘りて、

花「オヤ、照子さんは到底大變な衣道樂になつて了つた。私もあの人があ丶早く彼様になるとは思はなかつたが、今度の初めての舞踏會と云ふのが、餘程利いたものと見えるワ。それとも照ちやんだつてお化粧が好なんだが、それを今までは、口に出して云はなかつたのか知らん。」

と一寸考へて、

花「イヤ〳〵、それどころぢやアない、私も些と自分の事を考へなけりやならないよ。あんまり馬鹿〳〵しいからね、併し私も折角これまでやつたのだから、もう少し調べて見たく成つた。」

と書棚の處へ急いで行き、中からいろ〳〵厚い書籍を取り出して、

花「これが歴史、これが文學史、神話、地圖、百科字典、オ丶〳〵これで揃つた。」

と机の上に澤山の書籍を列べてゐる。

第七齣

照子は雙手に簪箱を持ち、十二分の盛裝して、

照「ア丶大さう氣が揉めたこと。花子さん、この簪は私に良く似合て？　それとも丶う少し赤い方が良いでせうか。何うでせう、一寸見て頂戴な。」

と鏡臺の前に坐り、いろ〳〵の簪を頭に挿して見る。

花子は一寸と振りむいて、

花「良いこと、大さう似合つてよ！　まるでオルレアンの少女の様ですワ。」

照「本當？」

と照子はいろ／＼挿しかへては、鏡に寫して見る。
照『私には矢張り空色が良いと思ひますワ。』
花『まア、照ちやん、一寸お聞きなさい。』と小聲に讀む、『シルレルのオルレアンの少女は………。』
照子はそれを止めて、
照『頭髪はよく結へても、何うも良い簪が無くつて困るのよ。花子さん、この薔薇は何うでせう？ そして衣服と同じ色のリボンをつけたら、丁度この簪にあるやうにしたら何うでせう？』
花子はその中他の書籍をあけて讀んでゐる。
花『とう／＼遂には斷頭機に………。』
照子はこれを聞いて驚いて、
照『何ですッて？』
花子は聞かぬ風にて仍讀んでゐる。
花『オヽ此處はもう革命時代だ。もつと先をあけて見やう。歴史は實に速いものだ。オヤ、もう此處よ、詩と歴史との比較は、ほんに面白いものですねエ、ですから人は一寸した例を知らねばならないのだワ……。』
照『肩掛は室に入つた時に、何うして居たらいゝものでせう。矢張り卷いておきませうか、それとも一寸手に持つてる方がいゝか知らん。オヤ、この手套は餘り良い色ぢやなかつたねエ。あんまりクリーム色が強いから……。』
花『クリーム色、クリームですか？ それはいろ／＼意味のある言葉ですよ。一寸字典を引いて見ませう。』
花子は字典を繰つて、
花『C―Cr―Cre―r―eme………エヽ、社會の最も良き階級――美味なる食物――赤味を帶びたる黄色……。』
照『オヤ、花子さんては………一々書籍を手に持つて、字なんか調べて居らつしやるよ。まア驚いたことねエ。』
花子は冷かし氣味にて、
花『お氣に入りましたらう？ 照ちやん、私のする事

が、貴方のお嗜好なことですから。初めての舞踏會に行くのに、餘りお化粧の事ばかり氣を注けてもいけませんからねエ……。」
照子も同じ樣に、
照「さう。では私のする事も貴方のお氣に入りましたらう。貴女のなさる樣に、お化粧の事ばかり氣にしてますから………、お化粧は若い娘の大切な身嗜みだと云ふぢやありませんか。」
此時外に誰か來る音する、照子はそれを聞きつけて、
照「オヤ、誰か來たやうよ。が、アヽ女中のやうですねエ。何しに來たんだらう？」
と障紙を少しあけて、
照「オヤヽ、さう、では此方へお出し！」
花子は獨り言に、
花「必然私の誂へといた衣服の質だよ。」
照子は書籍を一册受取つて、
「オヽ、社會字彙の第一卷！ さう〳〵、私が豫約しておいたんだ。」

とそれを無造作に臺の上に置き、
照「後で書棚へ入れておきませう。」
花子は違つたと云ふ思入れで傍を向き、
花「オヤ、あの人は一寸の間に大さう變つて了つたこと。あの書籍は疾うから欲しがつてゐたのに………。」
又女中の來る樣子。花子は進みよつて、
花「ナニ、まだ用があるの？」
その中照子は獨言に、
照「はやく〳〵あの書籍が見たいが、まあ、辛抱してゐませう。」
花子は大きな風呂敷包を受取つて、
花「何だらうこれは？、オヽ舞踏衣の質だよ。」
と無造作にそれを棚の上におき、
花「今に仕立屋に渡せばいゝ。」
照子はそれを見て獨言、
照「オヤ、あの人も大さう變つたこと！」
と云つて、かの包を開けて見て、

照「まア奇麗だ！良い色だことと！この質の良いことは！」
花子は傍をむいて、
花「アヽ一寸見たいけども……イヽエ、止しませう。」
と書籍を手に取つて、
花「オヽ大さう体裁の良い書籍だこと、奇麗な書が澤山あつて、オヤ地圖もある、いろんな事がよく集めてあることと！」
照子は布帛を擴げて見て、
照「オヤ充分三丈ある。」
と云つて又小聲で、
照「あの社會字彙がやつと手に入つて、こんな嬉しい事は……。」
と我知らず少し臺の方に近寄る。
花子は書籍をめくりながら、
花「まアこの言葉が手短かく、良く説明してあることと。」
と云つて棚の方を一寸見て、小聲で、

花「如何樣か一寸見たいッ。」
と、これも我知らず近寄る。
照「質も良し色も良し、……たつた一目書籍が見たいワ。」
とだん／＼近寄つて來る。
花子は一枚／＼めくつて見て、
花「あい、あさ、あか、あらし、あそもの、あだちがはら、オヽ何でも出てゐる、……アヽ如何樣な質だか、一目で良いから見たいワ。」
と進み寄り、兩人ハタと行當たる。
兩人、「おやッ」
と云ひながら、手に持つてゐる布と書籍とを手早く取換へて持つて、兩人仝時に、
花「アヽ良い衣服だことと！」
照「オヽ良い書籍だことと！」
花「眼の覺るほど良い色だワ！。」
照「もう誰にも貸しやアしない。」
兩人不圖顏を見合せて、狼狽へて默つてしまふ。

花子はモヂ／＼しながら、
花「照ちやん！貴方のお化粧好は、何處へか行つてしまつてねエ。」
照子も全じ樣子で、
照「花子さん、貴女の書籍好も何處へか消へましたワ。」
兩人顏を見合はして、少時默つてゐる。やがて笑ひながら、
花「照ちやん！ それぢやアわざと嗜好を換へて、一寸喜劇をして見たのねエ。」
照「さうなのよ。丁度さうなのよ。だが花子さん！これはほんとに良かつた事よ。今貴方がしたやうなら、私も必然これから氣をつけて、もう／＼書籍の虫にやアなりませんよ。」
花「照ちやん！ 私も貴女のお陰で、自分の疵が初めて解つてよ。本當にお化粧ばかりに凝つてるのは、馬鹿／＼しいわねエ。もうこれから氣をつけましやう。」
照「では本當にお互に良い教訓を得たのねエ。」
と云ひかけてきツと成り、
照「これからお互に書籍の虫にもならず、お化粧狂も止めにして、その中央を行く樣にしませう。」
花「ねエ、照ちやん！」
照「ねエ、花子さん！」
と、互ひに手を取り合つて笑ふ。よろしく幕

譯者曰　此の芝居は、獨逸の女學校や家庭なぞで、屢々演ぜられる物の中から、試みに譯して見たのであります。大部分は原文の通りでありますが、中には特に日本風にした所もあります。其邊をよく斟酌して、同窓會の餘興にでも演つて見たら、きつと面白からうではありませんか。

連れ立つて若葉に急ぐ海老茶袴　なみ子
春風にリボン吹かせてテニスかな　仝

滑稽小說

女學生世帯

黑田湖山

上

良人は廿七歳、細君は廿二歳、東京地方裁判所判事龜崎鶴雄君と、女子大學校卒業生青山澄子女史とは、完全なる自由結婚の下に、今より二週間前、模範的新家庭たるべき大抱負を以つて、處は麻布笄町、閑靜幽雅なる一邸に、所謂廿世紀の新家庭なるものを造り上げたのである。

廿世紀の模範的家庭は、秩序整然、無論男女同權の理想を實現したものである。澄子女史の持論に曰く、良人は外務大臣、細君は内務大臣、内閣は此の二個の者に依つて組織され、總理大臣の職務は、兩大臣の協議を以つてはじめて行ばれ、兩大臣の意見合致してははじめて其の權能を生ずるもの、昔日の家長萬能主義は甚しく家庭の平和を害するものとあつた。然れば、此の新家庭に於いても、其の說が實行せられて、良人は良人、細君は細君、二個は各其の本職に忠なるべく、構へて他の權限に立ち入るべからずと定められた。鶴雄の同僚の一人が、偶是れを評して、節分の豆撒は福は内鬼は外、廿世紀の新家庭は、奥は内おやぢア外ちやと冷笑した程度に於いて、此の服務規律は可也に能く守らるるやうに見えた。

澄子女史の曰く「ねえ貴方、時は是れ金！日本人の此の時の價値を粗畧にするといふことは、文明國の人としては、私、非常な缺點だらうと思つてよ。殊に、此の家庭に於いてゞすねえ、すべてを時間的にしないで、ちやんと時計といふ便宜なものがありながら、たとへば、朝起きる時間、夜寐る時間、御飯の時間なぞを、其の日其の日可い加減にして濟くといふ事なぞは、最も善けない習慣で、其の爲めに起る弊害は、ほんとに大したものだらうと思はれますわ。時間的にするのと、時間的にしないのとを、統計に照らして調べて見たらば、それは大變よ。私は、先づ模範を示す爲

めに、言ふよりは行ふて見せるのが一番良いと思ふから、我家の家政は、すべて時間的にしたいのですわ。いえ、する積りよ。ね、行爲は即ち能辨也でしやう。』

鶴雄君の曰く『全く然樣だよ、うむ、それは早速實行するが可いだらう。』

澄子女史の曰く『隨つて斯う思つてよ。今日の日本の婦人、若くば妻女程ですねえ、此の時間的に壓迫されて居るものはゐるまいと信ずるわ何故かと言ふと、朝はまあ一番早くから起きなければなりますまい。夜は、良人が外で如何なる事をして居るにかゝはらず、其の歸宅のある迄は、必らず起きて待つて居なければなりますまい。睡る時間、即ち安息する時間は僅で、そして不規律で、まゝまあ躰がつゞくと疑はれる位よ。だから、自然に其の氣が滅入つて、段々陰氣に神經的になつてしまふのですわ。是れで、婦人の頭の働かないのを責めるのは、全く絕對に無理よ。それから又女中の問題ですねえ。諸方の奥さんたちから聞きますと、此頃は女中が拂底で困る、殊に良い女中の居ないのには困ると言つてゞすが、是れは寧ろ當然だわ。何故かと言ふと、日本の女中はほんとにあはれですもの。行儀見習といふやうなことに滿足して居たのは、前世紀のことで、今では、少し學問をするとか、裁縫を覺えるとか、時間の餘裕といふものがあつて、多少自分の修養になるやうにしてやらなければ可けない事よ。だから、女中などを使ふには、時間的にして、勤務するのは、朝何時から夜何時迄といふやうに定めて、後は女中らの自由に任す事にしてよ。西洋的に、いえ、是れは寧ろ廿世紀の文明的にと言つた方が可いわ。』

鶴雄君の曰く『成程、至極可いな、早速實行するが可いだらう。』

斯くの如き會話に依つて、家政の時間的事務は其の翌日の金曜日から、早速實施される事とは相なつた。

澄子女史は、其の机の上で、色々の書物をひねくり廻して、和洋書籍渉獵三時間と廿分、沈思默考一時間

と十七分、筆を執つて五十六分三十四秒にして、漸く女中服務時間表なるものを作つた。即ち、此の苦心經營の後になつた時間表は、實は左の如くである。

女中服務時間表

一　午前五時三十分起床の事。
一　自午前六時至同七時朝食用意の事。
一　自午前七時至同八時朝食の事。
一　自午前八時至同八時卅分、卅分間休息の事。
一　自午八時卅分至同十時卅分臺所取りかたづけ掃除の事。
一　自午前十時卅分至同十一時卅分晝食用意の事。
一　自午前十一時卅分至正午十二時卅分晝食の事。
一　自正午十二時卅分至午後一時、卅分間休息の事。
一　自午後一時至同一時卅分臺所取りかたづけの事。
一　自午後一時卅分至同三時卅分洗濯其他雜用の事。
一　自午後三時卅分至同四時卅分夕食用意の事。
一　自午後四時卅分至同五時卅分夕食の事。
一　自午後五時卅分至同六時、卅分間休息の事。
一　自午後六時至同七時臺所取りかたづけ其他雜用の事。
一　午後七時以後十時迄の間は、隨意自由の身たるべき事。
一　午後十時卅分就床の事。

『鍋や！　釜や！　ちよつとおいで！』表ができあがつたので、澄子女史は、直に其の旨を達示する爲めに、鍋、釜の女中兩人を自分の居間にと寄び呼せた。

『これハア、奧樣何の御用で御座ゐますだアね。』と女中お鍋君は、水に濡れた眞赤な手を拭ひもせず、ブクリと兩方に垂れて、鋭からざる大きな眼をキヨロつかせつゝ、立つたまゝの言葉。

『奧さん、何か御用どすか。』後につゞいた同役のお釜君は、青い顔の、痩せた体を、お鍋君の横に置いて、是れは叮嚀に中腰の挨拶。肩にかけた襷を取り拂ひつゝ、輕い口調に斯う言つたのである。

『お前たちに、能く話して置きたいことがあるのだから、もつと此方へ來て、ちやんとお坐り！』『ハア、斯うかね。』とお鍋。『ヘー。』とお釜。

其處で、澄子女史はやをら向き直つて、多少の演説口調をさへ交へつゝ、徐に其の口を開いて、家政を今日よりすべて時間的にするといふ説明をし初めた。『能く考へて見ると、此の時間といふものは、實に貴いもので、實に大切にしなければなら無いもの、それに、日本の人は、何ういふ譯か、さほど此の時間を貴ばな

い、大切にしない、いや、貴ばないどころか何とも思は無い、是れは、まことに大した間違ですよ。時間を粗略にするから、自然にものがダラシなくなる、仕事が怠惰がちになる、すべての規律が亂れてくる。何でも、ものを秩序正して、つまり文明的にして行くには、仕事を時間的にしなければなら無いのよ。ね、可いかい。それで、私の家でも、今日から萬事を時間的にして、規律正しくして行かうと思ふから、茲へお前たちに心得て貰ふ時間を表にして置いたんだよ。』と彼の表を兩人に見せる。

『是れは、何ういふもので御座えますだね。』とお鍋君は、彼の表を手に取つて見たが、讀んで見やうとはせず、さも迷惑らしい顔をして澄子の色を窺ふ。『讀んで御覽！』

『是れをかね。お釜さんお前さん、ちよつくら讀んで見ておくんせえ。』釜『貴女まア讀んでおくんなはい。』鍋『お前さん字讀むでねえかよ。』釜『貴女やて〻、讀めるやおまへんか。』と兩人は頻りに爭つて居る。澄『お前たち、字は讀めないのかい？』釜『いえ、讀めますだアよ。』澄『ぢや、そんな事を言つて居ないで、早く讀んで御覽よ。』鍋『私ハア、字い讀めるだけれど、私の讀める字はこんな四角な字でねえだ。あの、いろはやアイウエオで書いてあれば、私、立板へ水ぶん流したやうに、スラ〳〵とハア讀みますべえがね、こんな四角な字は、ちよとも分らねえで御座えますだ。』澄『まあ困つたものだね、ぢや、釜！お前は讀めるのだらう。』釜『いえ、私もえらい鈍なこッちやけんどお鍋どんと同じこッとすのや。』

『ほんとに仕方がないのねえ、ぢや、私が讀んで聞かすから、能く聞いておいで！』と澄子は、悉皆讀んで聞かして、さて、『ねえ斯ういふ風に定めたのだから、是れは堅く守つて貰はないと困るよ。其の代り、午後の七時からは、さうだね、十時迄の三時間、お前たちの自由だから、家に居て讀書を稽古するなり、外へ出て學校へ行くなり、何うしても良いことになつて居るのだよ。時間的になると、何だか最初は窮屈のやうで

もあるが、慣れゝば此の方が餘程樂で、そして、お前たちの爲めにもなる譯ですから、充分に氣を注けて行つとくれよ。可いかい。能く分かつたかい！」鍋『三時間宛、毎日お暇下さいますだね。是れはハア、いかい難有えことで御座えますよ』。釜『へい、あの能う分かりましとすけんど、直に忘れるもんどすさかい、えらい濟まんこッとすけんど、奧さん、あの夫れをどすなア、いろはで書き直しとくれやすいな、さうせんと一向あかへんよつてな。」澄『こんなもの位が讀めないとは、何といふ情ない事だらうねぇ、よろしい、では直に書き換へてあげやうよ。』



と、澄子女史は筆を取つて、一條々々いろはで書き直し、やつとの事で皆記し終る。『さあ、是れならば、お前たちにも能く分るだらうね。』と兩人の前へ出す鍋『待つて下さえませよ。お釜さん可えだアね。ごせん、ごじ、さんじゆつ

ぶん、おきることゝな。はい、難有う御座えます。これでハア書いてありや、どんなに長くつても、一息で讀んでしまひますだアよ。』菊「奥さん、此の御膳しまうた後で、卅分づつ休むことになつてますのは何ういふこッとすやろ？』

澄「それかい、それは矢張り衛生の事を考へて、さう定めたのたよ。御飯を食べて、直ぐに働き出すのは、胃の爲めに大層良くない、卅分間は、体を樂にして休んで居る方が、体の爲めに非常に良い



といふ事だから然う定めてあるのだよ。』菊「御飯いたでえて、卅分間は体を動かさねえが可いで御座いますだねすると奥様、其の間は、御用し無えでも可えだね。』

澄「あゝ然うだよ。休息の卅分間には、決して用をいひつけ無いから、お前たちの勝手に休んで居て差支へは無いのだよ。』

菊「さうどすか、えらい樂なこッとすな。何どすか奥

さん、是れは、今日から直ぐに行つていくのどすか。』

『さう仕事といふものは、しやうと定めたらば直ぐ其の時から行つて行くが可いのだからね。それでは、此の三時卅分の夕御飯の用意から、此の表に隨つて働いてもらふ事としやう。云ふまでも無いことではあるが、お前たちの休む時間は休む時間として整然と定まつてあるのだから、働く時は働く時で、此の表にある通り、間違なく働いてくれなければ困りますよ。ね、可いかい。』鍋『よう御座えます。』釜『何やら、窮屈らしう思はれますけれど、直きに慣れませうわいな。』

兩人は勝手へさがつて、彼の時間表を、臺所の壁へ貼りつけ、何よりは、夜三時間宛の暇が貰へる嬉しさに、お前様何うするだね、あんた何うしなはると、早や三時間の使ひ方に胸をわくつかせて、各々時間の經つのを忘れて居たが、ふと氣がついて時計を見ると、既に三時卅分を超えて居たので、驚き慌てゝ、彼らは早速夕食の仕度に取りかゝつた。

四時過ぎには、主人の鶴雄君も役所から歸つて來た。

初めての事だからといふので、澄子女史は、身親ら臺所へ出張して、色々と指揮した爲めに、兎に角も、時間通りに仕度はできて、滯りなく夕食も濟み、午後六時に至つて、全く夕食の取かたづけも終つた。

釜『お鍋どん、卅分間のお休みどすせ。』鍋『まだ、ちよッくら洗ひ物が殘つてるけれど、もう可かんべえ。規則守らねえと、また奥様にお小言ぶッくらはせられるべえよ。さア、此の卅分は私が時間だ、誰れが何チウたつて、梃杆でも動くことでねえぞ。』

正直なるお鍋君とお釜君は、澄子女史の講義に隨つて、其の体を休息せしむべく、時計が六時を打つと直ぐ、機械が止まつたやうにヒタと仕事の手を止めて、臺所狹しと、兩人は其の場に身を横へてゐると、主人の居間で手が鳴つた。

釜『お鍋どん、旦那はんが呼んで居やはるやおまへんか。』鍋『今私等が休む時間でねえか。旦那様呼んだつて、奥様呼んだつて、そりやお前だめなこンだ。返事しねえで可えだよ。』奥では澄子女史の注意があつたと

見えて、二度とは手の鳴る音もしなかつた。が、暫らくして、車が二臺玄關先へついて、一つ二つ、玄關前に釣つた銅鑼の音が響を立てたのである。

釜『お鍋どん、お客やおへんか。』

釜『お客やて丶、何やて丶、矢張り斯うして休んで、も可えのどすやら。』鍋『それは失れで可えだよ。今私等休む時間でねえか。こんな時分に來るお客は、ぶんみよう的でねえだ。待たしとくべえ。お前、返事しねえで可えだよ。』

銅鑼は、更に三つ四つ續いて鳴つた。それでも、返事は無い。客を載せて來た二人の車夫は、耐えかねてか、大きな聲を張りあげて。『頼もう!』『お頼申します!』それでも返事は無い。銅鑼は雷の如くに鳴つた。

鍋『やかましいな。何とか言うてやりまへうか。』釜『さうだね。卅分間は、休みの時間で御座えますから、幾ら鳴らしても、だめなこンで御座えますと言つてやツぺえかな。』

釜『そやけんど、理窟でいうと、それも仕事のうちどすいな。』

鍋『かまわねえで、うち遣つとくべえよ。』

銅鑼の音……ガン、ガン、

車『頼もう!』

『お頼申します!!』

と慌しく馳けつけて來た澄子女史、女中屋部へ突入して。『鍋! 釜! お前たちは、何をして居るんだね、玄關に、お客樣が來有つたぢや無いか。』

銅鑼の音……ガン、グワン、ガン、

澄『さア、早くおいでよ!』

釜『だつて奥樣、まだ六時半にはなりましえねだよ。』

澄『何を言つてるんだよ、え丶もう、早くおいでよ!』

釜『奥樣、あの未だ私らの休む時間どすのや。』

又もや銅鑼の音……ガン、ガン、

『え丶、もうじれッたいね!』

澄子女史、終に焦れて自ら玄關へ飛んで出る。時しも、主人の鶴雄君、餘りの喧しさに、慌て丶玄關へ飛んで出て、是れはしたり! 澄子女史と烈しい鉢合せ。

「あら！」（中）

其の翌日の土曜日の朝は、起床も、朝食の用意も、朝食も、兎に角時間割通りに行はれたので、それ迄絶えず台所へ出張して、彼れよ是れよと頻りに兩人の女中を督勵して居た澄子女史も、此の調子ならば、もう夫れ程世話をやくことも要るまいと、時正に午前十時三十分、兩人の女中が晝食の用意に取りかゝつたのを見すまして、女史は、一先づ其の居間へと退いた。

菊「お鍋どん、こないに細う、キチ〳〵と時間が割つたると、とうない窮窟におすな。私もう汗が出るわ。」

鍋「まるでハア、碁盤の目の中で、逆立させられるやうな氣がするだよ。もう何分だッぺい最早何時だッペいと氣がせいてなんねえ、先から、それえ心配して、時計さ見て居るばッかりでの、首い痛くなつて、ちよつくら回らなくなつてしまつただよ。」

菊「ほんまやなア。何やら壽命が縮まるやうな氣がするいな。」鍋「ほうら、もう十時四十分になつただよ。ぶんめよう的だか、へんめよう的だか知んねえが、奥樣何だつて此樣なシチ面倒なものお拵えなさつただか私には、さつパり譯はア分らねえだ。こんなによ、喧しいことなら、三時間宛お暇貰つたッて、あんまり難有くもねえだよ。私はア小供ができても、横文字はもう讀ませねえこんだ。横文字なんぞを、あんまり讀むと、こんな人困らせをして困るだよ。御自分樣はアよかんべえが、此方は大え迷惑するだよ。」

お鍋とお釜は、此の一時間のうちに、晝食の用意を調へなければならないので、それ五分經つた、それ十分過ぎたと、時計の音にのみ心を勞して、汗水たらしつゝ頻りに其の用意を急いだ。

斯くて、卅分は過ぎて、時計は無造作に十一時を打つた。晝食用意の時間として、殘る處は僅に卅分となつた。が、其の用意は、まだ半分とは運ばなかつたのである。

『お釜どん、まだ蓮根切つてるだね。遲いでねえか。もう汽車が出るまでには、三分しか間はねえだよ。』愚

[illegible]かぐづッかして居ると、滊車はおいてきッぽりブッ食はして出て行ッちまうだんべえよ。』嵩「ほゝゝほんまに、滊車の時間見たいなものやなア。もう三分なら、おまはん、鈴鳴らしんかいな。』與「おほゝゝえゝ、まだ沸かねえかよ。今度の三河屋の薪は、何とか言つたッけね、じ、時間的でねえだよ。これハア、お櫃へうつす間が、何うしても五分ばかりはかゝるべえから、早く沸いてくれねえぢや、間に合はなくなるだからね。』嵩「さうやな、私の方やかて、此の庖刀が時間的でないよつて弱るのや。』

折柄、『御免下せえましよ。』と聲をかけて、勝手元を覗き込んだのは、一人の老婆、それは、お鍋君の母親であつた。

『あれ、母様でねえか。何うして來ただアね。』とお鍋君は嬉しさに、釜の下は放りやつておいて、慌しく飛び出だす。

『あにね、新濱の太吾作どんに賴まれての、お米坊を迎ひに來たゞアよ。馬鹿に急ぐだけんど、私お前の顏が見たいしの、それに、何ういふ家に御奉公して居るだか、一つ見とゞけて置きてえと思つただで、ちよつくらお米坊を待たして置いて、えちこら、此處までやつて來たゞアよ。』與「あれ、能く來てくれたゞね。皆丈夫にして居るだアね。』母「あゝ、皆達者で居るだで我家のことは心配してくれるでねえだよ。此の間、與作どんが東京から歸つて來ての、お前が、今度は太え好え處え御奉公しただと言ふでね、皆喜んで居るだよ御立派なお宅でねえか。奥様、今はア御座らつやるだアね、ちよつくらお會ひ申して行くべえかの。』

與「何時歸るだね。』母「明日の朝になるべえよ。お鍋お前の仲よしだつた彼のお竹坊のう、此の間お嫁入したたアよ。お前にも、よろしく言つてくんろと、一昨日我家へ來て、長え事話いして行つたゞよ。好え處え嫁いて、彼の娘も幸したゞアよ。嫁く前には、太え騷ぎだつたけんどよ。』

俄にフッ〳〵といふ音、今しも竈の上なる飯は、盛に湯氣を立てゝこそは沸き出だしたのである。

米「お鍋どん、火をひいときまへうか。」時間といふことに氣がついて、お鍋はびつくり！ 鍋「母樣、待つてくんせえよ。十一時半までに、すつかり御飯の用意をしねえではなんねえだよ。此處の家は、何でも、時間的になさるだからね、少しでも時間違ふとお小言頂くだアよ。あれ、もう十一時十分を過ぎたでねえか。此處では、ゆつくり話いできねえだから、晩に、私行くによ。宿さ歸つて待つて居てくんせえよ。」

「宿る處は遠方だから、それには及ばねえだよ。ちよツくら、茲で話いしたとツて、態々鄕國から來たゝあもの、譯いえばお小言もあるめえでねえか。」

「いや然うでねえだよ。其の代り、夕方の七時から三時間宛、毎日お暇下さるだからね。遠方でも何でも、晩には乾度行くべえよ。母樣、まだお前分らねえだね。」

「お前の方が餘程分らねえでねえか。私ハア遠方から態々來たゞアもの、ちつとぐれえ、茲で話いしたとツて可えでねえかよ。」

「あれ、また五分經つたよ。茲のお宅では、然う行かねえだよ。まあ、分らねえ母樣だよ。ほんとに。」

「何ちうこと言ふだよお前は。」と母樣は其の眼を濕まして、「鄕國に居る時は、こんな強情え娘でもねえだつたが、いつの間に、それえに強情えこと言ふやうになつたゝよ。親の心子知らずとは、ほんに是れだアよ。私ハア顏見せたら、どんなにか喜ぶだんべいと思つてよ、態々出向いて來たんだアに、碌々話もしねえで、歸つてくんろとは何ちうこんだ。」と袖で涙を拭いて、「此方でも、そんなものに最早用はねえだ、歸るべえよ。」と母親は、急に顏色を變へて歸りかける。

鍋「あれ、そんな譯でねえだよ。お前は、此處の家風ちふこと分らねえだ。」

母「はい、分らねえだよ。」と見向きもせず、ずん／＼と歩いて門を出る。

「お米坊の處え宿るだね。晩に行つて、緩り話いしべえよ。」と後影をのぞきつゝ、「ほんとに一こくで、分らねえから困るだアよ。」とお鍋は心配さうにして、「あれ

もう十一時半でねえか。」と慌しく仕事に取りかゝる。

「お氣の毒なことやな。」とお釜君は、慰め顔にお鍋君を見た。

時計は、十一時卅分を報じたのである。

「鍋や、釜や、もう用意はできたかい。」と澄子女史の聲。

「へえ……」と兩人は氣の無い返事。

「まだ出來ないのかい、それぢや、眞個にしやうが無いぢやないか。」

「奥樣、今私叫親來たもので御座えますのだからね。」とお鍋君は、手短に母親との問答を繰りかへす。

「まあ。」と澄子女史は寧ろ呆れて、「そんなのなら、私に然う言つてくれゝば可かつたに、まあお母樣には氣の毒したねえ。」

葦「さやうどすいな。」

耳「そして、もう大方用意はできたの？」

與「さう言ふ譯で御座えますだからね、まだ半分ぐれえしかできねえで御座えますだよ。」

耳「しやうが無いね。愚圖々々して居ると、順ぐりに時間が狂つて行くから、私手傳つてあげるからサア早くしておしまひ！」

葦「奥樣手傳つて下せえますだね。」

「あゝ、まだ海苔はやいて無いのだね、丼のお盆こちらへおかし！」と澄子女史は、さも自烈たさうに火鉢の前へ坐る。

葦「あれ奥さん、袂がお醤油入へはいてるやおへんか。」

「何だつてまた此樣な處へ、こんなものを置いとくんだね。」と澄子女史は、醤油だらけになつた袂をしぼる。

葦「あれ奥樣、裾へ釜の煤がつくではねえか。あれ、あれ。」

「まあ、何だつて此樣な處へ釜を置いとくんだね。」と立ちあがる拍子に、裾へ鐵瓶の口が引きかゝつて、ガラリと轉ると共に、俄にパツと立つ灰神樂、あたりは一面の霧で、折角お櫃へうつし終つた飯も、皿へ盛つ

た惣菜も、悉く灰の衣！　あゝ。あゝ。

（下）

翌日は日曜日、その又午後の事である。今日は二人お客があつて、四時卅分には、晩餐の饗應があるからと言ふので、澄子女史は、兩人の女中に特別の用意を命じて、晝食後間も無く、鶴雄君と相伴つて、何れへか散歩に出て行つた。

其の留守中、お鍋君とお釜君は、例の如く時間的臺所事務の窮屈なることを語り合ひ、それに、昨日は澄子女史が火神樂をあげた爲に、二度まで晝食の用意をしなほすといふ騒ぎもあつたので、兩人は心頗る平かならず、終にこそ／＼と何事をか相談した果は、澄子女史の居間にかゝつた時計と、臺所にかゝつてある時計の針を捻ち戻して、故更一時間半ばかり遲らして置いた。

それとは知らず、眞個の時計の午後四時ごろ、即ち龜崎家の時計の午後二時半頃に至つて主人夫婦は、何事をかいと樂しげに語り合ひつゝ歸つて來た。

歸つて來るや、澄子女史は一寸自分の居間の時計を見て、「あら、もう三時を餘程過ぎて居るだらうと思つてたのに、貴郎まだ二時半よ、ちよいと、ちよいとよ貴郎。お客樣は、何時に來有るやうに仰有つたの？」

「うむ、正四時に來てくれと言つて置いたのだよ。」

「さうですか。でも、矢張日本的の時間でせうね。」

「さア。併し、私の家は、何事にも堅く時間的にやつて居るといふ事を知つて居る筈だから、大した遲刻もあるまいよ。」

「然うでせうか。裁判所の方は何ういふものですか、時間には無頓着ね。全く、暢氣ですわ。私何時か傍聽に行つて、大變待たされた事があるのよ。彼の樣子では、ほんとに當にならなくつてよ。」「いや、然うばかりでもないさ、轟君も、伊吹君も、何だか君の處は總て時間的にやるといふ事だから、必らず正四時に行つて、細君のお叱りを受けないやうにするなんて言つて居たんだよ。」「あら然う、我家の時間的にしたしたのを、もう皆さん御存知なの？。」

「能く私が話をするものだから、皆知つて居るやうだよ。鵜子なんぞは、大に摸範にしたいから、是非一度拜見に行きたいとも言つて居たのサー。」「まあ、晴がましいわねえ、でも、たとへ一人でも、是れを實行して見たいといふ人が增えれば、貴郎矢張り我社會が夫れだけづゝ改善されて行くのですから、結構なことですわねえ、鵜子さんも、今日來有るお仲間なんでせう。」「さうさ。澄さんのことだから如才はあるまいが、用意は可いのかい。」「先刻能く言ひつけて置きましたから、手落は無い筈よ。三時になりましたら、台所へ行つて、また指揮する積りですのよ。」

と話をして居る折柄、玄關には案内を請ふ銅鑼の音お釜君の取次に、早くも森君と、伊吹君が相伴うて來たとあつたので、鶴雄君も澄子女史も、實際今四時即ち招待した正時刻になつて居るとは、ゆめ更氣がつかなかつたので、内心偖は遲刻をしない要愼をして、一時間も前から來て置くのだなと考へて、ひそかに相微笑んで、何かれと接待をして居るうちに、「何うも遲刻しまして相濟みません！」といふ言葉を先だてゝ、やがて殘る招待客の一人鵜子君も出て來た。

既に客は揃つた。正しい時計では、最早四時を過ぐること四十分以上であつたが、澄子女史の居間なる時計、及び臺所にかゝつて居る時計は、まだ僅に三時を少々過ぎたのみであつた。隨つて、夕食用意は、漸く其の端緒に就きかけた位だつたのである。

四時卅分には、御膳を出すとなつたにも拘らず、待てども待てども其の摸樣は無い。ハテ何うした事かと客は代りく\に其の時計を見て、一種異樣な眼を以つて切りに鶴雄君の顏を見出したのであつた。

「何うですね、例の時間的にするといふ事は、うまく實行ができますかね。」辛抱しかねて、皮肉やの森君は終に口を切つた。

が、善良なる鶴雄君は、なかく\然うとは氣がつかなかつたのである。「妻は、時間に就いては、極めて嚴格な考を持つて居るので、定めた通り、兎に角も實行してるです。」

『實は何で御座いますよ。』と折柄側に居た澄子女史は言葉を挿んで、『貴郎方のおいで下さいますのも、乾度日本的の時間だらうと存じて居りましたのに、斯うお早くおいで下さいましたので、誠に嬉しう存じますよ。』『いや、是れは恐れ入りました。』卅分遲れて來た鵜子君は、澄子女史の言葉は、全く自分への當てつけと合點して、頭をかきながら肩を縮める。

『さうさ。諸君、今日は大變早くからお出かけだつたぢやありませんか、はゝはゝゝ、御要愼だつたですね。』と鶴雄君は、無邪氣な笑ひやう。

『いや君、早くなかつたのですよ。ね、丁度今六時だから、僕たちが此處へ伺つたのは、正四時だつたのですよ。』と、溫順な伊吹君は時計を出して見せる。『へッ六時?!　お間違ぢやありませんか。』と澄子女史の面色は變る。『まだ六時にはならないでせう!?』と鶴雄君は平氣で居る。

『いや、もう六時でせうよ。』と鵜子君も時計を出して見せる。』

『僕の時計も六時さ!』と轟君。

『あら、ぢや我家の時計が進つて居るのですかしら、今丁度四時廿五分ですのよ!』

『さうかしら、ドレ私のを見やう。』と鶴雄君は、書齋から時計を持つて來て見ると、是れも正しく六時!!!

『あら、何うした事でせう!!!』と澄子女史は荒らかな聲を立てゝ、慌しく此の座敷を走り出た。其の眼は急に血走り、其の顏色は寧ろ泣き出しさう。

『鍋や!!　釜や!!　何うしたんだねえお前たちは、何を愚圖々々して居るの!!!』

釜『奥さん何どすのや。』

澄『さア、早く、早くさ、其のお皿を此方へ出しとくれ!』

鍋『奥樣、何事が持ちあがつたので御座えますだアね。』

澄『何ッてお前、我家の時計は、すつかり狂つて居るんぢや無いか、今もう、七時になつてるんだよ。だからさ、早く拵へて出さなくつちやならないんだよ。』

與「ヘツ、七時で御座えますだアね。」

芸「何、七時にはならないけれど、もう七時近くになつて居るんだよ。もう、直ぐ七時なんだからさア、愚図々々しないで、早くちやんとしとくれよ！　何だねえ、そ、そんなお肴の盛けやうがあるものかね、じれつたいね、もう、お前、七時ぢや無いか。」

芸「奥さん、ほんまに七時どすか？」

玉「あゝ、然うさ、何を又お前たちはマゴ〳〵して居るんだね、お客様が居有るのだから、ちやん〳〵として、能く時間を大事にしてくれなくつちや困るぢや無いか。」

與「奥様、七時で御座えますだアね。」

玉「うるさいね、あゝ然うだよ。」

與「ぢや、私たちは、最早何にもしなくつても可かんべえ。」

芸「然うや、もう私らの時間やよつて、何も御用せんでも可えのや。」

玉「何故だよ？」

與「奥様、もう七時だと仰有つたでねえか。七時から十時までは、私等が時間だと定めて下さつたでねえかよ。時間割通りにしねえぢや、ぶんみよう的でねえと仰有つたでねえか。今七時なら、私ハア何にも御用しねえでも可えのでねえかよ！」

玉「まあ……」

（完）

春の鳥

國木田獨歩

（一）

今より六七年前、私は或地方に英語と數學の敎師を爲て居たことが御座います。其町に城山といふのがあつて大木暗く繁つた山で、餘り高くはないが甚だ風景に富んで居ましたゆゑ私は散歩がでら何時も此山に登りました。

頂上には城跡が殘つて居ます。高い石垣に蔦葛から

み附いて其が眞紅に染つて居る案排など得も言はれぬ趣でした。昔は天主閣の建て居た處が平地になつて、何時しか姫小松疎に生ひたち夏草隙間なく茂り、見るからに昔を忍ばす哀れな樣となつて居ます。

私は草を敷いて身を横たへ、數百年斧を入れたことのない鬱たる深林の上を見越しに近郊の田園を望んで樂んだことも幾度であるか解りませんほどでした。

或日曜の午後と覺えて居ます、時は秋の末で大空は水の如く澄んで居ながら野分吹きすさんで城山の林は烈しく鳴つて居ました。私は例の如く頂上に登つて、やゝ西に傾いた日影の遠村近郊を明く染めて居るのを見ながら、拾つて來た書籍を讀んで居ますと、突然人の話聲が聞えましたから石垣の端に出て下を見下しました。別に怪しい者でなく三人の小娘が枯枝を拾つて居るのでした。風が烈しいので得物も多いかして澤山背に負たまゝ猶も四邊をあさつて居る樣子です。むつまじげに話しながら樂しげに歌ひながら拾つて居ます。それが何れも十二三、多分何村あたりの農家の兒供でしやう。

私は暫時見下して居ましたが、又もや書物の方に眼を移して何時か小娘のことは忘れて了ひました。するとキヤツといふ女の聲、驚いて下を見ますと、三人の兒供は何に懼れたのか枯木を背負たまゝアタフタと逃げ出して忽ち石垣の彼方に其姿を隱して終ひました。可怪なことゝ私は其近處を注意して見下して居ると、薄暗い森の奥から下草を分ながら道もない處を此方へやつて來る者があります。初は何物とも知れませんでしたが、森を出て石垣の下に現はれた處を見ると十一か十二歳と思はるゝ男の兒です。紺の筒袖を着て白木綿の兵兒帶をしめて居る樣子は農家の兒でも町家の者でもなさゝうでした。

手に太い棒切を持つて四圍をきよろ／＼見廻して居ましたが、フと石垣の上を見上げた時思はず二人は顏を見合しました。兒供は熟と私の顏を見つめて居ましたが、やがてニヤリと笑ひました。其笑が尋常でないのです。生白い丸顏の、眼のぎよろりとした樣子まで

が唯の兒供でないと私は直ぐ見て取りました。

『先生。何を爲て居るの？』と私を呼びかけましたので私も一寸驚きましたが、元來私の當時敎師を務めて居た町は極く小さな城下ですから、私の方では自分の敎兒の外の人を除り知ないでも土地の者は都から來た年若い先生を大概知つて居るので、今此兒供が私を呼びかけたも實は不思議はなかつたのです。其處へ氣がつくや私も聲を優しうして

『書籍を讀んで居るのだよ。此處へ來ませんか。』と言ふや、兒童はイキなり石垣に手をかけて猿のやうに登りはじめました。高五間以上もある壁のやうな石垣ですから私は驚いて止めやうと思つて居る中に早くも中程まで來て、手近の蔦に手が屆くとすら〳〵とこれを手繰つて忽ち私の傍に突立ちました。そしてニヤ〳〵と笑つて居ます。

『名前は何と呼ふの？』と私は問ひました。『六』『六？六さんといふのかね。』と問ひますと、兒童は點頭いたまゝ、例の怪しい笑を洩して口を少し開けたまゝ私の顏を氣味の惡いほど熟視て居るのです。

『何歳かね、歳は？』と私が問ひますと、怪訝な顏を爲て居ますから、今一度問返しました。すると妙な口つきをして唇を動かして居ましたが急に兩手を開いて指を屈て一、二、三と讀んで十、十一と飛ばし、顏をあげて眞面目に

『十一だ。』といふ樣子は漸と五歳位の兒の、やう〳〵數を覺えたのと少しも變らないのです。そこで私も思はず『能く知つて居ますね。』『母上さんに敎つたのだ。』『學校へゆきますか。』『往かない。』『何故往かないの？』

兒童は頭を傾げて向を見て居ますから考へて居るのだと私は思つて待つて居ました。すると突然兒童はワア〳〵と啞のやうな聲を出して駈出しました。『六さん六さん』と驚いて私が呼止めますと

『烏々』と叫びながら後も振りむかないで天主臺を駈下りて忽ち其姿を隱くしてしまひました。

（二）

私は其頃下宿屋住でしたが何分不自由で困りますから色々人に頼んで、遂に田口といふ人の二階二間を借り、衣食一切のことを任すことにしました。

田口といふは昔の家老職、城山の下に立派な家敷を昔のまゝに備へて有福に暮して居ましたので此二階を借し私を世話して呉れたのは少からぬ好意であつたのです。

處で驚いたのは田口に移つた日の翌日、朝早く起きて散歩に出やうとすると城山で逢つた兒童が庭を掃いて居たことです。私は「六さん、お早う」と聲をかけましたが、兒童は私の顏を見てニヤリ笑つたまゝ草帚で落葉を掃き、言葉を出しませんでした。

日の經つ中に此怪しい兒童の身の上が次第に解かつて來ました、と言ふのは畢竟私が氣をつけて見たり聞いたりしたからでしやう。

兒童は名を六藏と呼びまして田口の主人には甥に當り、生れついての白痴であつたのです。母親といふは四十五六、早く夫に分れまして實家に歸り、二人の兒を連れて兄の世話になつて居たのであります。六藏の姉はおしげと呼び其時十七才、私の見る處ではこれも亦た白痴と言つてよいほど哀れな女でした。

田口の主人も初の程は白痴のことを隱して居るやうでしたが、何にをいふにも隱し得ることで無いのですから終に或夜のこと私の室に來て敎育の話の末に甥と姪の白痴であることを話しだし、如何にかしてこれに幾分の敎育を加へることは出來ないものかと私に相談をしました。

主人の語る處に依ると此哀れなきようだいの父親といふは非常な大酒家で、其爲に生命をも縮め、家産をも蕩盡したのださうです。そして姉も弟も初の中は小學校に出して居たのが、二人とも何一つ學び得ずいくら敎師が骨を折つても無益で、到底他の生徒と同時に敎へることは出來ず、徒らに他の腕白生徒の嘲弄の道具になるばかりですから、却て氣の毒に思つて退學をさしたのださうです。

成程詳しく聞いて見ると姉も弟も全くの白痴であることが愈々明白になりました。然に主人の口からは言ひませんが、主人の妹、則ちきようだいの母親といふも普通から見ると餘程拔けて居る人で、二人の兒供の白痴の源因は父の大酒にもよるでしやうが、母の遺傳にも因ることは私は直ぐ看破しました。

白痴教育といふが有ることは私も知つて居ますが、これには特別の知識の必要であることとですから私も田口の主人の相談には浮かと乘りませんでした。たゞ其容易でないことを話したゞけで止しました。

けれども其後だん／＼おしげと六藏の樣子を見ると、如何にも氣の毒でたまりません。不具の中にもこれほど哀れなものはないと思ひました。啞、聾、盲などは不幸には相違ありません。言ふ能はざるもの、聞く能はざる者、見る能はざる者も、尙ほ思ふことは出來ます。思ふて感ずることは出來ます。白痴となると、心の啞、聾、盲ですから殆ど禽獸に類して居るのです。兎も角、人の形をして居るのですから全く感じがない譯ではないが普通の人と比べては十の一にも及びません。又た不完全ながらも心の調子が整ふて居ればまだしもですが、更に歪になつて出來て居るのですから、樣子が餘程變です、泣くも笑ふも喜ぶも悲も皆な普通の人から見ると調子が狂つて居るのだから猶ほ哀れです。

おしげは兎も角、六藏の方は兒童だけに無邪氣なところが有りますから、私は一倍哀れに感じ、人の力で出來ることならば如何にかして少しでも其智能の働きを增してやりたいと思ふやうになりました。

すると田口の主人と話してから二週間も經つた後のこと、夜の十時ごろでした、最早床に就うかと思つて居る處へ、

「先生、お寢ですか」と言ひながら私の室に入つて來たのは六藏の母親です。背の低い、痩形の、頭の小い、凸の顏、何時も齒を染めて居る昔風の婦人。口を少し開けて人のよささうな、たわいのない笑を何時も其眼

尻と口元に現はして居るのが此人の癖でした。

「そろ／＼寢やうかと思つて居る處です。」と私が言ふ中、婦人は火鉢の傍に坐つて

「先生 私は少しお願が有るのですが。」と躊つて言ひ出しにくい樣子。「何ですか。」「六藏のことで御坐います。あのやうな馬鹿ですから將來のことも案じられて、其を思ふ私は自分の馬鹿を棚に上げて、六藏のことが氣にかゝつてならないので御坐います。」

「御尤です。けれどもさうお案じなるほどのことも有りますまい。」とツイ私も慰めの文句を言ふのは矢張人情でしやう。

（三）

私は其夜だん／＼と母親の言ふ處を聞きましたが何よりも感じたのは親子の情といふことでした。前にも言つた通り此婦人とても餘程拔けて居ることは一見して解るほどですが、それが我子の白痴を心配することは普通の親と少しも變らないのです。

そして母親も亦た白痴に近いだけ、私は益々憐を催ふしました。思ず私も貰ひ泣きをした位でした。

其處で私は六藏の教育に骨を折つて見る約束をして氣の毒な婦人を歸へし、其夜は遲くまで、いろ／＼と工夫を凝らしました。さて其翌日からは散歩ごとに六藏を伴ふことにして、機に應じて幾分かづゝ智能の働きを加へることに致しました。

第一に感じたのは六藏に數の觀念が欠けて居ることです。一から十までの數が如何しても讀めません。幾度も繰返して教へれば、一、二、三と十まで口で讀み上げるだけのことは爲ますが、路傍の石塊を拾ふて三個並べて、幾個だときゝますと考がへてばかり居て返事を爲ないのです。無理にきくと初は例の怪しげな笑方をして居ますが後には泣きだしさうになるのです。

私も苦心に苦心を積み、根氣よく務めて居ました。或時は八幡宮の石段を數へて昇り、一、二、三と進んで七と止り、七だよと言ひ聞して、さて今の石段は幾個だときゝますと、大きな聲で十と答へる始末です。松の並木を數へても、菓子を褒美に其數を數へても、

結果は同じことです。一、二、三といふ言葉と、其言葉が示す數の觀念とは、此兒童の頭に何の關係をも有つて居ないのです。

白痴に數の觀念の欠げて居ることは聞ては居ましたが、これほどまでとは思ひもよらず、私も或時は泣きたい程に思ひ、兒童の顔を見つめたまゝ淚が自然に落ちたこともありました。

然るに六藏はなか〳〵の腕白者で、惡戲を爲るときは隨分人を驚かすことがあるのです。山登りが上手で城山を驅廻るなどまるで平地を歩くやうに、道のあるところ無い處、ザツザと飛ぶのです。ですから從來も田口の者が六藏は何處へ行つたかと心配して居ると發飯を食つたまゝ出て日の暮方になつて城山の嵳から田口の奥庭にひよつくり飛び下りて歸つて來るのださうです。木拾ひの娘が六藏の姿を見て逃げ出したのは必定これまで幾度となく此白痴の腕白者に嚇されたものと私も思ひ當つたのであります。

けれども又た六藏は直きに泣きます。母親が兄の手前を氣ねて折り〳〵痛く叱ることがあり、手の平で打つこともあります、其時は頭をかゝへ身を縮めて泣き叫びます。しかし直ぐと笑つて居る樣は打たれたことを全然忘れて終つたらしく、これを見て私は猶更此白痴の傷しいことを感じました。

かゝる有樣ですから六藏が歌など知つて居る筈も無さゝうですが知つて居ます。木拾ひの唄ふやうな俗歌を暗んじて、をり〳〵低い聲でやつて居ます。

或日私は一人で城山に登りました、六藏を伴れてと思ひましたが姿が見えなかつたからです。

冬ながら九州は暖國ゆゑ天氣さへ佳ければ極く暖かで、空氣は澄んで居るし、山のぼりには却て冬が可いのです。

落葉を踏んで頂に達し例の天主臺の下までゆくと、寂々として滿山聲なき中に、何者か優い聲で歌ふのが聞えます。見ると天主臺の石垣の角に六藏が馬乘に跨がつて、兩足をぶら〳〵動かしながら、眼を遠く放つて俗歌を歌つて居るのでした。

空の色、日の光、古い城跡、そして少年、まるで畫です。少年は天使です。此時私の眼には六藏が白痴とは如何しても見えませんでした。白痴と天使、何といふ哀れな對照でしやう。しかし私は此時、白痴ながらも少年はやはり自然の兒であるかと、つくゞ感じました。

今一ツ六藏の妙な癖をいひますと、此兒童は鳥が好で、鳥さへ見れば眼の色を變て騒ぐことです。けれども何を見ても烏といひ、いくら名を敎へても憶えません。「もず」を見ても「ひよどり」を見ても烏といひます。可笑いのは或時白鷺を見て烏といッたことで、鷺を烏にいひ黑めるといふ俗諺が此兒だけには普通なのです。

高い木の頂邊で百舌鳥が鳴いて居るのを見ると六藏は口をあんぐり開けて熟と眺めて居ます。そして百舌鳥の飛立つてゆく後を茫然と見送る樣は、頗る妙で、この兒童には空を自由に飛ぶ鳥が餘程不思議らしく思はれました。

（四）

さて私もこの憐れな兒の爲めには隨分骨を折つて見ましたが眼に見えるほどの効能は少しも有りませんでした。

彼是するうちに翌年の春になり、六藏の身の上に不慮の災難が起りました。三月の末で御座いました、或日朝から六藏の姿が見えません。晝過になつても歸りません、遂に日暮になつても歸つて來ませんから田口の家では非常に心配し、殊に母親は居ても起つても居られん樣子です。

其處で私は先づ城山を探すが可らうと、田口の僕を一人連れて、提灯の用意をして、心に怪い痛しい想を懷きながら平常の慣れた徑を登つて城跡に達しました。

「俗に虫が知らすといふやうな心持で天主臺の下に來て

「六さん！六さん！」と呼びました。そして私と僕と、申し合はしたやうに耳を聳てました。場處が城跡

であるだけ、又た采す人が普通の兒童でないだけ、何とも知れない物すごさを感じました。

天主臺の上に出て、石垣の端から下をのぞいて行くうちに北の最も高い角の直下に六藏の死骸が墮ちて居るのを發見しました。

怪談でも話すやうですが實際私は六藏の歸りの餘り遲いと知つてからは、どうも此高い石垣の上から六藏の墜落して死だやうに感じたのであります。

餘り空想だと笑はれるかも知れませんが、白狀しますと、六藏は鳥のやうに空を翔け廻る積りで石垣の角から身を躍らしたものと、私には思はれるのです。木の枝に來て、六藏の眼のまへで、枝から枝へと自在に飛で見せたら、六藏は必定、自分も其枝に飛びつかうとしたに相違ありません。

死骸を葬つた翌々日、私は獨り天主臺に登りました。そして六藏のことを思ふと、いろ〳〵と人生不思議の思に堪えなかつたのです。人類と他の動物との相違。人類と自然との關係。生命と死、などいふ問題が年若い私の心に深い〳〵哀を起しました。

英國の有名な詩人の詩に『童なりけり』といふがあります。それは一人の兒童が夕毎に淋しい湖水の畔に立て、兩手の指を組み合はして、梟の啼くまねをすると、湖水の向の山の梟がこれに返事をする、これを其童は樂にして居ましたが遂に死にまして、靜かな墓に葬られ、其靈は自然の懷に返つたといふ意を詠じたものであります。

私はこの詩が嗜きで常に讀んで居ましたが、六藏の死を見て、其生涯を思ふて、其白痴を思ふ時は、この詩よりも六藏のことは更に意味あるやうに私は感じました。

石垣の上に立つて見て居ると、春の鳥は自在に飛んで居ます。其一は六藏ではありますまいか。よし六藏でないにせよ。六藏は其鳥とどれだけ異つて居ましたらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

憐れな母親は其兒の死を却て、兒のために幸福だと

いひながらも泣いて居ました。

或日のことでした、私は六藏の新しい墓にお詣りする積りで城山の北にある墓地にゆきますと、母親が先に來て居て頻りに墓の周圍をぐる／＼爲ながら、何か獨語を言つて居る様子です。私の近くのを少も知らないと見えて

『何だつてお前は鳥の眞似なんぞ爲た、え、何だつて石垣から飛んだの？……だつて先生がさう言つたよ、六さんは空を飛ぶ積りで天主臺の上から飛んだのだつて。いくら白痴でも鳥の眞似をする人がありますかね。』と言つて少し考へて『けれどもね、お前は死んだはうが可いよ。死んだはうが幸福だよ……』

私に氣がつくや

『ね、先生。六は死んだはうが幸福で御座いますよ。』

と言つて涙をハラ／＼とこぼしました。

『さういふ事も有りませんが、何しろ不慮の災難だからあきらめるより致方がありませんよ。……』

『けれど何故鳥の眞似なんぞ爲たので御座いましよう。』

『それは私の想像ですよ。六さんが必定鳥の眞似を爲て死んだのだか解るものじやありません。』

『だつて先生はさう言つたじや有りませぬか。』と母親は眼をすえて私の顏を見つめました。

『六さんは大變鳥が嗜であつたから、さうかも知れないと私が思つただけですよ。』

『ハイ、六は鳥が嗜好でしたよ。鳥を見ると自分の兩手を斯う擴げて、斯して』と母親は鳥の搏翼の眞似をして『斯して其處らを飛び歩きましたよ。ハイ、さうして鳥の啼眞似が上手でした』と眼の色を變て話す樣子を見て居て私は思ず眼をふさぎました。

城山の森から一羽の烏が翼をゆるやかに、二聲三聲鳴きながら飛んで、濱の方へゆくや、白痴の親は急に話を止めて、茫然と我をも忘れて見送つて居ました。

この一羽の烏を六藏の母親が何と見たでしよう。

（をはり）

成女學校記念會餘興

コルデリア姫

（沙翁作『キング、リア』の一節）

宮田素庵翻案

是は客年十一月成女學校の紀念會で催した餘興對話の材料として、會員の需に應じ、沙翁四大悲劇中の「キング、リア」の第一齣を譯したものです。原作は世に既に定評のある通り世界の大文學であつて、とても我々の筆には載らぬものですが、此作に現れたコルデリアの意氣は、實に心ある婦人の心とすべき處と思ひましたから、強て邦文にうつして見た次第であります。夫につきまして筆をとる初には、なるべく忠實に、及ぶだけ原文の妙所を害はぬ樣にと思つて居ましたが、元來注文が對話の材料と云ふわけでしたから、若し是を原文通りにしたり、時代ぶりの口調にすると、餘りに演劇風になり、また彼我事情を異にする所などの爲に、情がうつらなくなりますので、不本意ながら往々原文の妙所秀句を脱いて、却つて拙劣な文句などを入れ、とうとうこんな變妙來のものにしてしまつたのです。だから原文が讀まれたお方からは、必ず非難もありませうが、此事情を御くみとり下すつて、偏に御許しを願いたう存じます。今本誌記者の需に應じて、本誌の餘白をけがすに當り、一言を申添へる次第であります。

リヤ王宮殿の場

總て英國宮殿大廣間の体。正面に大卓子を置き、左右に數脚の椅子を列べ、下手よき處に英國貴族ケント及びリヤ王の家老職グロースターの兩人椅子によりかゝり、話し最中の樣子。

ケント『殿下の御寵愛はコーンオールより寧ろアルバニーの方にあると思ふが、貴殿は如何御思召す。

グロースター『左樣で御座るて、表面はさうも見えますがさて愈々御國分配となつたら如何なもので御座りませうか。

ケント『さらばなあー。

グロースター『ヤヽ、リヤ殿下が最早御見えになりました。

是にて兩人話を止め、最敬禮をなして王の入御を迎へる。リヤ王はコーンオール、アルバニー、ゴンチリル、リガン、コルデリア、其他數名の待從を随へて登場。

リヤ『佛蘭西王とバルガンヂー侯を御迎へ申して參れッ。

グロースター『ハヽ、仰承りました。（グロースター退場）

リヤ『今日こそは、今迄内密に致して置いた朕のもくろみを明さうと存ずる。……イヤ誰かある、ウヽ地圖

を持て參れ、地圖を。……そのもくろみと云ふは外でもないが、見らるゝ通り朕も最早いたく老い朽ちてナア、此頃では日々の執務も殊の外難澁に覺ゆるじや、だによつて此の英國を三分し、是を夫々若い御身等の健な人に任せたいと思ふのじや。コーンオール、イヤなに、アルバニー、朕が眼をつぶつた後、また何かの間違ひから、爭の起らぬとも限らぬによッて、今の内夫々姫達に遺産を分けてやる事に決心した。もうしやんと決心いたしたのじや。夫に今日は幸ひコルデリアが婿の候補者となつてゐるフランス王もバルガンヂー公も愈々此話を極めるため、當所に見える筈じや。旁々都合もよいから、夫も是も今日の内に取極めてしまをうと存ずるのじや。どうかな、よからうがな。「さあお前たち、誰が一番此父樣を愛して居るか、サヽ云ふてみい。その言ひ方によつては、隨分領地の分配に加減が生じやうぞへハヽヽヽ。ゴンヂリルそちは惣領娘の事じやから、先づそちから云ふがいゝ。

ゴンヂリル『父上を御慕ひ申す私の心は、所詮此口では申上げ樣すべも御座りません。此眼の力よりも、此眼が及ぶかぎりの土地よりも、その自由よりも、いやいや貴しと云ふ貴さの限り、富よりも、世に稀なりと貴ばれますものよりも、父上ッ、美しい、健康な、また名譽もあるべき此の生命よりも、もつともつと。小供の無邪氣な愛、夫よりも、父上も御覺えが御座りませうが……妾は不幸にも嗣の種を存じませんから、所詮充分には申上げられません。けれども父樣の事は此上なく愛し奉る者で御座ります。

コルデリア『まああんな事が、よくまあ……コルデリアはどう申上たらよからうか。愛し奉つては居る。がいやいや默つて居りませう。(と傍を向きて云ふ白)

リヤ『此處から此處まで、此内は皆なそちのものじや。此處にはな、綠したゝる森も豊かに、葡萄の葉末繁き園生も多く、滾々として盡せぬ流れも、限り知られぬ牧場もあるのじや。此處をアルバニーとその子々孫々に永久に遣すぞよ。サア、朕にとつては次の姫、今ではコーンオールの妻たるリガン、サアこんどはそち

の番じや。早よう云ふて見い。

リガン「ハイ妾も姉君とすつかり同じ質の金属で、作られました身で御座りますから、姉君同様の御褒美に預りたう存じます。真実に姉君が仰せらるゝ通り、では御座りまするが、妾の心は未だ姉君の御言葉では足りません。妾が父上を愛し奉る時はありとあらゆる外の喜び、よしんば、その喜びの敵になりましてもツユ厭ひは致しません。何故かと仰せられますれば、父様が居てさへ下されば、是ほど私の身にとつて幸福なことはないので御座いますものを。お察し下さいまし。

コルデリア「マア何たる事、妾の申上る言葉はない。妾の心はとても申上る事は出來ないのだけれど（わきを向きて）

リヤ「よしよし、そちとそちが子孫のためには、此處の大きな處を遣はさう。此處はな、廣さも値打も、快しさも、ゴンチリルに遣した處と少しも違ひないのじや。サア一番末ではあるが一番殿の秘蔵な子、今[illegible]西の葡萄とバルガンヂーの乳とが、その愛を競つて居る末娘、サア、コルデリアそちの番が參つたぞ。そちには姉たちよりも猶よい遺産を分けてやるつもりじやが、何と云ふて貰うつもりか、さあ早く申して見い。サ、早く申せと云ふに。

コルデリア「別に申上ます事も御座いません。

リヤ「何じやナイとは、

コルデリア「御座りません。

リヤ「無は無から來るのじやが。もう一度申して見い。

コルデリア「妾は不幸で御座ります。妾の心は所詮此口に表すことが出來ません。妾は父上を愛し奉つて居ります。たから子としての務だけは必度愛しまするので御座ります。

リヤ「何ッ、何ッ、コルデリア、そんな事は云はぬものじや。繕はつしやい〳〵。でないとそちの財産に故障が出來やうぞ。

コルデリア「父様、父様は妾を生んで下さいました。

育てゝも下さりました、而して御慈くしみ下さいました。ですから私は必度その御恩には御報び申上るつもりで御座ります。而して父上の御仰にも従ひます。御慕ひも致して居ります。敬も致します。……あれ程姉君達は何もかも打捨てゝ、あなたを愛すると御仰る程なら、何故御縁付きなされましたらう。若し妾も縁付きまするやうな事が御座りますれば、連れさう郎君の出來るは當然、君が出來ますれば、其御方の爲に私の半分の愛は殺がねばならぬ事。是が妻の義務では御座りますまいか。して見れば父様ばかりを愛する事が出來ませうか。

リヤ『夫りやそうもあらう。じやがそちはほんとにさう思ふてか。

コルデリヤ『はア、

リヤ『左様な事を申すは今の若いものゝ癖じや、してそちのもその若い爲につい云ふのか、イヤまた心がやさしうない爲か。

コルデリヤ『父上、けれと是がほんとゝは思召しませぬか。

リヤ『エゝ左様致して置くがよからう。そちはそちの眞理を財産と致すがよいわ。嗚呼今の今迄存へて居つたも、たゞたゞそちの行末が見たい一念があつたからの事。やゝ夜も滅せよ、日も消えよ。朕は最早親子の血縁を絶つ。これからは未來永却此心からも、此體からも、赤の他人と心得やうぞ。悪魔ッ、悪魔ッ、汝が思ふまゝに振舞へ。そちは曾て朕が姫であつた。而して一度は此朕の憐も受け、救も受け、親みもされたけれど、もう／＼今は早や——、

ケント『我君ッ、

リヤ『アゝ物を云ふて呉れるな。龍とその怒との間に挾れまいぞ。曾ては朕が一番秘藏の姫であつた、されば行末かけて乳母をもつけ、大事に大事をとつて護り育てゝ貰う所存であつた。……じやが、サアもう直ぐ此處から立つてしまへ。そちの父の心が、そちの体を去つたからは、朕の平和はたゞ墓にあるのみじや。サア佛蘭西王を呼んで參れ。呼んで參れといふに、バル

ガンデーを呼んで參れと云ふに。何を愚圖〳〵致して居るか。……アルバニー、コーンオール、さあ此殘つて居る土地は姫もろともの引出ものじや。よき樣に分けるがよからう。そして彼奴には、雜作もなく申した其得意の言葉を嫁入らすがよい。朕の權力と、朕の王權に伴なうた總ての從者も、あげて皆御身等に委ねましたぞ。して隱居致した朕には、最早多くの兵士もいらねば、毎月交替に兩家からたゞ百人程の親兵をつけて貰えばよい。而してその間、御身等の邸で世話になりたいと存するが。よいかな、たゞ名のみは存して盈くが、權力もな、歳入もな、イヤ其外のものまでも一切そち等に任せるのじや。サア此王冠は、御身等の間に分つがよい。（リヤ冠を與へる）

ケント「リヤ殿下、王として仰ぎ奉る殿下父君として敬ひ奉る殿下、主君として仕へ奉りし殿下。（ケントせきこめる態）

リヤ「矢は最早放たれた。うろたへて流矢に當るな。

ケント「矢尻が、よし此胸を貫くとも、あたらばあたれ、リヤが狂すればケントも無禮になります。老人ッ、あなたは何となさる御所存ですか、若し主君が阿甘言の徒に誑らかせられ給ふその時、硬臣は諫言申上げる事を恐るゝと思召ますか。齒に布きせず申しますれば、既に王が愚蒙となり給はゞ、王の資格は消えたも同然。あゝ情ない。今仰せられた殿下の御言葉は、御取消しなさるが宜敷う御座りませう。克ツく前後を御考遊ばして、その忌はしい怒をお爲になりまするがよろしう御座りませう、某は命を賭ても御返事を聞きたう存じます。コルデリア姫があなたを愛し給ふ御心根は、決して決して僅なものでは御座りません。口に任せて虚言を仰せらるゝやうな、左樣な根もなき心の御方では御座りませんぞ。

リヤ「ケント、命が惜しくば最早一言も申すな。

ケント「某の命は御身の敵に投げ出す爲の命。御身の安全が望める事なら、何ぞ是を失ふに、つゆ怨みが御座りませう。

リヤ「目通りならぬ。

ケント「よつく御覽めされ。イヤ何に、御身の正しい御眼に、克く見えますやうに、お立たせなさるな。

リヤ「サア、正八幡ッ、

ケント「サア正八幡ッ、如何に神に誓はれても、そりや無益な業と申すもの。

リヤ「無屆者ッ、不禮者め、（劍に手をかくる）

アルバニー、コーンオール「まあまあしばらく、（兩人左右より出でゝ止める）

ケント「斬らるゝならお斬りなされませ。御身の大事の醫師をお斬りなさりませ。而してその藥禮を御身の馬鹿な病にお拂ひなさるがよろしう御座いませう。尊公の御詞をお更めなさい。さらずは、此喉の働く間は殿下の御處置は誤り居ると申しませうぞ。

リヤ「歇れ無禮者めが、苟も一天萬乘の天子が申した言葉を更めよなどとは。高言も極まるとは存せぬか。無禮至極の徒者めが。……が然し特別の慈悲によつて五日間の猶豫は與へる。六日目は此國を去つてしまへ若し十日を經て貴樣の汚れたその體が、猶ほ此領内に見えたその時は、死は直に見舞うと覺悟しろ。さあ行けッ、一刻も猶豫はならぬ。如何なる事ありとも、此言葉は改められぬぞ。

ケント「然らば殿下、御身がかく云はるゝ上は、自由は彼處にうつり、侮辱は此處に住るで御座らう（コルデリアに向ひ）姫君あなたはよく思案なされました。よく正しい言を仰せられました。決して御悲みなさいますな。神樣は必ずあなたを掩つて下さりませう。（リガンとゴンチリルに向ひ）あなた達の立派な御詞は、やがて其御實行で拜見いたす事ができませう。よく其御心を以て御仕へ下されまし。かく申すケントも最早御別れいたさねばなりませぬ。然し御別れ申しても、まだ何處か新しい國に參つて、命だけは支へてゐる所存で御座ります。必ず拜見致して居りまする。

（是にてケントは退場し、入り代つて佛蘭西王、バルカンデー侯その他從者を案内してグロースター入場）

グロースター「御仰に從ひ、佛蘭西王とバルカンデー侯とを御案内申して御座ります。

リヤ『バルカンデー侯、先づ閣下から承りませうが閣下は此處に居らるゝ佛蘭西王と、朕の拙い姫の愛を御競ひ下されたが、閣下は此姫と共に如何くらいの財產を御望みなさるのですか。アイヤ、若し其持參の財產がないとすれば、此御申込は御取消しなさらうと云ふので御座りませうな。

バルカンデー『殿下。某には別に是と申して望む所は御座りませぬ。たゞ殿下の御思召下さる、イヤ何にそれ丈で別に異存は申上げませぬ。もう相當の事は御如才もない事と存じますれば。

リヤ『されば閣下。朕が此姫を愛して居つたその時は隨分附けてやるつもりでも御座りましたが、今では最早何もかもなくなつてしまいました。侯爵、姫はそ、そこに居ります。今では朕も見放して、身に附いたものとては塵一つもないその体。体のみでよろしくば御持ち歸り下さい。それ、そこに居りまする。

バルガンデー『是は何と申上げたらよろしいので御座りませうか。

リヤ『朕が憎しみをかけ、久離切つての勘當を致した姫、夫でも御伴れなさると仰つしやるか、乃至また御斷りなさると御仰しやるか。

バルガンデー『では、失禮では御座りまするが、某はかくとは存じませぬ事故

リヤ『デハ御斷りになると御仰しやるのですか。夫はよろしい御思案。(佛蘭西王に向ひ)して殿下、朕が敬愛致す殿下。その殿下に向つて、今では朕が嫌いまする姫を、差上げる事は憚ります。されば斯樣な侮辱を受けました者より、他から、もつとすぐれて、立派な御方を御迎へなさる事を望みまする。

フランス王『ハテ奇体な事を承りまするものです、此の姫君は、今の今まで殿下が最も愛で給ふて、賞讃の詞を盡され、御齡の番と迄せられし方を、時も程經ぬ今となつて、かく忌しきものかの如く仰せらるゝは、そりや何かの行違ひでも御座りましたか。さなくば何にか他にその愛を猜ねんで、讒言でも致したものが御座るのではありませぬか。

コルデリア『厚かましいかは存じませねど、どうか一言御許し下さりませ、かく父の怒に觸れましたも元はと申せば妾の口のきゝやうに巧を存せぬからの事。父の氣に入りますやうな口をきけば、よろしいので御座りましたらうが、とかく我儘に育ちました身の、つい口のきゝ樣も存じませず、夫故物を露骨に申しましたのが此仕儀。決して惡い意趣のありましたわけでは御座りませぬ。剛情と仰せらるゝかは存じませんが、妾にはたとへあなたの愛を失ひませうとも、此樣な心にもない虚言は申されないので御座ります。

リヤ『自らはよくもあらう。そちに喜ばして貰へぬ位なら、寧そ生れて呉れなかつた方がましであつたわ。

佛王『事柄は斯樣な事で御座りますか、思ふた事が顯れずにしまつたといふ樣な事で御座りますか。さればバルガンヂー、姫に對する御意見は如何で御座ります。愛はたゞ愛です。何か外の考が混入た時は、最早愛では御座りませぬ。御身は姫を御伴れなさらぬのですか。姫は姫自身が財產で御座りませうが。

バルガンヂー『リヤ殿下、たゞ殿下の御思召しだけを御添へ下さい。さすれば直ぐ此處よりバルガンヂー侯爵夫人と致しましてコルデリア姫を頂いて歸りまする。

リヤ『何も遣すものはありませぬ。朕の心は固う御座る。

バルガンヂー『然らば御氣の毒ながらコルデリア姫。御身は父君を失はれた。それが又夫を失うた事になつたのです。

（コルデリアは此時憂愁の内に侮蔑の色を以てうなづくのみ）

佛王『尤も富んで居りながら而も今は貧しきコルデリア。余が尤も勝れりとする御身は捨てられ、余が尤も愛する御身は侮られた。然し御身と御身の美德とは、此余が充分認めて居る。何ッ、惡しむに足らん。捨てられたものを拾ふに不思議はあるまい。御身が此冷かな世の人に捨てられたのを見れば、余の愛は愈々燃るのみじや。國王殿下、殿下の御勘當を蒙つた姫君は、何卒余が隨意に御任せ下さりませ。余が國民の、イヤ

ナニ美しき余の佛蘭西の女皇に致しまする。水臭きバルガンヂーの侯爵などが、賞牌はなくても、此價の尊き乙女をいかで購ひ得られやうか。サア、コールデリア先方に構はず、お暇乞を致すがよい。御身は今此處に捨てられたが、やがてもつとよい處に拾はれて行くのじや。

リヤ『デハ、佛蘭西王、そなたはこれを御伴なさるかいかやうとも御勝手次第。最早朕の姫ではない。もう再び見る事も厭はしい姫じや。サア出て行け……。朕が愛もなく、祝ぐ辭も聞かず……、バルカンヂー侯あちらに參らう。

(佛王、ゴンチリル、リガン、コルデリアを除きて皆な退場)

フランス王『姉君達にも御暇乞致すがよい。

コルデリア『でわ姉君様達、これからもどうぞ御父様を御大事になされて下さりませ。あゝあんなに御父様を、……すまぬ事でありました。然し云つて返らぬ事さらば御暇申し上げます。……どうぞ御父様を御大事に……

リガン『私達の事は御心配には及びません。

ゴンチリル『お前は、これから君を大事と御仕へなさる事を御忘れなさるな。全く御慈悲によつて伴れて往づて下さるのだからね、従順の德を缺いた爲に、價を認められたとは、ハテサテ妙な話しもあるものじやなあ。

コルデリア『時たてば又様子もわかりませう。

フランス王『サア、コルデリア

(佛王、コルデリアを引連れて退場)

ゴンチリル『さあ是からの事は、段々相談しなければならぬが、夫はさうと、短氣な父様だから、キット今夜から、もう直ぐお前達の處に行くと仰しやるに違ひないよ。

リガン『そうですねー。夫はキット左様に違ひありませんよ。だつたら最初は姉様の方へ御連れ下さいね。來月は私の方へ引とりますから。

ゴンチリル『初めから私の方へ。けれどまあいゝ、御誘れ申さう。御父さんも大分老耄して居らつしやるから、そのつもりで用意して置かなければならない。

リガン『餘り頑固だつたら、少し工夫をしなければならないのねー。

ゴンチリル『そんな事はまた緩り話合ふじやないか。

(是にて[illegible])

次號記事豫告

四月五日發行

毎月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）…	金二十錢
四冊（三ヶ月分）…………	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）…………	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）…………	前金二圓八十錢
內 定刊數…………十二冊 臨時增刊四回…三、六、九、十一月 價格同一	
郵稅 一冊	二錢

廣告料

二十四字詰	一行	中頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引三十三圓
一等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引二十七圓
二等	二十九錢	九圓二十八錢	割引二十二圓
三等			割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵劵代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢劵相添申込あれ

明治卅七年三月十五日發行　第四卷第四號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番　千十八番　三千二百二十九番

博文館發行　日露戰爭實記

一冊金拾錢●六冊五十七錢●十二冊一圓四十錢●廿四冊二圓十五錢●卅六冊三圓十五錢●郵稅一冊壹錢

第三編

（三月三日發行）

口繪寫眞銅版

口繪には黒木陸軍大將、第二師團長西陸軍中將、出雲、磐手、常磐、淺間、八雲、吾妻六巡洋艦と各艦長を首とし開戰前の旅順口大寫眞三頁大の全景及、敵國全艦隊、黄金山砲臺より船渠及市街とも總て一目の下に在り眞に絶類の珍なり近衛第一第二旅團長二三四各聯隊將校の寫眞は、如何に之を集むるに苦心せるか、讀者必ず之を諒とせられん

記事要目

一、旅順第三回襲擊の詳報を首とし、陸海軍の動靜は、法令の許す限り、最精最確、最迅最速、露國陸軍大臣クロパトキン同黒龍江總督リチウヰッチの傳、など、最新最詳、其他我が陸海軍各將校の傳記を首とし、財政外交、其他軍國の時事一切を網羅し、秩序整然、文勢雅健趣味實益兩ながら紙上に溢るゝを期す

第四編

（三月十三日發行）

口繪寫眞銅版

○大山參謀總長○兒玉參謀次長○上村海軍中將と同夫人令孃○井上第十二師團長○木越第二十三旅團長○佐々木第十二旅團長○最近の浦鹽須徳全景○川上貿易事務官、杉浦日本居留民總代○春日日進兩艦東京歡迎會○仁川港沈沒艦と仁川駐在露國領事○淺間艦乘組將校と八代艦長、依田副長○水雷發射管上の速鳥艦全乘組員○旅順の敗將スタルク中將、同破壞艦の修繕露國海軍の軍樂隊○露西亞皇帝皇后及皇帝我那來遊中の撮影

記事要目

記事には旅順口第三回襲擊の詳報。片山特派員の畫報。長谷川特派員の韓國通信。戰時の軍艦の最詳最確なる說明、日本魂、戰爭文學等趣味津々たる時局問題の記事紙上に溢る

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

十洲 男爵細川潤次郎先生序
赤堀 又次郎先生校訂

心學叢書

全部六冊

一冊大約三百頁

菊判和裝 正價一冊四拾錢 全部貳圓廿錢 郵稅一冊拾錢

德川氏の中世、太平既に久しくして四民奢侈に長し、淫逸に流れ、道德殆んど地に墮つ、石田梅巖先生深く感ずる所あり、慨然として廻瀾の志を起し、"心を知ること學問の始たるを悟り、平易の話を以て其說を講せられき、所謂心學是れなり、手島堵庵、脇坂義堂、中澤道二、奧田頼翁、柴田鳩翁等の諸家相踵ぎて、其道を說き一世を喊起し明治の今日に及ぶ本館今回諸家の遺書を搜り、其名著を校訂して發行せんとす、其卷中には心學に關する諸種の密書を加へ傍訓を施し、句讀を正し、一讀趣味多く資益する所を全からしむ、希くは江湖諸彥其遺志を繼きて、後進の士を稗益せられんことを

第壹編（製本既成）

●賣卜先生安樂傳授
●賣卜先生糠俵
●齊家論……石田勘平著
●民の繁榮……虚白齋著
●里俗數訣 錢湯新話……八宮齋譯

續刊

第貳編（三月發兌）

●松翁道話……伊藤單朴著
●塵とり……手島宗義著

以下第三編より逐次發行第六編に至りて完結すべし今や一世の人心復小康に傾き道念德操日に漸く微ならんとす今や本書刊行は全く無用の業にあらざるべし

（廣告の二）

發兌元 東京日本橋區本町 博文館

太陽

三月一日發行 第四號 正價卅錢郵稅三錢

本誌は最も**正確**にして且秩序整然たる**戰爭實記**也而して記事總て**武裝的**なり

◎本文刷込の寫眞版は總て日露の開戰に關係あり仁川の海戰名譽ある將校軍艦其他露國の軍艦司令官等材料豐富也

◎時評には時局の經過を簡潔明細に記述論評す……

◎日露戰爭に就て……大隈伯談
◎戰時雜話……谷子爵談
◎對露外交に就て……佐々氏談
◎自殺見本(小說)……巖谷小波
◎理想の美人……中内蝶二
◎露の二大非戰說……内田魯庵
◎慶長新聞……井上秋劍
◎現代思想の暗流……田岡嶺雲
◎戰爭觀外數項……大町桂月
◎文明史上の日露戰爭……長谷川天溪
◎弓削道鏡……大町桂月

口繪

大元帥陛下◎旅順口海戰御參加の三殿下◎栗野公使◎ローゼン男◎日進及春日◎浦港及旅順口全景(二頁大)◎クロパトキン大將◎西比利亞鐵道一等車内◎京釜鐵道工事等……

◎獨逸皇帝陛下……鳥谷部春汀
◎戰爭以外の國民的活動……陸實
◎交戰國民の態度……大石正巳
◎清國の中立……肥塚龍
◎國民皆兵と兵役稅……長谷場純孝
◎大阪築港國營論……中橋德五郎
◎故スペンサー氏と日本憲法……男爵 金子堅太郎
◎高山樗牛と日蓮上人……文學博士 姉崎正治

◎蔚山陣の加藤清正……長田秋濤
◎最近西比利亞旅行……矢野太郎
◎朝鮮の殖民的資格……矢津昌永
◎日本石器時代の住民論追加……醫學博士 小金井良精
◎北千嶋の海賊……東川楊舟
◎評論之評論には日露問題に關する内外の論文を紹介す

前金 三冊八十七錢六冊壹圓六十五錢▲一冊三錢づゝ

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(後付の四)

中學世界春期增刊

（三月廿日發行）

本誌の增刊は從來主として懸賞文を收め來りたるが本年は姑らく方針を一變して懸賞文募集は例號に於てのみ之を行ひ、增刊は各期とも特別に計畫を立て、從來と趣味異りたる最多趣味なる材料を以て編纂することとしたり、而して先づ本年第一回を三月廿日發行とし、先頭自轉車にて世界無錢旅行を企て、幾多の艱難と危險とを排して、終に其目的を達し、めでたく歸朝したる山口縣人中村春吉氏の旅行實歷談を冒險小說に堪能なる押川春浪氏の筆に依つて紹介せんとす。小說よりも更に奇なる此冒險談の如何に痛快なるよ。

無錢冒險 自轉車世界一周

正價廿錢
郵稅貳錢

（附錄）

●日本歷代の冒險家傳……大町桂月君
●冒險奇談無人船……上村左川君
●マルコポーロ冒險譚……鷹野止水君

右の冒險譚は各自得意の文章なり其詳細に至りては誌上に就て見よ。如何に趣味の豐かにして、稗益の饒多なるかを

（後付の五）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の八）

女學世界定期增刊 女學校生活
（毎月一回五日發行）
明治三十七年三月十五日發行　第四卷第四號　明治卅參年拾貳月廿五日第參種郵便物認可

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㉖
明治37年3月（第4巻第3号、第4巻第4号）

2007年7月10日　第1刷発行　　定価（本体20,000円＋税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　有限会社オンデマンドジャパン
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3142-6　C3321